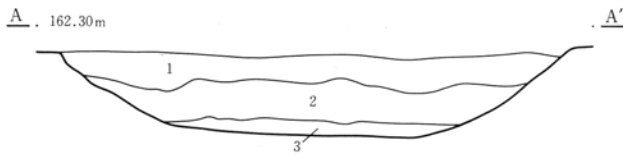
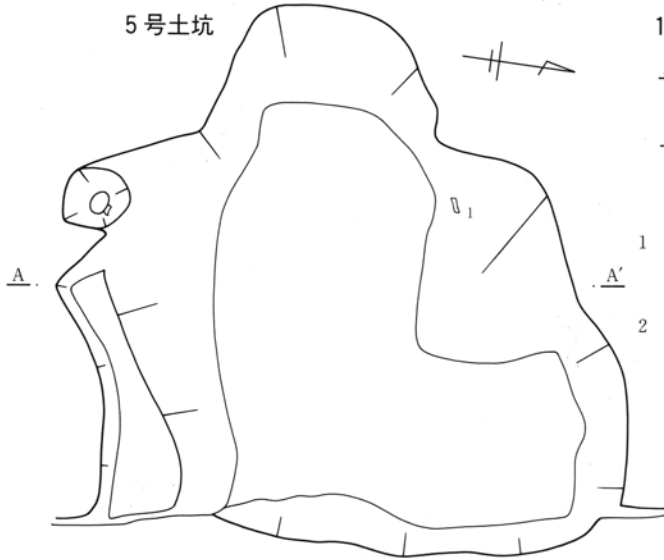


3. 土坑・土壙墓・竪穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑

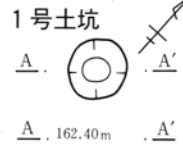
65号土坑 (P L 94)

ほぼ半分を試掘時のトレンチに壊されるが、楕円形を呈すると見られる。底面は凸凹する。規模は径

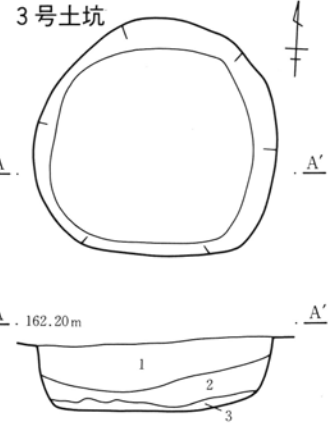
83以上×48cm、深さ22cmである。遺物は出土しなかった。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。



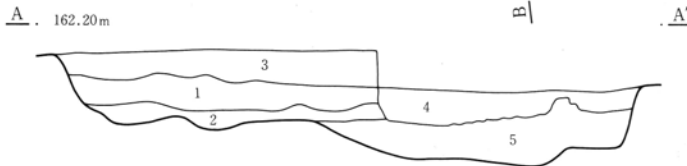
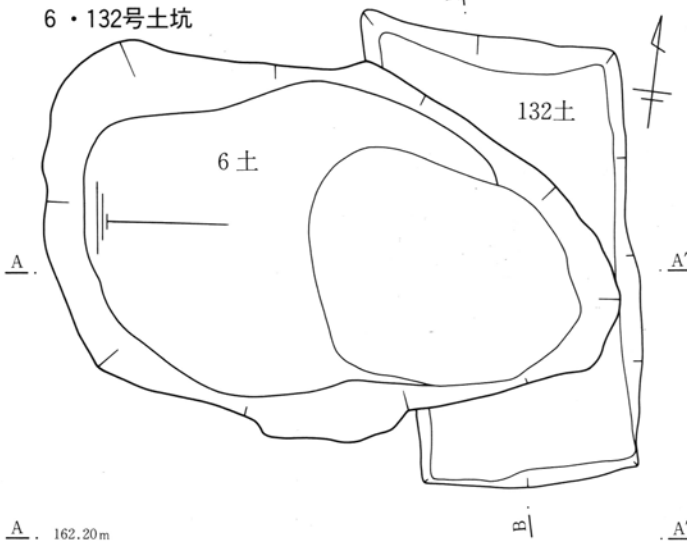
- 1 褐灰色砂質土 As-B20%、As-C5%含む。
- 2 褐灰色土 As-B20%、As-C10%含む。
- 3 暗褐色土 VII主体。



- 1 におい黄褐色土 炭化物、As-B、As-Cを5%含む。
- 2 におい黄褐色粘質土 As-C1%含む。

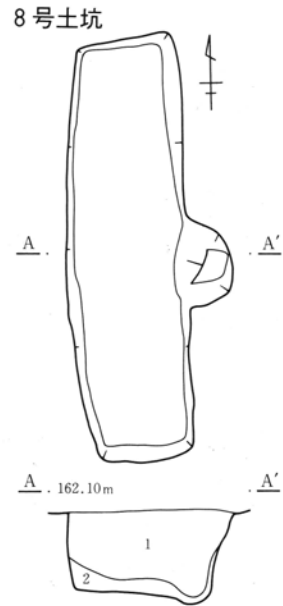


- 1 におい黄褐色土 炭化物、As-B、As-Cを5%含む。
- 2 におい黄褐色粘質土 As-C1%含む。
- 3 褐色土 黄褐色土粒1%含む。



162.00m

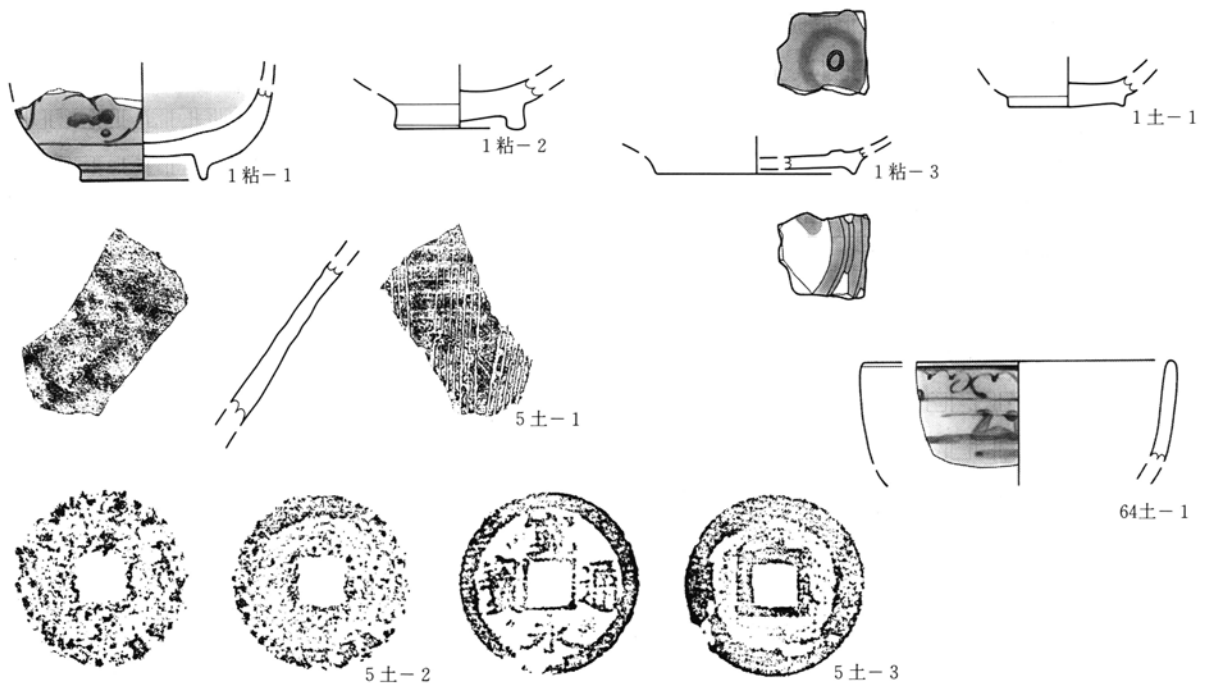
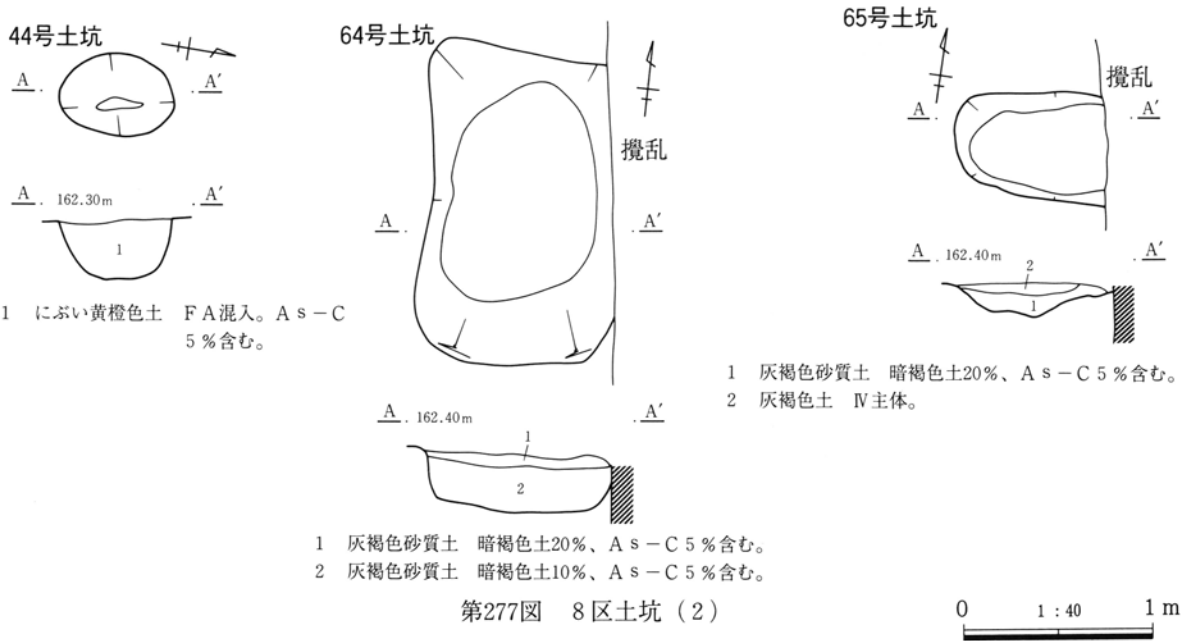
- 1 褐灰色砂質土 As-B20%、As-C5%含む。
- 2 褐色土 暗褐色土大ブロック20%含む。
- 3 暗褐色土 VII主体。
- 4 灰黄褐色砂質土 褐色土を層状に20%含む。
- 5 におい黄褐色土 灰色砂10%、As-A5%含む。



- 1 灰黄褐色砂質土 As-A5%含む。
- 2 におい黄褐色土 灰黄褐色砂質土20%含む。

第276図 8区土坑 (1)

0 1:40 1m



第278図 8区1号粘土採掘坑群・8区土坑出土遺物

9区 埋土は全てAs-C、FAを含むにぶい黄褐色～暗褐色土であり形状から3つに分類できる。①調査区北端の1・2・4・8・9号土坑と南端の42・45～50号土坑は、形状から芋穴と位置づけられる。北端のものは分布に統一性がなく、径道に近いが関連は不明確である。②7・27・30・31・43・44・61・119号土坑は、楕円形を呈し規模も近似する。4号土

坑を除いて浅い。③上記以外の土坑全てであり、形状はピットである。なお、土坑の分布密度が南端部で濃いのは、埋土が類似することから見て、9区の遺構との関連性が強いためであると考え。

2号土坑 (P L95)

方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径218×92cm、深さ35cmである。芋穴か。埋

没は人為埋墳による。遺物は土師器・須恵器片が出土しているが混入と見られる。

31号土坑 (P L 95)

不整形円形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。平坦。規模は径166以上×138cm、深さ27cmである。

37号土坑 (P L 95)

ほぼ正方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径116×108cm、深さ24cmである。遺物は磁器片1片が出土している。

43号土坑 (P L 95)

不整形円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径134×78cm、深さ48cmである。

遺物は出土しなかった。

46号土坑 (P L 95)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径205×95cm、深さ56cmである。芋穴か。壁際から自然埋没後、人為埋墳される。

112号土坑

不整形円形を呈するピット。規模は径35×26cm、深さ33cmである。遺物は出土しなかった。

119号土坑 (P L 95)

不整形円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。倒木痕と重複するが、本土坑の方が新しい。遺物は出土しなかった。時期はA s - C 降下以前である。

10区 埋土は、①A s - C、F A を含む灰褐色～暗褐色土、②にぶい黄褐色～灰褐色砂質土、都合2つに分類できる。①は7・17・18・20・24号土坑であり、形状はピットである。また、1号竪穴住居跡の埋土と近似しており、いくつかは関連するものと見られる。②は上記以外の土坑全てであり、形状から更に3つのグループに細分できる。②-1は、14・21～23号土坑であり、形状から芋穴と位置づけら

れる。分布の特徴は、23号土坑を除いた3基が1列に並んでいること位である。②-2は、11・15・16号土坑であり、楕円形を呈し浅く規模も類似する。②-3は上記以外の土坑全てであり、形状はピットである。

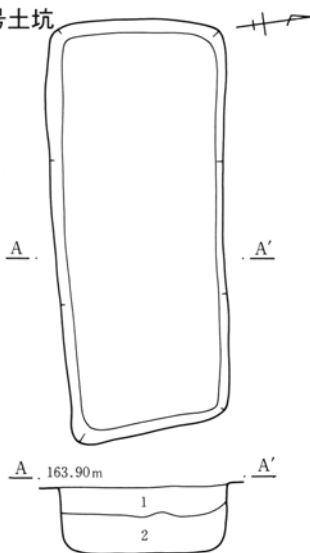
16号土坑 (P L 95)

円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径96×88cm、深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

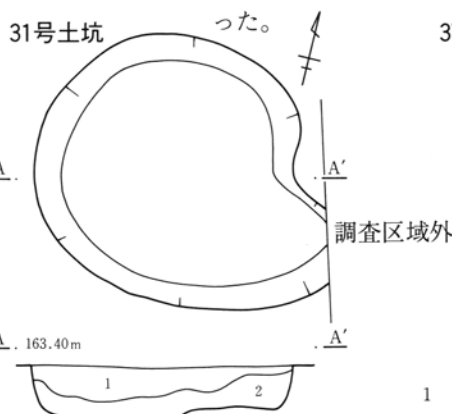
20号土坑 (P L 95)

不整形円形を呈するピット。底面はほぼ平坦。規模は径50×40cm、深さ14cmである。遺物は出土しなかつ

2号土坑

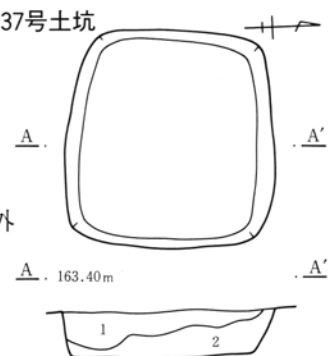


- 1 灰褐色砂質土 F A 小ブロック20%、A s - C 5% 含む。
- 2 黒褐色砂質土 黒褐色粘質土小ブロック、F A、A s - C を5% 含む。



- 1 灰黄褐色砂質土 A s - C、F A 小ブロックを5% 含む。
- 2 褐色砂質土 A s - C 1% 含む。

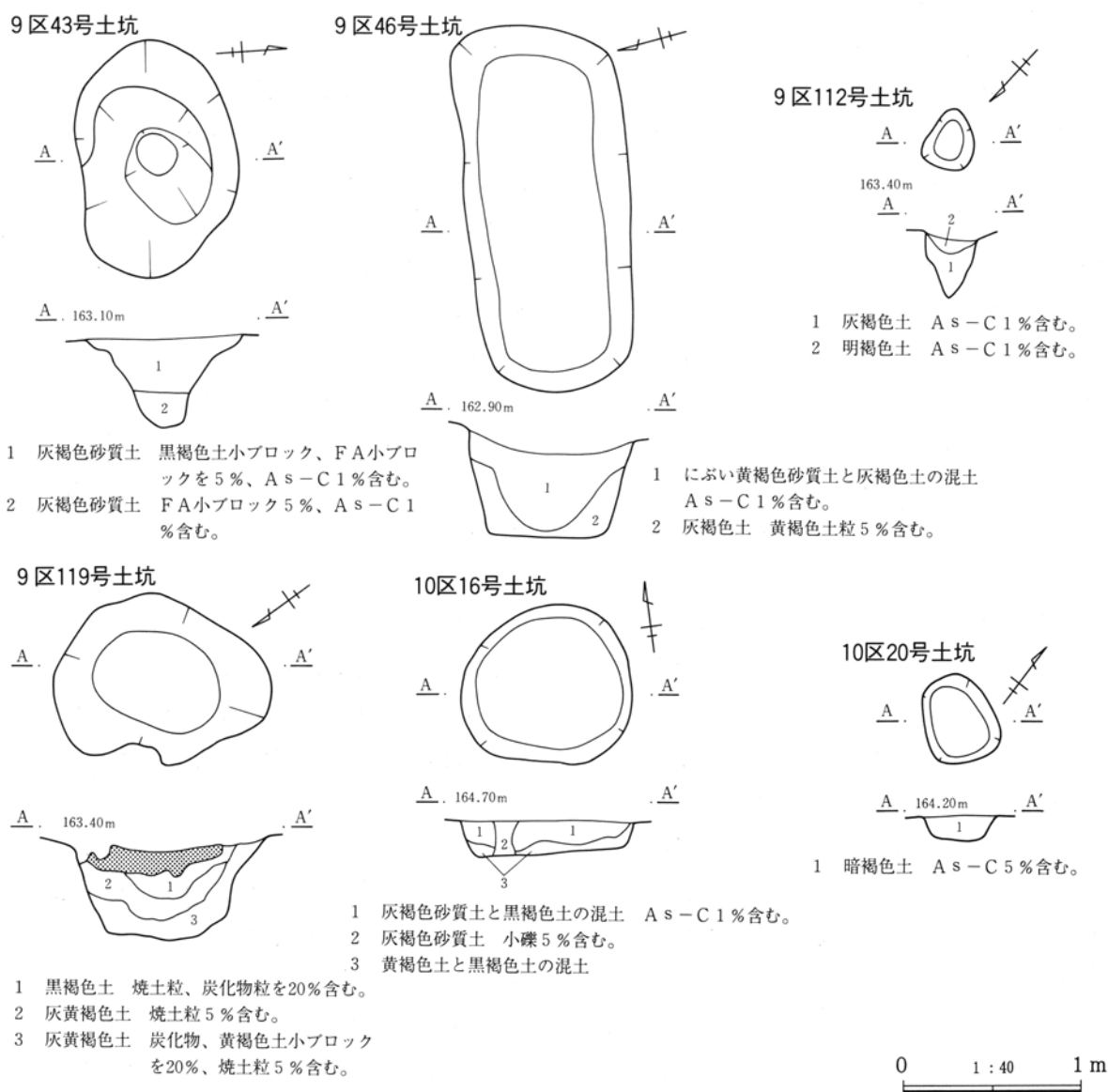
37号土坑



- 1 灰褐色砂質土 F A 小ブロック20%、A s - C 5% 含む。
- 2 灰褐色土

0 1 : 40 1 m

第279図 9区土坑



第280図 9区・10区土坑

11区・12区・13区 全体として遺構量が少なく、土坑も少ないため、3調査区一括で扱う。埋土は、①表土に近い暗灰褐色～明灰褐色砂質土、②しまりのない暗褐色～褐色土、③As-Cを含む暗褐色土、都合3つに分類できる。①は11区の1～3号土坑。②は11区の1号土壙墓、12区の1号土坑、③は13区の1・2号土坑である。

11区1号土壙墓 (P L96・153)

長方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径240×126cm、深さ82cmである。埋土はしまりのない褐色土で、黄褐色土と黒褐色土の

小ブロックを多く含む。なお、調査時において攪乱と誤認してしまったため、遺憾ながら断面の土層観察がない。遺物は1の須恵器壙が北壁下床面で出土しており、被葬者の頭部に置かれたものと看取される。このほか埋土から土師器甕片1片が出土しているが、遺物出土量は極めて少ない。28.9×19.8×13.2cmを測る2の石皿(S3)は、木棺の台石として転用されたと見られ、S1～S4は他に比べて大きく、台石として支持力を持つ。S1～S4の間隔は中心距離で、東西40～45cm、南北115～120cmで、深さも上面で75cm前後に置かれる。出土遺物から10

3. 土坑・土壙墓・竪穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑

世紀半ばに比定される。

11区2号土坑 (P L 96)

ほぼ半分が調査区域外だが、円形を呈すると見られ、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径140×100cm以上、深さ26cmである。遺物は出土しなかった。

12区1号土坑 (P L 96)

ほぼ半分が調査区域外だが、長方形を呈すると見られ、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径170以上×95cm、深さ90cmである。遺物は土師器甕片1片が出土している。埋土及び形態から、11区

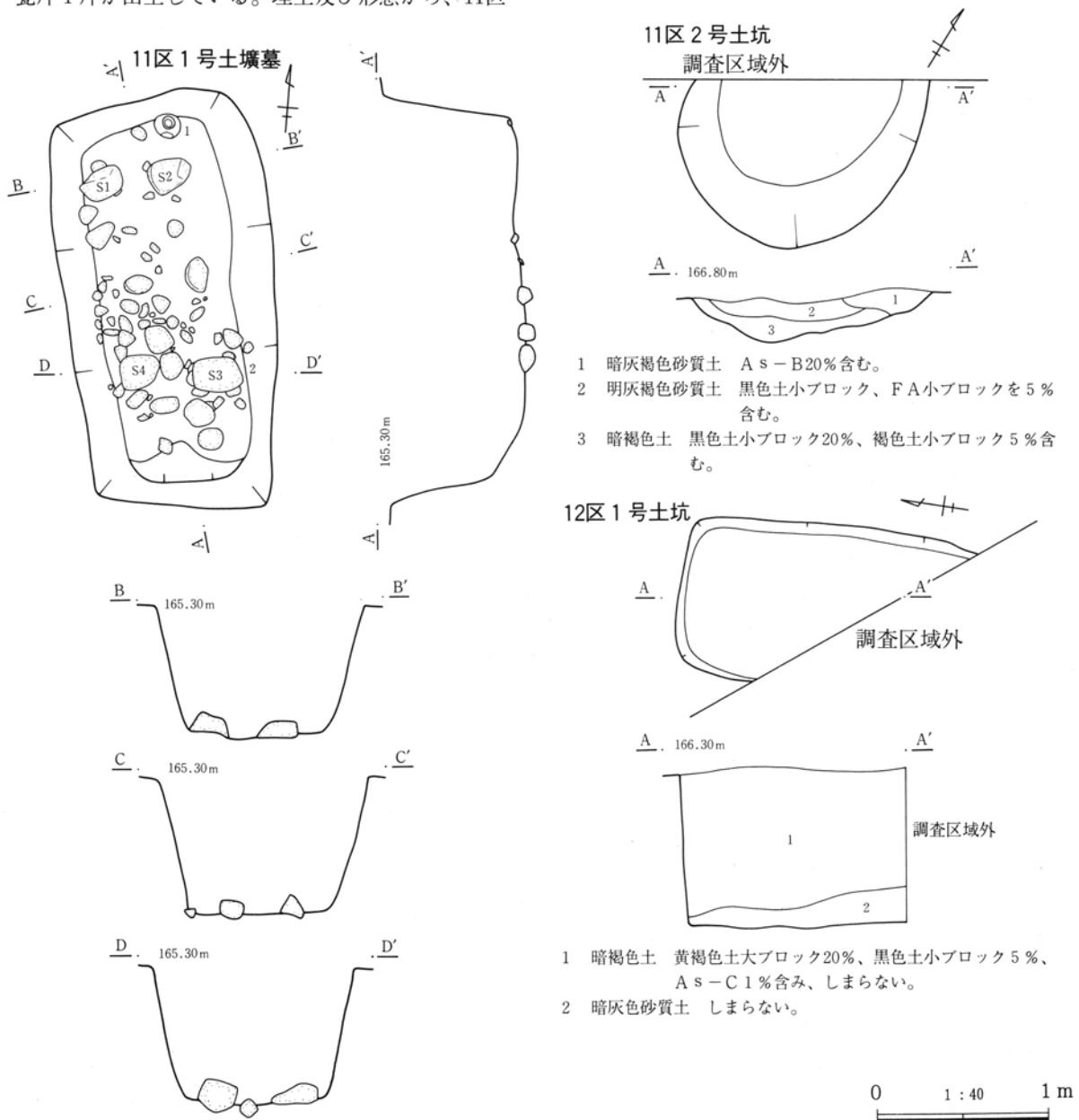
1号土壙墓に類すると考えられる。時期不明。

13区1号土坑 (P L 96)

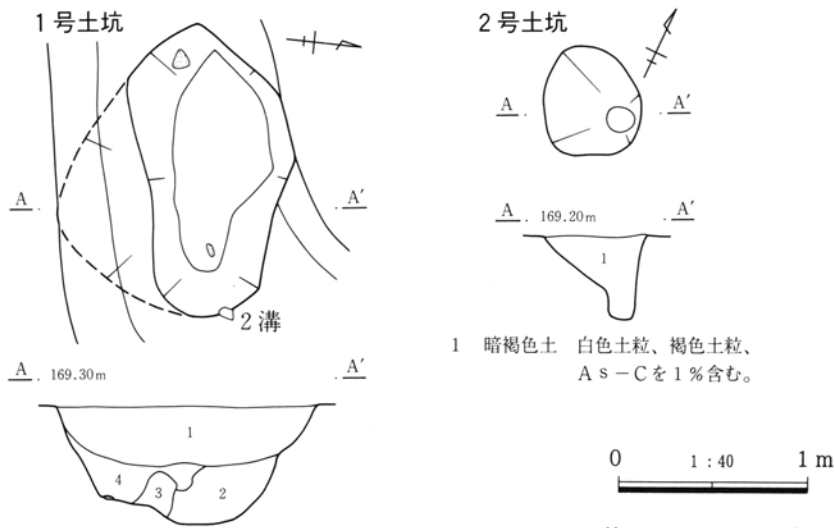
不整円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。北半分が長方形にくぼむ。規模は径154×80cm以上、深さ61cmである。遺物は出土しなかった。

13区2号土坑 (P L 96)

ほぼ円形を呈するピット。底面は丸みを持つ。規模は径58×50cm、深さ43cmである。遺物は出土しなかった。



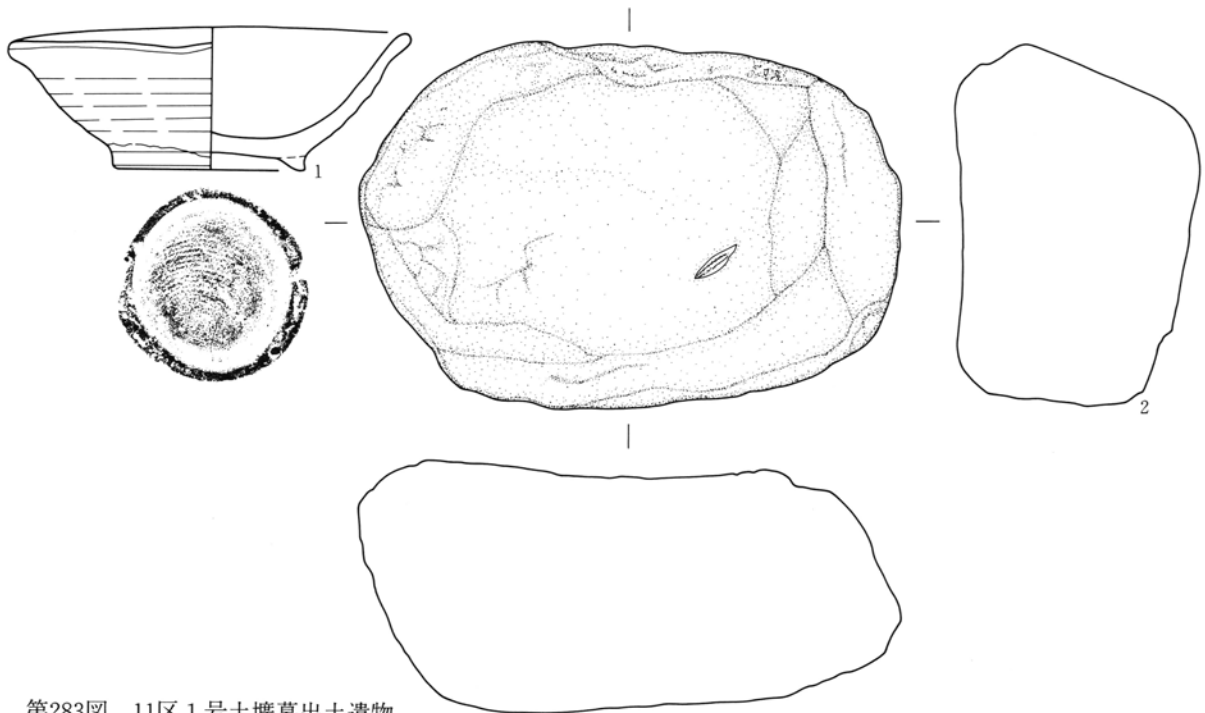
第281図 11区1号土壙墓・11区・12区土坑



1 暗褐色土 白色土粒、褐色土粒、
A s - C を 1 % 含む。

- 1 暗褐色砂質土 褐色土大ブロック、黒色土大ブロックを 5 % 含む。
- 2 暗褐色土 A s - C 5 % 含む。
- 3 褐色土 暗褐色土小ブロック 5 % 含む。
- 4 褐色砂質土 白色土粒 5 % 含む。

第282図 13区土坑

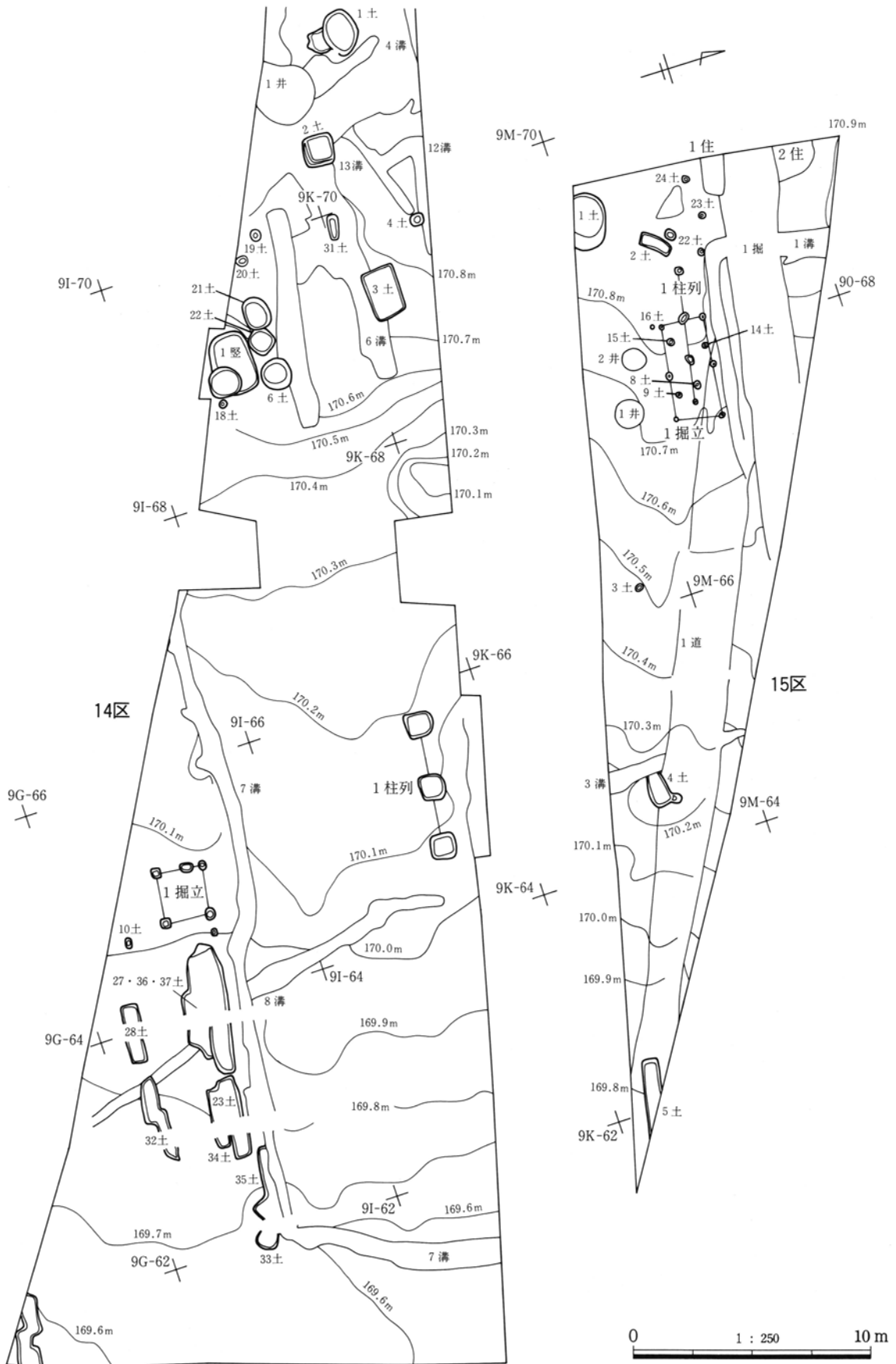


第283図 11区 1号土坑出土遺物

14区 埋土は、①表土に近いにぶい黄褐色～暗褐色砂質土、②A s - C を含む黒褐色土、都合 2 つに分類される。①は 4・31号土坑を除く全ての土坑の埋土であり、1号掘立柱建物跡や1号柱列のピットとも共通している。また、分布及び形態により更に 3 つにグループ分けできる。①- 1 は、1～3・6・21・22

号土坑であり、1号井戸や1号竪穴状遺構と関連するものと見られる。①- 2 は、23・27～30・32～37号土坑であり、形状から芋穴に似るが、調査以前の地境や径道よりもむしろ7号溝に並行している点で注目される。また、1号掘立柱建物跡と関連する可能性がある。①- 3 は10・13・18～20号土坑であり、形状は

3. 土坑・土壙墓・竪穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑



第284図 14区・15区土坑全体図

ピットである。②は4・31号土坑であるが、4号溝等と共通しており、①よりも古い段階の遺構である。

1号竪穴状遺構 (P L 97・154)

隅丸台形を呈し、内側にD1～D3の円形を呈する内部土坑を持ち、桶を埋設したものと見られる。全体の規模は262×221cmを測る。D1・D2は並存したものと見られ、D3はそれよりも古く壊されている。D1の規模は径114×103cm、深さは据え方で30cm、掘り方で37cmである。D1の底面は、D2より40cm程低く設けられる。D2の規模は径85cm程であり、D3の規模は計測できない。D1～D3は、掘り方から5～15cm程黒色砂質土・暗褐色土を盛っており、上面に薄く粘土を張っている。遺物は1のすり鉢と2～4の寛永通宝などの銅銭のほか、磁器片8片が出土している。北側に隣接する6・21・22号土坑と一連の遺構と見られ、周辺の1号井戸跡及び1・2・3号土坑とも関連すると考える。出土遺物から近世に比定される。

1号土坑 (P L 97・98・154)

隅丸方形を呈し深く底面の平坦な土坑の長軸側に、正方形で浅い張り出しを伴い、全体でT字形を呈する。主要部の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。主要部の規模は径167×131cm、深さ55cmである。張り出し部の規模は径65×109cmで、石敷き面が確認面で露呈し、掘り方の深さで35cmである。張り出し部には、小円礫が敷き詰められており、主要部底近くで出土した同様な小円礫も張り出し部からの崩落と見られる。また、張り出し部には石敷き面の約5cm下に、上面をほぼ水平に据えた一辺約30cm大の方形に近い自然石が出土し、石敷き施設の下部構造または同じ用途を持った1段階古い構造物と推測する。本土坑は位置から、1号井戸との関連が強いと見られ、水場が想定される。遺物は1の陶器鉢及び2・3の軟質陶器焙烙・焜炉のほか、軟質陶器片9片、陶磁器片10片が出土している。

2号土坑 (P L 98)

整った長方形を呈し深く、壁は西側が垂直であり、東側が半ばまで斜めでその後垂直に立ち上がる。底

面はほぼ平坦。規模は径145×116cm、深さ65cmである。埋土は4つの土層がほぼ水平に堆積するが、硬化面は認められなかった。性格不明。遺物は陶磁器片3片が出土している。

3号土坑 (P L 98・154)

整った長方形を呈し深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦でやや柔らかい。規模は径211×159cm、深さ45cmである。埋没は人為埋填と考えられる。性格不明。遺物は1の磁器碗・2の軟質陶器内耳鍋のほか、軟質陶器片2片が出土している。

6号土坑 (P L 98)

整った円形を呈しやや深く、桶を埋設したものと見られる。規模は径138×131cm、深さ42cmである。壁・底側ともに掘り方を持つが、特に締め堅めはなく粘土も見られない。桶の底径は痕跡から約70cmを測る。なお、南側半分は調査時に誤って掘り方面まで下げてしまい、埋設面は調査できなかった。埋設面は人為的な一時埋填だが、角礫を意図的に使用したと見られ、廃棄時に埋填したものとすれば興味深い。1号竪穴状遺構、21・22号土坑と一連の遺構と考える。遺物は1の陶器碗・2の瀬戸美濃系片口のみが出土している。出土遺物から18世紀前半に比定される。

21号土坑 (P L 98・99)

整った円形を呈し浅く、桶を埋設したものと見られる。据え方の規模は径93×84cm、深さ12cmである。掘り方の規模は径131×116cm、深さ9cmである。確認段階では西側半分だけ粘土が外周しており、深さ約6cm下まで確認できた。この粘土の内側が桶の据え方となる。桶の底径は痕跡からほぼ85cmを測る。6号土坑同様、1号竪穴状遺構と一連の遺構と見られる。遺物は出土しなかった。

22号土坑 (P L 98・99)

ほぼ円形を呈し浅く、桶を埋設したものと見られる。壁は緩やかで不分明。底面はやや凸凹する。規模は径116×108cm、深さ9cmである。粘土は見られないが、埋土は21号土坑の据え方土に似ており、本土坑は掘り方のみが残存していた可能性がある。桶の

3. 土坑・土壙墓・竪穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑

底径は推定できない。6号土坑同様、1号竪穴状遺構と一連の遺構と見られるが、他に比べて深さが際だって浅い点で注目される。遺物は出土しなかった。

27・36・37号土坑 (P L99)

3基ともに長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。27号土坑の規模は、径531×95cm、深さ50cmである。36号土坑は長径230cm、37号土坑は長径426cmを測る以外、規模は不明。3基の新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。位置及び

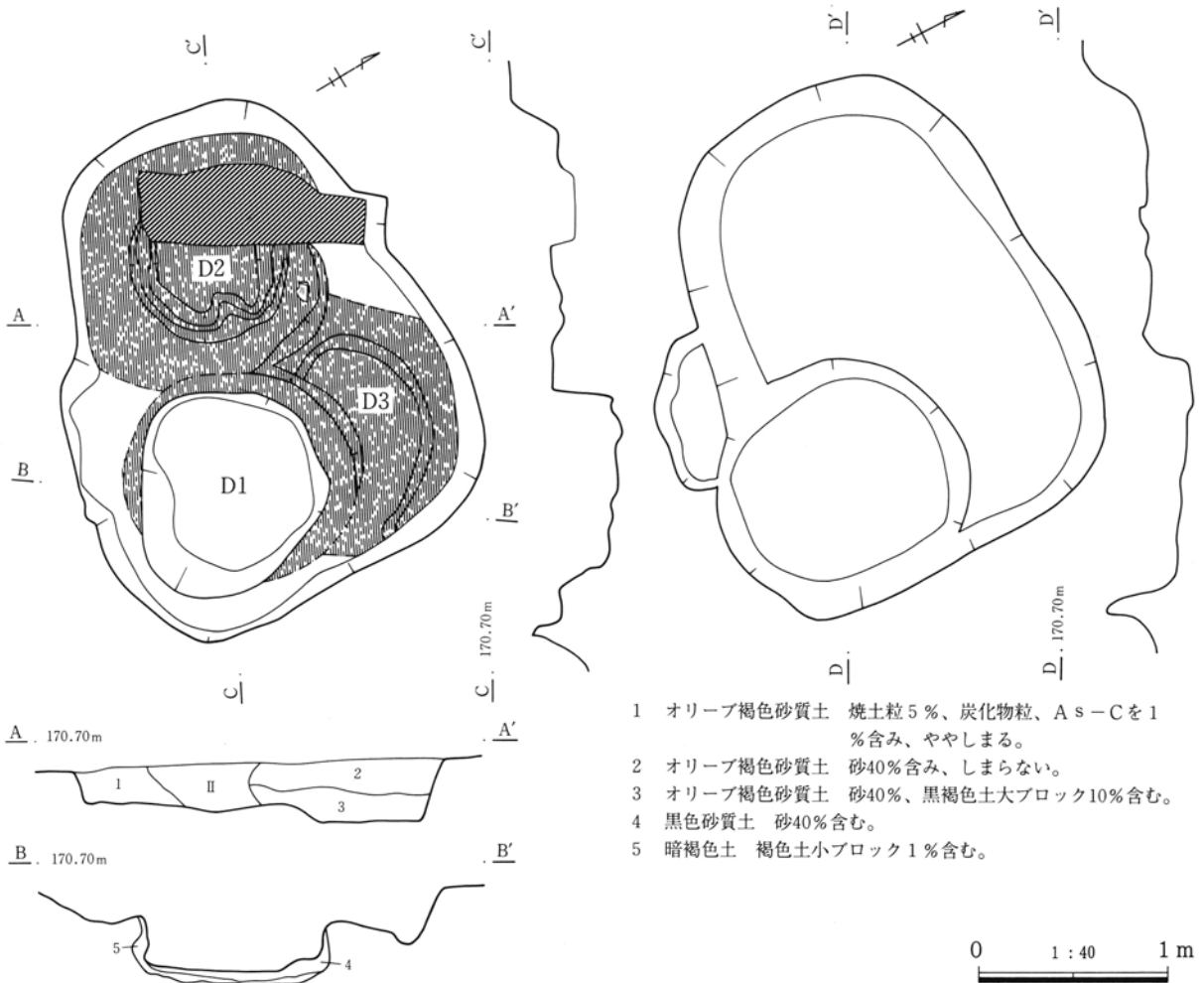
15区 埋土は、①表土に近いオリーブ褐色～黒褐色砂質土、②暗褐色砂質土、③A s - Cを含む黒褐色土、都合3つに分類される。①は4・5号土坑で、形状から芋穴に位置づけられ、現在の前橋市道に並行する。③は3号土坑のみで、3号溝の埋土に共通

埋土から、1号掘立柱建物跡及び7号溝との関連が想定される。

31号土坑

隅丸方形を呈し、西壁は斜めに立ち上がり、東壁は垂直に立ち上がる。底面は丸みを持ち、東へやや傾斜している。規模は径115×59cm、深さ37cmである。須恵器碗片が出土している。6号溝より古い。埋土及び出土遺物から奈良・平安時代に比定される。

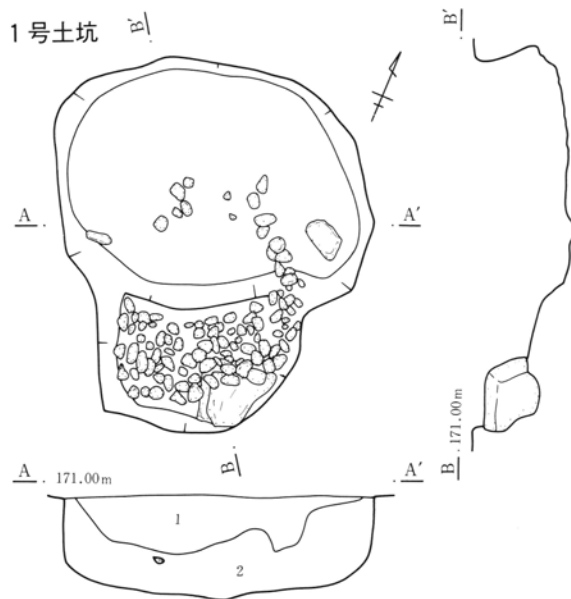
する。②は上記以外の土坑全てであり、1号土坑を除いて形状はピットである。また、②は1号掘立柱建物跡・1号柱列や1・2号井戸の埋土と共通しており、多くはこれらに関連すると考えられる。



第285図 14区1号竪穴状遺構

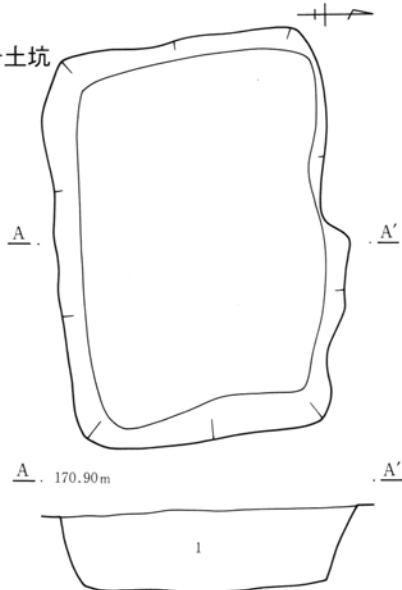
1号土坑 (P L 99・154)

ほぼ半分が調査区域外となるため形状不明。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径240×147cm以上、深さ32cmである。最大30×17×12cmの円礫を含むが、投棄された状態で規則性はない。遺物は1の敲石のほか、磁器片1片が出土している。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡及び1・2号井戸跡と関連するものと見られる。



- 1 暗褐色砂質土 褐色土大ブロック、白色軽石を5%含む。
- 2 暗褐色砂質土 白色軽石、円礫を5%含む。

3号土坑



- 1 にぶい黄褐色土 褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを5%、白色軽石1%含む。

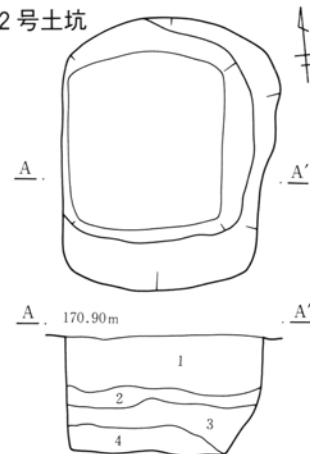
3号土坑

円形を呈するピット。底面は西に傾斜する。規模は径32×31cm、深さ27cmである。

5号土坑 (P L 99)

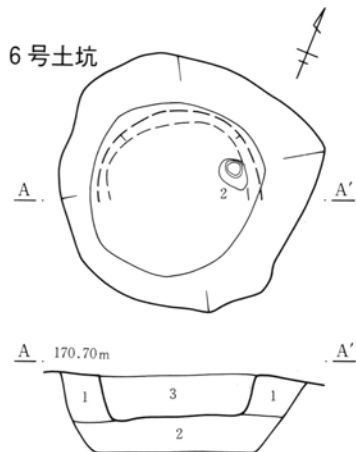
ほぼ半分が調査区域外となるが、非常に長い長方形を呈すると見られる。規模は径220以上×74cm、深さ60cmである。芋穴か。人為埋填される。遺物は磁器片1片が出土している。

2号土坑

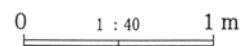


- 1 にぶい黄褐色砂質土 砂10%、白色軽石5%、小円礫1%含む。
- 2 暗褐色土 褐色土粒5%含む。
- 3 黒褐色土 黄色土粒、白色軽石を5%含む。
- 4 黒褐色砂質土 砂20%含む。

6号土坑

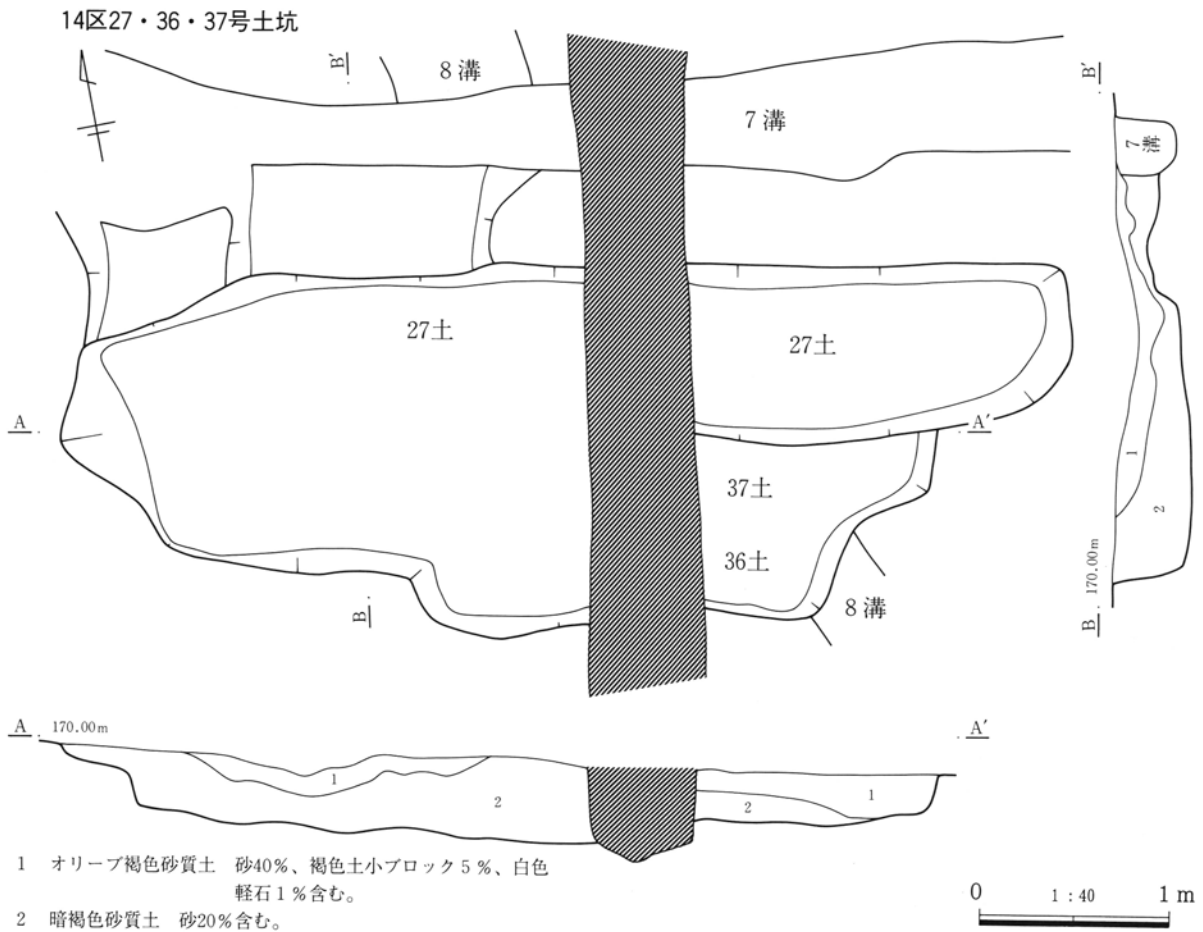
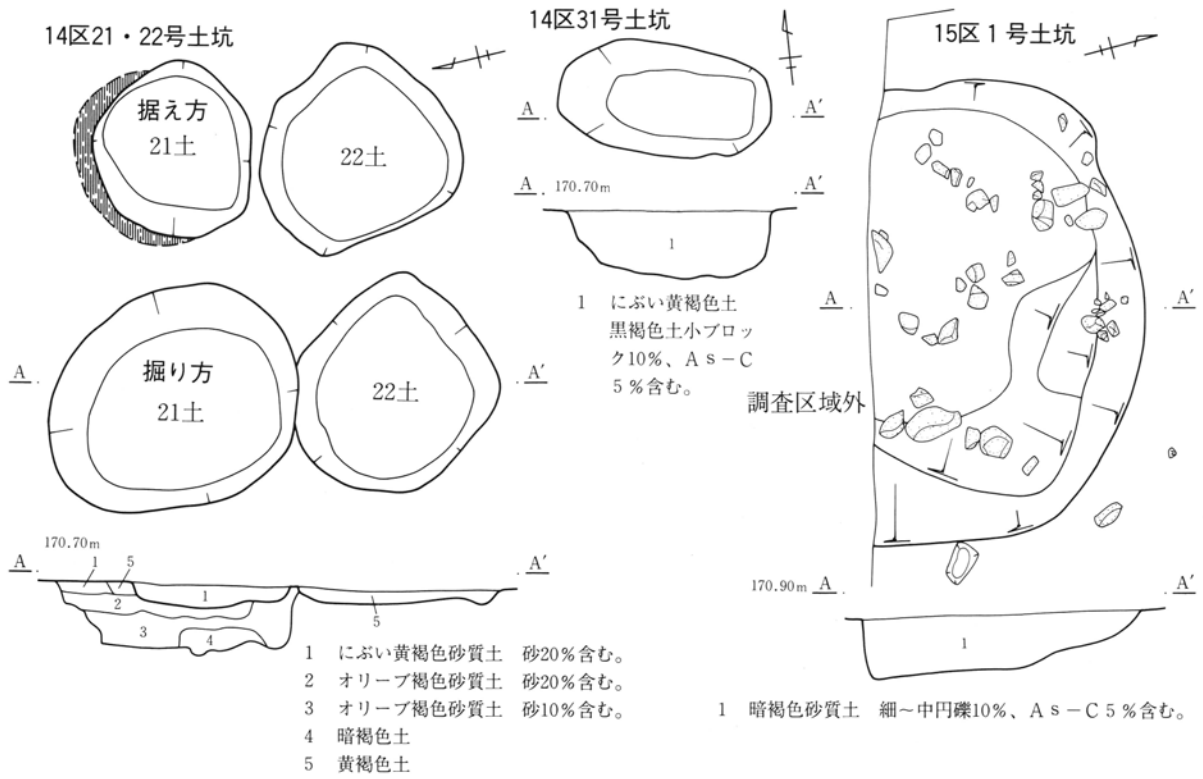


- 1 にぶい黄褐色土 黒色土小ブロック5%含む。
- 2 黒色土 A s-C 5%含む。
- 3 小〜大角礫

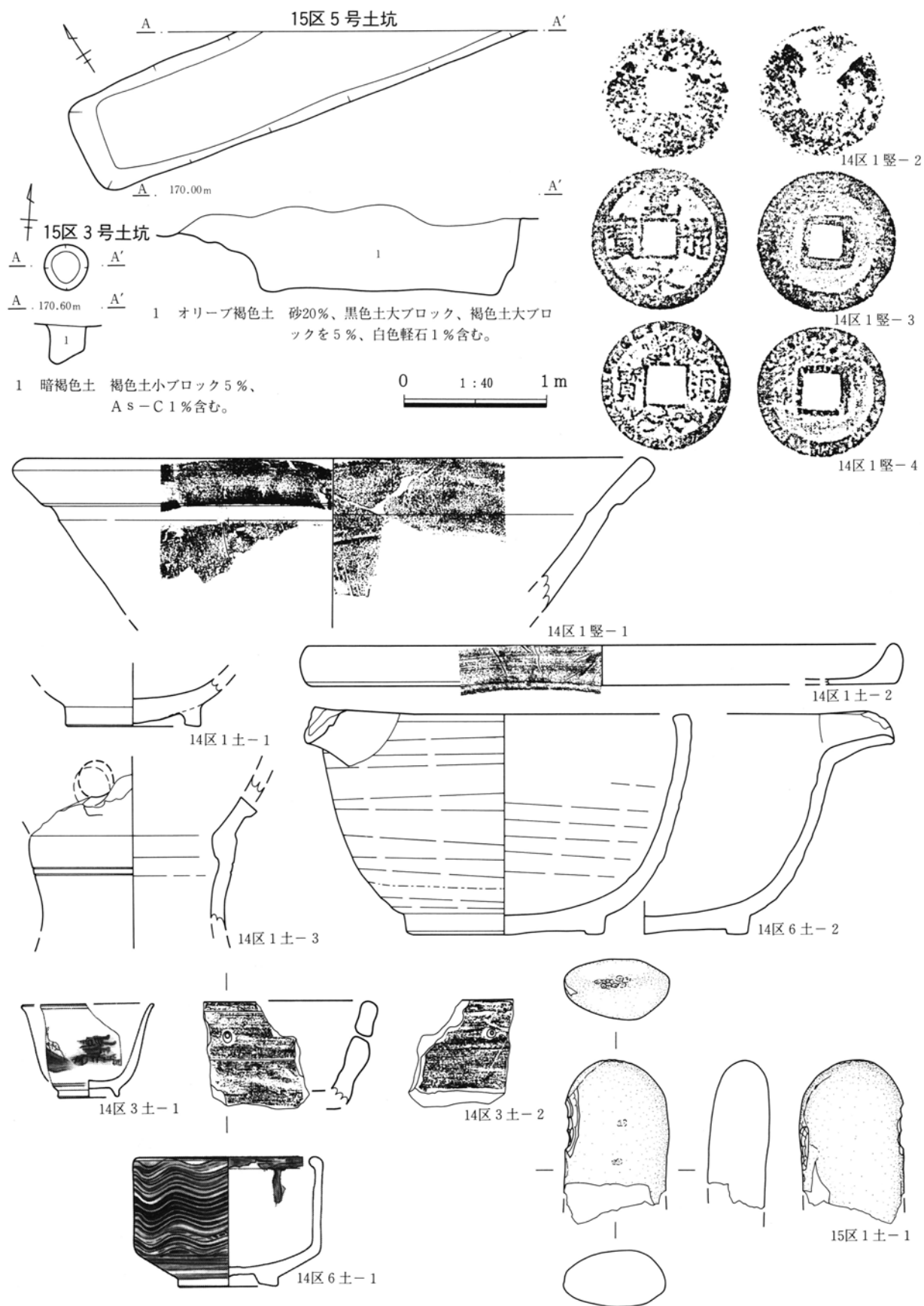


第286図 14区土坑

3. 土坑・土壙墓・竪穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑



第287図 14区・15区土坑



第288図 15区土坑・14区・15区土坑出土遺物

4. 堀・溝

1区2号溝

位置 西端 2L-21グリッド

重複 120・121号土坑より古い。

形態 中央部で北に折れ、くの字状を呈し、やや不整形で外形は波打つ。規模は3.04×0.60m、深さは断面観察部で54cmである。走向方位はN-70°-W程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。

出土遺物 土師器甕片4片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

3区1号堀 (PL99・付図5)

位置 調査区を南北に縦走する。

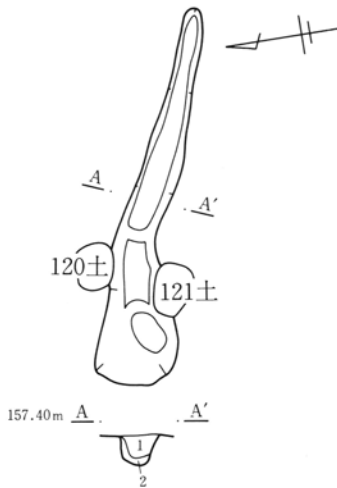
重複 2号土坑よりも新しい。

形態 整った直線状。規模は長さ47.60mで、最大幅は上幅2.32m下幅0.64m、深さは北端で70cm南端

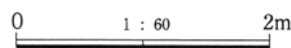
で89cmである。走向方位はN-1°-E程である。断面は逆台形で、壁は底面から半分位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後斜めに立ち上がる。底面は南方向に緩やかに傾斜しており、底面標高は北端から南端まで47.60mで62cm下がる。流水痕跡は見られない。確認面は褐色土(Ⅷ)上面で、黒褐色土(Ⅵ・Ⅶ)はほとんど堆積していなかった。したがって時期は不明だが、調査区全体が大きく削平されていると見られ、遺構密度が低い要因と考える。位置及び埋土から、町道を挟んで4区1・2号堀と同一の区画堀と見られ、西側が区画された内側と考えるが、関連する遺構は認められない。

出土遺物 なし

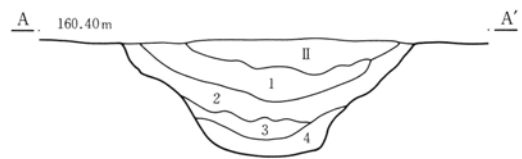
時期 4区1号堀と同じ。



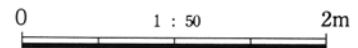
- 1 暗褐色土 A s-C 1%含む。
- 2 黒褐色土 A s-C 1%含む。



第289図 1区2号溝



- 1 にぶい褐色土 褐色砂5%含む。
- 2 黒褐色砂質土 A s-C、砂利を10%含む。
- 3 黒褐色土 黒色土大ブロック10%含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色砂大ブロック5%含む。



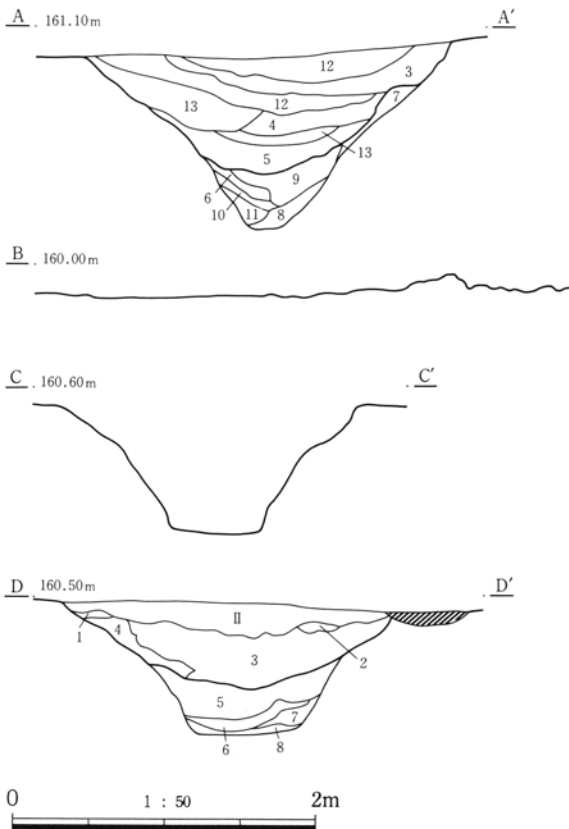
第290図 3区1号堀

4区1・2号堀 (PL99~101・154・付図5)

位置 調査区を南北に縦走する。

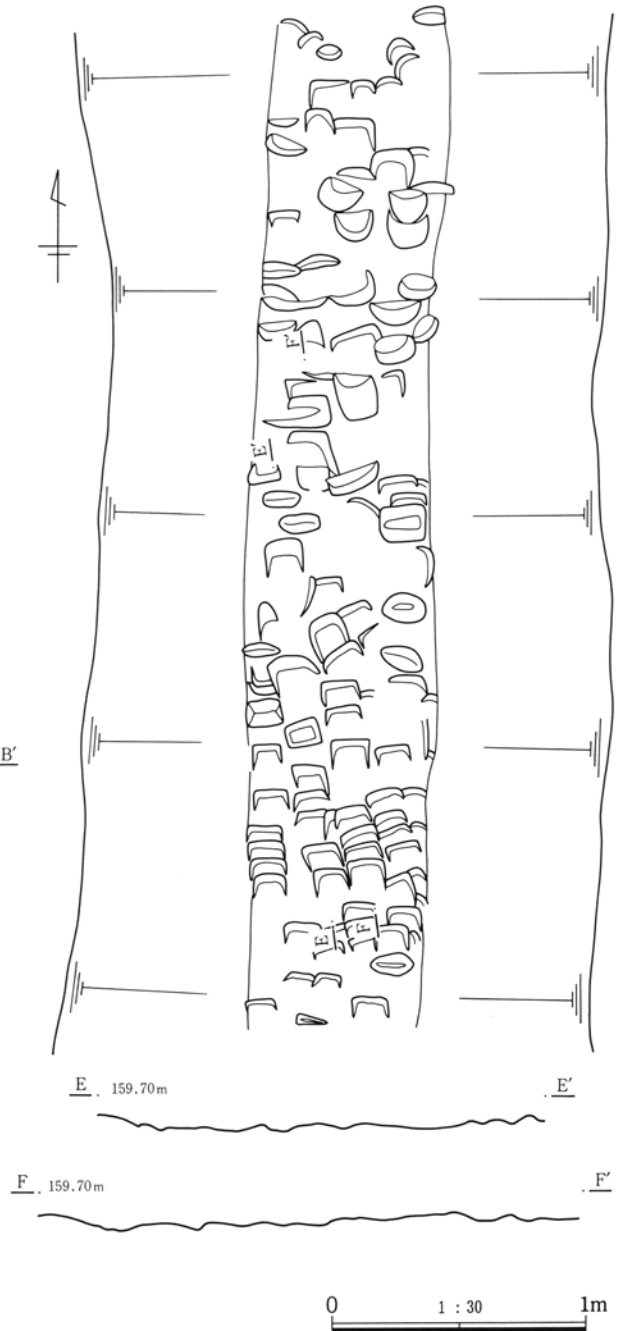
重複 1号住居跡、16・60・79号土坑、2・4号溝、FA下畠跡よりも新しく、17・18号土坑とは新旧関係不明。

形態 1号堀はL字状を呈し、北西角から長さ20.50mで直角に南方へ折れ、更に117.60m延びる。東西軸の規模は、最大で上幅2.78m下幅0.52m、深さ116cm、走向方位はN-89°-E程である。南北軸では、最大で上幅2.63m下幅0.82m、深さは北端で84cm、中央部で92cm、南端で100cmである。走向方位はN-2°-Eである。2号堀は長さ2.65mで、上幅1.50m下幅0.76m深さ60cmである。断面は逆台形で、一度掘り直される。このため、壁は底面から2分の1位から斜めに立ち上がる。1号堀東西軸の底面は西傾斜で、東端から西端まで19.3mでほぼ水平である。南北軸の底面は南傾斜で、北端から南端まで115mで110cm下がる。底面はほぼ平坦で、掘削時の工具痕が全体によく残り、特に南北軸の中央付近は図示したとおり顕著である。



第291図 4区1号堀

- 1 灰褐色土 IVの崩落土。
- 2 黒褐色土 褐色土大ブロック5%含む。
- 3 にぶい褐色土 褐色砂5%含む。
- 4 暗褐色土 褐色土小ブロック5%含む。
- 5 黒褐色砂質土 A s-C、砂利を10%含む。
- 6 黒褐色土 黒色土大ブロック10%含む。
- 7 暗褐色土 A s-C 1%含む。
- 8 暗褐色土 黄褐色砂大ブロック5%含む。
- 9 暗褐色砂質土 褐色砂小ブロック、A s-Cを5%含む。
- 10 にぶい黄褐色砂 水成堆積。
- 11 灰褐色シルト 水成堆積。
- 12 灰色砂礫 小垂円礫主体。白色軽石1%含む。
- 13 暗褐色砂質土 砂礫40%、橙色土粒、A s-Cを5%含む。



第292図 4区1号堀工具痕



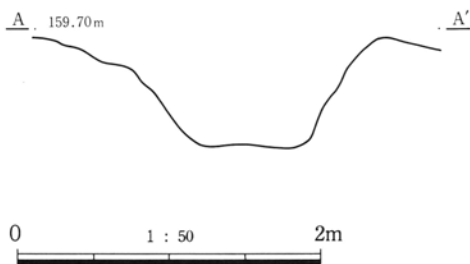
第293図 4区1号堀出土遺物

東西軸で一部流水痕跡が見られるが、全体では底面近くにやや粘質の黒色土があり、ある程度湿った状態が保たれていたと見られる。東西軸西端では、南から多くの砂礫により人為埋填されており、近接する225号土坑に類似し関連が想定される。なお、内側に土塁が存在したことを示す埋没状況はない。1号堀は3.92mの土橋状の開口部を隔てて2号堀へと連

なる区画堀と見られ、更に南側町道を挟んで3区1号堀と同一の区画堀であり、3・4区を通した南北の長さは、外側で176.10m内側で174.20mとなる。区画された内側は西側と考えるが、関連する遺構の選別は困難で、平安時代のもも含めて多数のピットが分布する状況にある。

出土遺物 底面近くで出土した遺物は5の石造物片のみで、他は埋土中である。出土遺物量は少なく、その内では土師器・須恵器片が多くを占めるが、周辺の竪穴住居跡からの混入と見られる。

時期 出土遺物及び埋土から中世以降と考えられる。
備考 底面の掘削または整形は、工具痕から見て刃先が角型で幅約15cmの鋤または鍬を使用して、走向方向に並行してなされていた。



第294図 4区2号堀

4区2号溝 (P L101・付図5)

位置 中央部南寄り 3T~4D-23~27グリッド
重複 64・65・72号土坑、1号堀よりも古い。
形態 ほぼ直線状。規模は東端から長さ8.0mで一度1号堀で分断され、その後更に西へ24.66m伸びる。全長は26.55mとなる。幅は0.85m、深さは断面観察部で23cmである。走向方位はN-50°-W程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。
出土遺物 土師器坏・甕片40片弱が出土している。
時期 出土遺物から奈良・平安時代に比定される。

4区3号溝 (付図5)

位置 南端 3P-25・26グリッド
重複 なし
形態 ほぼ直線状。規模は2.70×0.45m、深さは断面観察部で35cmである。走向方位はN-81°-E程である。断面は皿状で浅い。削平が著しいが、位置及び埋土から両端は延びて、東は5号溝へ西は1号堀に壊されて7号溝に連続していた可能性が高い。流水痕跡は見られない。
出土遺物 なし
時期 埋土から2号溝と同じか。

4区4号溝 (P L101・付図5)

位置 北半部 4I~4Q-25~29グリッド
重複 FA下畠跡よりも新しく、1号堀より古い。
形態 ほぼ直線状。規模は北東角から長さ22.3mで一度立ち上がり(途中一度攪乱に壊されるが)、0.46mの間隔をとって再び25.30m南西方向走向する。走向方位はN-22~31°-E程である。断面はU字状で、底面はほぼ水平だが、北東部は北東方向の谷地形に向かって緩やかに傾斜する。流水痕跡は見られないが、埋土にAs-B二次堆積が顕著である。中央部の開口部は通路である可能性が高く、本溝が何らかの区画溝であることを示唆する。
出土遺物 土師器・須恵器片が少量出土している。
時期 出土遺物から奈良・平安時代に比定される。

4区5号溝 (付図5)

位置 東端 3P~3Q-23グリッド
重複 なし

形態 検出範囲が狭く形状不明。規模は0.65×0.60m、深さは断面観察部で18cmである。調査面積は少ないが、東西方向に走向する。断面は皿状。流水痕跡は見られない。前橋市道を挟んで西側3号溝と同一の溝である可能性が高い。

出土遺物 なし

時期 埋土から2号溝と同じか。

4区6号溝 (P L101・154・付図5)

位置 南端 3P~3Q-27~29グリッド
重複 なし
形態 ほぼ直線状。規模は9.90×1.06m、深さは断面観察部で28cmである。走向方位はN-55°-W程である。断面はやや乱れたU字状を呈する。流水痕跡は見られない。西端は小谷地と重複して消滅した可能性が高く、元来西側へ延びていたものと見られる。東側7号溝とは0.42mの間隔を設けており、通路であった可能性がある。

出土遺物 1の刀子のみが出土している。

時期 埋土から2号溝と同じか。

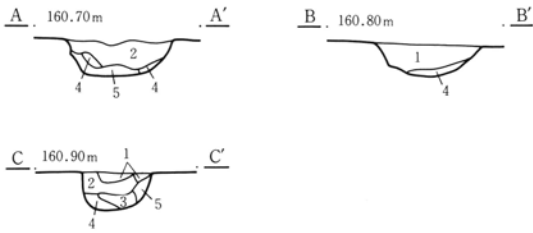
4区7号溝 (P L101・付図5)

位置 南端 3P-27グリッド
重複 なし
形態 検出範囲が狭く形状不明。規模は6.60×0.60m、深さは断面観察部で30cmである。調査面積は少ないが、東西方向に走向する。断面は皿状で浅い。流水痕跡は見られない。削平及び攪乱が著しいが、元来東側へ延びて3・5号溝と同一の溝であった可能性が高い。

出土遺物 なし

時期 埋土から2号溝と同じか。

4号溝



- 1 黄灰色小礫 A s-B二次堆積。
- 2 オリーブ褐色砂質土 におい黄褐色大ブロック10%、A s-C 1%含む。
- 3 黒色土 VI主体。F A混入。
- 4 暗褐色土 F A混入。
- 5 暗褐色土 黒色土大ブロック10%含む。

5号溝

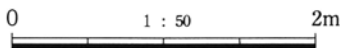


- 1 暗褐色土 細砂20%含む。

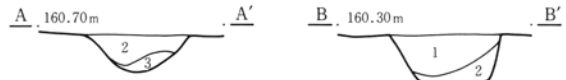
6号溝



- 1 暗褐色土 褐色土大ブロック20%、A s-C 1%含む。
- 2 褐色土 F A混入。
- 3 黒褐色土 小~中円礫10%、A s-C 1%含む、よくしまる。水成堆積。

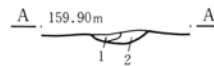


2号溝



- 1 褐色土 黄褐色土大ブロック20%含む。
- 2 灰褐色土 F A混入。
- 3 黒褐色土 VIIの崩落土。

3号溝

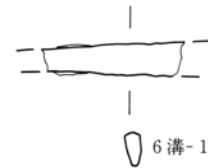


- 1 褐色砂礫 小礫主体。
- 2 暗褐色土 におい褐色土大ブロック40%、A s-C 1%含む。

7号溝



- 1 暗褐色土 褐色土大ブロック20%、A s-C 1%含む。
- 2 黒褐色土 小~中円礫10%、A s-C 1%含む、よくしまる。水成堆積。



第295図 4区2~7号溝セクション・6号溝出土遺物

5区1号溝 (P L 102・154)

位置 西半部 5B~5G-26~27グリッド

重複 なし

形態 南側3分の1まで直線的に走行した後、15°程西に折れて更に直線的に進む。また、南端部はほぼ直角に折れ50cm程東へ伸びる。規模は27.00×1.20m、深さは断面観察部で15cmである。走行方位は南側N-3°-W程、北側N-18°-W程である。断面はU字状を呈し浅い。北側3分の1程で、土橋状に50cm程立ち上がり再び落ち込む。この土橋状の盛り上がりは、地山面を掘り残したもので、上面に小円礫が多く見られた。この小円礫は地山に見られないため、意識的に置かれたものであれば、この盛り上がりは出入口であった可能性もある。調査区全

体の地形は北東方向に傾斜するが、本溝は北へ向かって深く底面も下る。なお、南側が浅いのは削平によるものと見られる。したがって、南端部は元来東へ伸びて行き、2号溝と接近または合流していた可能性があり、L字形の区画溝となるかもしれない。流水痕跡は見られない。

出土遺物 1の須恵器底部片のほか、土師器杯・甕片が30片程度出土している。

時期 出土遺物から9世紀後半に比定され、周辺住居跡との関連が想定される。

5区2号溝 (P L102)

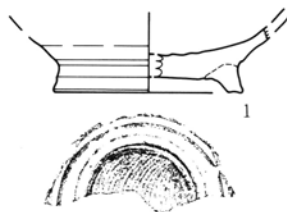
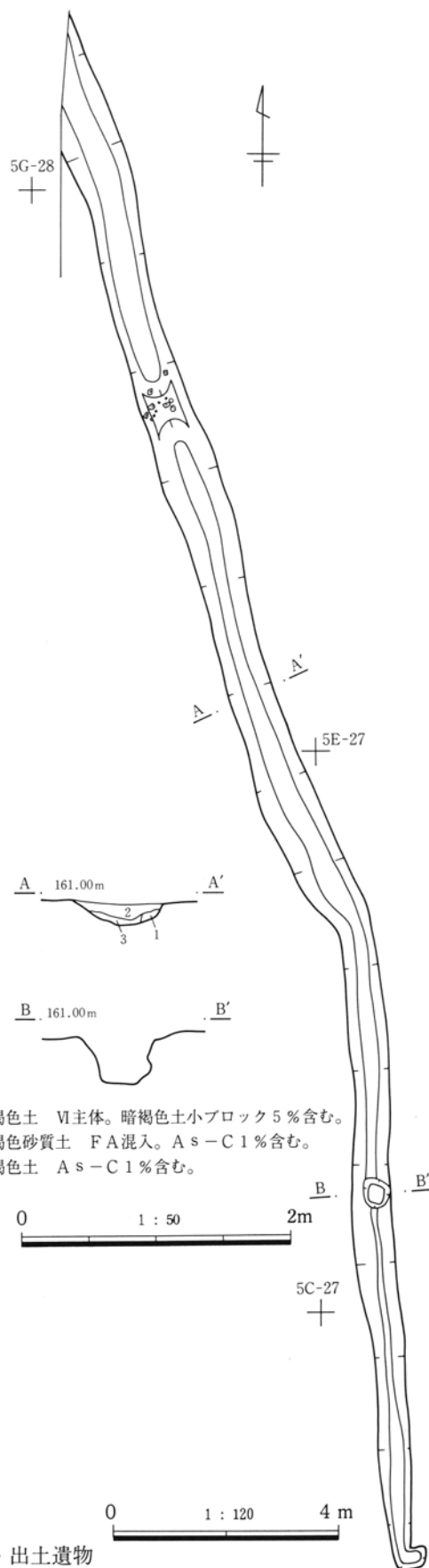
位置 中央部東側 5A~5B-22~25グリッド

重複 FA下畠跡よりも新しい。

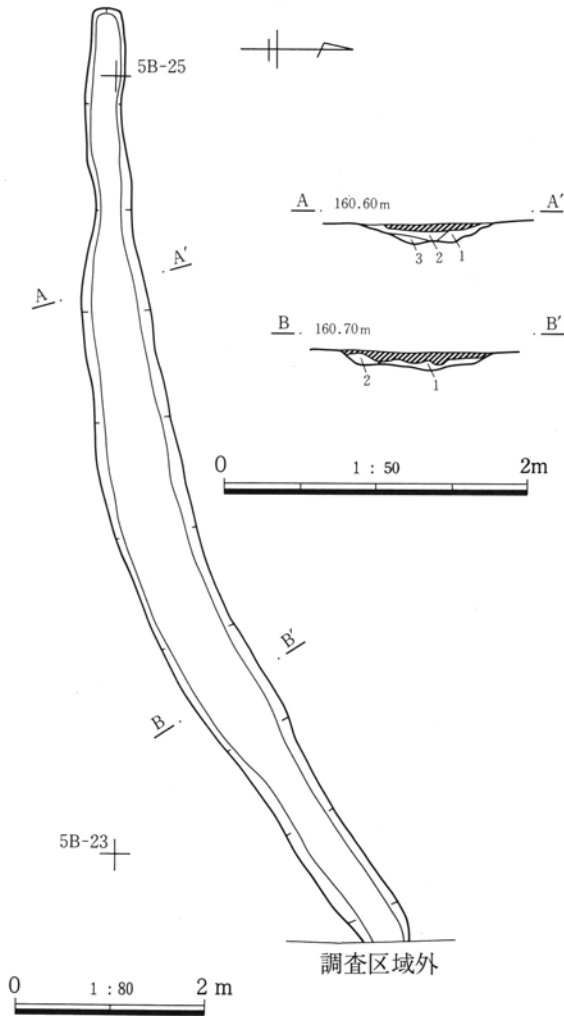
形態 ほぼ直線的で、東端に向かって北へ湾曲する。規模は13.21×1.14m、深さは断面観察部で13cmである。走行方位はN-57~88°-W程である。断面は皿状を呈し浅い。調査区全体の地形と同じく、底面は北東方向に緩やかに傾斜する。なお、西側が徐々に浅くなるのは、1号溝と同様削平によるものと見られ、元来西へ伸びて行き、1号溝と接近または合流していた可能性があり、L字形の区画溝となるかもしれない。流水痕跡は見られない。

出土遺物 土師器甕片11片が出土している。

時期 位置及び埋土から、周辺の竪穴住居跡や1号溝の時期に近いものとする。



第296図 5区1号溝・出土遺物



- 1 黒褐色土 VI主体。暗褐色土小ブロック5%含む。
- 2 暗褐色砂質土 FA混入。As-C1%含む。
- 3 暗褐色土 FA大ブロック20%含む。

第297図 5区2号溝

6区1号溝 (P L 102・154)

位置 北端 5R-23~27グリッド

重複 1号土坑・2号溝よりも古く、FA下畠跡よりも新しい。4号溝との新旧関係不明。

形態 中央部がやや折れるがほぼ直線的。規模は20.00×0.70m、深さは断面観察で10cmである。走行方位はN-76~89°-W程である。断面はU字状を呈し浅い。調査区全体の地形と同じく、底面は東方向に緩やかに傾斜する。

出土遺物 1の須恵器杯のほか、土師器甕片・須恵器壺片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定

される。

6区3・4・5号溝 (P L 102)

位置 北端 5R-25~27グリッド

重複 2号溝よりも古く、FA下畠跡よりも新しい。1号溝との新旧関係不明。

形態 3・5号溝は東西方向、4号溝は南北方向で、ほぼ直線的。規模は3号溝が11.26×1.30m、深さは断面観察で3cm、4号溝は1.1×0.5m、深さは断面観察7cm、5号溝は2.65×0.32m、深さは3cm程である。走行方位は3・5号溝でN-79°-W程、4号溝でN-4°-E程である。断面は皿状を呈し浅い。調査区全体の地形と同じく、底面は東方向に緩やかに傾斜する。3条の溝とも砂を底面近くに含んでおり、流水があったものとする。また、3・4号溝の合流部分が広がっている状況から、3条の溝は並存する小流路であったかもしれない。なお、位置や形態から、3号溝は7号溝と合流していた可能性がある。

出土遺物 3号溝から土師器坏片・須恵器碗片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

6区6号溝 (P L 102)

位置 北端 5R~5S-23~25グリッド

重複 なし

形態 外形線は波うち、底部は中程から東側が段差をもって下がる。規模は10.20×1.50m、深さは断面観察部で11cmである。走向方位はN-70~90°-W程である。断面は凸凹したU字状を呈する。砂を底近くに含み、壁・底とも浸食が見られることから、流水していたものと認める。北側調査区境を挟んで、7区6・7号溝と同一の溝と見られ、7区20号溝と合流するものと判断される。

出土遺物 埋土から土師器甕片・須恵器片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から平安時代に比定される。

6区7号溝 (P L 102)

位置 北東隅 5Q~5R-23グリッド

重複 なし

形態 ほぼ直線状。規模は2.20×1.00m、深さは断面観察部で9cmである。走向方位はN-75°-W程である。断面はU字状を呈する。調査区全体の地形と同じく、底面は東方向に緩やかに傾斜する。砂を底近くに含み、底面がやや荒れることから、若干流水していたものと認める。位置及び埋土から、西側に更に伸びて3号溝と合流していた可能性がある。

出土遺物 なし 時期 不明

6区42号溝 (P L 102・154)

位置 中央部 5J~5N-22~27グリッド

重複 FA下畠跡・39号土坑よりも新しく、55号溝との新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状。規模は27.60×1.55m、深さは断面観察部で26cmである。走向方位はN-56~73°-E程である。断面はやや凸凹した皿状を呈する。調査区全体の地形は東方向に緩やかに傾斜するが、やや斜めに走向するかたちで、北東に向かってやや広がりながら底面もわずかに下がる。埋土に砂を含んでおり、若干流水していたものと認める。

出土遺物 1・2の須恵器壺片、3の瓦片のほか土師器甕・須恵器甕数片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から平安時代に比定される。

6区50・54・55号溝 (P L 103)

位置 中央部 5K~5L-25・26グリッド

重複 42号溝と重複するが、新旧関係不明。

形態 不整形で外形は波うち、各溝の境界も不分明だが、北西-南東方向とそれに直行する方向の2方向に溝は走向しているため、別に遺構名を付した。規模は54号溝で長さ3m程、50・55号溝は長さ7.5m程で、深さはともに10cm以下である。全て埋土に砂を含んでおり、若干流水していたものと認める。位置及び埋土から、42号溝と並存か。

出土遺物 なし

時期 42号溝の時期と同じか。

6区51・57号溝 (P L 103)

位置 南西部 5J~5K-25・26グリッド

重複 なし

形態 ほぼ直線状。規模は51号溝で6.01×0.6m、深さは断面観察部で5cm、57号溝は7.3×0.6m、深さは断面観察部で6cmである。走向方位はともにN-45°-E程である。断面は皿状で浅い。51号溝は底近くに砂を含み、若干流水していたものと認める。位置及び埋土から、42・53号溝など周辺の溝と並存する一連の遺構と考える。

出土遺物 なし

時期 42号溝の時期と同じか。

6区52号溝 (P L 103)

位置 中央部東端 5L~5M-22~24グリッド

重複 FA下畠跡よりも新しい。

形態 ほぼ直線状。規模は10.56×0.6m、深さは断面観察部で10cm程である。走向方位はN-55°-E程である。断面はU字状で、底は緩やかに北東方向に下がる。底面近くに砂を含み、若干流水していたものと認める。

出土遺物 なし

時期 42号溝の時期と同じか。

6区53号溝 (P L 103・154)

位置 南部 5I~5K-25~27グリッド

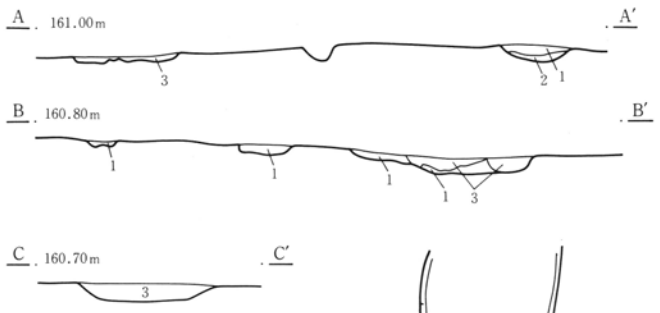
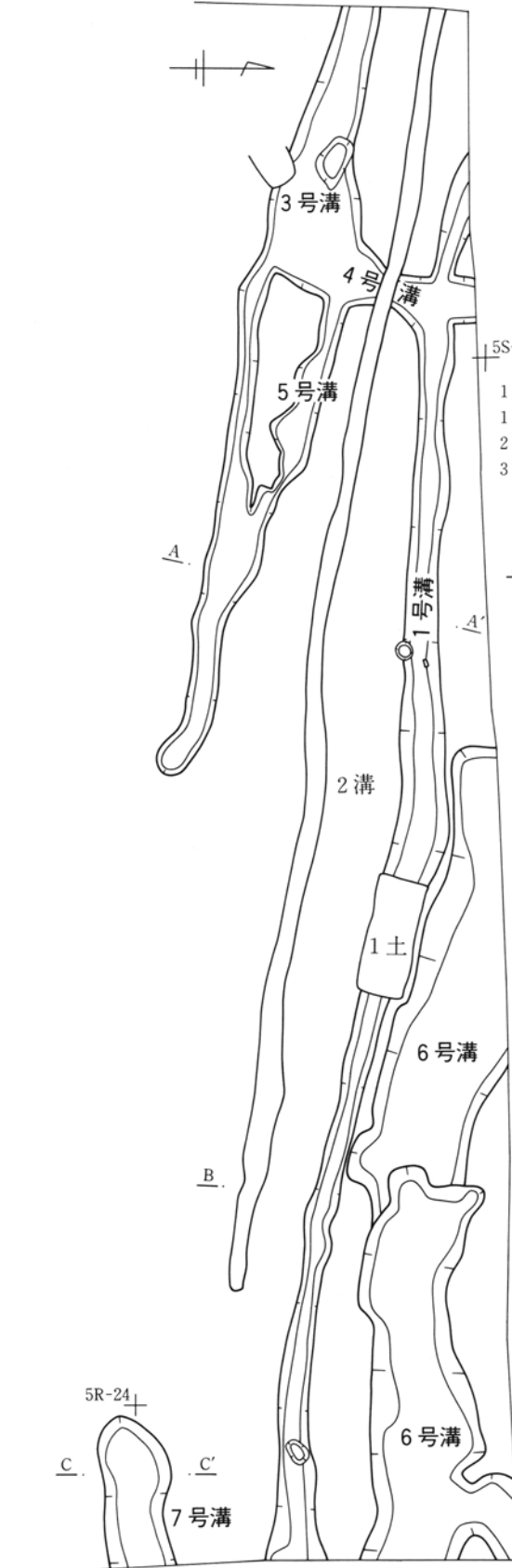
重複 FA下畠跡・49号土坑よりも新しく、38号土坑・1号井戸よりも古い。

形態 ほぼ直線状で、外形は波うつ。規模は17.70×2.40m、深さは断面観察部で6cmである。走向方位はN-48°-E程である。断面は皿状で浅い。底近くに砂を含み、若干流水していたものと認める。

出土遺物 1の土師器坏、2の鉄器片のほか土師器甕、須恵器坏・甕片が出土している。

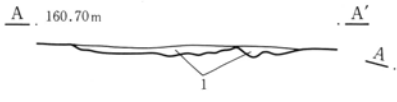
時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

1・3～7号溝



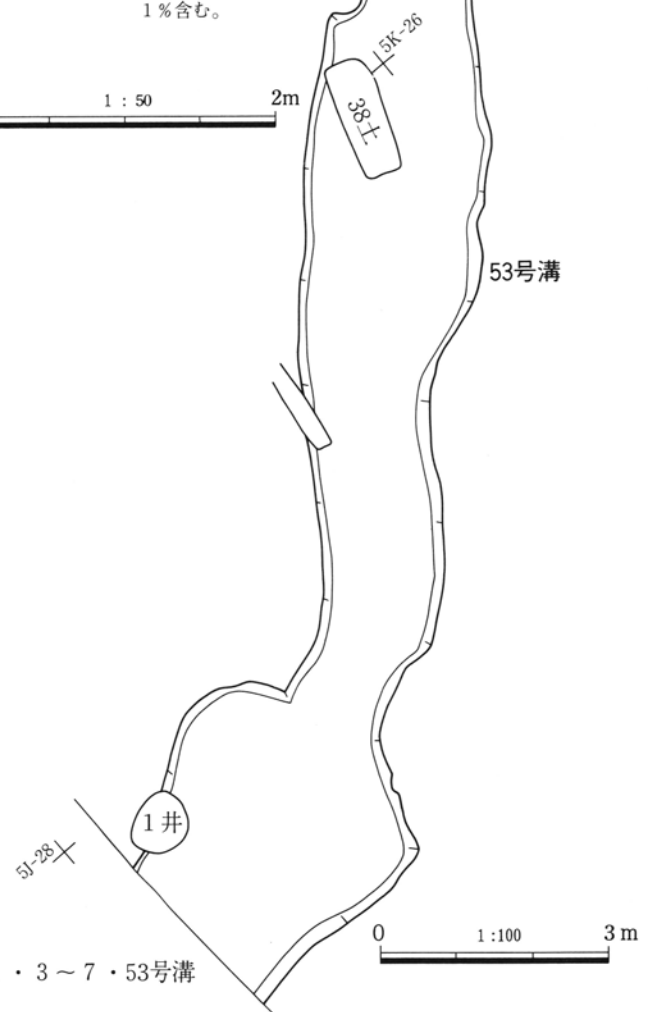
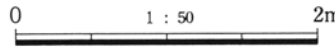
- 1・3～7号溝
- 1 にぶい黄橙色土 A s - C 1%含む。
 - 2 暗褐色土 A s - C 1%含む。
 - 3 にぶい黄橙色土 砂20%、A s - C 1%含む。

53号溝

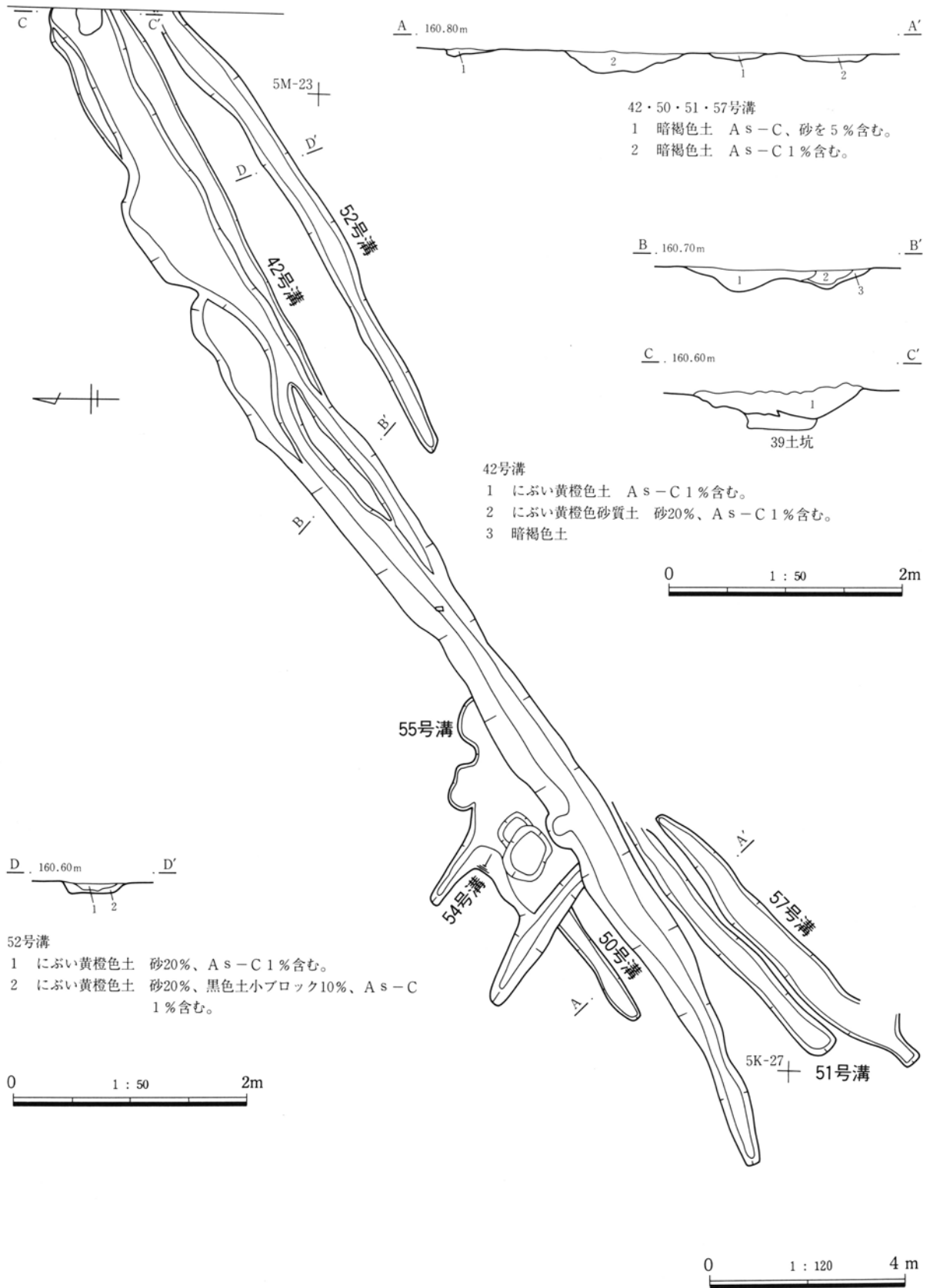


6区53号溝

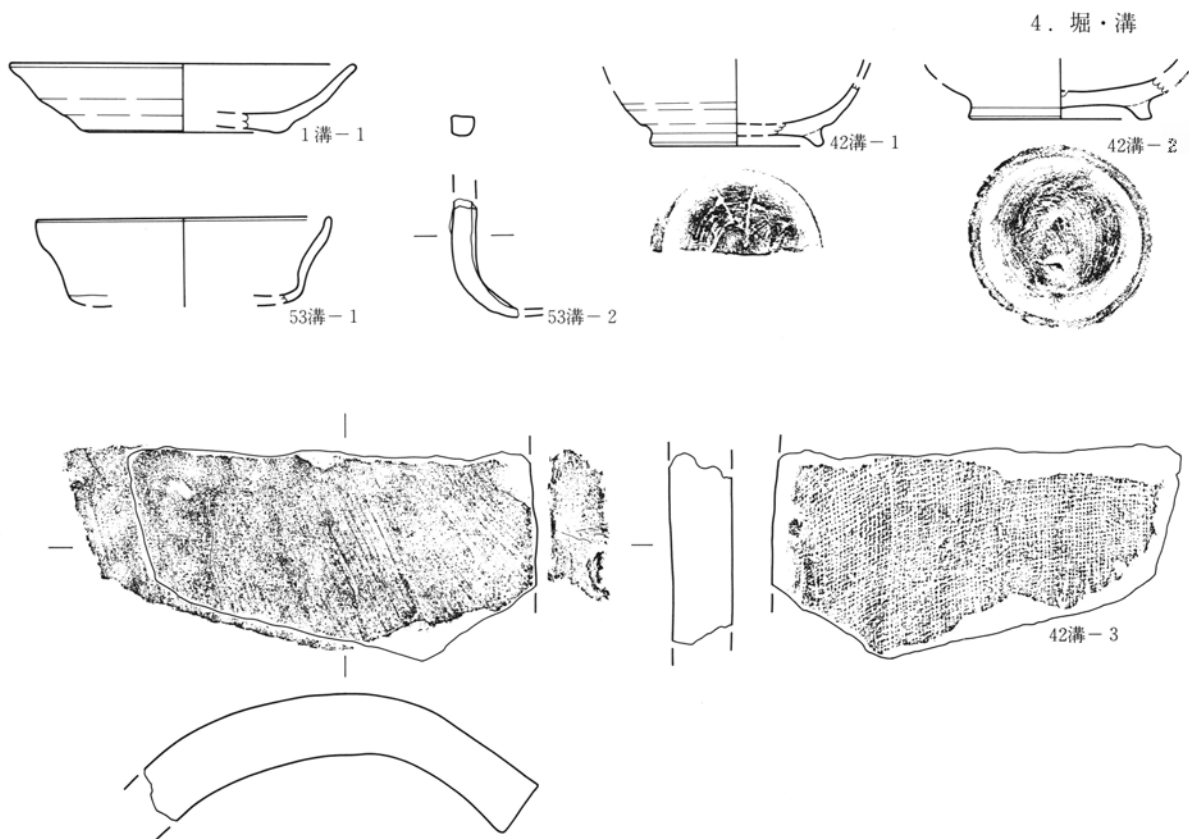
- 1 にぶい黄橙色土 砂20%、A s - C 1%含む。



第298図 6区1・3～7・53号溝



第299図 6区42・50～52・54・55・57号溝



第300図 6区1・42・53号溝出土遺物

7区4号溝 (P L103)

位置 北東隅 6H~6I-24グリッド

重複 なし

形態 ほぼ直線状。規模は4.08×0.92m、深さは断面観察部で27cmである。走向方位はN-58°-W前後である。断面はU字状。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜する。砂を底近くに多く含み、底面がやや荒れることから、若干流水していたものと認める。北側調査区境を挟んで、8区2号溝と同一の溝と見られる。

出土遺物 なし

時期 8区2号溝と同じか。

7区6・7号溝 (P L103・154)

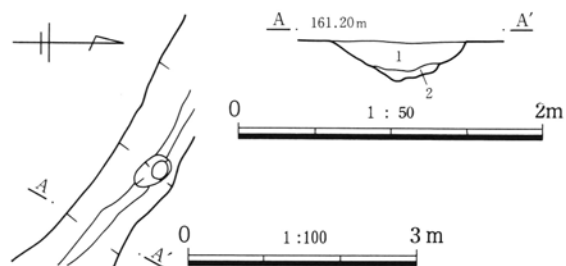
位置 南端 5S-25~27グリッド 重複 なし

形態 6号溝はやや弓なりに南側に膨らみ、7号溝は直線状。両溝の重複関係は7号溝が新しいが、重複部では境界が不分明である。規模は6号溝が重複部まで7m程で、最大幅1.95m深さは断面観察部で21cm、7号溝が10.20×1.95m、深さは断面観察部で37cmである。走向方位は6号溝がN-62~100°-

W程で、7号溝がN-33°-W程である。断面はともに凸凹したU字状を呈する。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜する。砂を底近くに多く含み、壁や底面が荒れていることから、若干流水していたものと認める。南側調査区境を挟んで、6区6号溝と同一の溝と見られる。

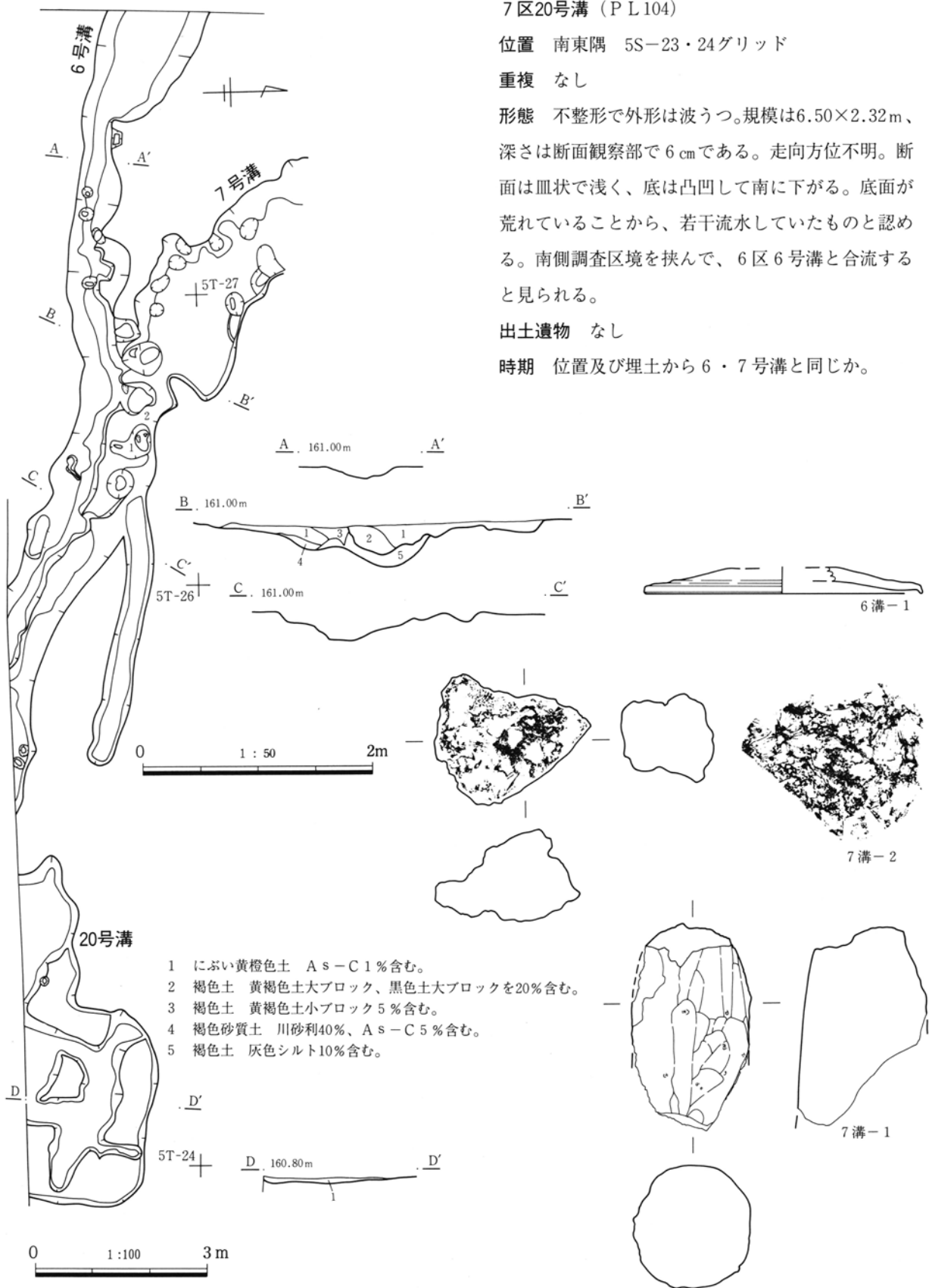
出土遺物 6号溝では1の須恵器蓋、7号溝では1の石製支脚、2の椀形鉄滓、そのほか土師器・須恵器甕片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。



- 1 灰黄褐色粘質土 黒色土小ブロック、FA小ブロックを5%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 灰黄褐色砂質土 礫20%含む。鉄分の凝集斑紋あり。

第301図 7区4号溝



第302図 7区6・7・20号溝・6・7号溝出土遺物

8区1号溝 (P L104)

位置 南半部 6J~6N-24~27グリッド

重複 FA下畠跡より新しく、68号土坑より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は29.11×1.04m、深さは断面観察部で23cmである。走向方位はN-22~47°-W程である。断面はU字状で、壁や底は浸食され凸凹しており、若干流水していたものと認める。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に傾斜する。北西端は徐々に浅くなり消滅することから、削平を受けたと見られ、本来はさらに北西に延びていたものと想定される。

出土遺物 土師器甕片4片、須恵器坏片1片が出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

8区2号溝 (P L104・155)

位置 南半部 6J~6O-26~28グリッド

重複 FA下畠跡より新しく、17・18号土坑より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は29.50×2.30m、深さは断面観察部で40cmである。走向方位はN-35°-W程である。断面はU字状で、壁や底は浸食され凸凹しており、若干流水していたものと認める。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に傾斜する。南側調査区境を挟んで、7区4号溝と同一の溝と見られる。

出土遺物 底部で1・2の須恵器坏、その他土師器坏・甕片がやや多く出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

8区3号溝

位置 北側中央部 6Q~6R-27グリッド

重複 4号溝と重複するが、新旧関係不明。

形態 直線状。規模は5.18×0.62m、深さは断面観察部で5cmである。ほぼ南北に走向する。断面は皿状で浅く、底面はほぼ水平。流水痕跡は見られない。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡と関連する可能性がある。

出土遺物 なし

時期 埋土から1号掘立柱建物跡と同じか。

8区4号溝 (P L104)

位置 北端 6R-24~28グリッド

重複 1号粘土採掘坑群よりも新しく、3号溝・1号井戸とは新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状で、1号井戸重複部分である中央部がやや膨らむ。規模は23.03×1.62m、深さは断面観察部で32cmである。ほぼ東西に走向する。断面は逆台形で、南壁は緩やかに幅広く立ち上がり、底面は東方向に緩やかに傾斜する。埋土にAs-Aの二次堆積が見られ、若干流水していた可能性がある。1号井戸との並存が想定される。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡と関連する可能性がある。

出土遺物 軟質陶器片1片のみ出土している。

時期 1号粘土採掘坑群の比定年代から18世紀半ば以降と考えられる。

8区5号溝 (P L104)

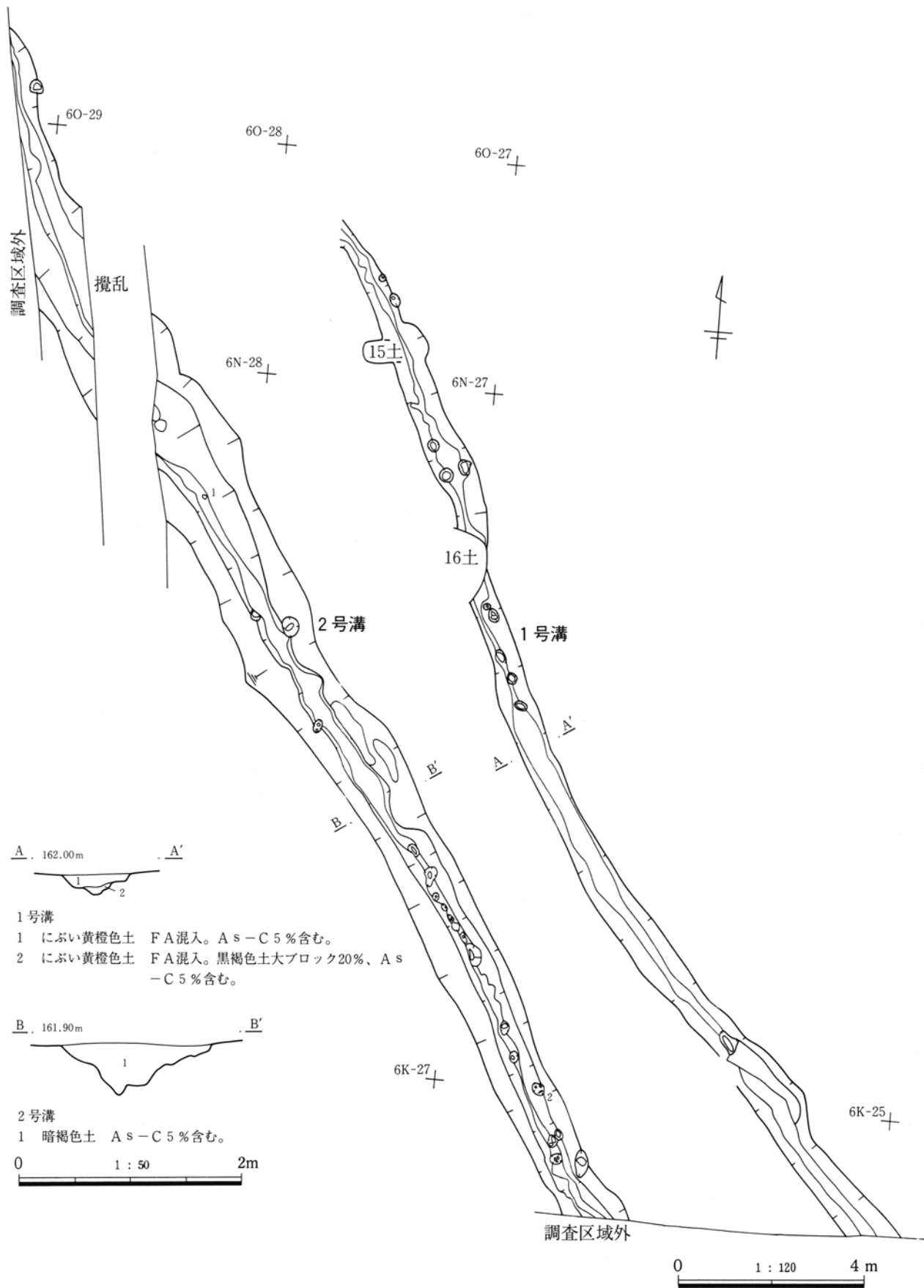
位置 北端 6R-24~29グリッド

重複 124号土坑と重複するが、新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状だが、中央部で一度南側へくの字に折れる。規模は5.66×0.42m、深さは断面観察部で22cmである。走向方位はN-72~88°-W程である。断面はU字状で、底面はほぼ水平。流水痕跡は見られない。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡や3・4号溝との関連が想定される。

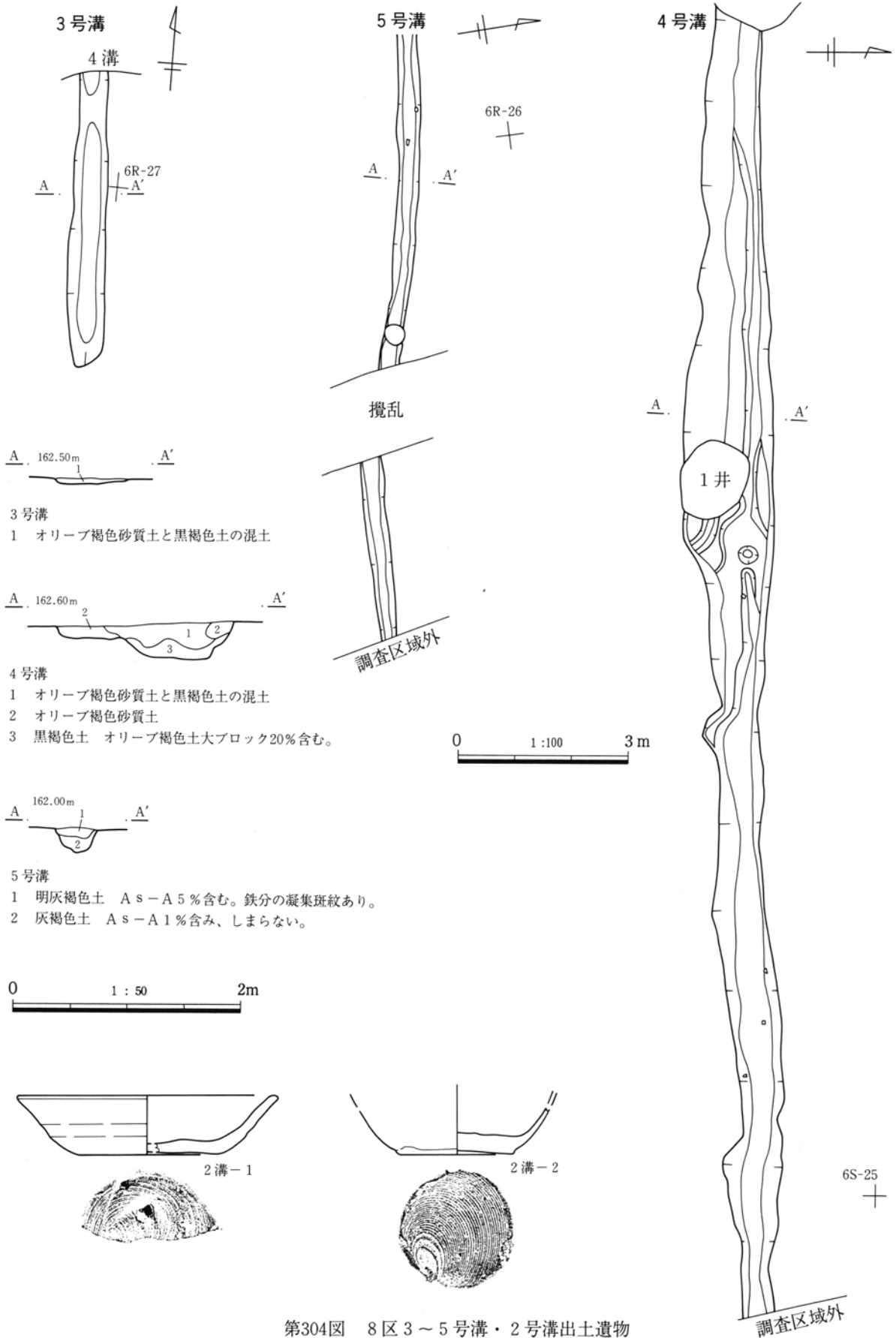
出土遺物 土師器片4片のみ出土している。

時期 埋土から1号掘立柱建物跡と同じか。



第303図 8区1・2号溝

4. 堀・溝



第304図 8区3～5号溝・2号溝出土遺物

9区4・5・6号溝 (P L105・155)

位置 調査区を北東-南西方向に斜めに走向する。

重複 F A畠跡よりも新しい。

形態 ほぼ直線状をなすが、北端はやや東方向に折れ、南端は逆に西方向にやや折れる。5・6号溝ともに中央部のほぼ同じ位置に、各々5号溝で2.16m、6号溝で1.40mの土橋状に途切れる部分を持つ。規模は4号溝で40.50×1.12m、深さは断面観察部で60cm、5号溝は北端から中央部まで長さ15.90mで一度立ち上がり、土橋状の空間をとって再び南端付近まで20.20m走向するが、南端部は攪乱により不明である。また幅は0.52m程で、深さは断面観察部で41cmである。6号溝は北端近くから中央部まで長さ14.65mで一度立ち上がり、土橋状の空間をとって再び13.20m走向する。また幅は0.22m程で、深さは断面観察部で13cmである。走向方位は全てN-24~61°-E程である。3つの溝は、各々同じ間隔を取りながら並走していることから見て一連の遺構と考えられる。それぞれの間隔は、4号溝と5号溝の間隔で14~76m、5号溝と6号溝の間隔で24~61mである。断面は全て逆台形を呈し底面は平坦であるが、4号溝の壁は斜めに立ち上がり、5・6号溝はほぼ垂直に立ち上がる。調査区全体の地形は緩やかに南東方向に傾斜しているが、3つの溝の底面は南西方向に緩やかに下がる。埋土には砂の堆積など流水を示す痕跡は全く認められなかった。3つの溝の形態を比較すると、4号溝から5・6号溝の順で幅と深さが極端に小さくなる。5・6号溝の中央部にある途切れた部分は出入り口を示すものと見られるが、この場合3つの溝は性格的に区画溝に位置づけられるものと考えられる。したがって、4号溝は比較結果からして、区画溝の主体となっており、5・6号溝は付随する関係にあり、これは機能面を反映した状況であろう。区画溝とすれば、その区画空間は東西どちらかとなり、東側に所在する時期不明の1号掘立柱建物跡は出入り口部に直面しており注目されるが、溝の走向方位と柱軸方位が全く符合せず、関連させる根拠に欠ける。

出土遺物 4号溝から1の土師器坏のほか土師器甕片1片、5号溝では土師器坏片1片が出土している。

時期 出土遺物は混入と見られ、埋土から中世以降と考えられる。

9区9号溝 (P L105)

位置 南端 7A-26グリッド

重複 F A畠跡よりも新しく、56号土坑と新旧関係不明。

形態 外形はやや乱れ、くの字状。規模は5.94×0.71m、深さは断面観察部で28cmである。走向方位はN-48~108°-E程である。断面はU字状を呈す。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 不明

9区10号溝

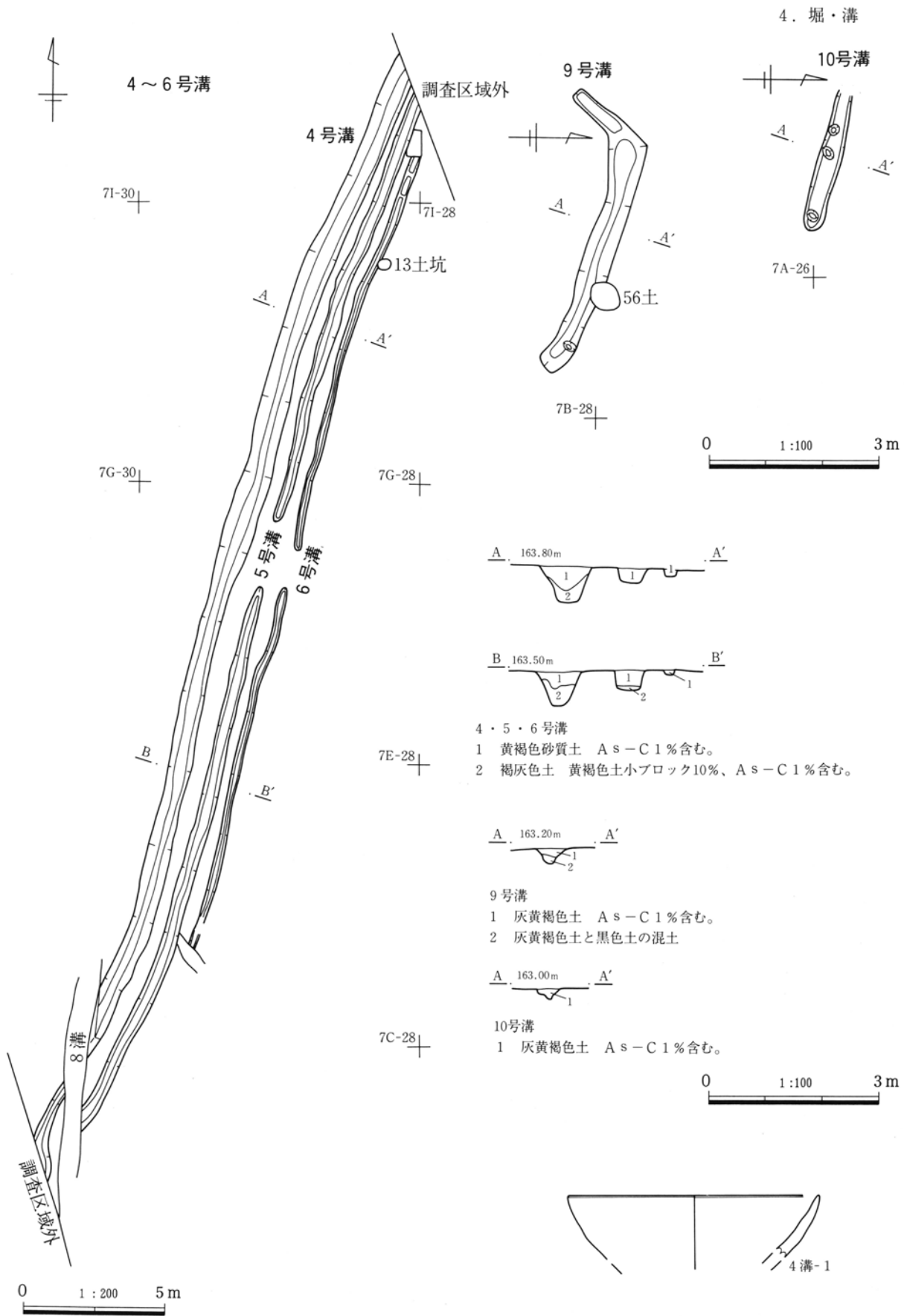
位置 南端 7A~7B-28・29グリッド

重複 F A畠跡よりも新しい。

形態 直線状で、更に西側に延びていたものと見られるが、攪乱のため未検出。規模は2.50×0.42m、深さは断面観察部で20cmである。走向方位はN-73°-W程である。断面はU字状で浅い。流水痕跡は見られない。西側延長上に位置する9号溝へ連続する可能性がある。南側に並ぶ45~50号土坑(イモ穴か)と一連の遺構と見られ、旧時の地境または耕作境を反映しているものと考えられる。

出土遺物 なし

時期 不明



第305図 9区4～6・9・10号溝・4号溝出土遺物

10区7号溝・11区2号溝 (P L105)

調査区の違いによって遺構名が2つになってしまったが同一の溝である。

位置 10区の北西隅から11区の南東に走向する。

重複 11区3号溝よりも古い。

形態 ほぼ直線状で中央付近で一度くの字状に北へ折れる。規模は28.80×1.15m、深さは断面観察部で21cmである。走向方位はN-27~43°-E程である。断面はU字状で浅い。流水痕跡はないが、11区の埋土にはAs-Bの二次堆積が顕著に見られる。

出土遺物 土師器甕片1片が出土している。

時期 出土遺物及びAs-Bとの層序から奈良・平安時代に比定される。

11区1号溝 (P L105)

位置 中央部 7T-32~38グリッド

重複 1号土坑よりも古く、1号道路跡よりも新しい。

形態 直線状。規模は26.85×2.04m、深さは断面観察部で53cmである。走向方位はN-87~90°-E程である。断面はU字状を呈し、底面はわずかに西へ下がる。流水痕跡は見られない。

出土遺物 土師器坏1片が出土している。

時期 不明

11区3号溝 (P L106・155)

位置 南半部 70~7T-32グリッド

重複 2号溝よりも新しい。

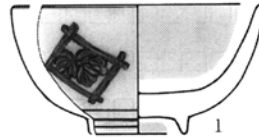
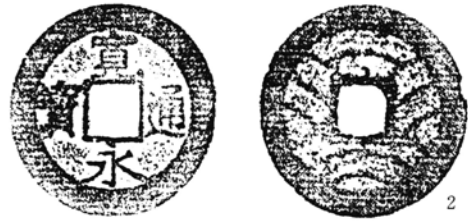
形態 ほぼ直線状で10区へ延びるが、10区では2条に分岐し不整合となる。しかし断面観察の結果、3条の溝が並走していたものと見られるため、掘り上がりの状態に比して、むしろ幅は狭かったものと見られる。規模は長さ24.60m、深さは24cm程である。断面は掘り上がりでやや大きな皿状であるが、もともとU字状の3条の溝の集まりである。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 不明

12区1A・1B号溝 (P L106)

位置 中央部 8J-38~45グリッド



第306図 11区3号溝出土遺物

重複 なし

形態 ほぼ直線状で、中央部で分岐して1A・1B号溝となる。両溝重複部分では境界は不分明。断面観察から1B号溝が1A号溝よりも新しい。規模は長さ26.30mで、1A号溝は最大幅1.30m、深さは断面観察部で22cm、1B号溝は最大幅1.00m、深さは断面観察部で55cmである。走向方位はともにN-79~87°-Wである。断面は1A号溝が皿状、1B号溝がU字状で、底面は水平に近いがわずかに西へ下がる。流水痕跡はないが、埋土にAs-Bの二次堆積が顕著に見られる。

出土遺物 なし

時期 埋土及びAs-Bとの層序から奈良・平安時代と考えられる。

12区2号溝 (P L106)

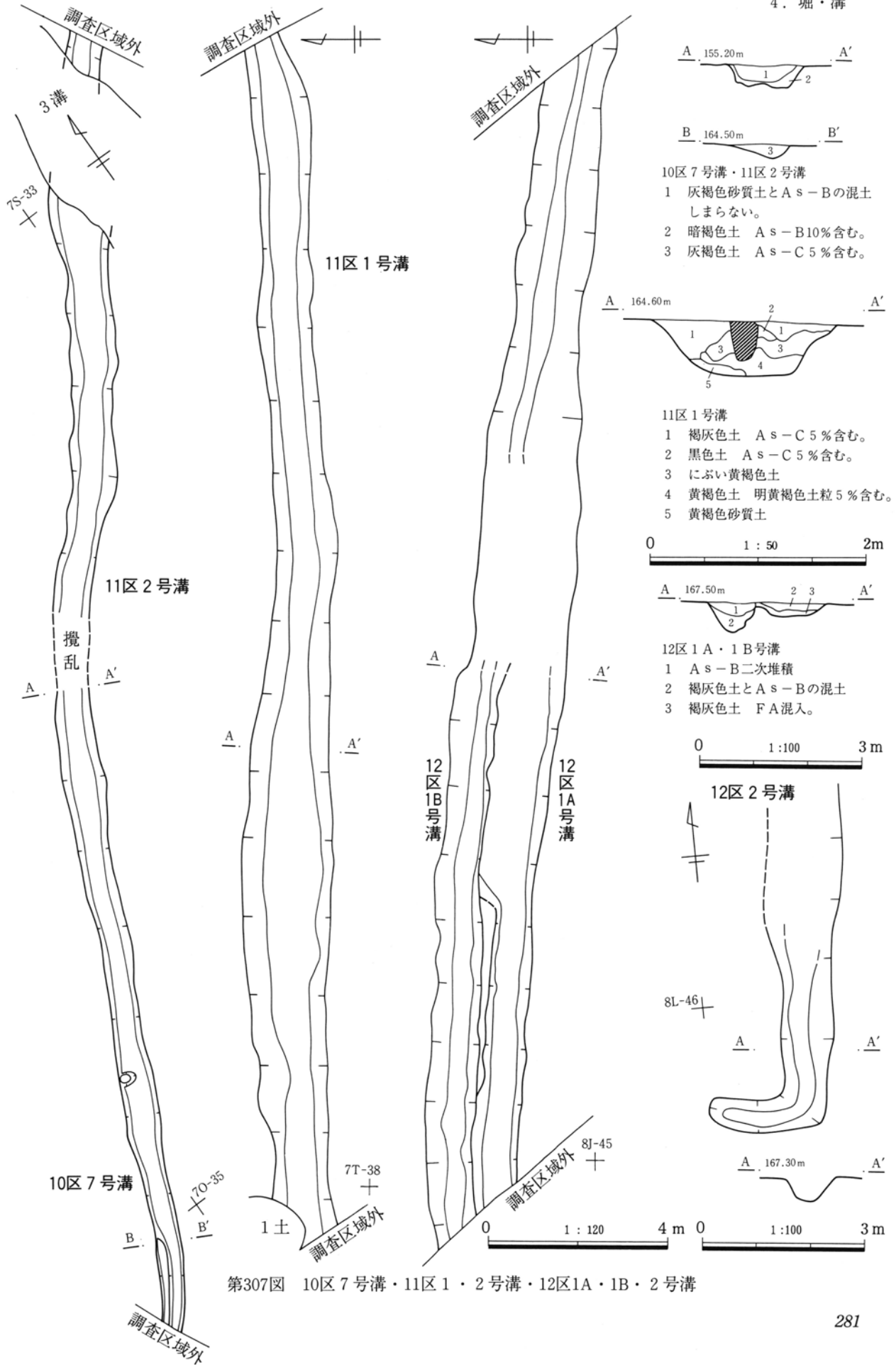
位置 中央部西端 8K・8L-45グリッド

重複 なし

形態 中央部で直角に折れてL字状をなすが、北端は攪乱により消滅しており、更に北に延びていたものと想定される。規模は北端から長さ3.80mで西に折れて、更に2.20m走向する。幅は125cm程で、深さは断面観察部で45cmである。走向方位は南北軸でN-4°-E程、東西軸でN-80°-W程である。断面はU字状を呈す。流水痕跡は見られない。埋土は、表土に近いオリブ褐色砂質土。

出土遺物 なし 時期 不明

4. 堀・溝



第307図 10区 7号溝・11区 1・2号溝・12区 1A・1B・2号溝

13区2号溝 (P L106)

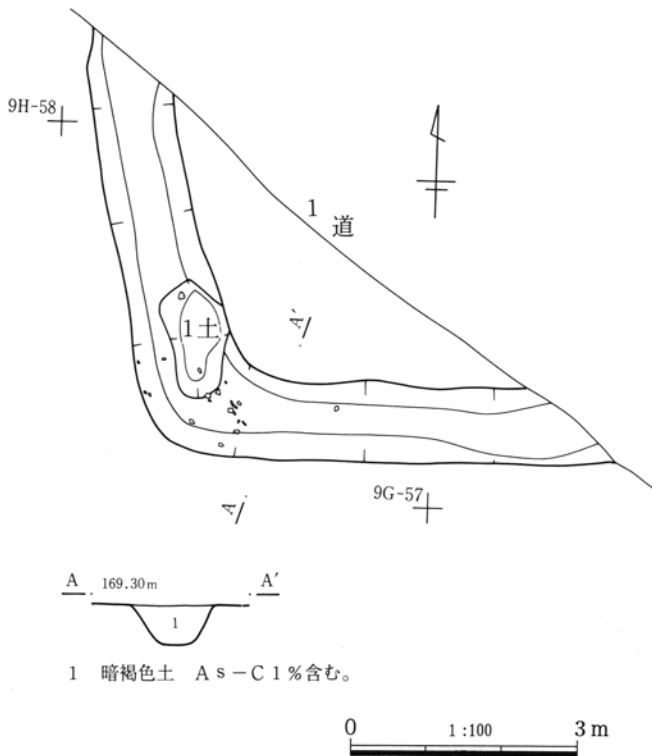
位置 北西部 9G-56・57グリッド

重複 1号道路跡よりも古く、1号土坑より新しい。

形態 両端を1号道路跡に壊されて、全体形を知ることにはできないが、残存部分は中央部で直角に折れるL字状をなす。規模は西端1号道路跡接点から長さ5.60mで折れて、更に東へ6.20m走向して再び1号道路跡に壊される。幅は1.49m程で、深さは断面観察部で56cmである。走向方位は南北軸でN-15°-W程、東西軸でN-88°-E程である。断面はU字状を呈す。流水痕跡は見られない。

出土遺物 土師器甕片が少量出土している。

時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。



第308図 13区2号溝

14区1号溝 (P L106)

位置 北西角 9L-70~74グリッド

重複 4号溝より新しい。

形態 直線状。規模は16.25×0.80m、深さは断面観察部で44cmである。走向方位はN-77~84°-W程である。断面は整った方形で、壁は垂直に近く立ち上がる。底面は東へ下がる。埋土は淘汰の良い砂礫が

水成堆積しており、相当量の流水量を想起させるが、木枠などの痕跡は認められなかった。埋土の状況から土砂により埋没した後、土砂上げされず廃棄されたと見られる。金古宿用水の末流の一部と考える。

出土遺物 なし

時期 位置及び埋土から近世以降と考えられる。

14区2号溝 (P L107)

位置 中央部西寄り 9J~9L-70・71グリッド

重複 1号溝より新しく、4号溝とは新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状で、外形はやや波打つ。規模は2.45×1.75m、深さは断面観察部で40cmである。走向方位はN-24°-W程である。断面は皿状を呈す。底面近くに砂を含み、若干流水していた可能性がある。

出土遺物 なし

時期 4号溝の時期と同じか。

14区4号溝 (P L107)

位置 中央部 西寄り 9J~9L-70~72グリッド

重複 1・2号土坑・1号井戸より古く、2・6・13号溝とは新旧関係不明。

形態 複数の溝が重複する形状を呈し、外形は不整形で波打つが、主軸は北西-南東方向である。西側には東西軸をとる張り出し部がある。規模は南北軸で長さ10.00mで幅は6.30m程、また張り出し部は長さ3.95mである。深さは断面観察部で32cmである。走向方位は南北軸でN-23°-W程、張り出し部でN-85°-W程である。断面は皿状で浅い。中央部の1号土坑・1号井戸重複部周辺の底面に、帯状に最低2条の落ち込みが見られる。周辺地形はほぼ平坦だが、南方の谷地へ向かい底面は南方に傾斜する。底面近くに砂を含み、底面も荒れていることから、若干流水していたものと認める。西側張り出し部は、東側で重複する13号溝と位置的に対応しており、新旧関係も不明であることから、同一の溝である可能性がある。このほか、同様な走向方位をとる14号溝も存在することから、関連が想起される。また、東西軸の溝も2・12号溝が並走しており、流水痕跡は見られないが関連する可能性がある。

出土遺物 土師器坏類片・甕片数片が出土している。
時期 出土遺物及び埋土から奈良・平安時代に比定される。

14区6号溝

位置 中央部 9J・9K-68~70グリッド
重複 31号土坑より新しく、2・3号土坑よりも古い。4号溝とは新旧関係不明。
形態 ほぼ直線状。規模は1.22×0.46m、深さは断面観察部で9cmである。走向方位はN-85°-E程である。断面は皿状で浅く、ほぼ水平。流水痕跡は見られない。

出土遺物 須恵器片1片のみである。

時期 不明

14区7号溝

位置 東半部 9G~9I-61~67グリッド
重複 27・33号土坑よりも新しい。
形態 北東角から南方へ走向した後、ほぼ直角に折れて西方に向かって調査区外へ延びており、L字形をなす。東西軸部中程にも軽微な折れを1か所持つ。規模は南北軸で長さ9.60m、東西軸で26.70mである。幅は1.28m程で、深さは断面観察部で52cmである。走向方位は東西軸でN-83°-W程、南北軸でN-28°-E程である。断面はやや整った逆台形で、底面は平坦で水平。流水痕跡は見られない。区画溝と見られ、形状から溝北側が区画された内側と考えるが、1号柱列を除いて顕著な遺構はなく、むしろ南側の方が1号掘立柱建物跡や27号土坑などの遺構分布が多い。特に芋穴と見られる土坑として、23・27~30・32・34~37号土坑が南側に軸を揃えて多く集中することが注目される。調査前の地割によれば、本遺構を挟んで南北で耕作状況を変える要因は認められず、この点で南北に3条走向する攪乱溝は地割によく対応している。したがって、土坑群は本遺構を意識していたことが濃厚となり、本遺構が地境または耕作境であったことが事実となる。また、市町境となる前橋道を挟んで15区には、2時期に渉る区画溝として1号堀と1号溝が存在し、走向方位も本遺構とよく符合することから関連が考えられる。

出土遺物 なし **時期** 不明

14区8号溝

位置 東半部 9F~9J-63・64グリッド
重複 27・36・37号土坑、7号溝より古い。
形態 ほぼ直線状で、やや外形は波打ち、中央部が膨らむ。規模は15.85×1.03m、深さは断面観察部で10cmである。走向方位はN-10~17°-W程である。断面は皿状で浅い。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に傾斜する。流水痕跡は見られない。位置及び埋土から、市町境となる前橋道を挟んで15区3号溝と同一の溝と見られる。なお、本遺構は削平が著しく、深さも浅くなっており、北端は元来調査区北壁まで延びていたものと考えられる。

出土遺物 なし

時期 埋土から4号溝と同じか。

14区12号溝

位置 中央部西寄り 9K・9L-70グリッド
重複 13号溝と重複するが、新旧関係不明。
形態 ほぼ直線状。規模は1.44×0.74m、深さは断面観察部で12cmである。走向方位はN-11°-W程である。断面は皿状で浅い。流水痕跡は見られない。走向方向が2・4号溝と同じで埋土も似るため、一連の遺構の可能性はある。

出土遺物 なし **時期** 不明

14区13号溝

位置 中央部西寄り 9K-69・70グリッド
重複 4・12号溝と重複するが、新旧関係不明。
形態 直線状で、西端がやや狭くなる。規模は4.40×0.70m、深さは断面観察部で13cmである。走向方位はN-73°-E程である。断面は皿状で浅い。流水痕跡は見られない。4号溝の西側張り出し部や14号溝は、本遺構と走向方位や規模がほぼ同じであり、関連が想定される。

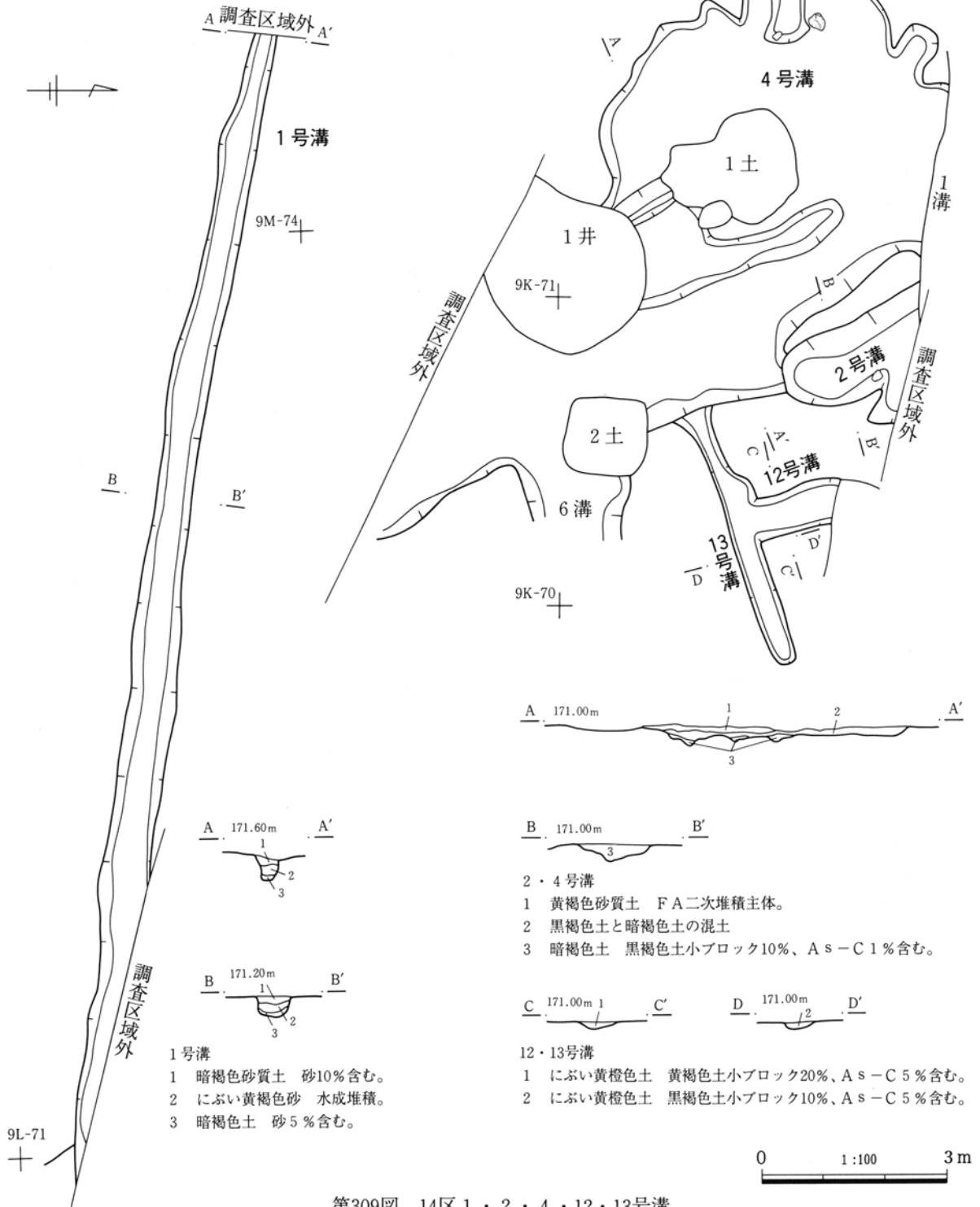
出土遺物 なし **時期** 不明

14区14号溝

位置 中央部南寄り 9J-69グリッド
重複 22号土坑より古い。
形態 直線状。規模は1.22×0.46m、深さは断面観

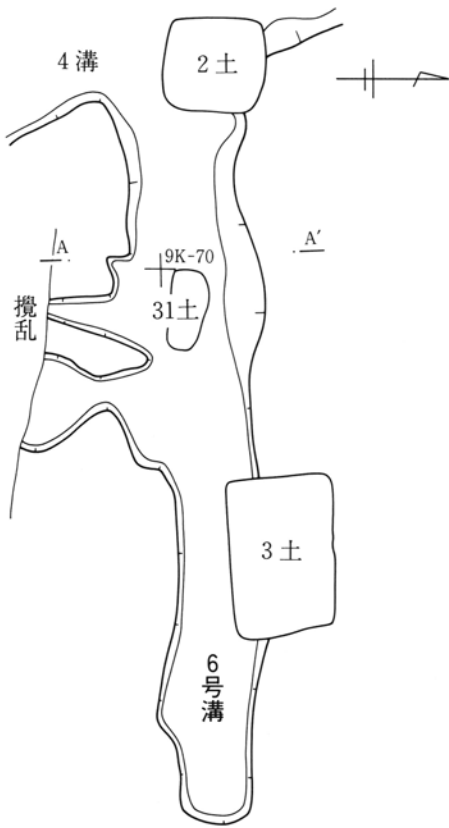
察部で9cmである。走向方位はN-50°-E程である。断面はU字状で浅い。流水痕跡は見られない。4号溝の西側張り出し部や13号溝は、本遺構と走向方位や規模がほぼ同じであり、関連が想定される。

出土遺物 なし 時期 不明



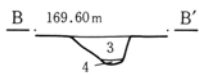
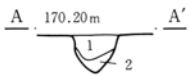
第309図 14区1・2・4・12・13号溝

4. 堀・溝



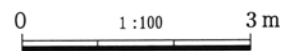
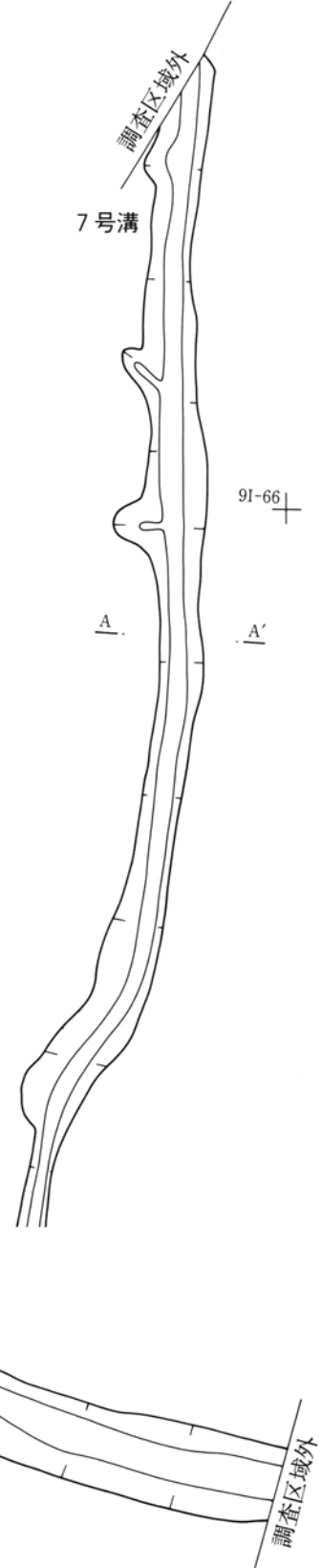
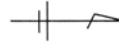
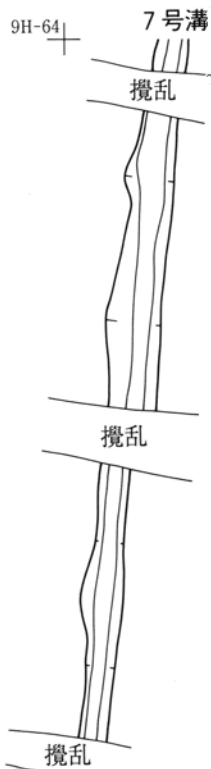
6号溝

1 にぶい黄橙色土 黒褐色土小ブロック10%、
A s-C 5%含む。

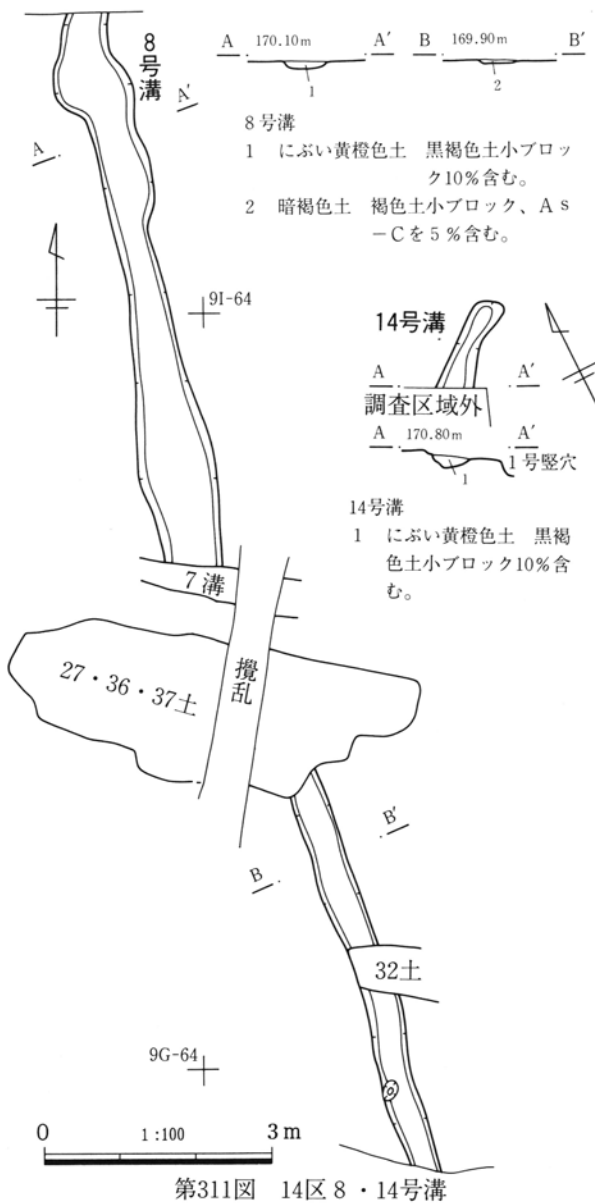


7号溝

- 1 暗褐色土 砂10%、A s-C 1%含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土小ブロック1%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 黒褐色土小ブロック20%、
A s-C 5%含む。
- 4 褐色砂質土 黒褐色土小ブロック20%含む。



第310図 14区6・7号溝



15区1号堀 (P L107・155)

位置 北西端 9M・9N-66~69グリッド

重複 1号住居跡・1号道路跡より新しく、1号溝より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は14.00×2.56m、深さは断面観察部で67cmである。走向方位はN-80°-W程である。断面は逆台形で、底面は平坦でやや丸みを持ち、西へ緩やかに傾斜する。西半部分では底面から3分の1程の高さに、小円礫が多量に出土しており、北側からの流入を示す。本遺構は形状から区画堀と見られ、北側が区画された内側と考えるが、実際だった遺構はなく、むしろ南側で1号掘立柱建物

跡、1号柱列、1・2号井戸の一連の遺構が分布する。しかし、これらの遺構は1号溝と関連することも十分考えられる。埋土内の小円礫の流入から見て、北側に何らかの遺構が存在したものと考えられ、小字名「上屋敷」との関連も想起される。

出土遺物 出土遺物量は少なく、中でも1号住居跡からの混入である土師器片が多くを占める。

時期 出土遺物及び埋土から中世以降と考えられる。

15区1号溝 (P L155)

位置 北西端 6M・6N-66~68グリッド

重複 1号堀、1号道路跡よりも新しい。

形態 L字状を呈する。規模は北壁から長さ5.20mではほぼ直角に折れ、更に東へ長さ10.30m延びるが1号堀手前で切れる。幅は1.28m程で、深さは断面観察部で42cmである。ただし、東端は元来北壁まで延びていたものと思われるが、1号堀との重複部となり調査時には未確認となってしまった。走向方位は南北軸でN-12°-E程、東西軸でN-79°-W程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。区画溝と見られ、形状から溝北側が区画された内側と考えるが、1号堀同様むしろ南側で1号掘立柱建物跡、1号柱列、1・2号井戸の一連の遺構が分布しており、関連する可能性がある。

出土遺物 出土遺物量はわずか。

時期 出土遺物及び埋土から近世以降と考えられる。

15区3号溝

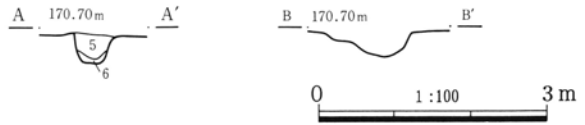
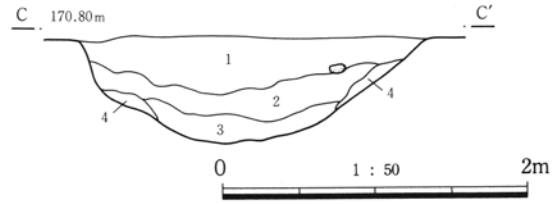
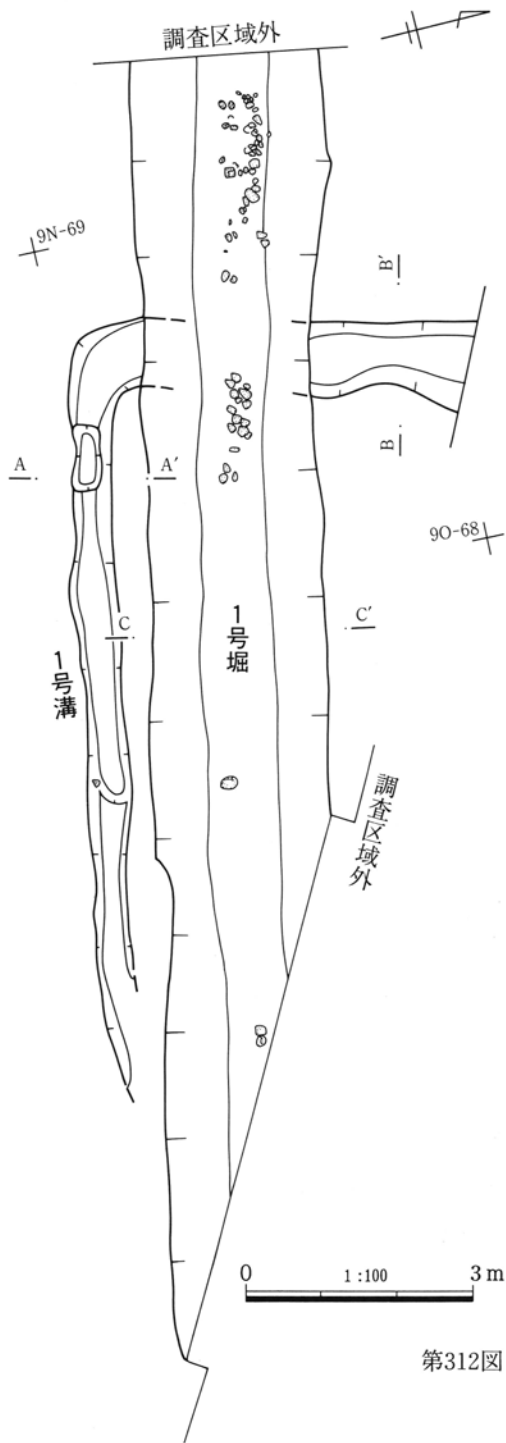
位置 中央部 9K~9M-65グリッド

重複 1号道路跡より古い。

形態 直線状で、外形は波打つ。規模は6.20×0.90m、深さは断面観察部で19cmである。走向方位はN-2°-W程である。断面は皿状で浅い。流水痕跡は見られない。位置及び埋土から、市町境となる前橋道を挟んで14区8号溝と同一の溝と見られる。

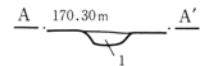
出土遺物 なし

時期 14区8号溝と同じ。



1号堀・1号溝

- 1 褐色土 A s - B 5%、白色軽石1%含む。
- 2 黒褐色土 A s - C 5%含む。
- 3 黒褐色土と褐色土の混土 A s - C 5%含む。
- 4 褐色土 Ⅷの崩落土。
- 5 オリーブ褐色砂質土 砂20%、A s - C 1%含む。
- 6 黄褐色土 黒褐色土小ブロック5%含む。



3号溝

- 1 オリーブ褐色砂質土 黒褐色土小ブロック20%含む。

第312図 15区1号堀・1・3号溝



第313図 15区1号堀・1号溝出土遺物

5. 井戸跡

6区1号井戸跡 (P L 108)

位置 南西端 5I-27グリッド 重複 なし
確認面形状と規模 不整形円形。径0.82×0.72m。
底面形状と規模 ほぼ円形。径0.41×0.39m。
断面形 円筒形 深さ 2.87m
標高 上面160.65m、底面157.78m。
アグリ 最上部が深さ42cm、標高160.20m、最下部が深さ246cm、標高158.14m。最下部の浸食著しい。
湧水層 調査時は湧水なし。1m程下層から㊸が堆積しており透水性は高い。
埋没状況 砂を使用して南方向から人為的に埋填。
出土遺物 1の鉄器のみが出土している。

時期 埋土及び位置から2号掘立柱建物跡と関連か。

8区1号井戸跡 (P L 108)

位置 北半部6R-27グリッド
重複 4号溝と重複するが新旧関係不明。
確認面形状と規模 楕円形。径1.41×1.26m。
底面形状と規模 ほぼ円形。径0.97×0.93m。
断面形 円筒形 深さ 3.50m以上(調査時下面から更に1.5mは下がる) 標高 上面162.22m
アグリ 最上部が深さ82cm、標高161.40m、最下部が深さ336cm、標高158.86m。中間部の浸食が著しい。
湧水層 0.5m程下層から小中円礫を多く含んだ㊸が堆積しており透水性は高い。
埋没状況 均質であり人為埋填と思われる。
出土遺物 掲載遺物のほか軟質陶器片1片が出土。

時期 出土遺物及び埋土から近世に比定される。

8区2号井戸跡 (P L 108)

位置 中央部西端 6O-28グリッド 重複 なし
確認面形状と規模 不整形円形。径2.32×2.08m。
底面形状と規模 円形。径0.70×0.56m。
断面形 漏斗状 深さ 4.14m
標高 上面162.12m、底面157.98m
アグリ 最上部が深さ97cm、標高161.10m、最下部が深さ366cm、標高158.40m。
湧水層 調査時は湧水なし。上から2番目のアグリ

(深さ142cm)が礫層であり、以下㊸が堆積しており透水性は高い。

埋没状況 上面から深さ1m以下は底部まで巨角礫で人為的に埋填される。その後は自然埋没する。

出土遺物 1の砥石のほか軟質陶器片1片が出土。

時期 出土遺物及び埋土から近世に比定される。

8区3号井戸跡 (P L 108)

位置 北半部 6R-27グリッド 重複 なし
確認面形状と規模 不整形円形。径1.61×1.19m。
底面形状と規模 楕円形。径1.16×0.78m。
断面形 円筒形 深さ 2.17m
標高 上面162.14m、底面159.97m。
アグリ 1か所のみで、深さ126cm、標高161.10mである。浸食は壁面から23cm程張り出す。

湧水層 調査時は湧水なし。アグリ部分で礫が顕著に混入し、以下㊸が堆積しており透水性は高い。

埋没状況 人為埋填。最上層を小〜中円礫を含む灰黄色土で被覆するとともに、下層を固くしめる。

出土遺物 なし **時期** 1号井戸跡の時期に近いか。

14区1号井戸跡 (P L 109)

位置 西半部 9J・9K-70・71グリッド
重複 4号溝より新しい。
確認面形状と規模 石組。円形。内径1.38×1.12m。
掘り方径 2.52×(2.40) m。
底面形状と規模 不明

断面形 石組は円筒形。掘り方はやや漏斗状。

深さ 3.52m以上 **標高** 上面170.70m

湧水層 調査時は湧水なし。

埋没状況 均質な砂質土であり人為埋填と思われる。

出土遺物 掲載遺物は推定年代の上限を示す遺物で、下限となる昭和20年代の遺物が多量に出土している。

時期 出土遺物及び位置から近世に比定される。

備考 石組の外側に若干玉石の裏込めを持つ。周辺住民からの聞き取りにより、埋め戻しは戦後すぐ。

15区1号井戸跡 (P L 109)

位置 中央部 9L・9M-67グリッド 重複 なし

確認面形状と規模 円形。径1.26×1.00m。

底面形状と規模 円形。径1.18×0.90m。

断面形 漏斗状

深さ 3.42m以上（調査時下面から更に1.0mは下がる） 標高 上面170.70m、底面167.28m。

アグリ 最上部が深さ166cm、標高169.05m、最下部が深さ246cm、標高168.25m。浸食わずか。

湧水層 調査時は湧水なし。

埋没状況 均質な砂質土であり人為埋填と思われる。

出土遺物 土師器片・近世陶磁器片少量が出土。

時期 出土遺物及び位置から近世に比定される。

15区2号井戸跡（PL109）

1号井戸跡に隣接し上面規模も近似するため井戸跡と認定したが、別の用途も考えられる。

位置 中央部 9M-67・68グリッド 重複 なし

確認面形状と規模 円形。径1.00×0.92m。

底面形状と規模 円形。径0.94×0.80m。

断面形 円筒形 深さ 1.10m

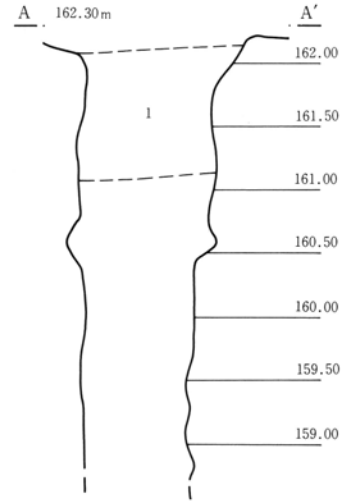
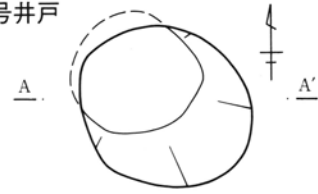
標高 上面170.78m、底面169.70m。アグリ なし

湧水層 調査時は湧水なし。湧水層も認めにくい。

埋没状況 上面から深さ1m程に中円礫が集中し人為的に埋填される。 出土遺物 なし

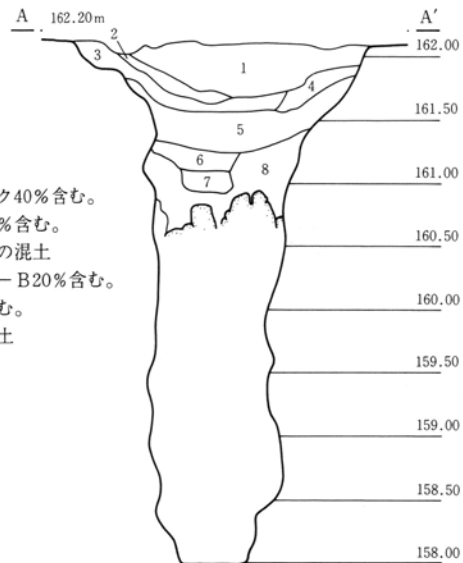
時期 位置及び埋土から1号井戸跡と同じか。

8区1号井戸



1 にぶい黄褐色土 A s-A 5% 含み、しまらない。

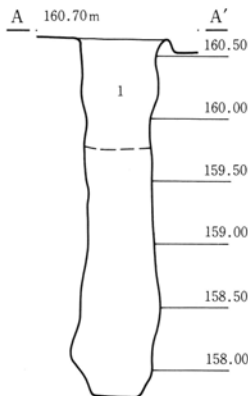
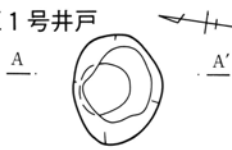
8区2号井戸



- 1 灰黄褐色砂質土
- 2 灰黄褐色土 FA大ブロック40%含む。
- 3 褐灰色砂質土 A s-B40%含む。
- 4 灰黄褐色土と黒褐色粘質土の混土
- 5 にぶい黄褐色砂質土 A s-B20%含む。
- 6 灰褐色土 A s-B 5%含む。
- 7 灰褐色土と明黄褐色土の混土
- 8 灰褐色砂 A s-B主体。

0 1 : 60 2m

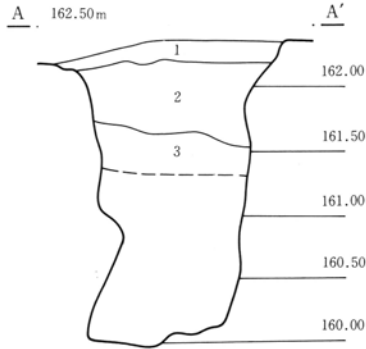
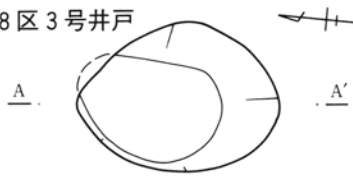
6区1号井戸



1 暗褐色細砂 北下がりの堆積。

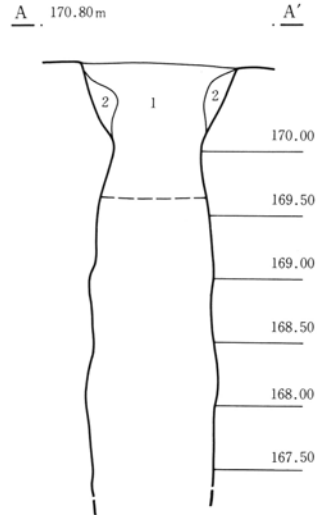
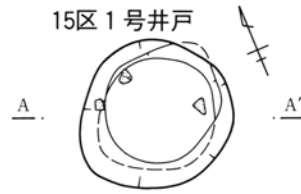
第314図 6区1号井戸・8区1・2号井戸

8区3号井戸



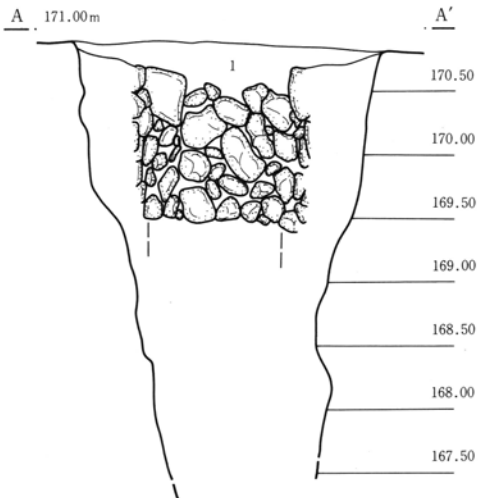
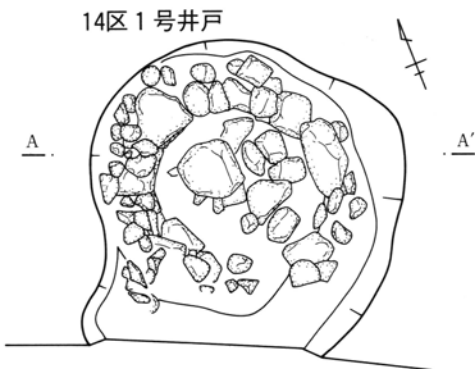
- 1 灰黄色土 小～中円礫40%含む。
- 2 にぶい黄色土 固くしまる。
- 3 明黄褐色土 小円礫20%含む。鉄分の凝集斑紋あり。

15区1号井戸



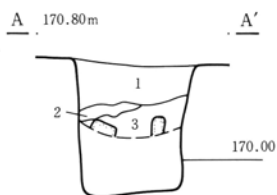
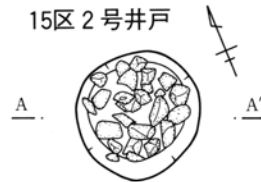
- 1 暗褐色砂質土 砂20%、小円礫1%含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土大ブロック、褐色土大ブロックを20%含む。

14区1号井戸

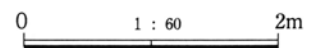


- 1 暗褐色砂質土 褐色土大ブロック、白色軽石を5%含む。

15区2号井戸

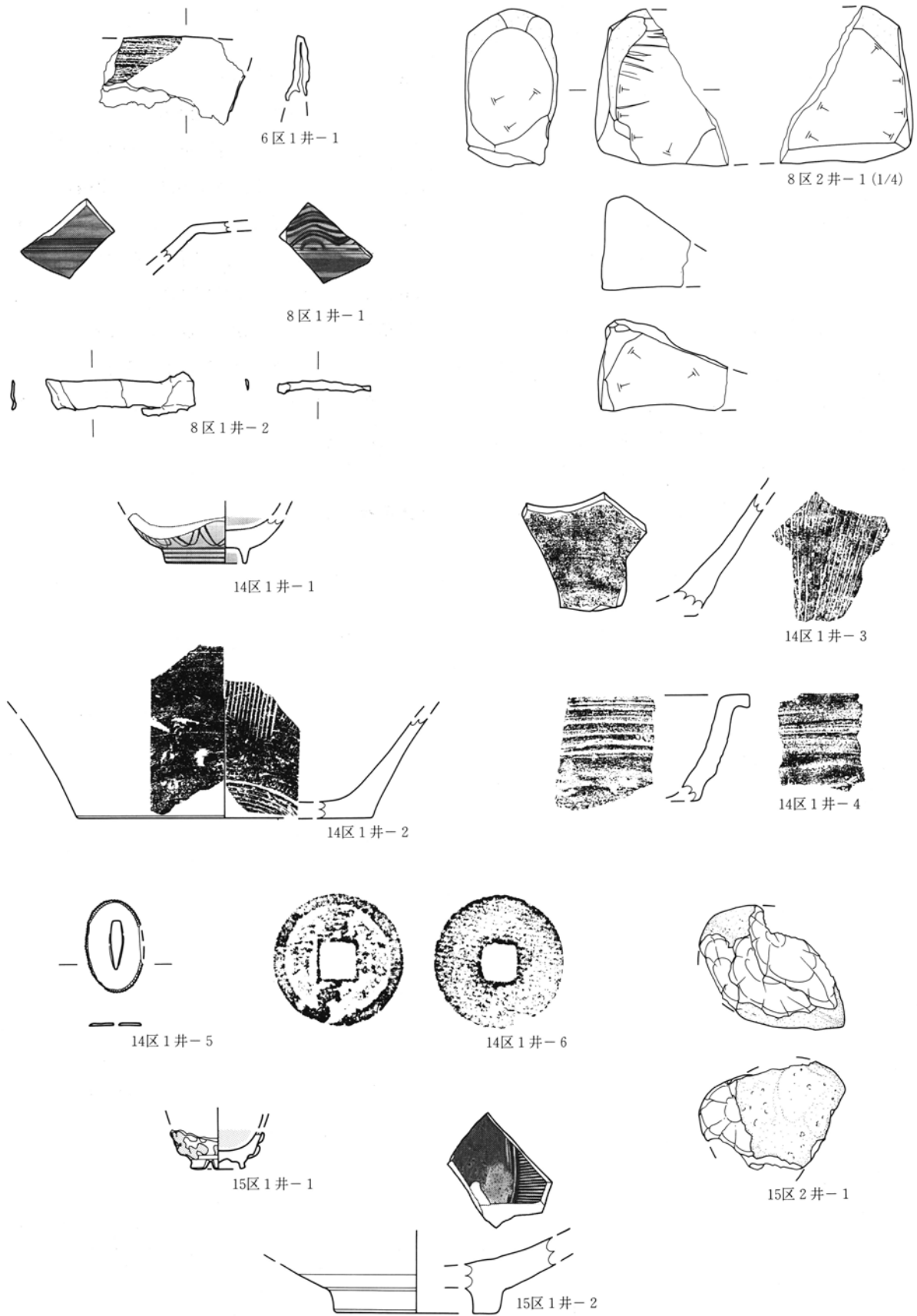


- 1 暗褐色砂質土 砂20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 2 浅黄色礫 小円礫主体。中円礫5%含む。
- 3 暗褐色砂質土



第315図 8区3号井戸・14区1号井戸・15区1・2号井戸

5. 井戸跡



第316图 6区・8区・14区・15区井戸出土遺物

6. 畝跡と溝群

(1) F A下畝跡

1区F A下畝跡 (P L 110)

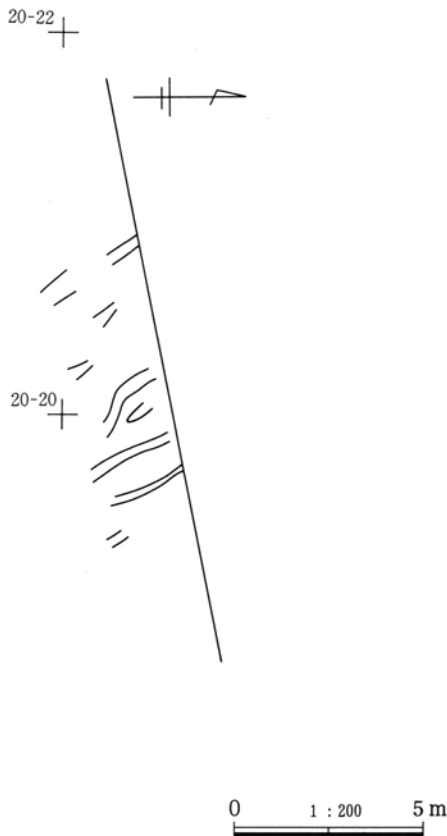
位置 北端 20-19・20グリッド

地形 南流する牛池川に向かって全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北2.50m、東西8.50mである。サクは9条ある。サクの最大長は2.20mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-28°-W程であり、傾斜に対してほぼ並行である。本区ではF Aの堆積が少なく、F Aがシミ状に残る状況をサクとして確認したにとどまり、確認面のみを実測できたにすぎない。走向方位から見て2区南端部まで連続する遺構であると見られ、総延長23.60mを測る。

耕作土 A s - Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし



第317図 1区FA下畝跡

2区F A下畝跡 (P L 110)

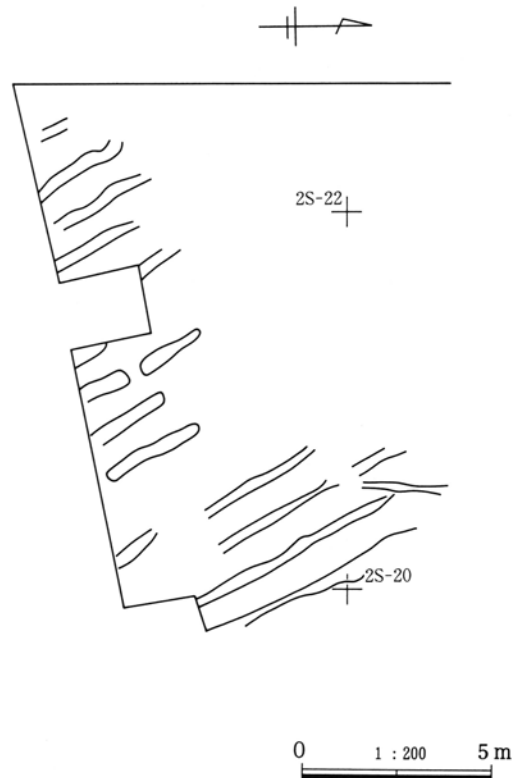
位置 南端 2R・2S-19~22グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北9.40m、東西14.50mである。サクは17条ある。サクの最大長は6.70mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-31°-W程であり、傾斜に対してほぼ並行である。本区ではF Aの堆積が少なく、F Aがシミ状に残る状況をサクとして確認したにとどまり、確認面のみを実測できたにすぎない。走向方位から見て1区南端部まで連続する遺構であると見られる。

耕作土 A s - Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし



第318図 2区FA下畝跡

4区FA下畝跡 (PL110)

位置 北半部 4E~4R-24~27グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北63.95m、東西21.05mである。サクは109条であり、削平による断裂を考慮すれば、47条と考えられる。サクの最大長は18.20mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-20~40°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなし、北西に向かい西方向に湾曲する。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。南半部、東半部で畝跡が確認できないのは、削平による消滅と考える。走向方位から見て本区から6区南端部まで連続する遺構であると見られ、総延長123.80mを測る。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

5区FA下畝跡 (PL110)

位置 北半部及び東半部

地形 全体に北東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北43.20m、東西26.00mである。サクは86条であり、削平による断裂を考慮すれば、40条と考えられる。サクの最大長は17.60mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-22~46°-Wであり、傾斜に対してほぼ直交して直線状をなし、北西部がやや東に湾曲する。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。東南部で最大幅1.52m程サクが断裂しているのは、削平によるとは考え難く、畝跡の区画の違いを示している可能性がある。また、南西部で畝跡が確認できないのは、削平による消滅と考える。走向方位から見て4区北半部から6区南端部まで連続する遺構であると見られ、本区はその中央部に位置する。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

6区FA下畝跡 (PL110)

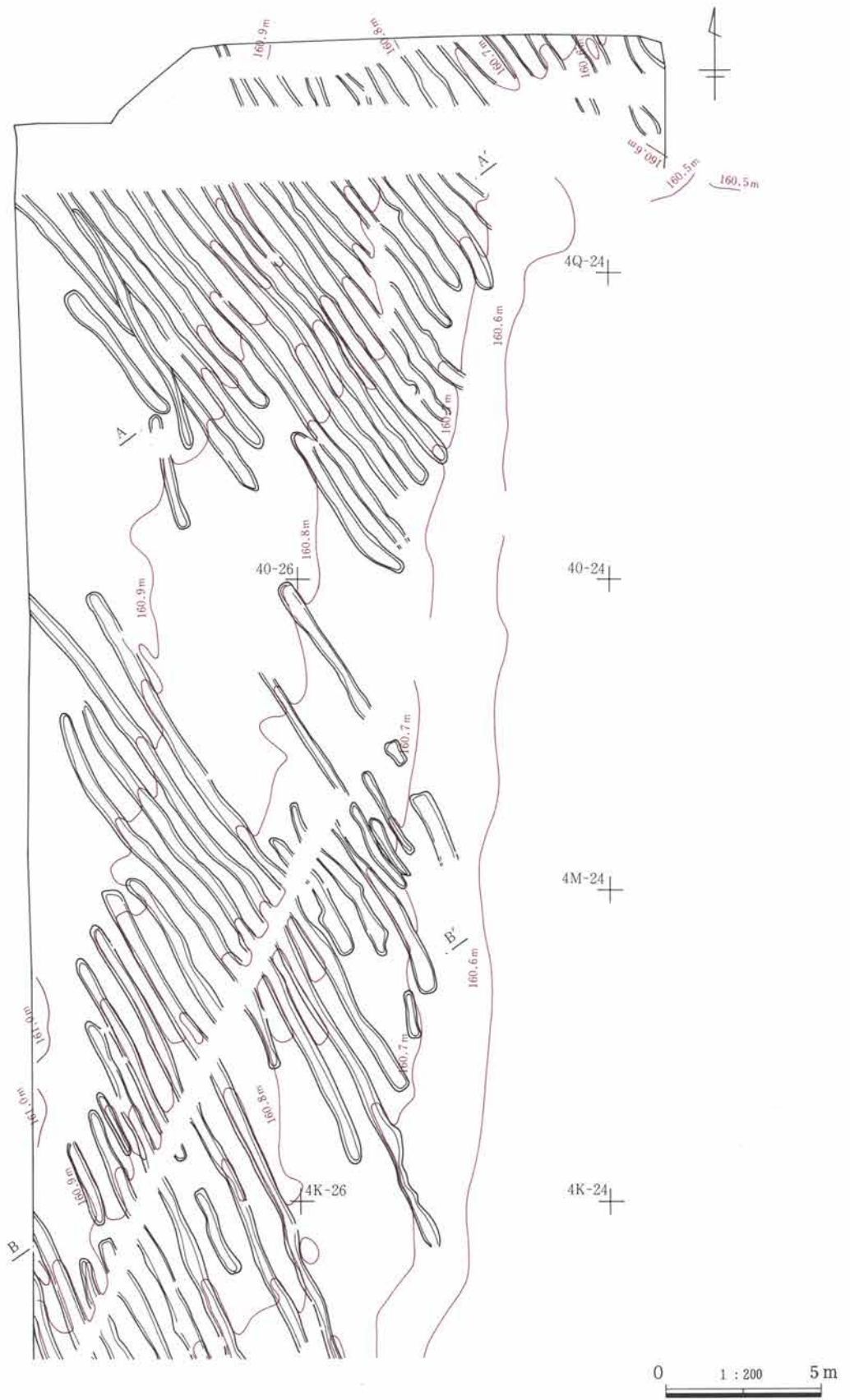
位置 調査区ほぼ全域。

地形 東~南東方向に緩やかに傾斜する。

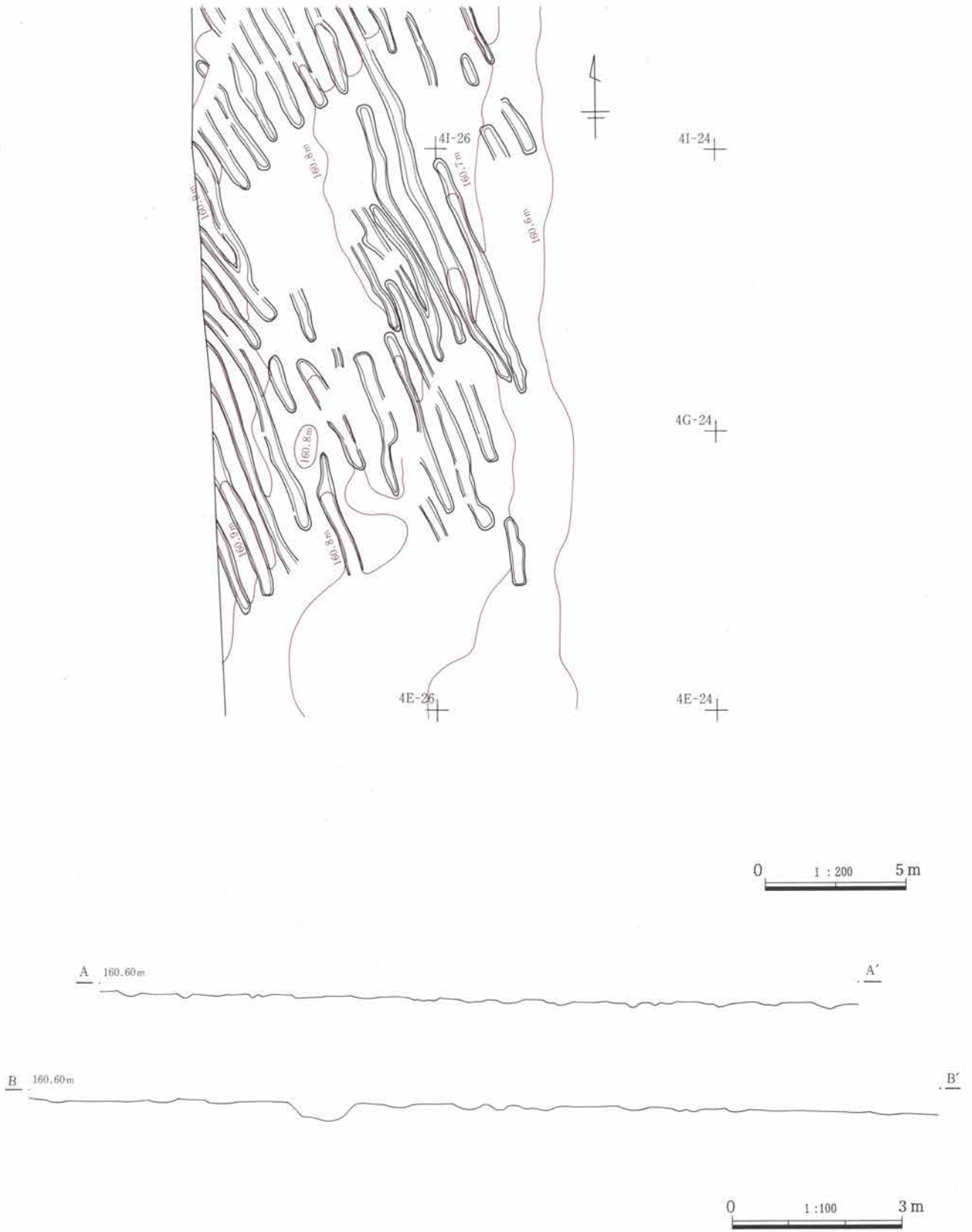
形態 南端部を境に走向方位が異なり、北・南区画と区別して呼称する。北区画の確認範囲は南北35.00m、東西27.50mである。サクは89条であり、削平による断裂を考慮すれば、32条と考えられる。サクの最大長は11.60mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-41~60°-Eであり、傾斜に対して直交して直線状をなす。本区北半部ではFAが厚く堆積していたため、ウネ部も削平されずに残存していた。サクの断面形は潰れたU字形を呈し、幅30~80cm、深さ2~10cmを測る。ウネの断面形は潰れた台形で、土圧による圧密を考慮しても、作付け面は平坦であったと見られ、幅20~105cmを測る。また、西部で畝跡が確認できないのは、削平による消滅と考える。走向方位から見て本北区画から8区まで連続する遺構であると見られ、総延長104.65mを測る。

南区画の確認範囲は南北8.40m、東西17.30mである。サクは20条であり、削平による断裂を考慮すれば、17条と考えられる。サクの最大長は8.20mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-30~41°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなす。南区画ではFAの堆積が少なく、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。走向方位から見て4区北半部から本区南区画までが連続する遺構であると見られる。北・南区画の境界の状況は、42号溝ほかの平安時代溝に壊され明確ではないが、地形に大差はない。北区画とそれら溝群の走向方位は同じであることから、FA下段階から平安時代まで区画境として踏襲されてきたことが想定できる。

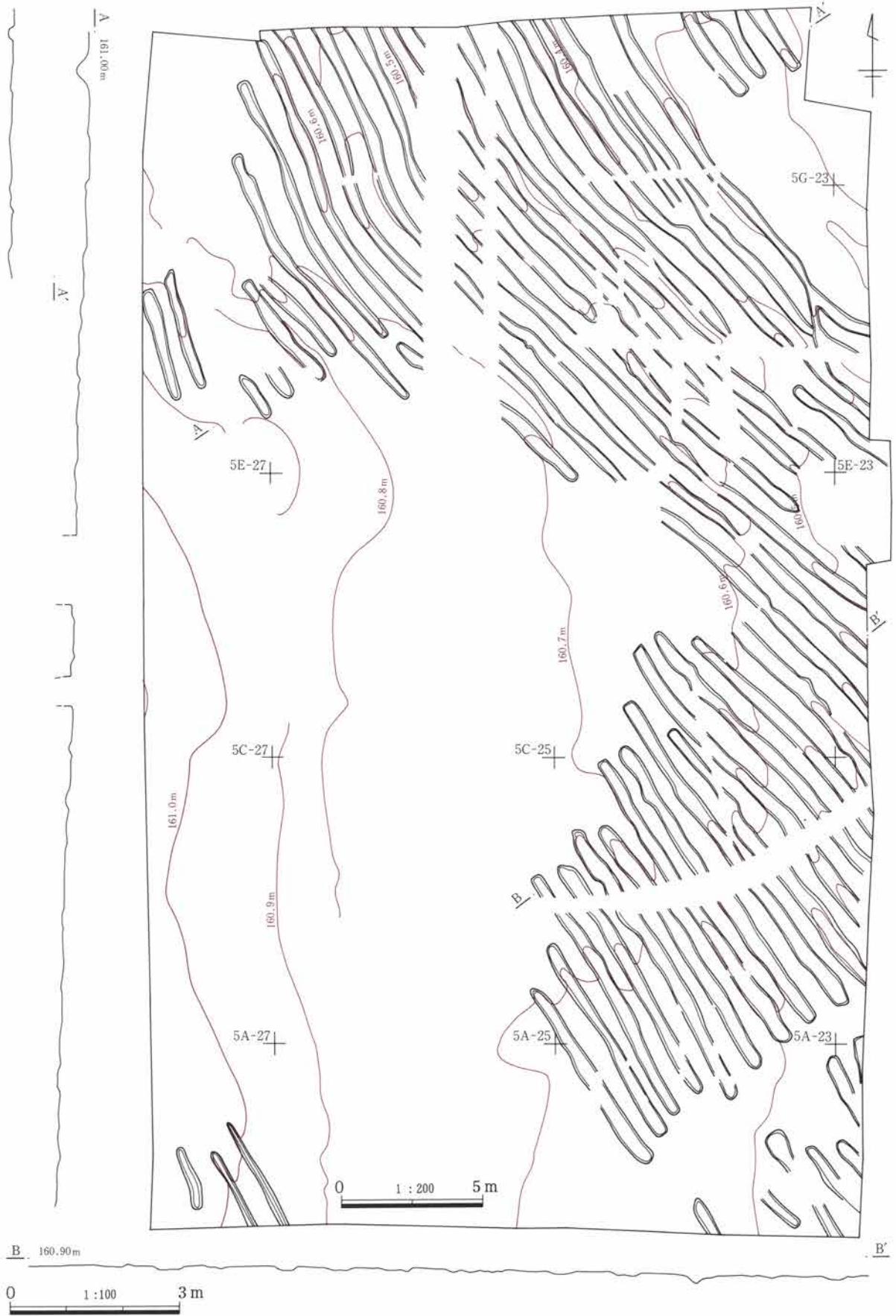
耕作土 As-Cを含む黒褐色土 出土遺物 なし



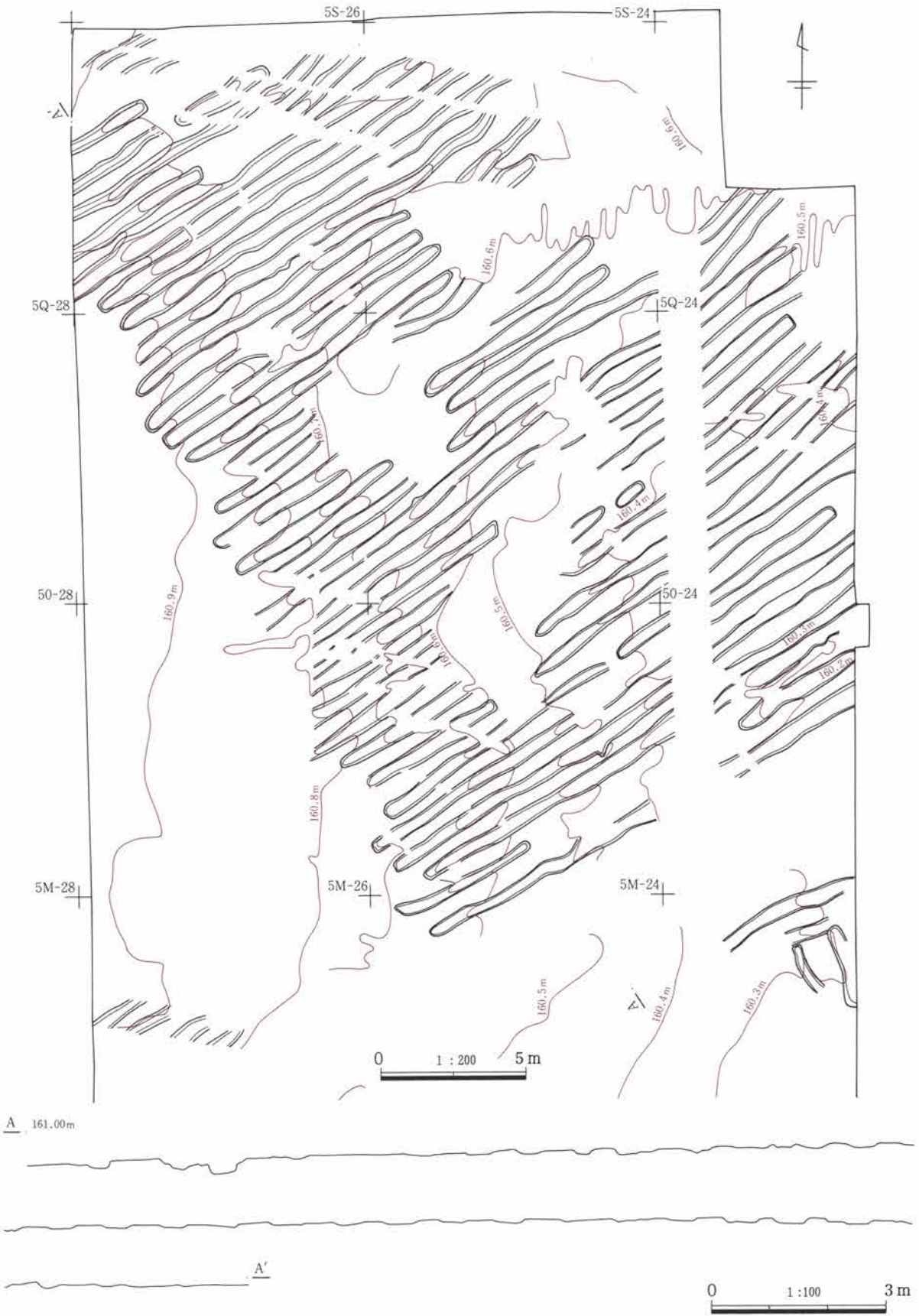
第319図 4区FA下畠跡(1)



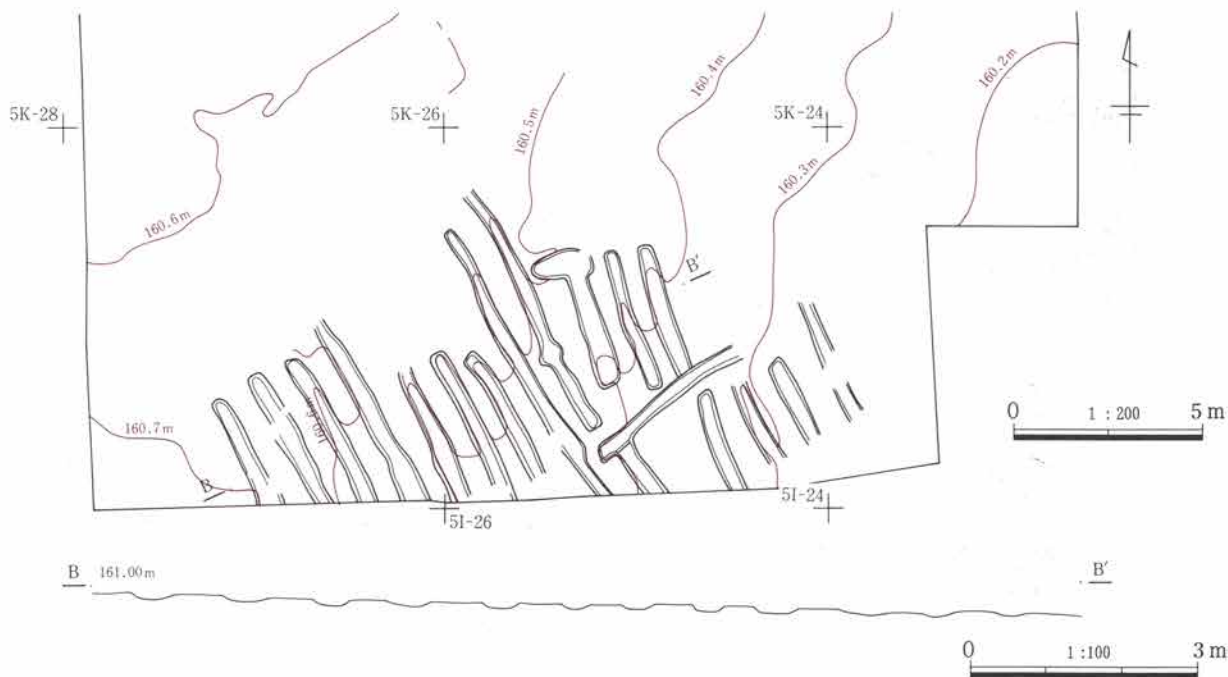
第320図 4区FA下畝跡(2)



第321図 5区FA下畠跡



第322図 6区FA下畠跡(1)



第323図 6区FA下畠跡(2)

7区FA下畠跡 (PL110)

位置 南側4分の1を除く調査区全域

地形 全体に南東方向に緩やかに傾斜している。一方で、この傾斜とほぼ並行する窪地が、中央部を北西-南東方向に存在するため、この窪地に向かっても傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北45.8m、東西26.5mである。サクは138条あり、削平による断裂を考慮すれば、37条と考えられる。サクの最大長は15.50mを測る。ウネ及びサクの走行方向はN-18~56°-Eであり、傾斜に対してほぼ直交しており、中央窪地以北はほぼ直線状で、以南はやや北東-南西方向へ方位が振れると共に、北へ湾曲して徐々に窪地北側へ整合する。東端の様相を見る限り、サクは窪地を全く無視して一定の方向性を持つが、西側窪地周辺ではサクを確認できず、FAの堆積が良好であった点も考慮すれば、サクのない空白地であったかまたは、埋没後の土圧によって陥没し畠面が失われた可能性もある。本区では、FAが厚く堆積していたため、ウネ部も削平されずに残存していた。サクの断面形は潰れたU字形を呈し、幅25~105cm、深さ5cm程を測る。ウネの断面形は潰れた台形で、土圧による圧密を考慮しても、作付け面は平坦であった

と見られ、幅20~85cmを測る。走行方向から見て6区北半から8区まで連続する遺構であると見られ、本区はその中央部に位置する。

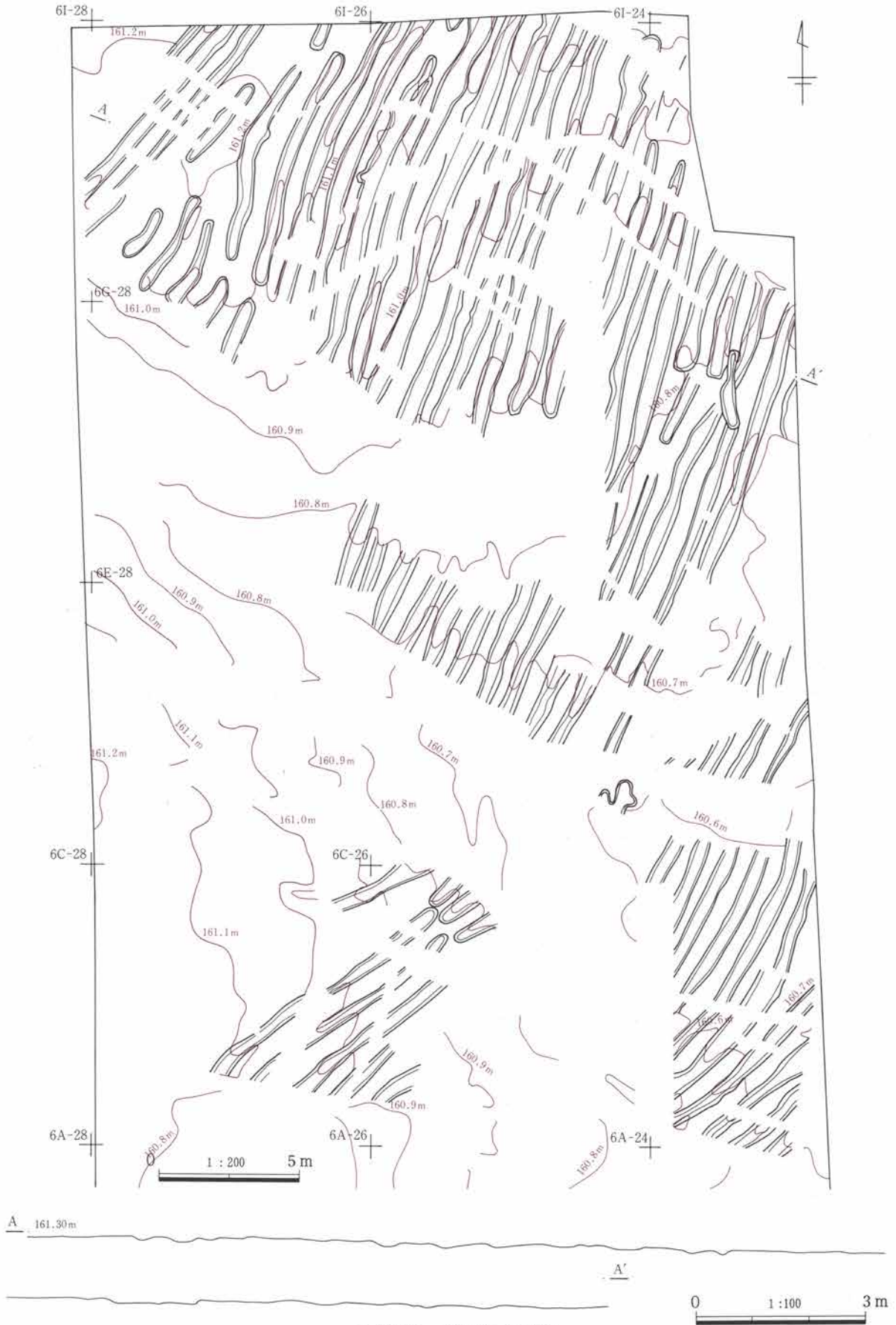
耕作土 As-Cを含む黒褐色土 出土遺物 なし
8区FA下畠跡 (PL110)

位置 南部 6J~6L-24~28グリッド

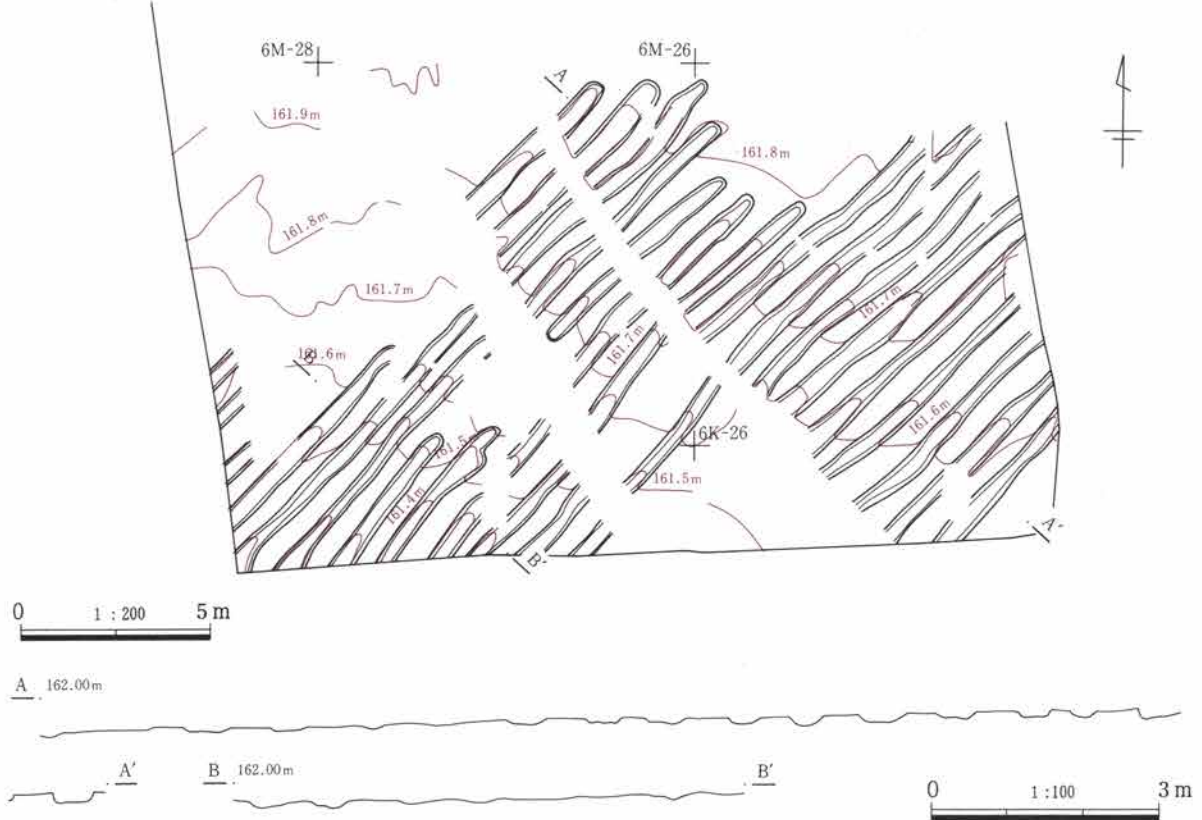
地形 全体に南方向に緩やかに傾斜している。調査区内では本畠跡が検出される辺りから傾斜が強まり、7区の窪地へと向かう。なお、本畠跡が調査区南側3分の1に限られるのは、この付近から以南にⅢ'の堆積が見られるからであり、それ以北では削平によりFAが失われ、FA下畠跡も消滅したものと考える。

形態 全体の確認範囲は南北12.50m、東西22.30mである。サクは37条あり、削平による断裂を考慮すれば、17条と考えられる。サクの最大長は4.52mを測る。ウネ及びサクの走行方向はN-33~40°-Eであり、傾斜に対してほぼ直交して直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。走行方向から見て6区北半部から本区まで連続する遺構であると見られる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土 出土遺物 なし



第324図 7区FA下畠跡



第325図 8区FA下畠跡

9区FA下畠跡 (PL111)

位置 北西部を除く調査区全域

地形 全体に南東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北36.00m、東西13.50mである。サクは127条であり、削平による断裂を考慮すれば、23条と考えられる。サクの最大長は6.70mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-27~40°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。走行方向から見て本区から10区まで連続する遺構であると見られ、総延長76.20mを測る。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

10区FA下畠跡 (PL111)

位置 東・西端を除く調査区全域

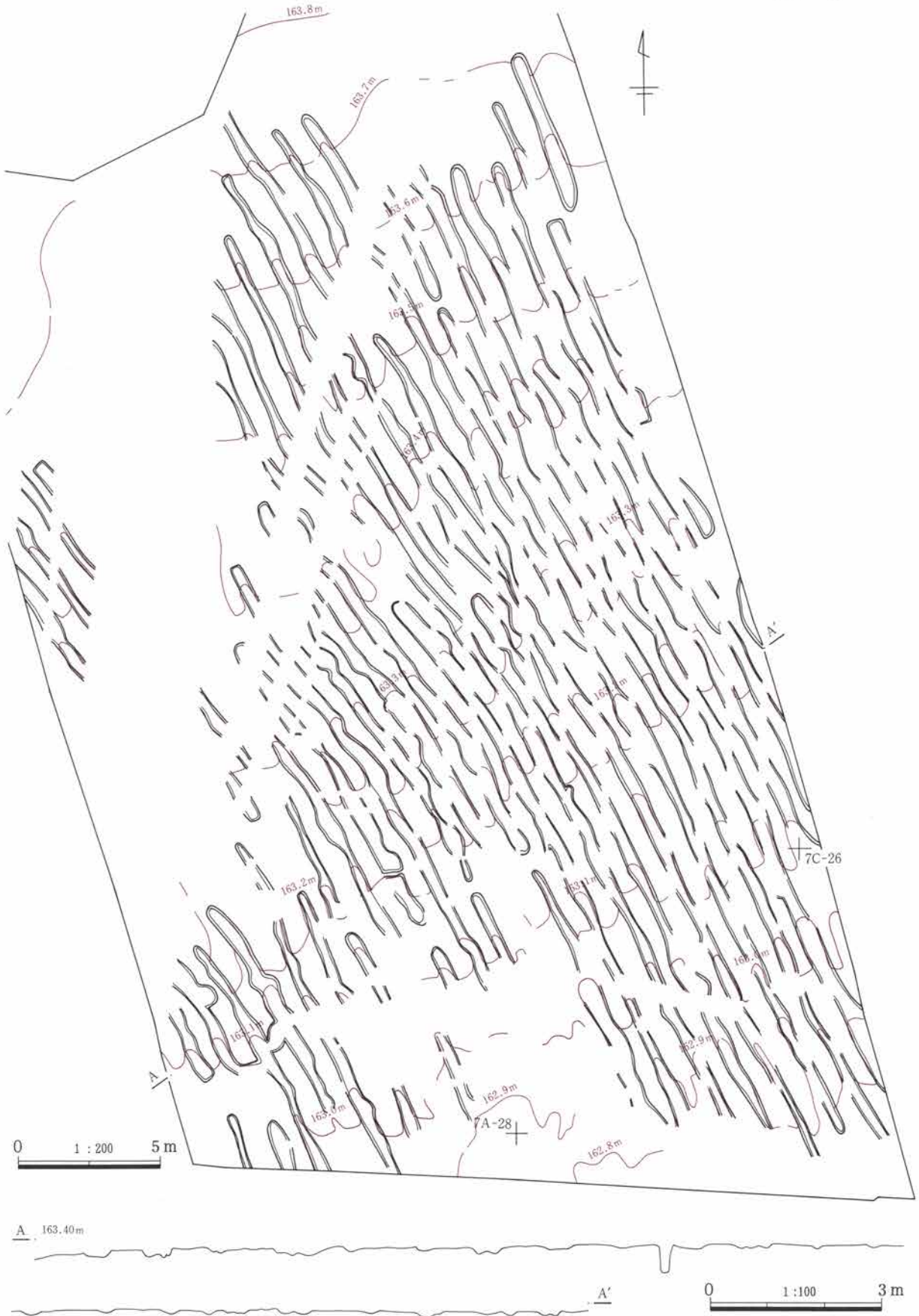
地形 全体に南東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北34.00m、東西16.20mである。サクは34条であり、削平による断裂を考慮

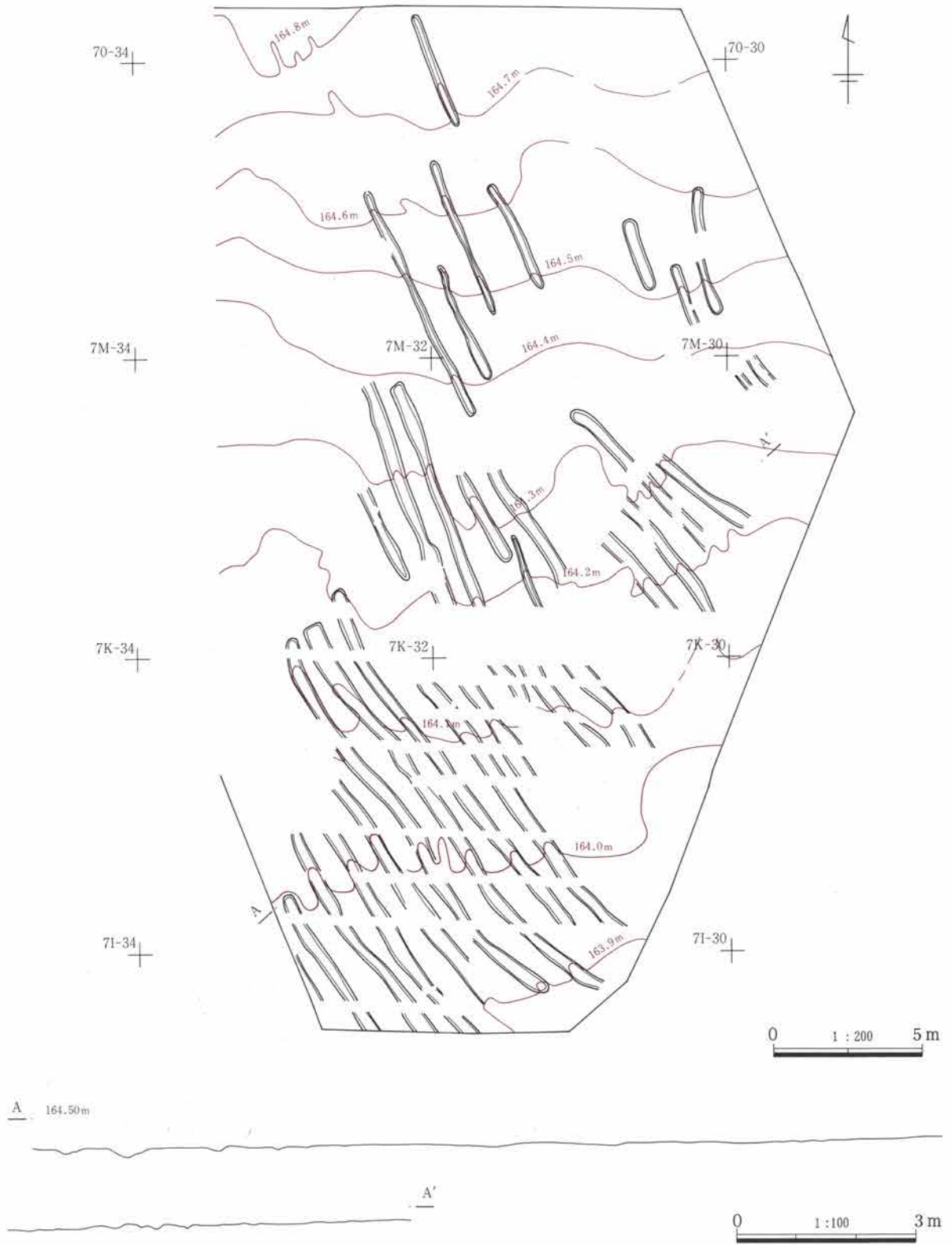
すれば、21条と考えられる。サクの最大長は15.50mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-20~53°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。また、東・西端で畠跡が確認できないのは、削平による消滅と考える。走行方向から見て本区から10区まで連続する遺構であると見られる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

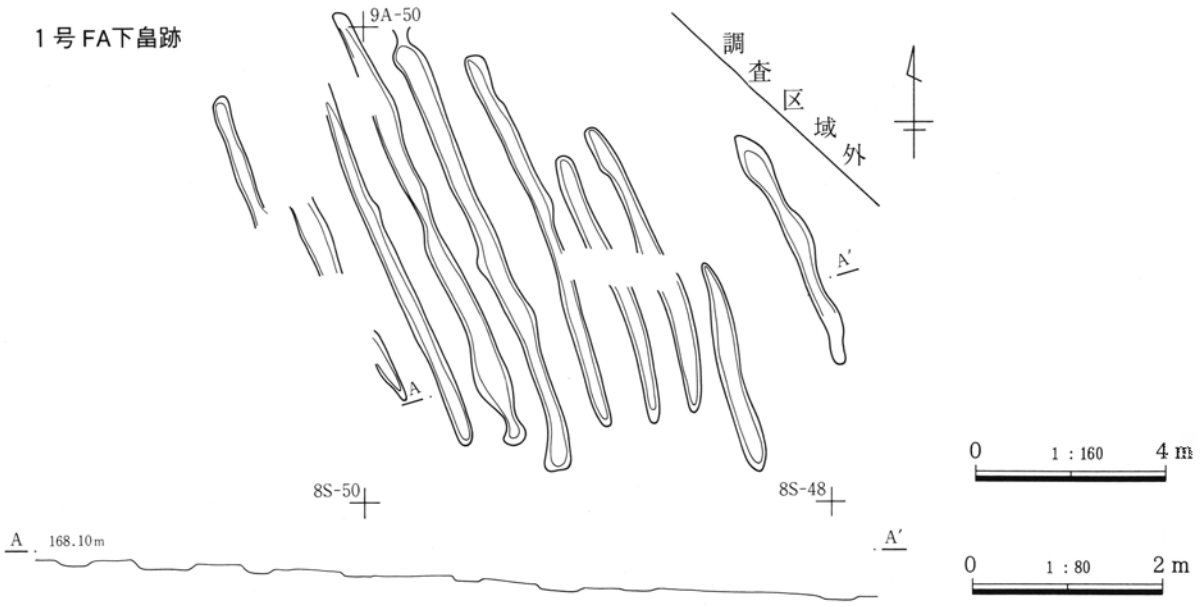


第326図 9区FA下畠跡

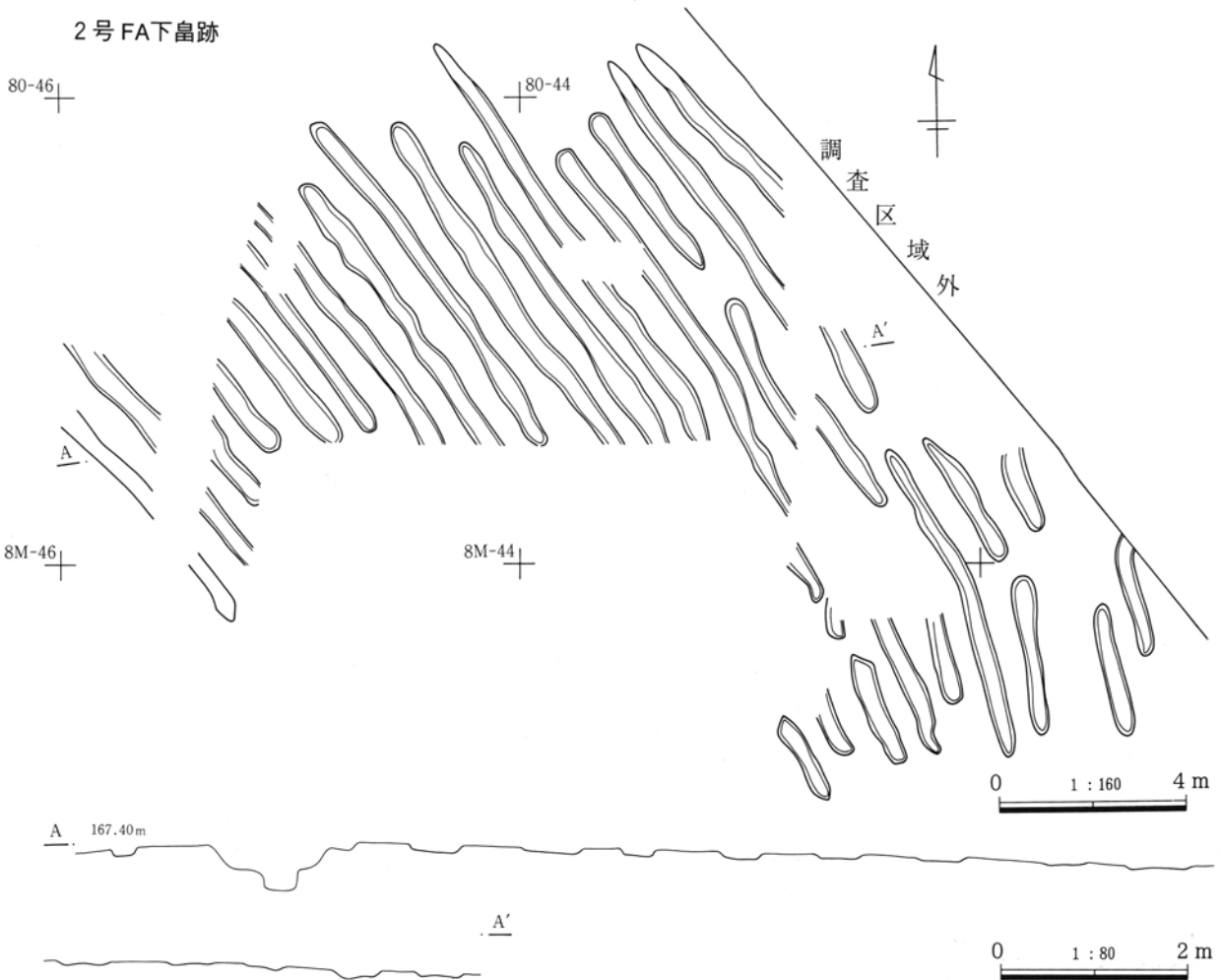


第327図 10区FA下畠跡

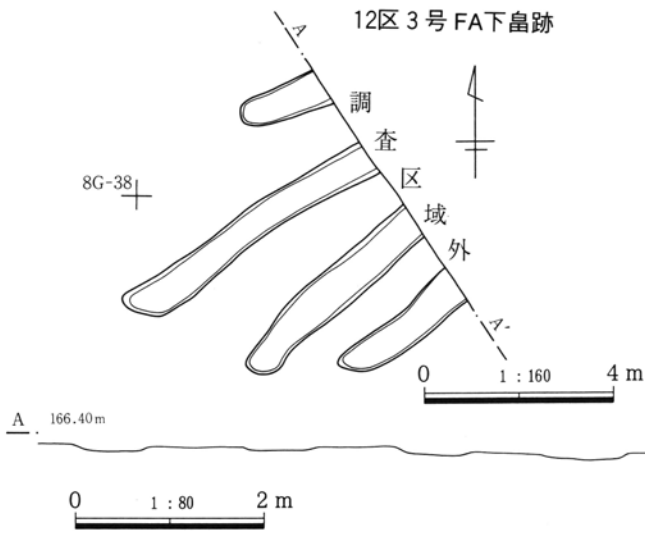
1号FA下畠跡



2号FA下畠跡



第328図 12区1・2号FA下畠跡



12区 1号 F A下畠跡 (P L111)

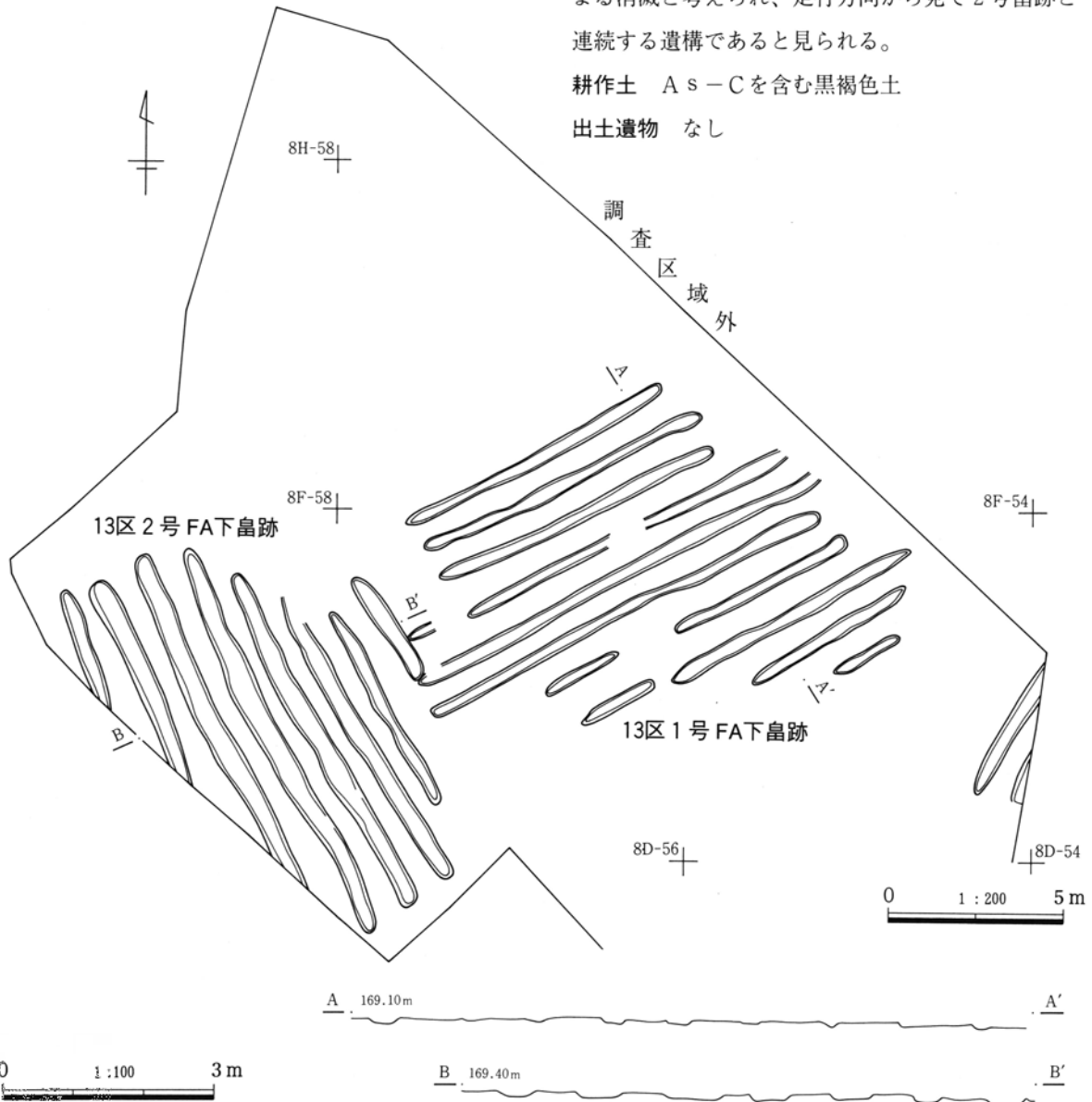
位置 北端 8S~9A-47~50グリッド

地形 ほぼ平坦でわずか東南方向に傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北9.70m、東西13.40mである。サクは13条であり、削平による断裂を考慮すれば、10条と考えられる。サクの最大長は9.90mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-13~23°-Wであり、直線状をなす。本遺構はサクにF Aが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。また、本遺構の確認範囲が狭いのは、削平による消滅と考えられ、走行方向から見て2号畠跡と連続する遺構であると見られる。

耕作土 A s-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし



第329図 12区 3号 FA下畠跡・13区 1・2号 FA下畠跡

12区2号FA下畠跡 (PL111)

位置 中央部 8L~8O-41~45グリッド

地形 ほぼ平坦でわずか東南方向に傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北16.30m、東西23.40mである。サクは36条であり、削平による断裂を考慮すれば、19条と考えられる。サクの最大長は10.30mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-15~35°-Wであり、直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。また、本遺構の確認範囲が狭いのは、削平による消滅と考えられ、走行方向から見て1号畠跡と連続する遺構であると見られる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

12区3号FA下畠跡 (PL111)

位置 南東端 8F・8G-36~38グリッド

地形 ほぼ平坦でわずか東南方向に傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北6.40m、東西7.40mである。サクは4条である。サクの最大長は6.10mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-46~65°-Eであり、直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。また、本遺構の確認範囲が狭いのは、削平による消滅と考えられる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

13区1号FA下畠跡 (PL111)

位置 東半部 9D~9F-54~57グリッド

地形 ほぼ平坦でわずか東南方向に傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北10.60m、東西9.80mである。サクは16条であり、削平による断裂を考慮すれば、12条と考えられる。サクは4条である。サクの最大長は12.40mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-29~62°-Eであり、直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形

は、潰れたU字形を呈する。2号畠跡と走向方位が大きく異なり、区画の違いを示していると見られる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

13区2号FA下畠跡 (PL111)

位置 西半部 9C~9E-56~59グリッド

地形 ほぼ平坦でわずか東南方向に傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北9.20m、東西14.50mである。サクは8条である。サクの最大長は12.50mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-25~36°-Wであり、直線状をなす。本遺構はサクにFAが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、潰れたU字形を呈する。1号畠跡と走向方位が大きく異なり、区画の違いを示していると見られる。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

(2) FA上溝群

5区FA上溝群

位置 東半部 4S~5G-23・24グリッド

地形 全体に北東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北40.30m、東西5.20mである。溝は南部で4条、中央部で1本、北部で断続的に7本確認できた。溝の最大長は6.20mを測る。溝の走行方位はN-2~17°-Wであり、傾斜に対して斜めに交差し、ほぼ直線状を呈する。本遺構はFAを削り込んだ結果、FA上面で確認することとなったが、形態的に畝跡のサクに類似している。溝の断面形は、潰れたU字形を呈する。溝の最大幅は43cmで、溝と溝の間隔は108cmと、前述のFA下畝跡よりも広い。溝の埋土は、FAの占める割合が多く、FA降下年代に近い時期に比定される。

耕作土 FAを母材とする灰褐色土

出土遺物 なし

6区FA上溝群 (PL111)

位置 中央部 5J~5Q-22~27グリッド

地形 全体に東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北34.00m、東西26.00mである。溝は3~41号溝の計101条を数える。溝の長さは最大でも30.50mに過ぎず、残存状況は良くない。溝の走行方位はN-42~107°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行し、直線状でやや南に向かって湾曲するものもある。溝の断面形は、潰れたU字形を呈する。流水痕跡は見られない。溝の埋土は、FAの占める割合が多く、FA降下年代に近い時期に比定される。

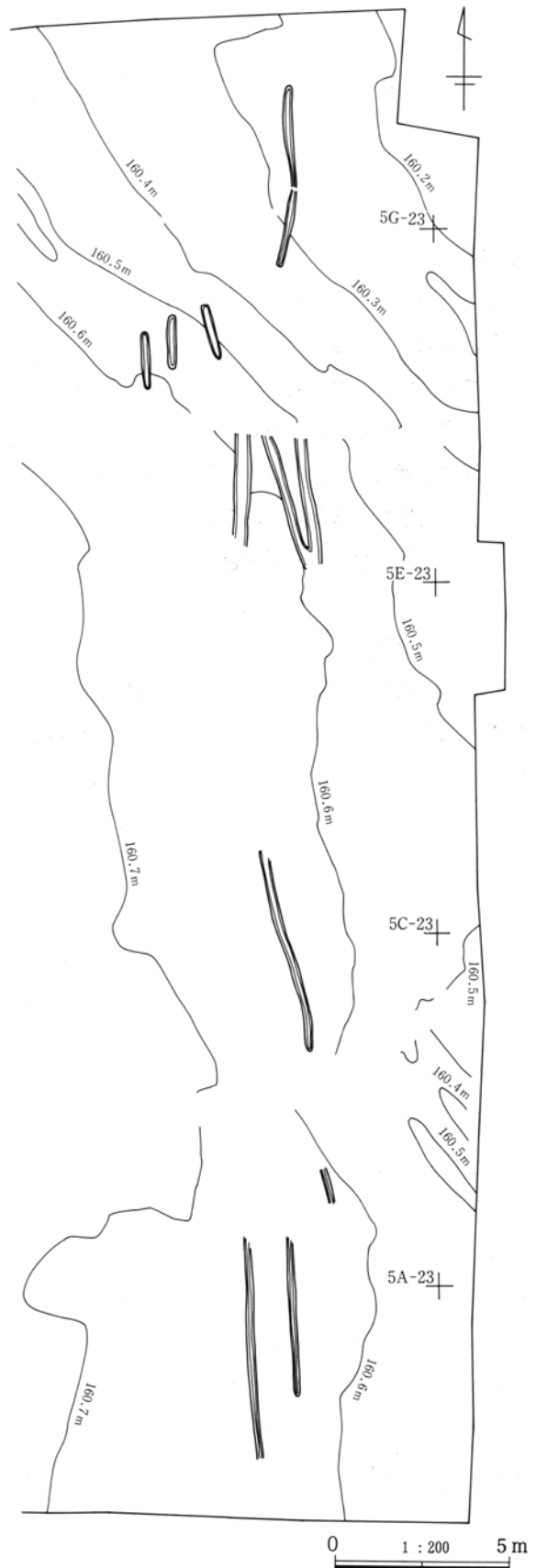
耕作土 As-Cを含む黒褐色土 出土遺物 なし

7区FA上溝群 (PL112)

位置 南側5分の1を除く、ほぼ調査区全域。

地形 全体に南東方向に緩やかに傾斜しているが、一方でこの傾斜とほぼ並行する窪地が北西-南東方向に存在するため、この窪地に向かっても傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北34.00m、東西26.00mである。溝は3~41号溝を含め101条を数える。溝群のうち5・17・26・27号溝は、規模及び形態から見



第330図 5区FA上溝群

て、他とは性格が若干違うと思われる。5号溝の規模は長さ30.05m、最大幅85cm、深さは断面観察部で18cmである。17号溝の規模は長さ26.40m、最大幅1.30cm、深さは断面観察部で19cmである。26号溝の規模は東端から長さ9.60mで南西方向に折れ、更に15.20m延びる。最大幅56cm、深さは断面観察部で11cmである。27号溝の規模は東端から長さ18.45mで南西方向に折れ、更に11.60m延びる。最大幅46cm、深さは断面観察部で8cmである。なお、27号溝と31号溝は同一の溝の可能性があり、埋土に砂を含み流水があったと見られる溝の分布を見ると、窪地に位置する5号溝と40・41号溝、南側では5号溝に並行する17号溝及びそこから分岐する14～16・22・32号溝、北側では26・27・31号溝が5号溝から分岐した傾向が看取される。このうち40・41号溝は5号溝と並行する溝を連結する意図が読み取れ、これら以外は傾斜に対して並行する位置にある。また、26・27号溝が重複関係にあることや、南側では南北方向と東西方向の溝が交差する状況から見て、最低2時期の溝群が混在しているものと思う。明確ではないが形態から見て、耕作痕の可能性が高く畝跡と考えられるが、流水痕跡を考慮すれば水田跡である可能性も否定できない。

耕作土 灰褐色粘質土

出土遺物 なし

9区FA上溝群 (PL112)

位置 東半部 6T～7H-25～28グリッド

地形 全体に南東方向に緩やかに傾斜している。

形態 全体の確認範囲は南北35.00m、東西24.00mである。溝は61本であり、削平による断裂を考慮すれば、15本と考えられる。溝の最大長は24.40mを測る。溝の走行方向はN-2～13°-Eであり、傾斜に対して直交し直線状を呈す。溝の断面形は、U字形をなす。溝の最大幅は22cmで、溝と溝の間隔は26～112cmだが、概して前述のFA下畝跡よりも広い。溝の埋土は、FAの占める割合が多く、FA降下年代に近い時期に比定される。

耕作土 As-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

(3) As-B混土畝跡

8区1号As-B混土畝跡 (PL112)

位置 中央東半部 6L～6O-23～26グリッド

地形 ほぼ平坦。

形態 全体の確認範囲は南北164.00m、東西12.58mである。サクは南北方向が32cm程の間隔で20条と、東西方向が28cm程の間隔で25条の2方向のものが重複する。サクの断面形は、整った箱形を呈する。分布から見て、西側に隣接する7～9号土坑との関連が想定される。

耕作土 As-Bを多く含むにぶい黄褐砂質土

出土遺物 なし

8区2号As-B混土畝跡 (PL112)

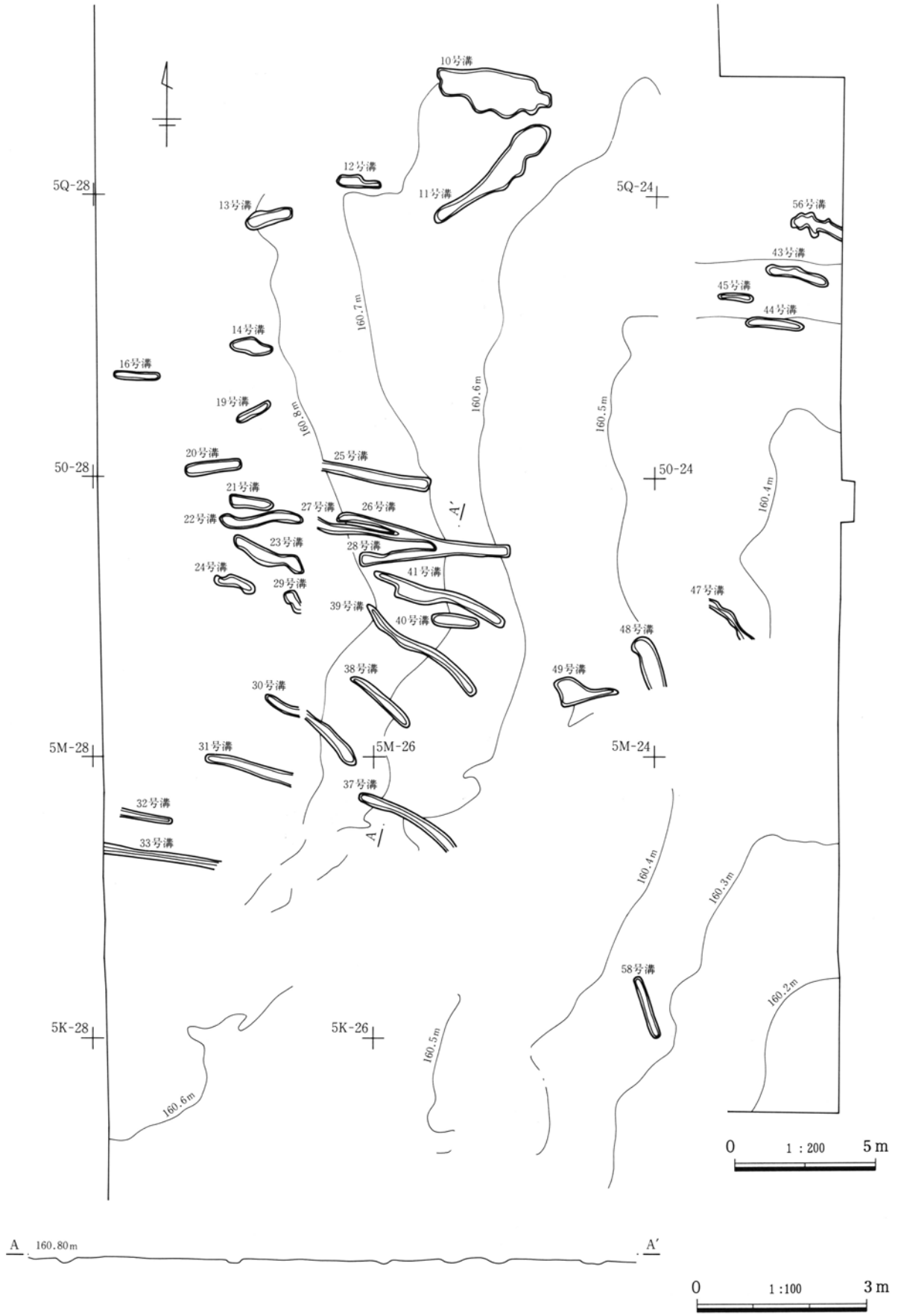
位置 中央西半部 6O～6Q-26～29グリッド

地形 ほぼ平坦。

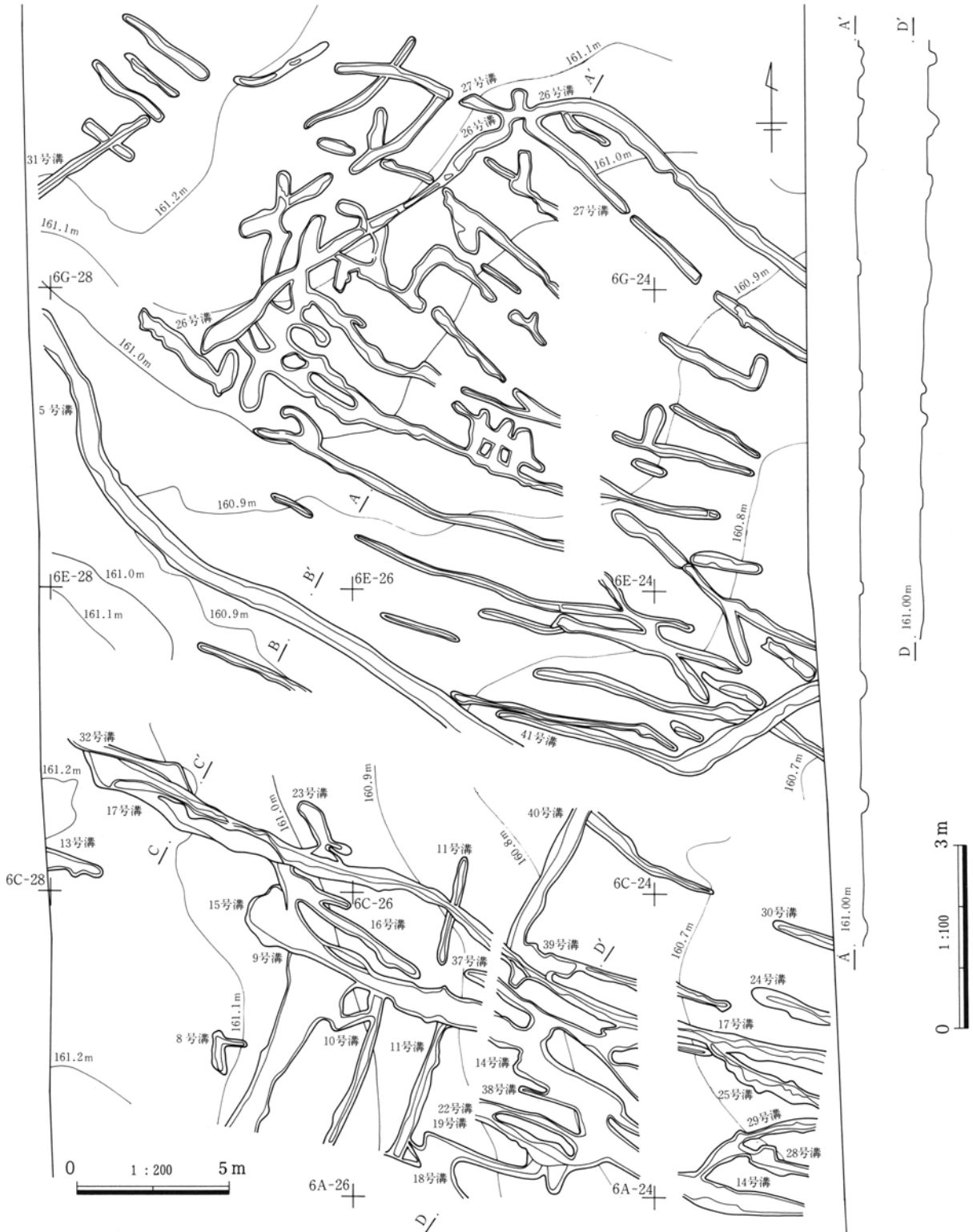
形態 全体の確認範囲は南北11.46m、東西7.10mである。サクは南北方向が24cm程の間隔で25条と、東西方向が21cm程の間隔で15条の2方向のものが重複する。サクの断面形は、整った箱形を呈する。重複関係では、1号掘立柱建物跡よりも新しいが、分布から見ると1号As-B混土畝跡とともに、1号掘立柱建物跡及び周辺の関連遺構を意識した位置関係にあり関連が想定される。

耕作土 As-Bを多く含むにぶい黄褐砂質土

出土遺物 なし



第331図 6区FA上溝群



5号溝

- 1 灰褐色粘質土 FA小ブロック5%、As-C1%含む。

17号溝

- 1 にぶい黄橙色土 As-C1%含む。
- 2 にぶい黄橙色シルト As-C1%含む。
- 3 にぶい黄橙色シルト 川砂利40%含む。

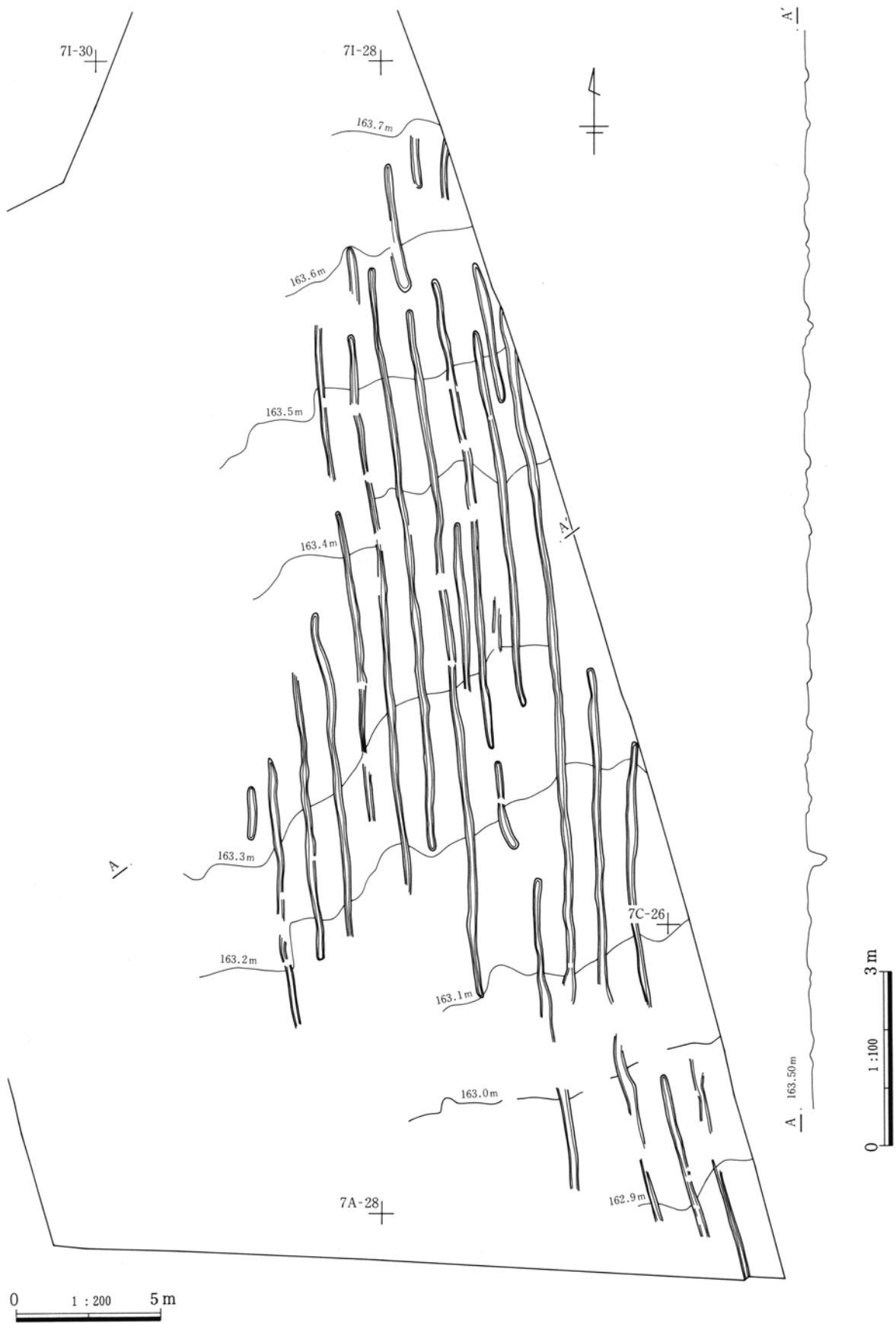


B 161.00m 1 B'

C 161.20m 1 2 C'

0 1:100 3m

第332図 7区FA上溝群



第333図 9区FA上溝群

7. 道路跡

2区1号道路跡 (P L 113)

位置 中央部南寄り 3B-19~22グリッド

重複 なし

形態 ほぼ直線状を呈し、ほぼ平坦。轍と見られる溝状の窪みを南北2条持つ。規模は17.40×1.30mである。走向方位はN-78°-W程である。道路面は地山(Ⅷ)が硬化している。本調査地は中央部に境に、南北で微高地と低地に分かれるが、本遺構はその境部に選地し、北側微高地をやや切土したものと認める。

出土遺物 覆土から土師器・須恵器片数片が出土しているが混入である。

時期 上限は不明だが、近年埋められ廃道となった。

7区1号道路跡 (P L 113・155)

位置 中央部 6C・6D-22~28グリッド

重複 1号土坑よりも古く、FA下畠跡及びFA上溝群よりも新しい。

形態 ほぼ直線的で、南北両側に側溝を持つ。道路面はほぼ平坦。全体の規模は26.50×2.21mで、道路硬化面の幅は38~91cm、北側側溝は幅24~58cm、深さは観察断面で13cm、南側側溝は幅31~61cm、深さは観察断面で18cmを測る。走行方位はN-79°-W程である。側溝の断面形は南北ともにU字形を呈する。Aセクションの断面観察によれば、道路硬化面は2面確認できる。下層硬化面は、掘り方より10cm程川砂利を多く混入する暗褐色砂質土を盛り、更に16cm程にぶい黄褐色砂質土を入れてよく締め固めている。上層硬化面は、下層硬化面に砂が5cm程堆積した後、新たに18cm程川砂利を多く混入する黒褐色砂質土を入れて締め固めており、補修面であると認められる。

出土遺物 掘り方から1の須恵器鉢が出土しているほか、北側側溝埋土及び掘り方から土師器・須恵器片が少量出土している。

時期 南側側溝の埋土にAs-Aが堆積しており、18世紀末と見られる。

11区1号道路跡 (P L 113)

位置 中央部 7S~8A-32~36グリッド

重複 1・5号溝より古い。

形態 西半分で北側に折れ、くの字状を呈し、外形は非常に波打ち乱れる。規模は19.60×1.68mである。走向方位はN-57~77°-Wである。硬化面は掘り方に5cm程土を入れた上面に形成され、残存状況は良くない。外形の乱れから見て、削平を著しく受けていると見られる。

出土遺物 なし 時期 不明

13区1号道路跡 (P L 113)

位置 北端 9E~9H-54~58グリッド

重複 2号溝より新しい。

形態 ほぼ直線状。道路硬化面は土層断面で初めて確認できたため、掘り方と見られる溝状の遺構として完掘となった。規模は26.50×2.20mである。走向方位はN-52°-W程である。断面は皿状で、底面から暗褐~褐色砂質土を30cm弱盛り締め固める。

出土遺物 なし

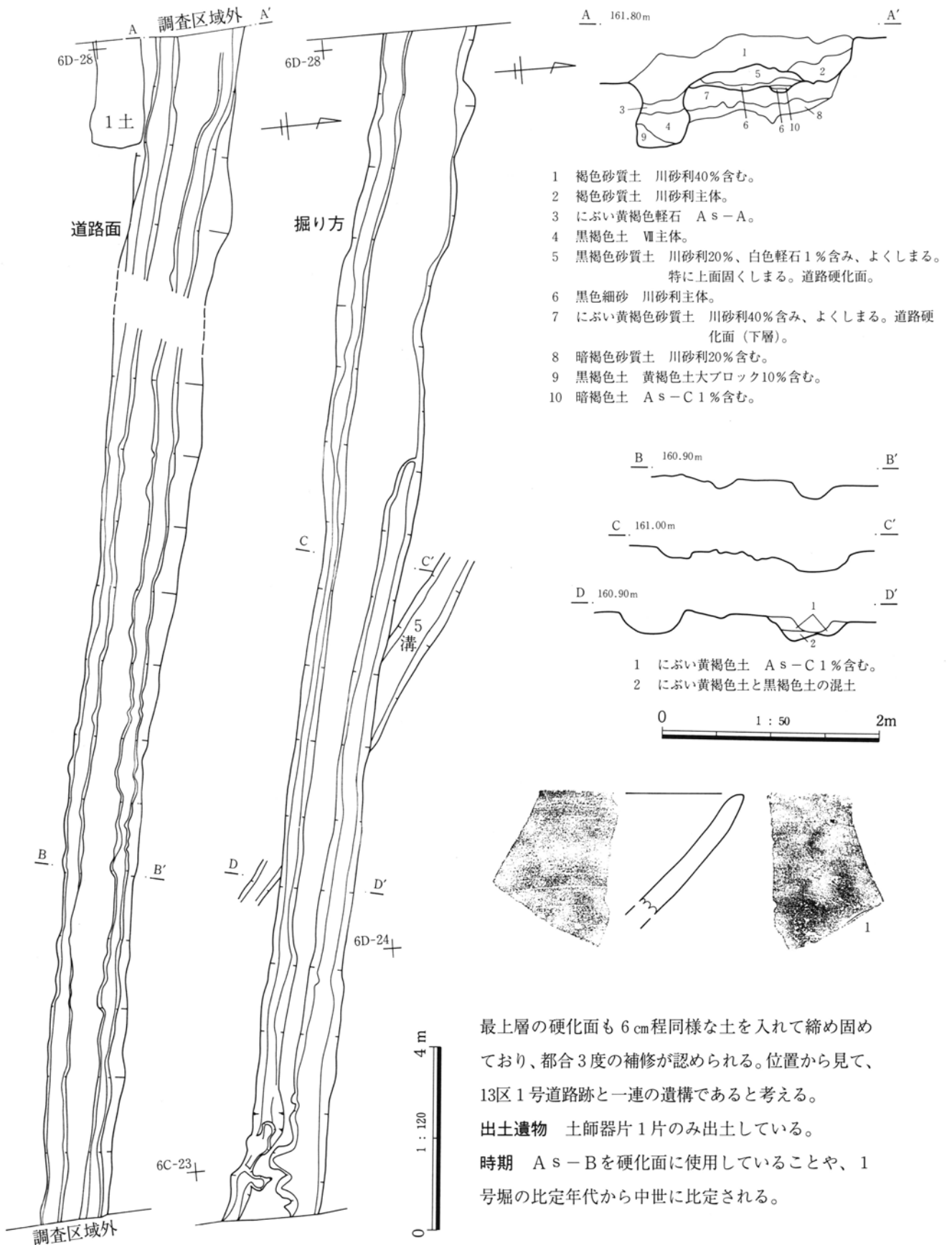
時期 15区1号道路跡の時期と同じと見られる。

15区1号道路跡 (P L 114)

位置 調査区を東西方向に横断する。

重複 1号堀及び1号掘立柱建物跡、1号柱列、5号土坑より古く、3号溝より新しい。

形態 ほぼ直線的で、北側に側溝を持つ。道路の路肩は周辺よりも6cm程くぼんでおり、路面は平坦で南側が斜めに立ち上がる。全体の規模は31.40×2.45mで、道路硬化面の幅は最大210cm、北側側溝は幅11~28cm、深さは観察断面で12cmを測る。走行方位はN-66°-W程である。側溝の断面形はU字形を呈する。Bセクションの断面観察によれば、道路硬化面は4面確認できる。最下層の硬化面は、掘り方より6cm程砂を多く混入する暗褐色砂質土を盛り、更に4cm程黒色土を入れてよく締め固めている。次の硬化面は、5cm程暗褐色砂質土を入れて締め固める。その上の硬化面も6cm程同様な土を入れて締め固め、

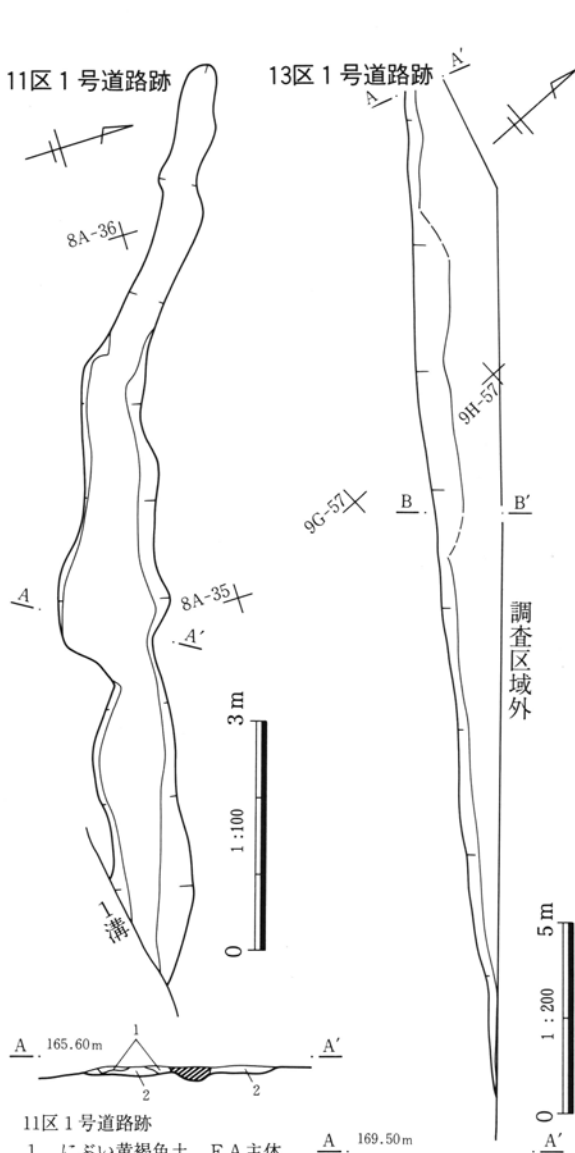


第334図 7区1号道路跡・出土遺物

最上層の硬化面も6cm程同様な土を入れて締め固めており、都合3度の補修が認められる。位置から見て、13区1号道路跡と一連の遺構であると考えられる。

出土遺物 土師器片1片のみ出土している。

時期 A s - Bを硬化面に使用していることや、1号堀の比定年代から中世に比定される。



11区1号道路跡

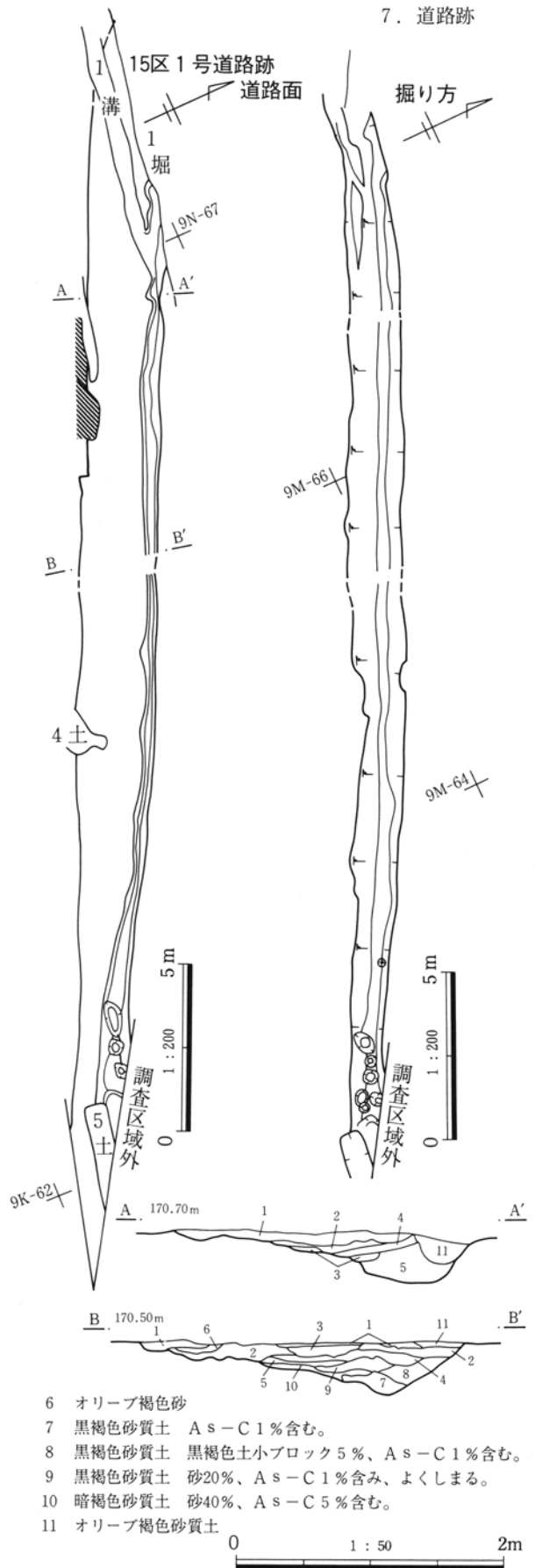
- 1 におい黄褐色土 FA主体。よくしまる。
- 2 FAと黒色土の混土

13区1号道路跡

- 1 褐灰色砂質土とAs-Cの混土
- 2 暗褐色砂質土 As-C1%含み、下層しまる。

15区1号道路跡

- 1 暗褐色砂質土 砂30%、小亜円礫1%含み、固くしまる。道路1面。
- 2 暗褐色砂質土 砂20%、As-B10%、As-C5%含み、よくしまる。道路2面。
- 3 黒褐色砂質土 褐色土小ブロック、砂を5%、白色軽石1%含む。道路2面。
- 4 暗褐色砂質土 砂20%含み、固くしまる。上層に砂層あり。道路3面。
- 5 黒色土 VIに似る。As-C5%含み、固くしまる。道路4面。



- 6 オリーブ褐色砂
- 7 黒褐色砂質土 As-C1%含む。
- 8 黒褐色砂質土 黒褐色土小ブロック5%、As-C1%含む。
- 9 黒褐色砂質土 砂20%、As-C1%含み、よくしまる。
- 10 暗褐色砂質土 砂40%、As-C5%含む。
- 11 オリーブ褐色砂質土

第335図 11区1号道路跡・13区1号道路跡・15区1号道路跡

8. 旧河道・小谷地

0区旧河道 (P L 115)

本区は牛池川左岸の隣接地であり、牛池川の変流路と見られる。トレンチ調査によって最下部までを確認したところ、表土から28m程で固く締まった緑灰色火山灰土が基底として現れ、この面を削り込んで徐々に砂礫が堆積して埋没する状況が観察できた。なお、壁となる灰褐色砂～シルト・粘土 (Ⅸ) は、本区から2区南半部まで堆積が認められ、大きくひとまとまりの低地部を形成しており、本旧河道或いは牛池川本流も含めた流路の初源的な流路であると考えられる。FA降下以前では、流路を反映した砂礫がA～Dの4層認められるが、A層を除いて巨礫を含まず概して小規模な流路であったと見られる。DはFA下段階の流路である。

FA下 全体の確認範囲は上幅19.20mである。底面には更に2条の溝があり、北側が幅2.50m、南側が幅4.10mである。また南側では砂礫Dが堆積していた。FA (V) は最大厚11cm堆積し、更に上層にはFA二次堆積を主体とする2が堆積する。

As-B下 全体の確認範囲は上幅23.2m、下幅1.50mである。底面はほぼ中央部に1条の流路を持つが、流量は余り見込まれない。底面上面には薄く層状に腐植に富んだ黒色土が見られ、湿地化した様相が窺える。As-Bの堆積は最大厚65cmを測り、以後徐々に離水する。掲載遺物は全てAs-B (Ⅲ) 降下以後の埋没過程で周辺から混入したものと認められる。

2区小谷地 (P L 115)

位置 北端 3J・3K-20・21グリッド

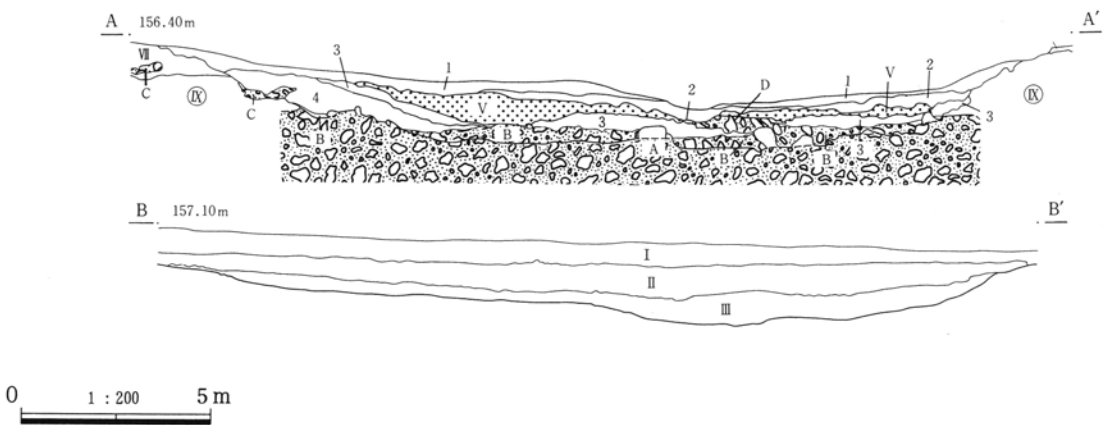
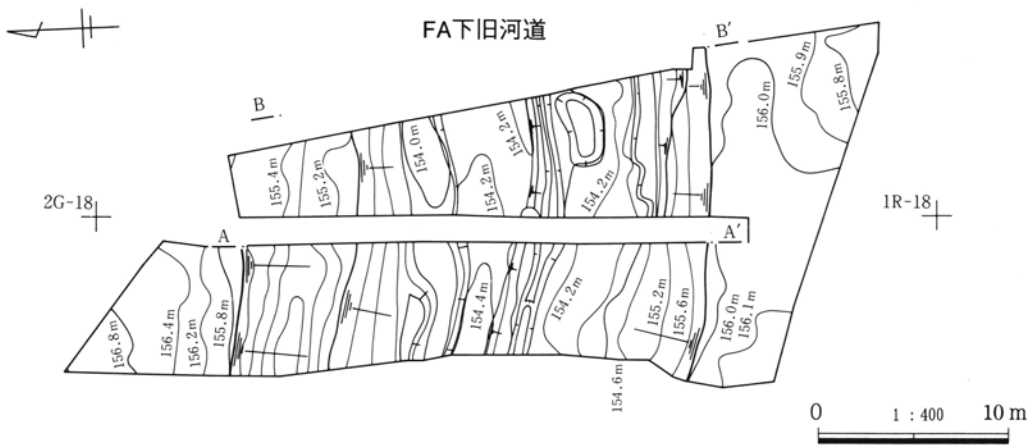
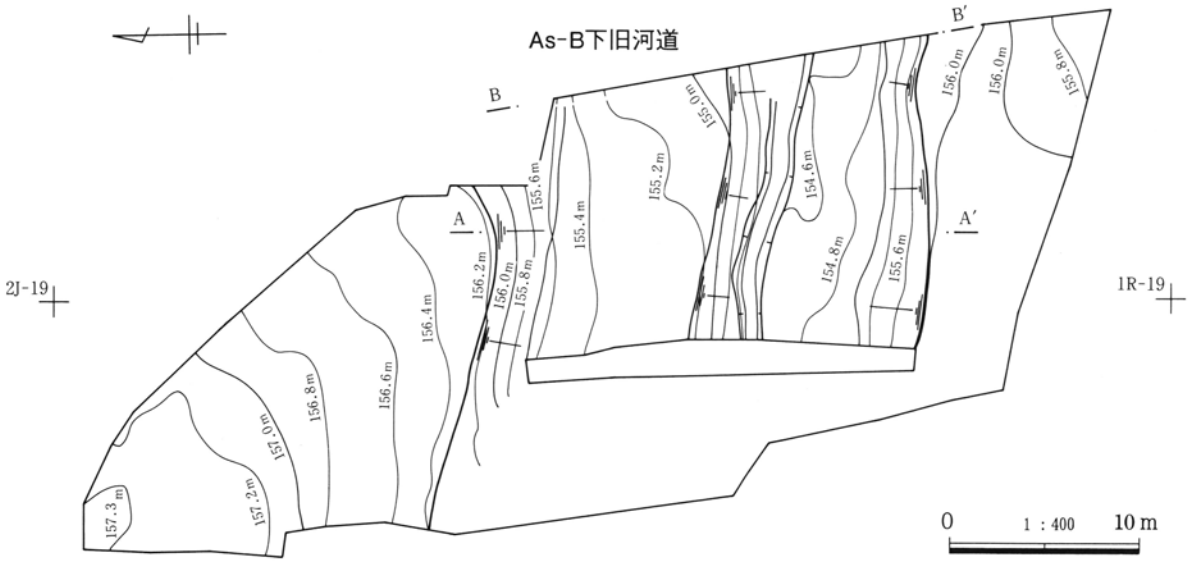
形態 規模は5.32×3.14m、深さは断面観察部で18cmである。走向方位はN-43°-W程である。確認面は褐色土 (Ⅷ) 上面である。底面はやや荒れ若干の流水は見込まれるが、概して少なく季節的なものとする。位置から市道を挟んで4区の小谷地と同一と見られる。

出土遺物 なし

4区小谷地 (P L 115)

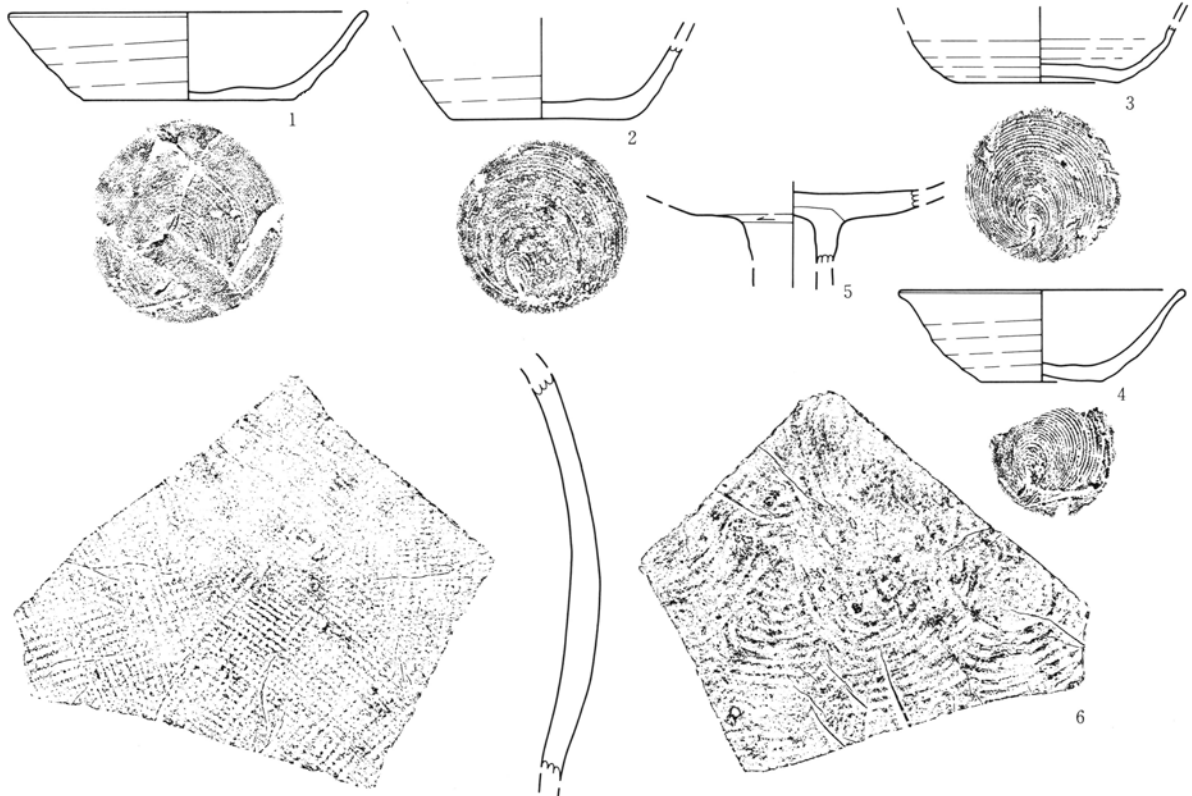
位置 30～3Q-25・26グリッド

形態 規模は24.80×5.15m、深さは断面観察部で37cmである。走向方位はN-51°-W程である。底面は荒れており流水していたものと認められるが、常時の流路ではなく季節的なものとする。As-B二次堆積 (Ⅲ) も水成堆積である。位置から市道を挟んで4区の小谷地と同一と見られる。本遺構の遺存状態は西側へ向かって良好で、西端ではAs-B二次堆積がやや良好に堆積するが、東方向に向かって削平が進む。なお、調査中の降雨時には、本遺構の5m程南に並走する径道に、雨水が集中することが目撃されており、現在もその影響が認められた。こうした点で、1・2号堀の開口部 (土橋状) が同様な位置に設けられているのも、雨水等との関係が考慮される。出土遺物は土師器・須恵器の小片がやや多く出土しているが、流水による磨滅が著しい。本遺構は集落に近接する周辺の窪地として、当該期遺物が流入したものと思われる。

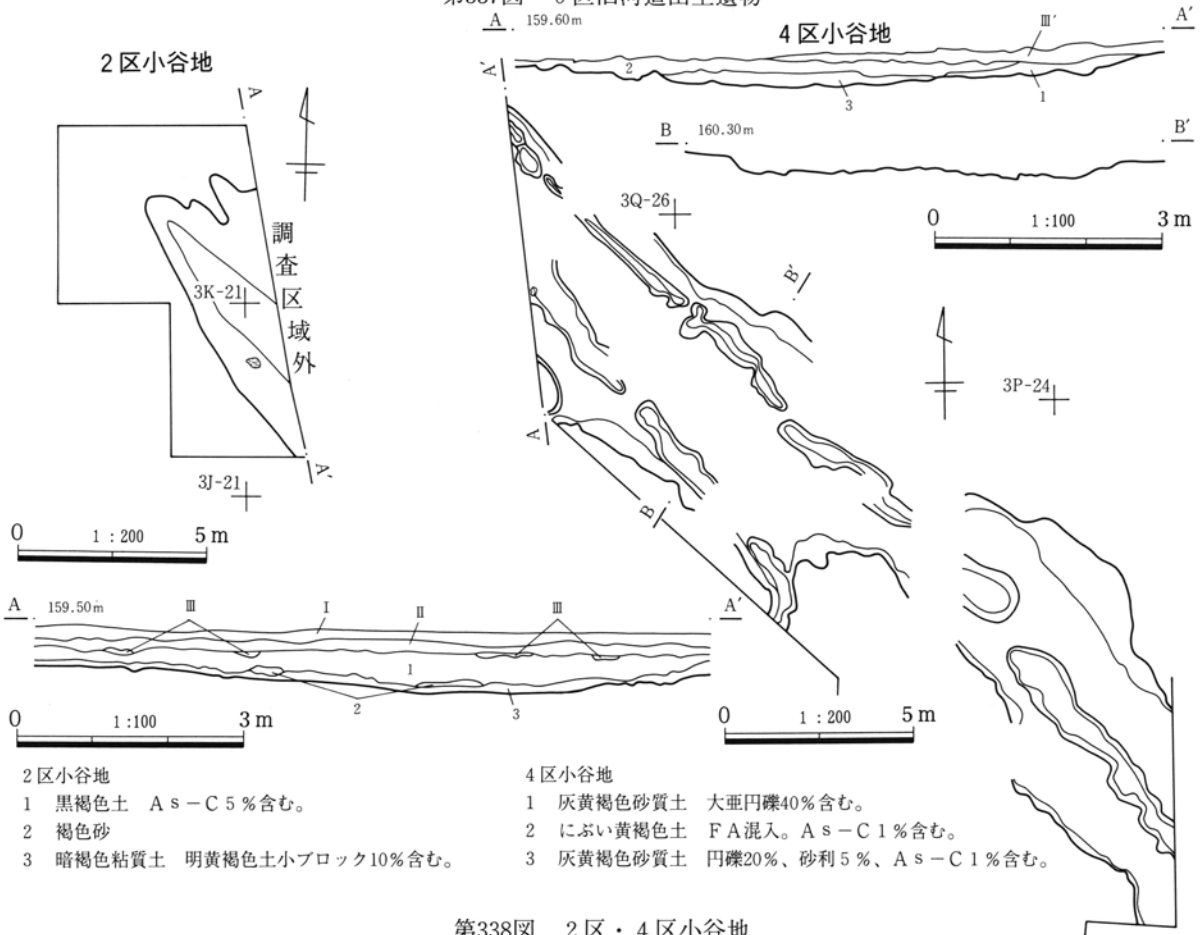


- | | |
|---|---|
| <p>1 黒～灰褐色粘質土 白色軽石5%含む。上層は腐植に富む。
鉄分の凝集斑紋あり。</p> <p>2 灰黄色砂と灰黄褐色土の互層 白色軽石、小円礫を1%含む。</p> | <p>3 黒褐色粘質土 A s-C、砂礫を5%含む。</p> <p>4 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 黄色軽石1%含む。鉄分の凝集斑紋あり。</p> |
|---|---|

第336図 0区As-B下・FA下旧河道



第337図 0区旧河道出土遺物



第338図 2区・4区小谷地

9. 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (P L 116・156)

前期から晩期にわたる遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。14の深鉢が出土した4区やその北側5区では、北側の埋没谷に向かって傾斜する地形として出土遺物量はやや多い。また13の深鉢が出土した10区でもやや多く遺物が出土している。

(2) 弥生土器 (P L 116)

6・9区では1・2の樽式土器の壺が、各1点ずつまとまって出土したが、遺構は検出できずその性格も不明である。両区ではともに上層でF A下畠跡が検出されており、その耕作による攪拌によって遺構・遺物ともに破壊されたものと考えられる。

(3) 石器 (P L 157・158)

石器は調査区全域にわたり散漫に出土するが、土器と同様に4・5・10区で、その出土量がやや多くなっているが、遺構は検出されなかった。本遺跡では石鏃の出土量がやや多く、その特徴的なものを中心に掲載する。

(4) 古墳・奈良・平安時代出土遺物 (P L 158)

古墳時代の出土遺物は非常に少なく、1・2区の土坑から出土した2点のほか、本掲載遺物しか見られない。本遺跡では1～13区まで連続して古墳時代後期のF A下畠跡が分布するが、その耕作者が居住する集落跡の所在は不明のままである。

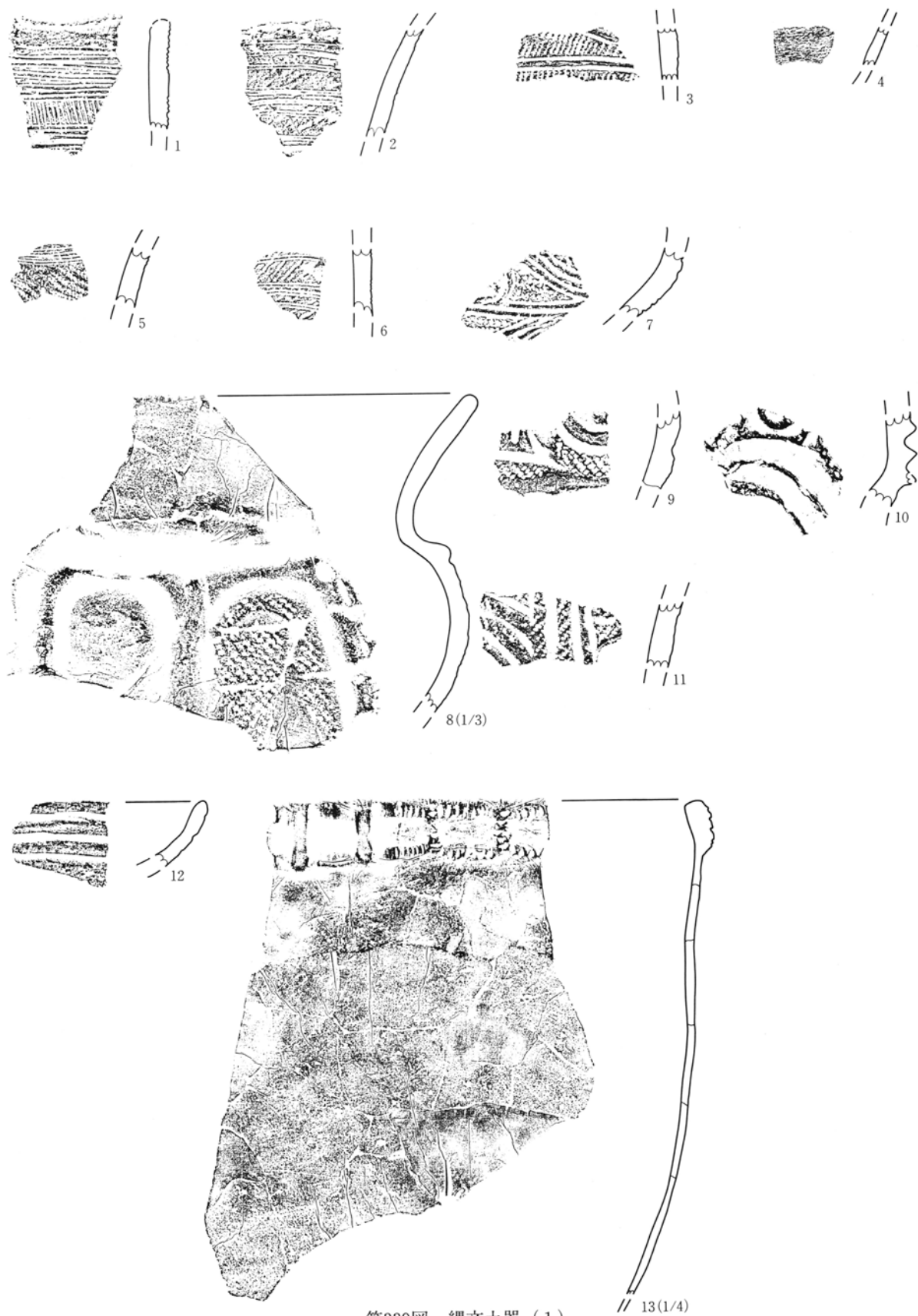
奈良・平安時代の竪穴住居跡は、1・2・4・5・10・15区に分布するが、それ以外の調査区で出土したやや遺存状態の良い遺物を中心に掲載した。また、11の須恵器甕は1区3号掘立柱建物跡付近に出土したもので、別に掲載した1区6号掘立柱建物跡周辺遺物と同様、須恵器甕である点が注目される。

(5) 中世以降出土遺物 (P L 159)

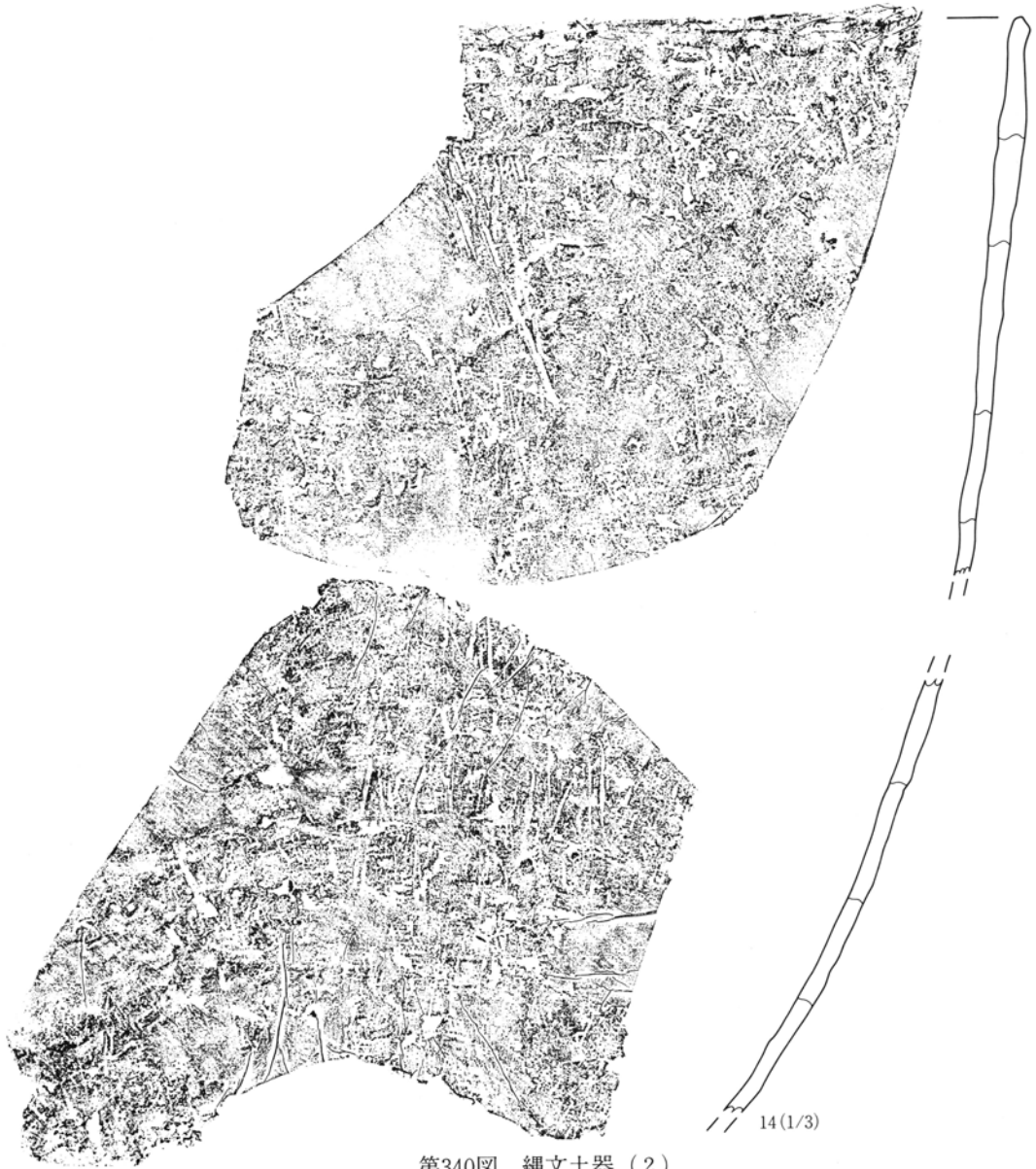
中世の遺物出土量は非常に少なく、16の香炉脚部と23の銅銭を掲載するにとどまる。本調査区周辺は中世の遺構・遺物が希薄な地域であり、調査結果もそれに符合するものである。3・4区で検出された区画堀の年代を推定するために、覆土からの出土遺物

にも注意を払ったが、4号住居跡の埋土中に中世の所産と見られる焼締陶器1点が混入していた以外皆無であり、その年代に対して示唆的である。

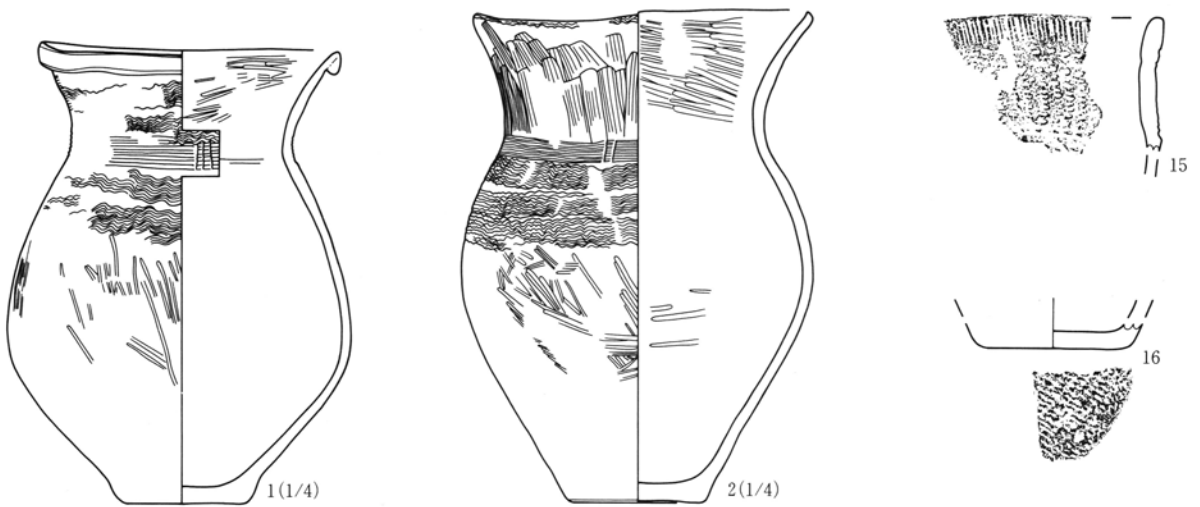
近世の遺物が出土した遺構は、4区1号堀や8・14区の土坑などがあるが、出土遺物量は8区でやや多い傾向が見られる。また、近世の遺構と考えられる6区1号掘立柱建物跡と1号井戸、8区1号掘立柱建物跡と周辺の土坑などからの出土遺物は少ないため、その覆土から出土した遺構外出土遺物をここでは意識的に拾い出すことに努めた。ただし、破片が多いため年代比定できる遺物が少なかったが、未掲載遺物も含めて両区とも17世紀に遡れるものは少なく、18世紀以降から急に増加する傾向が捉えられた。



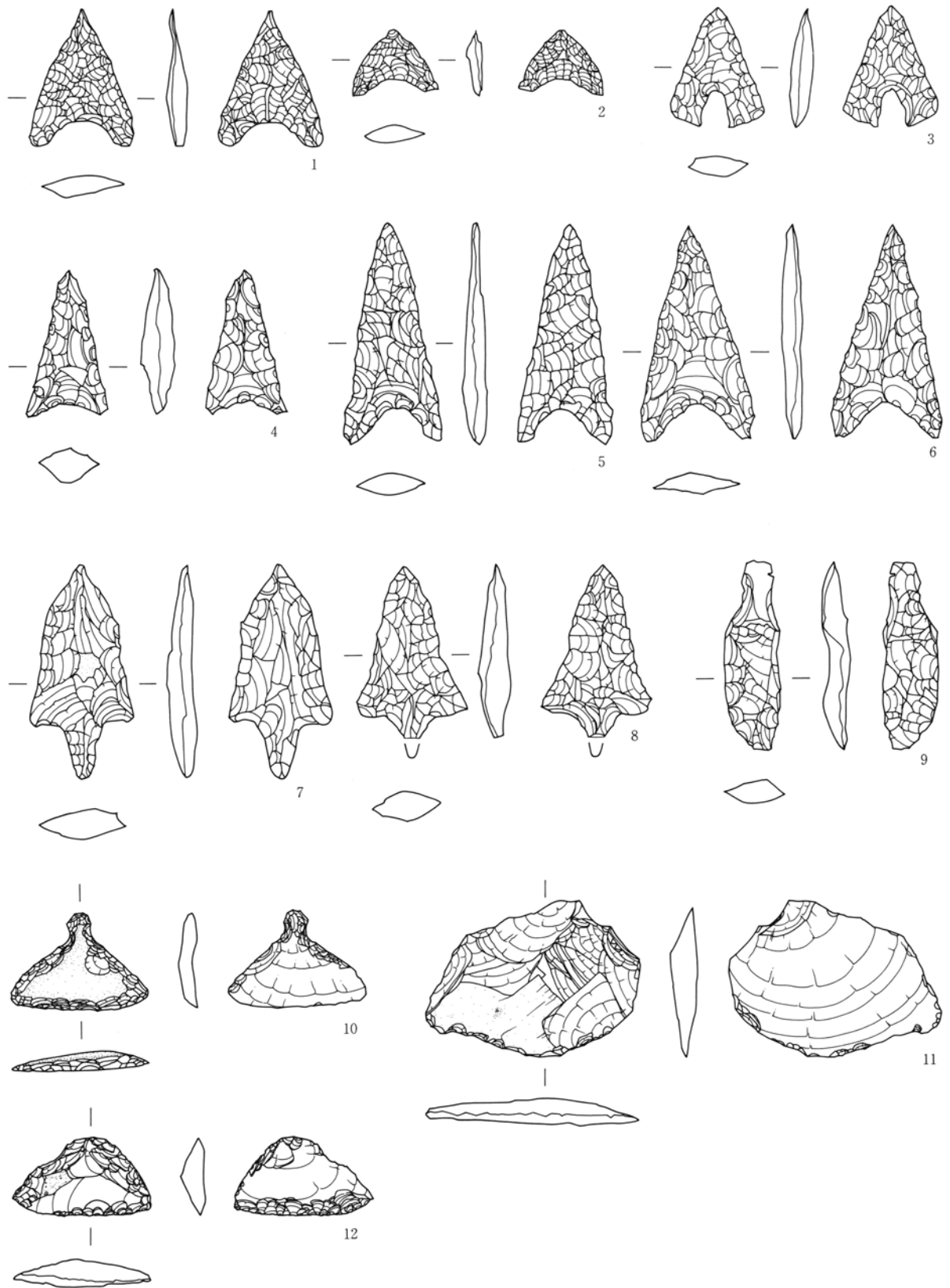
第339図 縄文土器 (1)



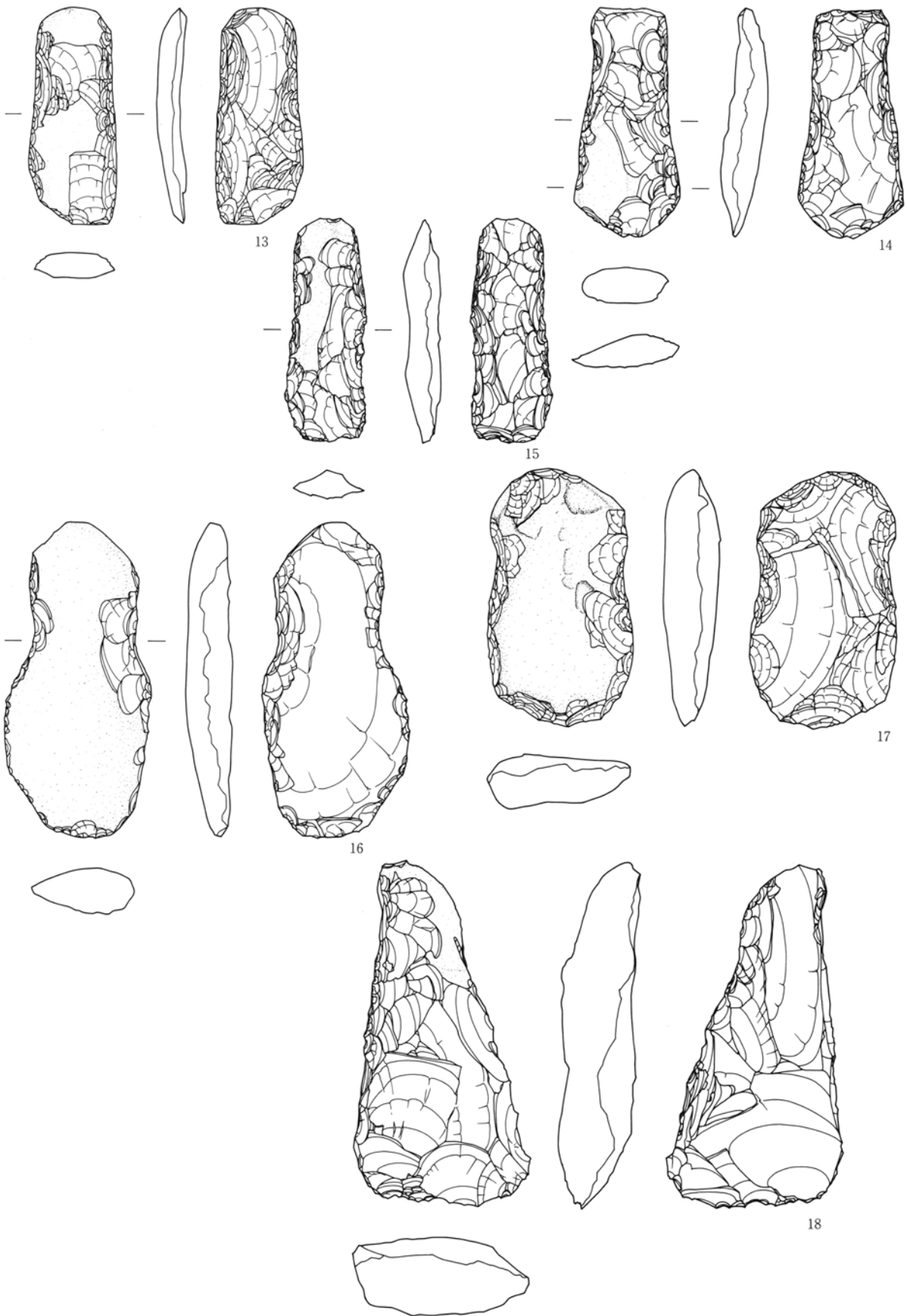
第340図 縄文土器 (2)



第341図 弥生土器



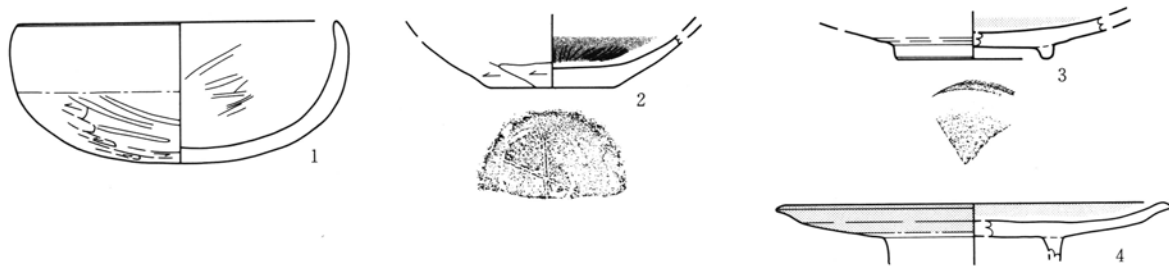
第342図 石器(1)



第343図 石器 (2)

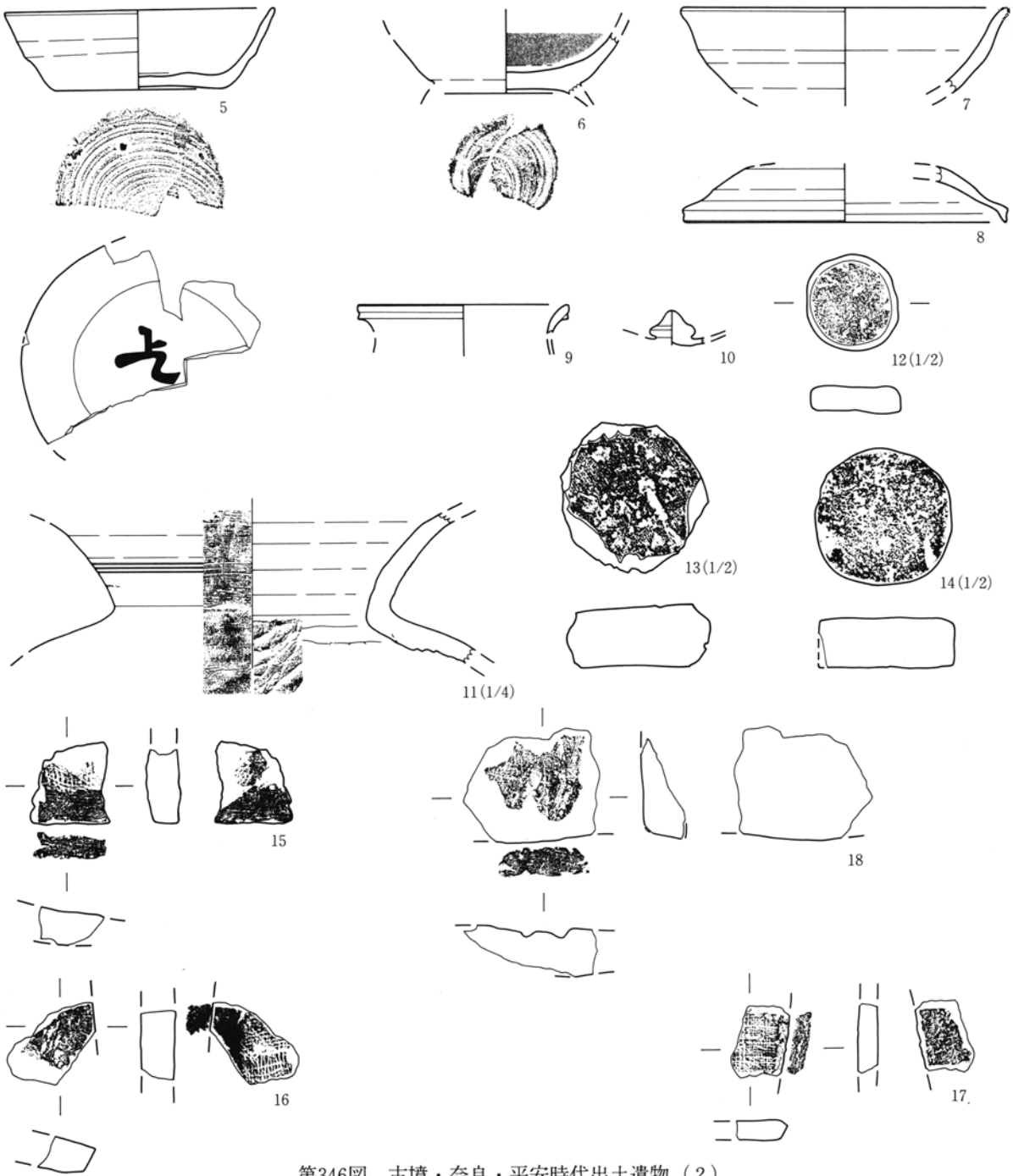


第344図 石器 (3)

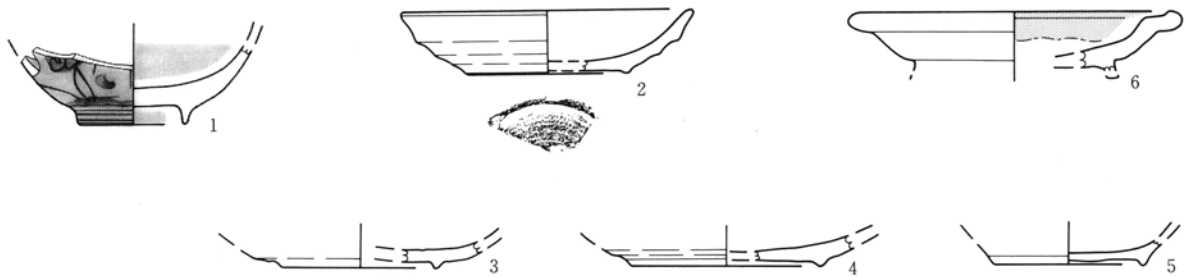


第345図 古墳・奈良・平安時代出土遺物 (1)

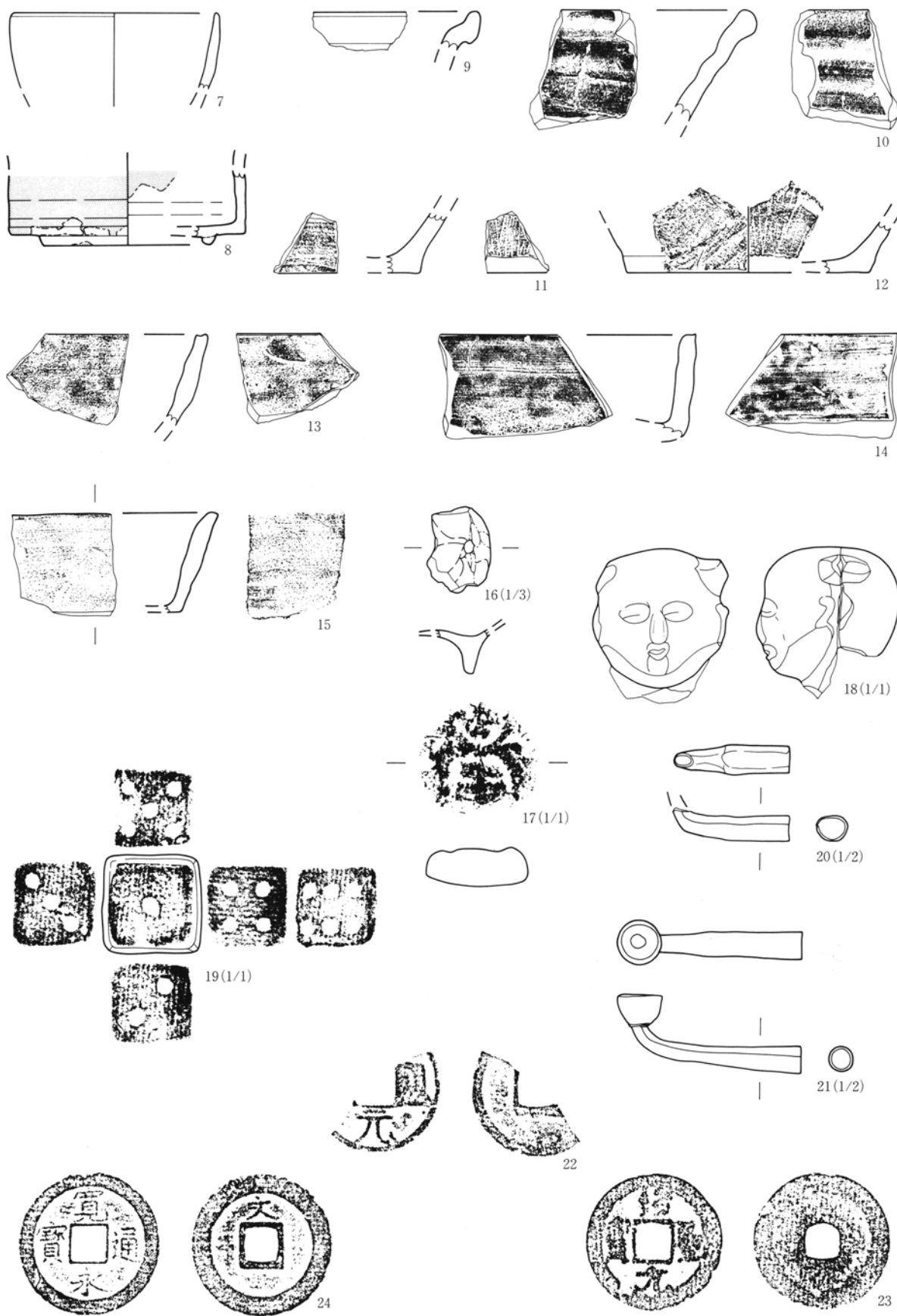
9. 遺構外出土遺物



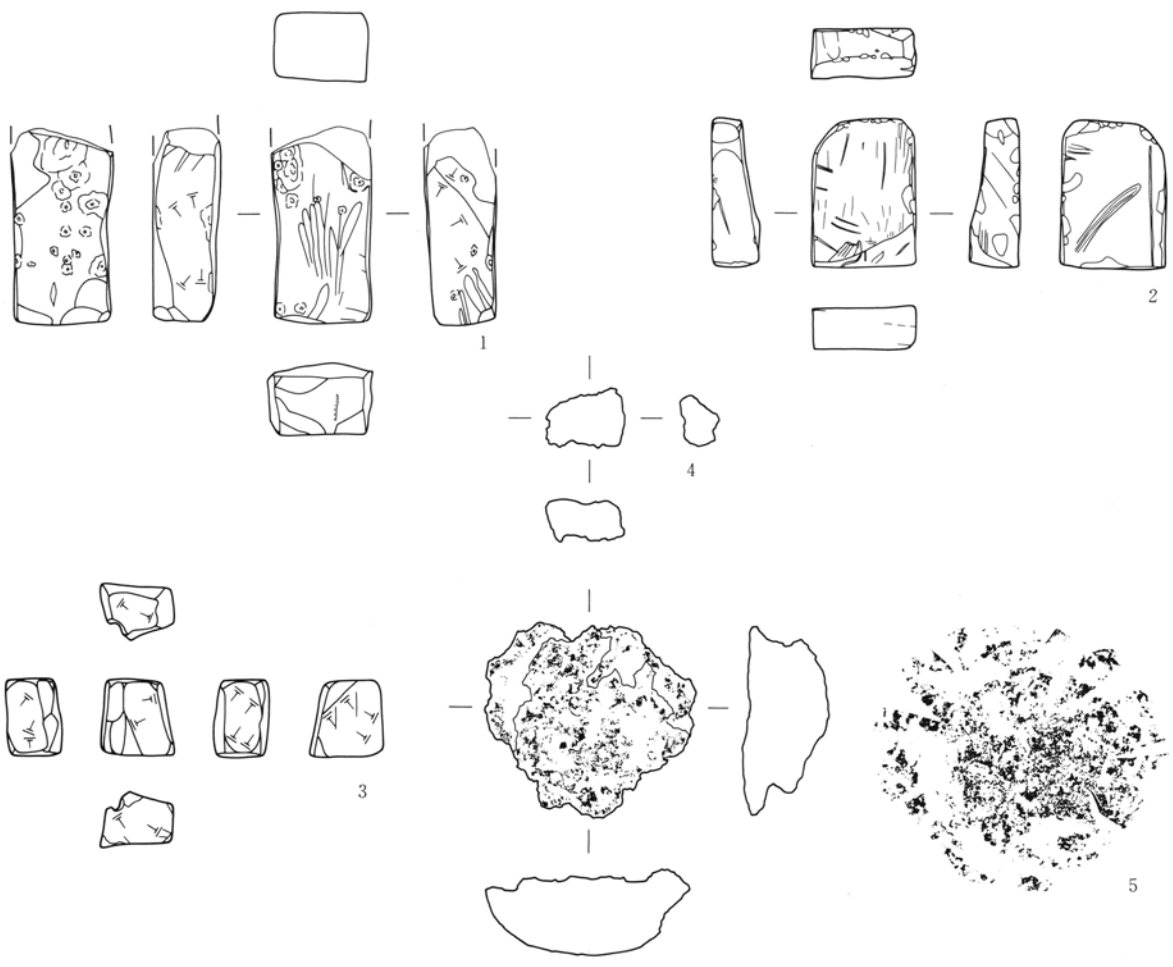
第346図 古墳・奈良・平安時代出土遺物 (2)



第347図 中世以降出土遺物 (1)



第348図 中世以降出土遺物（2）



第349図 時期不明出土遺物

10. 追加

13区東

概要

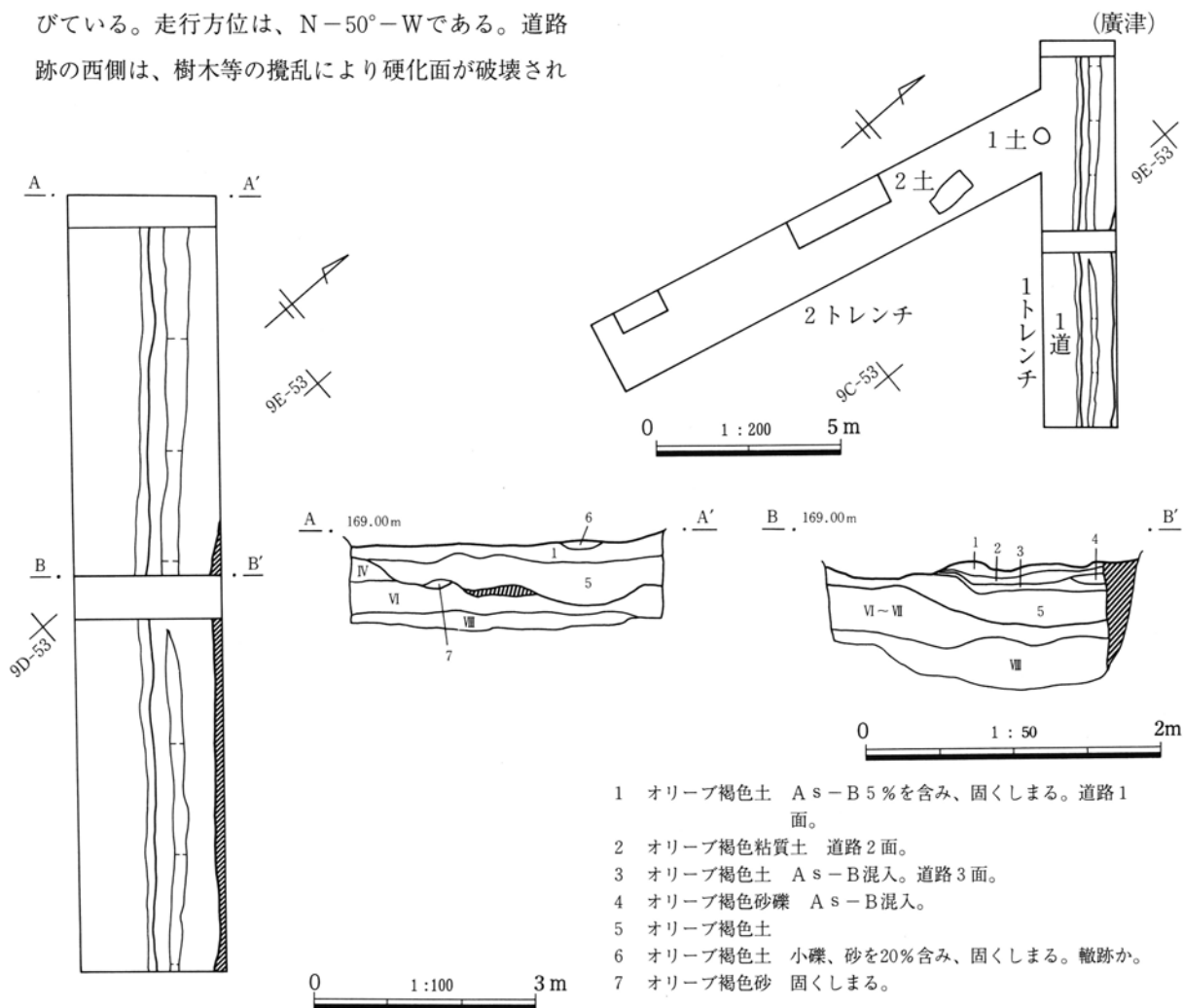
13区東は調査以前墓地であったため、改葬による攪乱が著しかったため、2本のトレンチ調査に止めた。遺構は1号トレンチから1号道路跡、2号トレンチから1・2号土坑が検出されたが、遺構量は極めて少ない。遺構確認面は全てAs-C混土(VI)上面である。1号土坑は直径40cm、深さ33cmの円形で時期不明。2号土坑は120cm×80cmの長方形で近代と考えられる。

1号道路跡 (P L117)

位置 1号トレンチ内を北西-南東方向に縦断する。
 形態 ほぼ直線的であり、その両端は調査区外に延びている。走行方位は、N-50°-Wである。道路跡の西側は、樹木等の攪乱により硬化面が破壊され

ていた。また、北側も調査区外となるため、道幅は不明である。硬化面はほぼ平坦だが、轍と考えられる幅20cmほどの浅い溝が、同一方位に走行する。土層観察から道路硬化面は3面確認され、上面からAs-B混土・粘質土・As-B混土といずれも固く締まっていた。硬化面除去後の最下面は溝状になり、埋土はAs-B混土で道路硬化面と類似することから、掘り方の可能性が高く、地面を窪めた後、盛土して路面を構築したものとする。遺物は近世から現代までの遺物が若干見られた。

時期 現在まで径道として継続使用されてきており、形態から13区・15区1号道路跡と同一の遺構と考えられるため、中世からの使用が想定される。



第350図 13区東全体図・1号道路跡

第6章 まとめ

1. 縄文時代

金古北十三町遺跡・冷水村東遺跡からは、縄文時代の遺構は検出されなかった。従って、これらの遺跡から出土したものは包含層出土の土器である。一般に縄文時代において、遺構が伴わず、僅かの土器が出土する遺跡は、人為的な痕跡をとどめる遺跡として認識され、一遺跡のみで当該期の時代的性格や集団行動を論じるのは無理がある。この場合、集団の領域や土器分布圏で示された一つの広がりを周辺遺跡にもとめて、総合的に考察する必要がある。

本遺跡から出土した土器は、時期別に分類すると、前期後葉では、諸磯b式・浮島Ⅲ式・興津式、中期中葉の、阿玉台式、加曾利E式、晩期前葉の安行Ⅲ式土器である。

前期前葉の諸磯b式土器は、本地域に濃密に分布している土器で、周辺遺跡からも少なからず出土している。これに伴う浮島Ⅲ式土器や興津式土器は、分布の中心が東関東の利根川下流域にある。当地域に搬入もしくは、模倣されて作られたものとする。

2. 弥生時代

金古北十三町遺跡の6・9区で後期の樽式土器が

3. 古墳時代

(1) FA層下の住居廃棄状況について(冷水村東遺跡)

本遺跡では、6世紀初頭の鍵層としてあるFA層が埋没土中に見られる竪穴住居跡を13軒検出した。その中の26号住居・29号住居・32号住居・36号住居については、FA層を主体とした埋没土であった。このことから、この4軒はFAの降灰時には既に廃棄された状態であったと考えられ、当時の住居廃棄を考えるのに良好な資料が得られた。また他のFA層を埋没土中に含む竪穴住居跡についても、FA層の位置や下層の状態を検討し、住居廃棄について考えてみたい。

浮島・興津式土器については、以前県内の分布状況を報告したことがある。(谷藤・関根 研究紀要 2・3 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986・7) 利根川右岸中流域には、分布が少ないものであったが、今回の出土例で分布域が広がった。また、諸磯b式の新段階に浮島Ⅲ式土器が伴っていることから編年上からも整合性がみられる。

中期中葉の阿玉台式土器や加曾利E式土器も本地域に主体的に分布する土器である。周辺では、清里陣馬遺跡や国分寺中間地域で当該期の遺跡が発見されている。

晩期前葉の安行Ⅲ式土器は本地域では、極めて出土例の少ない土器である。冷水村東遺跡出土7の土器は、精製された土器としては、文様施文がだれていて今一つはっきりしない部分がある。地域的な特色なのか、土器の個性なのか不明な点が多い。当地域での出土例の増加を待ちたい。

(関根)

1点ずつ出土したが、遺構は検出されなかった。

ア. FA層による埋没住居の概要

FA降下直前に廃棄されたと考えられる4軒は、谷地を挟んだB区・D区で2軒ずつ確認した。各住居の確認は、当初地山ロームとFA層の見分けがつかず、微妙な色調差と竈に残るわずかな焼土痕で遺構プランを確定した。埋没土は、各壁際に薄い暗褐色土の三角堆積が見られた以外はすべてFA層で覆われていた。26号住居の分析結果では、FA層は純層であり、層厚は15cm程であった。また、29号住居貯蔵穴内のFA層の堆積は二次的であり、蓋がされていた可能性が考えられる。竈については、住居内

に燃焼部を有するタイプであり、遺存状態は悪い。出土遺物は4軒とも少なく、29号住居では竈に小型甕がかけられた状態で出土し、他の住居では甕破片・坏類が数点出土しているだけであった。

以上の検出状況から、この4軒の竪穴住居跡はF Aの降灰直前に上屋が取り除かれ、柱も抜かれ、遺物も持ち出された状態で廃棄された同時期の竪穴住居跡と考えられる。また、住居規模などF A層を埋没土中に持つ他の住居に比べやや小さめであり、掘り込みが浅い点など、縮小傾向が窺われる。

イ. F A層を埋没土中に含む住居の埋没状況

上記4軒を除き、残り9軒の竪穴住居は、埋没土中にF A層を含むかまたは上層にあったと思われる。

以下は、各住居のF A層の位置及び下層の埋没状況である。

6号住居 東壁寄りの下層で流れ込みと考えられる二次堆積のF Aを確認した。出土遺物も多く、生活時そのままの状態に廃棄されたと考えられる。

14号住居 失火による焼失住居であり、その後そのまま廃棄された。F A層は不明瞭であった。

20号住居 29号住居掘削排土が投げ込まれた可能性が考えられる。F A層は埋没土上層にレンズ状堆積していた。

25号住居 地山ブロックを多く含む人為的な埋土と考えられる。出土遺物は少ない。F A層は不明瞭であった。

27号住居 失火による焼失住居であり、柱も立木状態で炭化し腐食による空洞も見られた。消火のために周辺の土が投げ込まれた可能性が考えられ、直上にF A層が堆積していた。

28号住居 中層に二次堆積のF A層があり、下層はブロックを多く含む人為的埋土。出土遺物も少なく破片類が多い。

31号住居 上層にF A層が堆積し、竈は不明瞭であった。廃棄後自然埋没したと考えられる。

33号住居 31号住居同様であった。

34号住居 F A層は中層で波打ち、住居廃棄後畠地化されている。同様の調査例は、北陸新幹線関連

の箕郷町下芝五反田遺跡でも検出されている。

以上のように、F A層を埋没土中に含む竪穴住居の埋没土は、ブロックを多く含む人為的な埋土が見られ、29号住居から20号住居への掘削排土の投げ込みが想定できる住居もあり、また焼失住居以外は出土遺物は少ない点など、F A層直下の埋没住居と同じ状態での廃棄が考えられる。

今回の調査では、F A層堆積以前の竪穴住居の廃棄について、上屋・柱・土器など取り除かれる状況が認められた。が、床面直上や壁際の土層観察が甘く、住居の廃棄から建て替えへの移行については不明瞭であり、今後は調査段階での細かな土層観察が必要と考えられる。(斎藤)

(2) 畠跡

ア. 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

F A直下の畠跡は、A・B・E南・G・H区で断続的に検出されたが、これはC区及びF A下水田跡を検出したD・E北区の谷地形に分断された結果である。したがって、畠跡の区画は地形的な制約を受け、南北幅が短くなっていた。ただし、G区2号畠跡からH区までは61.50mを測り、後述する金古北十三町遺跡に類似する大区画をなす。区画の違いは、サクの走向方位の違いに基づいて分別できるため、A・B区は別の区画と見なされるが、A区の南には崖地があり、B区では26・29号住居跡の床面にF Aが堆積するため、放棄された時期とF A下畠跡では余り時間差がない。したがって、A・B区ともに南北両方向に延びる可能性は低くなり、A区の南北幅30.80mと、B区の南北幅22.75mは、畠跡の実際の規模と大差ないこととなる。なお、サクの走向方位は、A区でN-3~47°-W、B区でN-18~35°-Eだが、両者の境界部分ではほぼ直交する走向となっていた。

区画境を示すアゼや溝等の明確な遺構は検出できなかったが、G区では複雑に区画配置された状況を検出することができた。G区1号畠跡は2・3号畠跡に対して、くの字状の境界をなし、南側へも延びず南北で27.50mを測る。3号畠跡は、2号畠跡に食い込む様相を示し、南北9.65mを測る。以上から

区画の配置は、直線的な境界をなすものではなく、入り組んだものと考えられる。また、その規模は長軸方向には60mを越える一方、幅は30m程度しかない事例が多く見られた。

イ. 金古北十三町遺跡

F A直下の畠跡は、1区から13区にかけて断続的に検出されたが、それらは削平によって分断されたもので、本来遺構が連続していたと見られる。したがって、本遺構は南北で総延長655m程を測るものと言える。また、サクの走向方位に着目すると、いくつかの区画に分かれていたと見ることが可能である。同様な走向方位を持つものは、1群をなすものとする。良好に連続した状況にある4区から10区に注目すると、区画の大きさは南北距離で、4区から6区南で123.80m、6区北から8区で124.65m、9・10区で76.20mを測り、概ね100mを越える規模を持つものと考えられる。ただし、5区の南端でサクが一列に途切れる状況は、細分化する小区画の存在を惹起させる。

走向方位は以下のとおりである。

- 1区 N-28°-W程
- 2区 N-31°-W程
- 4区 N-20~40°-W
- 5区 N-22~46°-W
- 6区 南側 N-30~41°-W
北側 N-40~60°-E
- 7区 N-18~56°-E
- 8区 N-30~40°-E
- 9区 N-27~40°-W
- 10区 N-20~53°-W
- 12区 3号 N-46~65°-E
2号 N-15~35°-W
1号 N-13~23°-W
- 13区 1号 N-29~62°-E
2号 N-25~36°-W

遺存状態の良い4区から10区を総体として見た場合、北西-南東方向に軸を持つものでN-20~46°-W、北東-南西方向に軸を持つものでN-18~60°-Eと数値的なばらつきは否定できない。ただし、検

出面積が狭いものはそれだけ遺存条件は悪いわけで、走向方位計測上の誤差も大きくなる。これは10区・13区について言えることである。また、5区・7区は谷地形に立地しており、埋没後の陥没などによる確認面地形への影響が想定され、その最深部を中心に走向方位の歪みが生じている。以上を考慮すれば、数値的なばらつきは様々な条件の影響下にある。

走向方位に顕著に見られる特徴としては、1群の区画がその接点となる地点では、ほぼ直交する様相を示していることがある。例えば6区の北側と南側との関係では、5区で西側へやや振れる状態を6区で東に振れることによって調整する。8区と9区もやや断裂する間隔は長い、ほぼ直交する。13区の1・2号畠跡は近接しており、直交する位置関係が顕著に見られる。

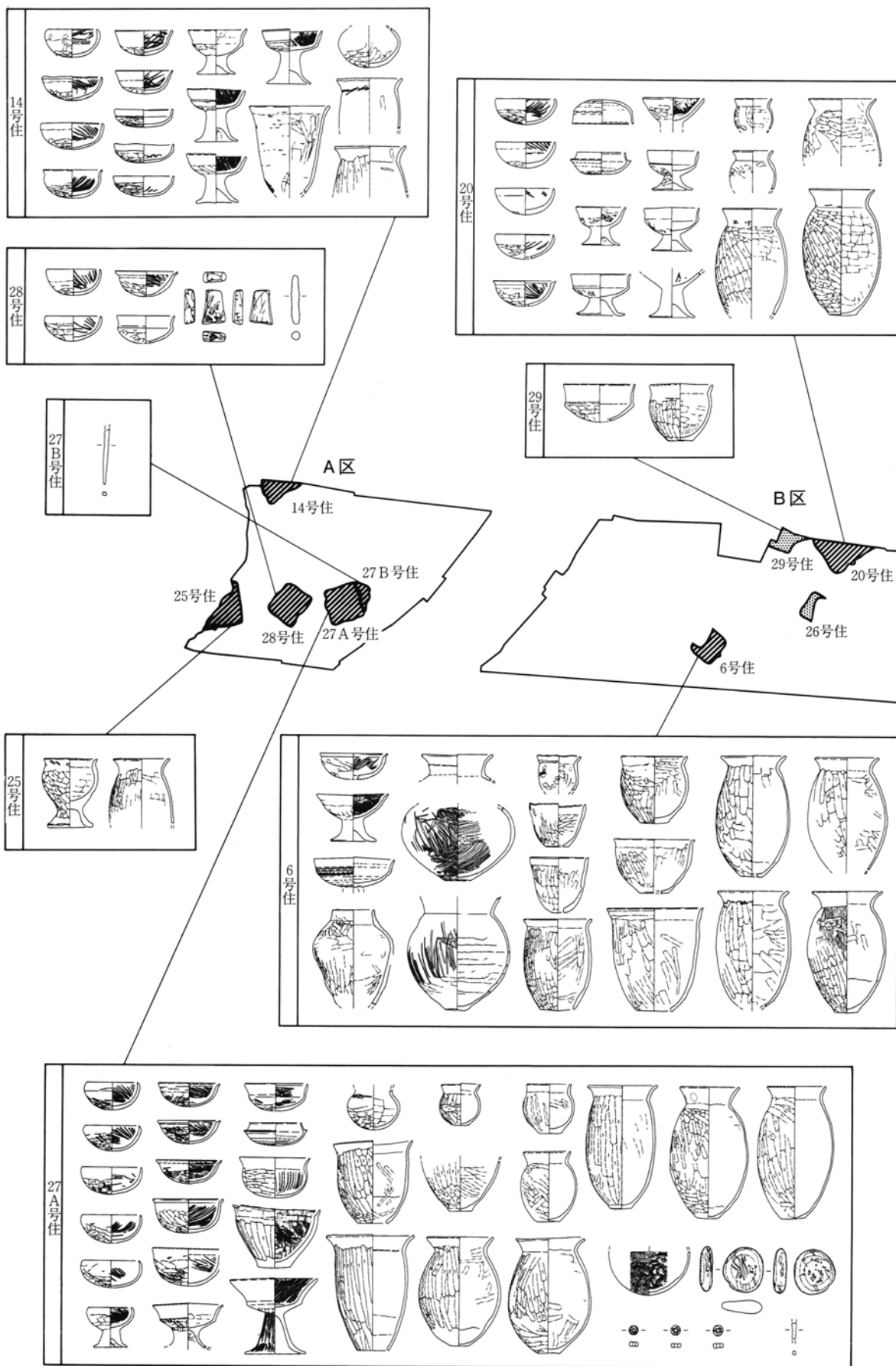
区画境を形成する特別な施設は、13区で明らかなお見られないが、6区では平安時代に比定される42・53号溝が、F A下畠跡の区画境の位置に重なっており、長く境界として存続していく要件を備えていたものとする。

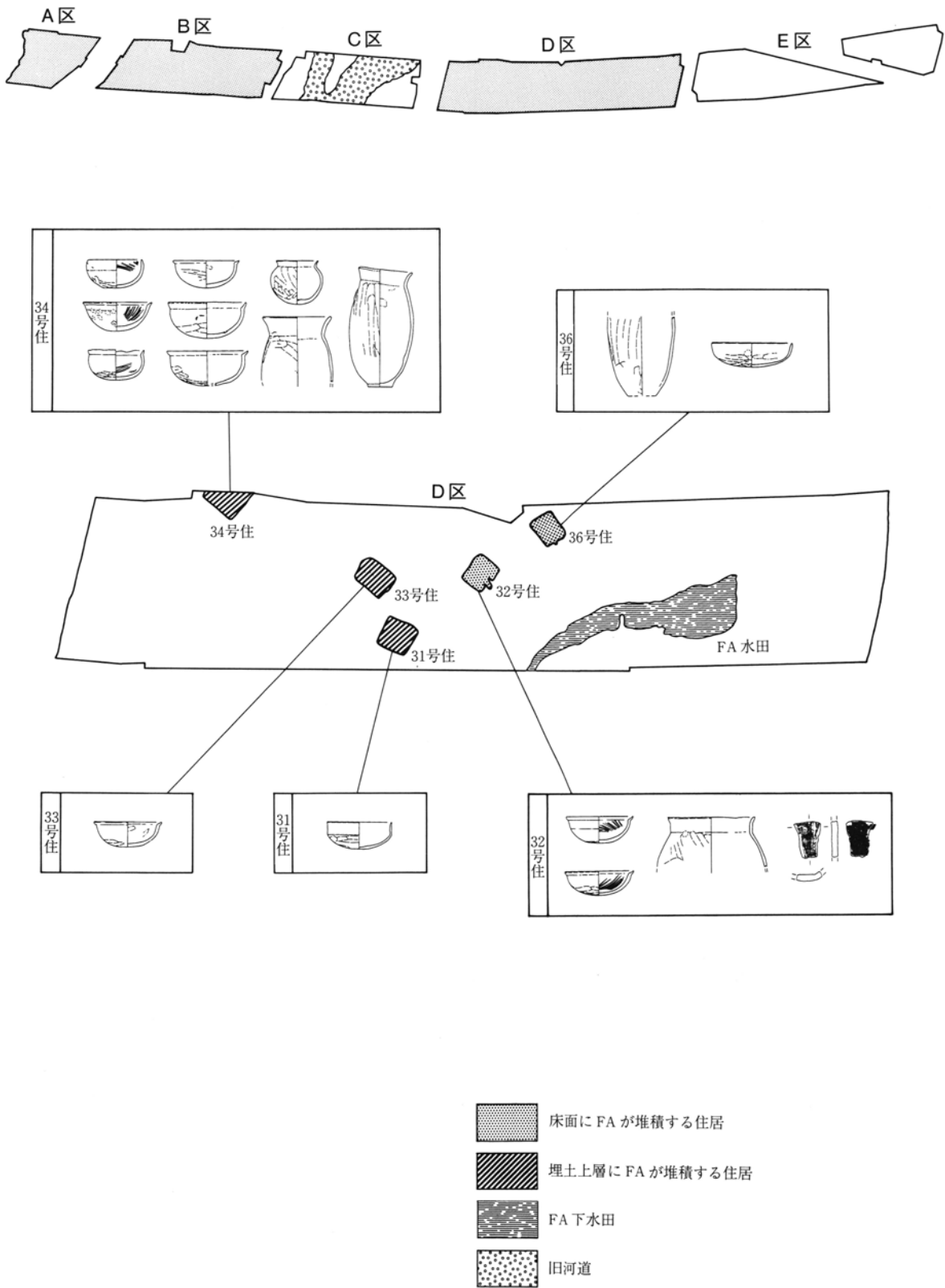
(3) 水田跡

ア. 冷水村東遺跡

F A直下の水田跡は、D区とE区北で検出されたが、これはともに小谷地を利用した谷水田である。なお、同様な地形環境に立地するC区では、旧河道に起因する小谷地がF A下で確認され、1号土器集積が検出された。しかし、水田跡は未確認となり、C区のみが水田化されない理由もないことから、埋没後の土圧による陥没等によって遺存状態が著しく悪化した結果、未検出となった可能性がある。

本水田跡では、配水路等特に見られないことから、谷水を利用した掛け流しと考える。区画の形状は、当時期に一般的に見られるいわゆるミニ水田であり、水田区画1枚を全て露呈できた例は少ないものの、その面積は4~31㎡と均一ではない。なお、本水田跡の区画設定の特徴として、谷底面の中央にタテアゼを設けて大きく二分した後に、ヨコアゼで細分割する方法が共通して見られた。





第351図 古墳時代住居跡FA埋没別配置及び出土遺物集成図

4. 奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡と水田跡

ア. 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

染谷川北岸の縁辺に立地するA・B区を中心に、8世紀第3四半期から10世紀中葉までの竪穴住居跡が検出された。内訳は以下のとおりである。

8世紀第3四半期	A区16・17号住、B区5号住
9世紀第1四半期	A区22号住、B区1号住
9世紀前半及び 第2・3四半期	A区19・23号住、B区2・9号住、H区1号住
9世紀後半及び 第3・4四半期	A区14・18号住、B区13号住
10世紀前半	B区4・8・10・12号住
10世紀中葉	B区11号住

したがって、各時期ともに3・4軒程度の散在した集落が継続していたものと見られる。

居住域以外となるC区～F区(2F～5Fグリッド)では総延長で南北300mを越えるB下水田跡が検出された。

イ. 金古北十三町遺跡

牛池川北岸の縁辺に立地する1区を中心に、8世紀第3四半期から9世紀第3四半期までの竪穴住居跡が検出された。内訳は以下のとおりである。

8世紀第3四半期	1区4号住、2区1号住
8世紀第4四半期	1区7号住
9世紀前半及び 第1四半期	1区1号住、15区1号住
9世紀第2四半期	1区2・5号住、4区1・2・3号住、10区1号住
9世紀第3四半期	1区3・6号住、4区4号住、5区1・2・3号住

分布を見ると、8世紀第3四半期から9世紀第1四半期にかけては1・2区で1・2軒程度であったものが、9世紀第2四半期には4区への拡大と共に増加し、9世紀第3四半期には更に5区へと拡大する様相を呈する。なお、本遺跡では水田跡などの生産域は検出されなかった。

(2) 掘立柱建物跡

ア. 冷水村東遺跡

竪穴住居跡と同様、染谷川北岸の縁辺に立地するA・B・D区で6棟の掘立柱建物跡が検出された。各掘立柱建物跡の規模は以下のとおりである。

A区3号掘立	が2×3間 (3.33m×4.54m)
A区4号掘立	が2×2間 (2.58m×3.03m)
B区1号掘立	が2×3間 (4.24m×6.06m)
B区2号掘立	が2×2間 (3.03m×4.54m)
D区5号掘立	が1×2間 (2.12m×3.33m)
D区6号掘立	が1×2間 (3.33m×3.33m)

A・B区はともに大小2棟の掘立柱建物跡の組合せになっている。また、D区の2棟はともに1×2間であり、A・B区との時期差を示す可能性があるが、年代比定もできず新旧関係も不明である。

イ. 金古北十三町遺跡

竪穴住居跡の分布とはほぼ同じ範囲で12棟の掘立柱建物跡を検出した。なお、4区は未検出であるが、建物跡に関係すると見られるピット多数が確認できた。各掘立柱建物跡の規模は以下のとおりである。

1区1号掘立	が2×3間 (4.24m×6.06m)
1区2号掘立	が2×3間 (3.48m×4.85m)
1区3号掘立	が2×2間 (3.64m×4.54m)
1区4号掘立	が2×3間 (3.33m×4.85m)
1区5号掘立	が2×4間 (4.09m×7.57m)
1区6号掘立	が2×3間 (3.94m×4.85m)
2区1号掘立	が2×3間 (4.24m×6.06m)
5区1号掘立	が2×2間 (2.73m×3.33m)
5区2号掘立	が2×2間 (3.33m×3.94m)
5区3号掘立	が1以上×2間 (1.82m×3.03m)
5区4号掘立	が2×2間 (3.03m×3.03m)
6区3号掘立	が1×1間 (1.82m×3.03m)

間取りを見ると、1・2区は2×3間が圧倒的に多く、5区は2×2間である。また、規模も全く同じ様相を示す。6区3掘立は特殊である。こうした違いは、竪穴住居跡で5区が9世紀第3四半期のみ

であるのと同じく、時期差によって生じたものと考

える。

5. 中世以降

(1) 掘立柱建物跡

ア. 金古北十三町遺跡

6区以北に散在して8棟検出された。規模は以下のとおりである。

近世

6区1号掘立が1×2間 (3.33m×3.48m)

6区2号掘立が1×2間 (1.52m×3.94m)

8区1号掘立が正方形 (6.67m×6.58m)

14区1号掘立が1×1間 (1.97m×2.12m)

15区1号掘立が1×2間 (1.97m×4.09m)

時期不明

8区2号掘立が1×2間 (2.42m×3.03m)

8区3号掘立が1×1間 (1.52m×2.27m)

9区1号掘立が2×2間 (3.48m×4.09m)

間取りを見ると、梁行1間ばかりであり特徴的である。8区1掘立は複雑な間取りを示す(第8章参照)とともに、5・6・64・65号土坑といった方形土坑が東辺に集中し、西辺には2号井戸、北辺(裏手)にも井戸があるなど、遺構構成と配置の状況を見ることが出来る。

(2) 金古北十三町遺跡14区近世遺構群について

本遺構は、14区検出の1号井戸及び1・2・3・6・21・22号土坑を指す。なお、1号井戸は旧地主からの聞き取り調査及び出土遺物から第二次大戦後すぐ埋められたことが判明している。また、遺構の上限は6号土坑の比定年代から18世紀前半まで遡れるものと考えられる。ただし、本遺構群は掘立柱建物跡など屋敷遺構と認定する決定的要素を欠くため、遺構の性格が不明瞭となってしまった。

さて、本遺構の所在する大字金古北十三町146番地の過去の登記簿を調べたところ、大正4年(1915)12月4日付けで地目が畑に変更されており、それ以前は宅地であった。所有関係を見ると、A氏は明治44年2月28日付けでB氏からこの土地を買って受け、旧所有者であるB氏の住所はまさにこ

の土地であるため、居住地を売却したものと見て大差ないだろう。

明治2年の金古宿略絵図⁽¹⁾では、家屋が描かれている。しかも、この家屋は14区と15区の境界である前橋市道よりも、明らかに南側に描かれているため、本遺構群のおそらく南側のすぐ近くに掘立柱建物跡などの家屋跡が所在していたと見られる。したがって、本遺構群は金古上宿に所在した近世屋敷跡の一部であると考えられることができる。

(3) 区画堀

ア. 金古北十三町遺跡

3区から4区にわたる方形区画遺構(第8章参照)及び、15区1号堀が検出された。15区の字名は上屋敷であり、中世の屋敷遺構を想起させ、1号堀北側がその区画範囲と想定される。15区では1号掘立柱建物跡や1・2号井戸が検出されたが、いずれも1号堀の南側に位置し、区画遺構の外側となる。今後、15区西側の発掘調査によって、関連遺構が検出されることを期待する。

(4) 井戸跡

ア. 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

中世の遺構として明確なものは井戸跡のみで、各計測値は以下のとおりである。

中世

D区1井戸 深さ2.35m以上

G区1井戸 深さ2.36m (1溝上面から)

G区2井戸 深さ3.41m (1溝上面から)

アグリ深さ 上0.74m 下1.69m

G区3井戸 深さ3.04m

アグリ深さ 上1.60m 下2.05m

G区4井戸 深さ1.98m アグリ深さ1.28m

中世以降

F区1井戸 深さ2.60m

アグリ深さ 上0.76m 下2.00m

H区1井戸 深さ1.10m以上

第6章 まとめ

分布を見ると、D区は22号溝、G区は1号溝に近接するが、G区1号溝は既に全く埋没しており並存しない。なお、両溝とも流水痕跡を持ち、主軸を北西-南東方向にとっている。中世における本遺跡周辺地域では、東に隣接する引間城と後疋間地区が中核的な集落と想定されており、そこから派生する小規模な居住域が本調査区まで拡大するについて、樹枝状に発達する小谷地縁辺を選地していることが可能である。なお、井戸の深さは2・3m程度でややばらつきがあるが、アグリの数値では浅い井戸でも最下部のアグリに達している。

イ. 金古北十三町遺跡

本遺跡の井戸跡は概ね近世以降と考えられ、全てに近接して掘立柱建物跡が並存している。各計測値は以下のとおりである。

- 6区1井戸 深さ2.87m
アグリ深さ 上0.42m 下2.46m
- 8区1井戸 深さ3.50m以上
アグリ深さ 上0.82m 下3.36m
- 8区2井戸 深さ4.14m
アグリ深さ 上0.97m 下3.66m
- 8区3井戸 深さ2.17m アグリ深さ1.26m
- 14区1井戸 石組 深さ3.52m以上
- 15区1井戸 深さ3.42m以上
アグリ深さ 上1.66m 下2.46m

分布する地形は、北西-南東方向に軸を持つ軽微な谷地形に対して、6区はその底面部、8区はその肩部、14・15区は肩部近くに立地しており、谷筋を利用する傾向は他の2遺跡に共通する。井戸の深さは3m弱が2基あるが、谷底面からやや離れた14・15区などは4mを越え相当の深さを持つものと推測される。アグリの上下差も2.5m強あり、未完掘を考慮すれば地下水位の季節変化はかなり大きい。第2表は、南雲栄治氏が昭和30年代に調査された金古の家庭用井戸の深さである。金古では深さ13~15mの井戸が217基中181基で実に83%を占めるといふ。また、矢嶋仁吉氏の研究によれば、金古は榛名山東南麓の深井地帯の中心に位置するという。したがっ

第2表 金古宿の井底深度表

区分 井戸数率	5 m 以下	5 ~ 10	10 ~ 15	15 ~ 20	20 m 以上	計
井戸数	0	25	181	11	0	217
百分率	0%	12%	83%	5%	0%	100%

(南雲氏論文1970より転載)

て、今回3つの遺跡で検出された井戸跡の深さは比較して浅いこととなる。ただし、金古集落の集住状況の影響下で、地下水の相互の争奪が行われた結果と見れば、昭和期でも12%を占める深さ5~10mのものと同程度と見なされ、年間を通して利用できたものとも考えることもできよう。また、本遺跡に比べ他の2遺跡は深さも浅く、地下水位の季節変化(アグリ変化)も小さく優位であるが、これは恵まれた立地という局地的な状況を示しているに過ぎず、金古集落が依拠する全体的な立地環境は深井地帯と見て間違いない。したがって、集住して井戸の数量が増加するに従い、地下水の取得は困難となったにちがいない。こうした中、江戸初期に成立した三国街道金古宿の形成については、宿用水整備が不可欠であった(第8章参照)とともに、井戸のさく井も深井地帯という状況を克服しなければならず、決して既存集落から自然派生したものではなく、非常に強い政治力が関与した集落移動によってなされたことが立証される。

註

- (1) 南雲栄治「三国街道金古宿の地理学的研究」『群馬県立前橋女子高校紀要』1970 所載
- (2) (1)に同じ
- (3) 矢嶋仁吉「榛名山東南麓の地下水」『地理学評論』第21巻第7・8号 1948

第7章 自然科学分析

1. 住居跡から出土する炭化材の樹種 —冷水村東遺跡—

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

冷水村東遺跡は、群馬郡群馬町冷水字村東に所在する古墳および平安時代の住居跡あるいは室町時代の道路などからなる。遺跡からは、榛名二ツ岳洪川火山灰 (Hr-Fa: 6世紀初頭) 下の住居跡や浅間B軽石 (As-B: 1,108AD) 下の水田跡などが検出された。このうち榛名二ツ岳洪川火山灰直下の住居跡からは、住居建築材の一部が炭化材として検出されている。

ここでは、この榛名二ツ岳洪川火山灰に覆われる2件の焼失家屋の炭化材について、その樹種を検討した。

(2) 樹種の記載と結果

樹種の検討を行った炭化材は、14号住居跡15試料と27号住居跡29試料である。

これら炭化材は、乾燥後比較的保存の良い部分を選び、実体顕微鏡下で横断面について観察した。さらに、実体顕微鏡観察で同定できない試料は (同定される典型的な試料も含める)、片刃カミソリなどを用いて横断面 (木口と同義)、接線断面 (板目と同義)、放射断面 (柁目と同義) の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡 (日本電子(株)製 JSM T-100型) で観察した。以下に、炭化材の記載と同定の根拠を示す。なお、同定された炭化材の樹種を表に示す。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科 (P L 160-1-1a~1c.)

やや丸い中型の道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してほぼ均一に散在する散孔材である (横断面)。道管のせん孔は15本程度の横棒からなる階段状である (放射断面)。放射組織は同性で1~4細胞幅、1~30細胞高である (接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のカバノキ属の材と同定される。カバノキ属の樹木には、樹高25m、幹径1mに達するウダイカンバ (*B. maximowicziana*) や亜高山帯上部に広く分布するダケカンバ (*B. ermanii*)、山地帯の二次林に多いシラカンバ (*B. platyphylla* var. *japonica*) など10種類からなる落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (P L 160-1-2a~2c.)

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一である (放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 (P L 160-1-3a~3c.)

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる (放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、2~55細胞高からなる (接線断面)。また、こ

第7章 自然科学分析

の種を特徴づける結晶細胞が見られる（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 (P L160-2-4a~4c.)

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~15細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ミカン科のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹（低木）である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 (P L160-2-5a~5c.)

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する（横断面）。道管のせん孔は単一で、内壁には微かにらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は、同性1~3細胞幅、1~25細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く分布する落葉広葉樹で、その種類も20種以上と多い。

アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. (P L160-2-6a~6c.)

中型の管孔が単独ないし2~3個放射方向に複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一のものと10本程度の横棒からなる階段状がある（放射断面）。放射組織は、異性1~3細胞幅で背は高い（接線断面）。

以上の形質から、アワブキ科アワブキ属のアワブキの材と同定される。アワブキは、本州以西の暖帯から温帯にかけて分布する樹高10m、幹径25cmに達する落葉広葉樹である。

(3) 考察

14号住居跡と27号住居跡は、いずれも古墳時代後半の住居跡である。ここで樹種を検討した炭化材は、14号住居跡が建築材主体、27号住居跡が建築材とカマドなどから出土する炭化材である。

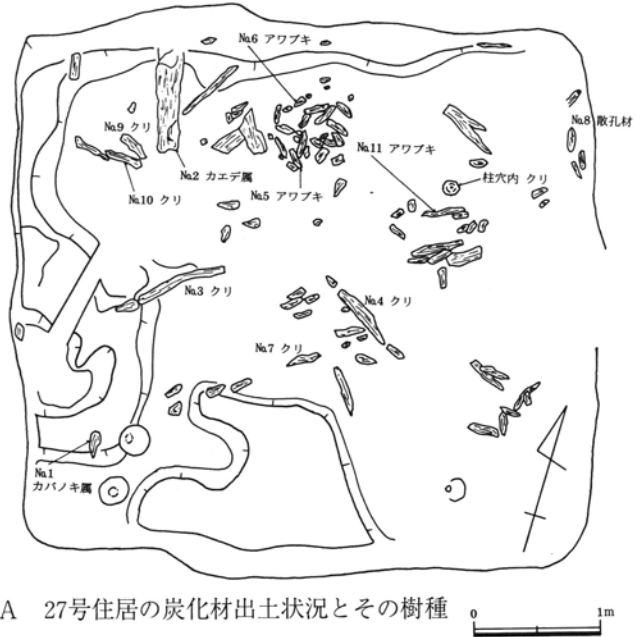
14号住居跡は、多量の炭化材が出土する焼失家屋である。試料は現地において明らかに建築材と思われる大型の炭化材のみ採取した。その結果、量的にはクリが多いものの、ケヤキも見られた。このことから、この住居では、建築部材として、クリとケヤキを使用したことが分かる。ただし、部材ごとの使い分けは見られないようである。

27号住居跡は、カマド部分あるいは貯蔵穴周辺に集中して出土する炭化材と、住居全体に分布する炭化材が見られる。住居全体から出土する炭化材は、クリ・カバノキ属・アワブキ・カエデ属・その他散孔材である（図A）。全体的にクリが多く検出されるが、No1やNo11のような大型炭化材においてクリ以外のカエデ属やアワブキの材からなる。この住居の建築材は、状況として数種類の樹木を利用していることが推定される。なお、ピット内（P67）から出土する炭化材はクリであることから、少なくとも柱材はクリであった可能性が高い。さらに、貯蔵穴やカマド周辺においてもほぼ同様の樹種が検出されることから、これら炭化材が建築材の一部とみなすこともできる。

2. 出土炭化材の樹種同定 —金古北十三町遺跡—

表 住居跡出土炭化材の樹種

No.	位置	樹種	No.	位置	樹種
1	14号住居-1	ケヤキ	23	27号住居-8	散孔材
2	-2	クリ	24	-9	クリ
3	-3	〃	25	-10	〃
4	-4	〃	26	-11	アワブキ
5	-5	〃	27	-12	散孔材
6	-6	〃	28	-13貯	アワブキ
7	-7	〃	29	-14貯	〃
8	-8	〃	30	-15貯	クリ
9	-9	〃	31	-16	〃
10	-10	〃	32	-17	〃
11	-11	〃	33	-18貯蔵穴	〃
12	-12	ケヤキ	34	-19貯蔵穴	〃
13	-13	クリ	35	-20貯蔵穴	散孔材
14	-14	〃	36	-21貯蔵穴	クリ
15	-15	〃	37	-22貯蔵穴	〃
16	27号住居-1	カバノキ属	38	-23貯蔵穴	〃
17	-2	カエデ属	39	-24貯蔵穴	アワブキ
18	-3	クリ	40	-25貯蔵穴	クリ
19	-4	〃	41	-26	カエデ属
20	-5	アワブキ	42	-27	コクサギ
21	-6	〃	43	-貯内	タケ垂料 (φ3.5mm)
22	-7	クリ	44	-柱穴内	クリ



図A 27号住居の炭化材出土状況とその樹種

第352図 冷水村東遺跡樹種同定関係図

2. 出土炭化材の樹種同定 —金古北十三町遺跡—

植田弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

当遺跡は榛名山東南麓の群馬郡群馬町に位置し、標高約160mの緩斜面に立地する。縄文時代から近世・近代に及ぶ複合遺跡である。ここでは、依頼を受けた炭化材4点の樹種同定結果を報告いたします。

(2) 方法

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柁目)は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあてて弾くように割り新鮮な面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察・写真撮影をした。

(3) 結果

完形椀倒置内容物(1区7号住No.5)の炭化材は針葉樹であった。試料は脆くこれ以上は詳しく調べられなかった。

同じく7号住の柱材と思われるNo.16とNo.17は、ともにクリであった。クリは柱材として縄文時代以来よく使用されている樹種である。クリ材は広葉樹材の中では強度は大きい方であり、特に中心部の心材の耐朽性はきわめて高い特徴がある。このような材質の特性と、おそらく周辺域に豊富に生育しており入手しやすかったことから多用されてきたのであろう。

6区1号被熱土坑から検出された炭化材は脆く十分な観察ができなかったため広葉樹であることまでしわからなかった。

第7章 自然科学分析

以下に同定結果を表にまとめ、組織観察の結果を記載する。

同定された樹種の材組織記載

針葉樹 conifer (P L161-1-1a~1c.) (1区7号住No.5)

試料は非常に脆く崩れやすく十分な観察はできなかった。仮道管と放射組織が見られ、針葉樹であることは判別できた。しかし重要な形質である分野壁孔は観察できなかったため、これ以上の詳しい同定はできなかった。

クリ Castanea cretana Sieb. et Zucc. ブナ科 (P L161-1-2a~2c.) (1区7号住No.16)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材で、接線状の木部柔組織が顕著である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔の孔口は大きく開いている。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

広葉樹 broad-leaved tree (P L161-1-3a~3c.) (6区1号被熱土坑)

試料は脆く細かく崩れるため放射断面はとれなかった。横断面では中型とやや小型の管孔が配列しているのが認められたが1年輪分の管孔配列の様子はわからなかった。放射組織はほぼ同性、1~2細胞幅でかなり密集して見られた。全般に組織の状況は悪く分類群を絞るにはいたらなかった。

表 試料と同定結果

遺構	同定結果	備考	時期
1区7号住No.5	針葉樹	完形椀倒置内容物	8世紀末~9世紀
1区7号住No.16	クリ	柱材か	8世紀末~9世紀
1区7号住No.17	クリ	柱材か	8世紀末~9世紀
6区1号被熱土坑	広葉樹	燃料か	不明 平安時代?

3. 須恵器底部灰色付着物の蛍光X線分析 —金古北十三町遺跡—

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) 試料と分析方法

金古北十三町遺跡から出土した須恵器(1区6号掘立柱周辺遺物-2)の底部には、灰色(N-4/)の付着物が見られる。

ここでは、蛍光X線分析計およびX線回折計を用いて、この灰色付着物の成分と含まれる鉱物種について調べた。

方法は、底部にセロハンテープを接着・剝離し、その剝離面の蛍光X線分析およびX線回折分析を行った。なお、付着物の付着状態を観察するために、実体顕微鏡を用いて観察し、写真撮影を行った(P L161-2)。蛍光X線分析は、セイコー電子工業(株)製の卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lを用いた。X線管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径3mm、電流63 μ A、電圧50KV、測定室真空である。

X線回折分析は、(株)リガク製のデスクトップX線回折装置MiniFlexを用いた。仕様および測定条件は、対陰極はCu、K β フィルター、管電圧30kV、管電流15mA、走査範囲5.000~90.000 $^{\circ}$ 、スキャンスピード4.000 $^{\circ}$ /minである。

(2) 結果

[実体顕微鏡による観察]

灰色付着物は、厚く付着する灰色部分が20x8mm程度である。既に剝離した部分も含め3x2cm程度の不定形(島状)を呈し、底部平面部にのみ付着する。付着面積は、既に剝離した部分を含め、底部平面部の約半分程度と見積もれる。また、この周辺には、明瞭ではないものの薄い同様の付着物が展開している。この灰色付着物の表面は、その周辺部において周辺に沿った皺が見られた(PL161-2-(2))。なお、薄く付着した部分では、このような表面形態は見られない。

[蛍光X線分析]

蛍光X線分析計による定性分析では、ケイ素(Si)、鉄(Fe)のピークが明瞭かつ高い計数率で検出された。これら元素以外のピークでは、アルミニウム(Al)、カリウム(K)やカルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)が検出され、量的には少ないもののイオウ(S)、クロム(Cr)、銅(Cu)、ジルコニウム(Zr)が検出された(図A)。

[X線回折分析]

測定の結果、石英(Quartz, SiO_2)、スピネル(MgAl_2O_4)が検出された(図B)。また、図Bには示していないがクロマイト($\text{Fe}_2\text{Cr}_2\text{O}_4$)も検出された。なお、石膏(gypsum)は、比較のために示したスペクトルである。

(3) 考察

この付着物は、長く地中に埋没していたにもかかわらず、付着物として残存することから、明らかに無機物である。実体顕微鏡による付着物の表面形態は、周辺部に沿って皺が見られる。これは、液状物が固結する際に、周辺部にできる皺と考えられ、須恵器の使用時に付着したことが予想される。

蛍光X線分析では、ケイ素や鉄が多く検出され、アルミニウム・カリウム・カルシウム・チタン・マンガンなども含まれ、イオウ・クロム・銅・ジルコニウムが量的に少ないものの検出される。

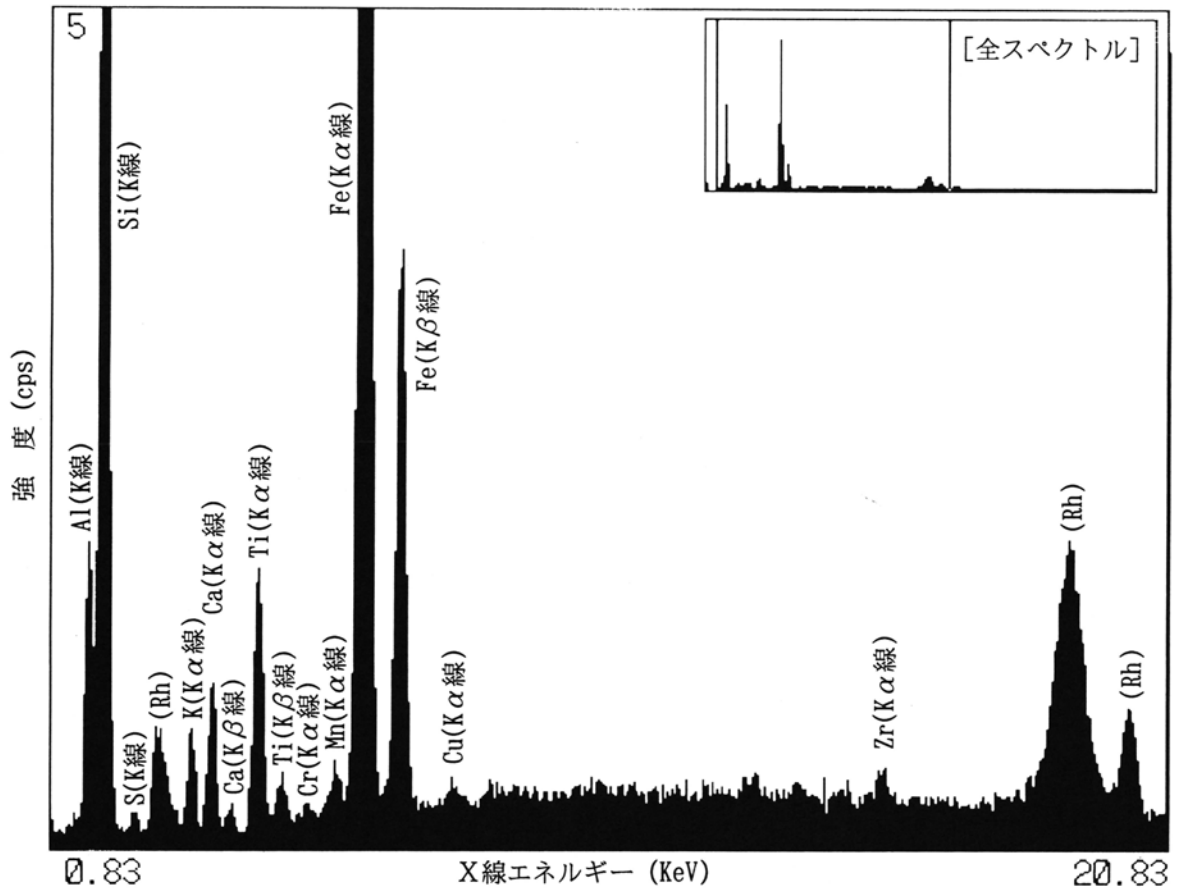
また、X線回折分析では、石英やスピネルあるいはクロマイトが検出される。スピネルはドロマイト質大理石や高温変成の泥質岩に産し、クロマイトはハンレイ岩や玄武岩などの塩基性岩あるいは蛇紋岩に含まれる(黒田・諏訪, 1989)。なお、粘土を構成する粘土鉱物は検出されない。

以上のことから、泥質岩あるいは蛇紋岩系の成分を含む粘土質物と推定される。遺跡は、榛名山東南麓の緩斜面に位置することから、スピネルやクロマイトなど塩基性岩中に含まれる鉱物が検出されても問題はない。なお、蛍光X線分析ではイオウが検出されるが、X線回折分析において硫化物(例えば石膏: $\text{CaSO}_4 \cdot \text{H}_2\text{O}$)などは検出されない。これは、接合の際に使用した石膏が付着していることが考えられる。

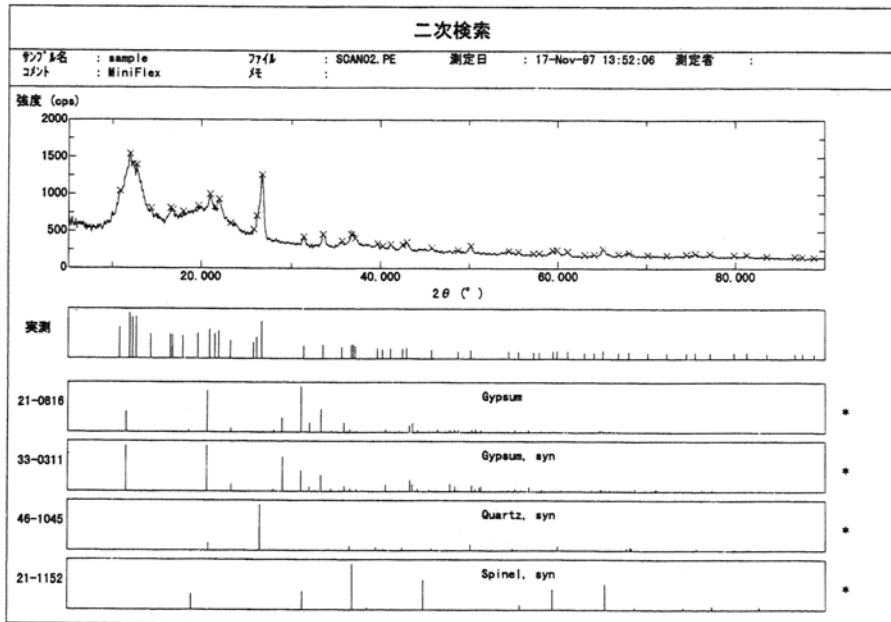
付着物の表面には液体が固まる際に形成される皺状形態が見られることから、この須恵器内に液状のものが入っていた可能性が高い。なお、X線回折分析では粘土鉱物が検出されていないことから、一般的な粘土とは異なる。ただし、こうした成分あるいは鉱物からなる粘土質物が、具体的に如何なる状況で付着したかは明らかではない。すなわち、顔料的な成分が付着したものか、偶然泥質物が貯まって付着したものかは明らかではない。今後、こうした付着物の事例を調査するなど、付着物の性質について数多くの検討が必要である。

引用文献

黒田吉益・諏訪兼位(1989) 偏光顕微鏡と岩石鉱物 [第2版]。343p, 共立出版。



図A 須恵器底部付着物の蛍光X線スペクトル



図B 須恵器底部付着灰色物のX線回折スペクトル

第353図 金古北十三町遺跡蛍光X線分析関係図

4. 冷水村東遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 冷水村東遺跡のテフラ分析

1. はじめに

榛名山東南麓の扇状地上に位置する冷水村東遺跡では、扇状地を構成する地層のうち比較的上部の良好な土層の断面が認められた。そこで地質調査を行い地質層序の記載を行うとともに、屈折率測定を合わせて行って示標テフラの層位の把握を行い、土層の堆積年代に関する資料の収集を試みた。地質調査の対象とした地点は、C区北寄深掘トレンチ、C区中央深掘トレンチ、B区北深掘トレンチ、B区南深掘トレンチ、D区東端トレンチ（埋没谷部）、E区谷部、B区26号住居跡、B区深掘トレンチ（上部）の8地点である。

2. 地質層序

(1) C区北寄深掘地点

ここでは、下位より黄色軽石層（層厚19cm、軽石の最大径12mm、仮に冷水村東第1テフラ；Hm-1と呼ぶ）、桃色がかった黄色凝灰質砂層（層厚28cm）、黒灰色土（層厚11cm）、黄白色軽石（Hm-2）に富む黒色土（層厚18cm、軽石の最大径9mm）、黒色土（層厚6cm）、桃灰色シルト層（層厚1cm）、層理の発達した灰色砂層（層厚8cm）、水流で円磨された白色軽石混じり灰色砂層（層厚24cm、軽石の最大径17mm）、細かく成層した灰色砂層（層厚18cm）、亜円礫混じり暗灰色砂層（層厚16cm、礫の最大径63mm）、淘汰の良くない灰色砂層（層厚3cm）、層理の発達した暗灰色砂層（層厚9cm）、亜角礫混じり灰白色砂層（層厚13cm、礫の最大径77mm）、上部に巨礫が集中した亜角礫混じり暗灰色砂層（層厚33cm、礫の最大径577mm）、灰色軽石（Hm-3）混じり暗灰色土（層厚18cm）、黒褐色土（層厚4cm）、成層した黄灰色粗粒火山灰層（層厚15cm、Hm-6）、表土（層厚58cm）の連続が認められる（図A）。

(2) C区中央深掘トレンチ

この地点では、下位より淘汰の良い灰色砂層（層厚80cm以上）、淘汰の良い黄灰色砂層（層厚8cm）、黄色軽石層（層厚22cm、軽石の最大径14mm、Hm-1）、黄色凝灰質砂層（層厚21cm）、黒灰色砂質土（層厚14cm）、黄白色軽石（Hm-2）に富む黒色土（層厚11cm、軽石の最大径8mm）、黒灰色土（層厚4cm）が認められた。その上位にはこれらの土層を斬って発達した埋没谷が認められる。この谷を埋めた地層は、下位より亜円礫および亜角礫を含む灰色砂礫層（層厚44cm、礫の最大径440mm）、黒灰色粘質土（層厚12cm）、黄灰色軽石（Hm-3）に富む黒色土（層厚9cm、軽石の最大径14mm）、Hm-3混じり黒色土（層厚12cm）、成層した火山灰層（層厚8cm、Hm-4）、暗灰色土（層厚13cm）、灰色土（層厚8cm）、Hm-3混じり灰色土（層厚33cm）、成層した黄灰色粗粒火山灰層（層厚13cm）、灰色がかった暗褐色砂質土（層厚15cm）、暗褐色砂質土（層厚47cm）、作土（層厚13cm）からなる（図B）。

(3) B区北深掘トレンチ

ここでは、下位より黄色軽石層（層厚8cm以上、軽石の最大径10mm程度、Hm-1）、桃色細粒火山灰層（層厚3cm、以上Hm-1）、黄灰色砂層（層厚22cm）、暗灰色砂層（層厚11cm）、黄灰色軽石（Hm-2'）に富む黒色土（層厚9cm、軽石の最大径8mm）、Hm-2'混じり黒色土（層厚11cm）、桃灰色シルト層（層厚1cm）、灰色砂層（層

第7章 自然科学分析

厚2cm)、亜角礫混じりで淘汰の良くない灰色砂層(層厚19cm、礫の最大径28mm)、下部が亜角礫および亜円礫混じりで層理の発達した暗灰色砂層(層厚33cm、礫の最大径63mm)、上部が淘汰の良くない灰色砂層(層厚14cm)からなる土石流堆積物、下部が灰色砂層(層厚3cm)、上部が亜角礫や角のとれた黄色軽石混じりで淘汰の良くない灰色砂層(層厚17cm、礫の最大径34mm)、暗灰色砂礫層(層厚33cm、礫の最大径88mm)、灰色砂質シルト層(層厚11cm)、上部25cmに角のとれた黄色軽石をごく少量含む灰色砂層(層厚56cm、軽石の最大径7mm)、暗灰色粘質土(層厚2cm)、白色シルト層(層厚13cm)、黒褐色粘質土(層厚9cm)、赤褐色岩片混じり黄褐色土(層厚27cm)、暗褐色土(層厚9cm)が認められた(図C)。

(4) B区南深掘トレンチ

この地点では、下位より亜円礫を含む淘汰の良くない砂質の灰色土石流堆積物(層厚60cm以上、礫の最大径413mm)、褐色亜円礫層(層厚58cm、礫の最大径74mm)、亜円礫混じり灰色砂層(層厚32cm、礫の最大径38mm)、灰色亜円礫層(層厚86cm、礫の最大径88mm)、褐色粘質土(層厚8cm)、灰色砂層(層厚20cm)、灰色砂層(層厚2cm)、亜円礫混じり黄褐色砂礫層(層厚17cm、礫の最大径14mm)、褐色粘質土(層厚7cm)、黄褐色土(層厚12cm)、黄色細粒軽石および灰色粗粒火山灰混じり黄灰色土(層厚31cm、軽石の最大径3mm)、黄色細粒軽石および灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚24cm、軽石の最大径3mm)、黒褐色土(層厚11cm)、黄色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径22mm、石質岩片の最大径2mm、Hm-3)、Hm-3混じり黒色土(層厚8cm)、暗褐色土(層厚8cm)、灰色砂層や暗褐色土のブロックからなる土層(層厚21cm)、作土(層厚18cm)が認められる(図D)。これらの土層のうち、灰色砂層や暗褐色土のブロックからなる土層の直下からは溝や島が検出されている。またその上面からは平安時代の竪穴式建物が検出されている。

(5) D区東端トレンチ(埋没谷部)

ここでは、下位より灰色軽石(Hm-3)に富む黒灰色土(層厚5cm以上)、Hm-3を含む黒色土(層厚3cm)、成層した火山灰層(Hm-4)、淘汰の良い灰色砂層(層厚7cm)、Hm-3混じり暗灰色土(層厚15cm)、Hm-3混じり灰色土(層厚22cm)、灰色砂層(層厚0.8cm)、灰色土(層厚2cm)、黒灰色粘質土(層厚2cm)、成層した粗粒火山灰層(Hm-6)、灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm、Hm-7)、暗灰色砂質土(層厚34cm)、褐色土(層厚11cm)、作土(層厚16cm)が認められる(図E)。

これらの土層のうち、Hm-4は下部の桃色細粒火山灰層(層厚3cm)と上部のかすかに成層した桃灰色細粒火山灰層(層厚3cm)からなる。またHm-6は、下位より灰色細粒火山灰層(層厚0.1cm)、灰褐色粗粒火山灰層(層厚0.6cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.1cm)、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層(層厚14cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)、桃色細粒火山灰層(層厚2cm)から構成されている。

(6) E区谷部

この地点では、下位より黒色土(層厚3cm以上)、成層した火山灰層(Hm-4)、黒色土(層厚2cm)、白色細粒火山灰層(層厚2cm、Hm-5)、黒灰色粘質土(層厚4cm)、暗灰色砂質土(層厚3cm)、黒灰色粘質土(層厚8cm)、灰色軽石(Hm-3)混じり灰色土(層厚36cm)、黒灰色粘質土(層厚8cm)、成層した火山灰層(Hm-6)、灰褐色砂質土(層厚46cm)、褐色砂質土(層厚42cm)、作土(層厚9cm)が認められる(図F)。

これらの土層のうち、Hm-4は下位より桃色細粒火山灰層(層厚3cm)、黄色細粒火山灰層(層厚1cm)、灰

色粗粒火山灰層（層厚 1 cm）、細かく成層した黄色細粒火山灰層（層厚 4 cm）、粗粒火山灰混じり黄白色細粒火山灰層（層厚 4 cm）から構成されている。またHm-6は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色細粒軽石層（層厚 1 cm、軽石の最大径 3 mm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚 2 cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚 1 cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、黄色細粒軽石層（層厚 2 cm、軽石の最大径 3 mm）、灰色粗粒火山灰層（層厚1.3cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚 1 cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃色細粒火山灰層（層厚 2 cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚 2 cm）から構成されている。

(7) B区26号住居跡

この住居跡の床面は、下位より成層した火山灰層（Hm-4）、灰褐色土（層厚 4 cm）、褐色土（層厚14cm）からなる土層により覆われている。これらのうちHm-4は、下位より桃色がかった褐色の細粒火山灰層（層厚 4 cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.5cm）、逆級化構造の認められる灰色粗粒火山灰層（層厚 1 cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.6cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃灰色粗粒火山灰層（層厚 3 cm）から構成されている（図G）。

(8) B区深掘トレンチ（上部）

ここでは、下位より黒褐色土（層厚11cm）、黄白色軽石層（Hm-3、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径 2 mm）、下位の黄白色軽石混じり黒色土（層厚 9 cm）、暗褐色土灰色砂層や暗褐色土のブロックから構成される土層（層厚21cm、ブロックの最大径59mm）、作土（層厚18cm）が認められる（図H）。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定結果

C区北寄深掘地点の試料番号2（Hm-1）および試料番号1（Hm-2）、さらにB区北深掘地点の試料番号1（Hm-2'）の3点について、位相差法（新井, 1972）により屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定のための資料を収集することにした。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表に示す。C区北寄深掘地点の試料番号2（Hm-1）には、斜方輝石のほかに単斜輝石や磁鉄鉱が認められる。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.707-1.711である。C区北寄深掘地点の試料番号2（Hm-2）にも、斜方輝石のほかに単斜輝石や磁鉄鉱が認められる。火山ガラスの屈折率（ n ）は1.504-1.505、斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.706-1.711である。さらにB区北深掘地点の試料番号1（Hm-2'）にも、斜方輝石のほかに単斜輝石や磁鉄鉱が認められる。火山ガラスの屈折率（ n ）は1.504-1.506、斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.706-1.710でHm-2との間に有意な違いは認められなかった。

4. 考察

冷水村東遺跡において地質調査と屈折率測定を行った結果、Hm-1～Hm-7の少なくとも7層のテフラを検出することができた。ここでは最初に示標テフラとの同定を行うことにする。

Hm-1：下部が黄色軽石層で上部が細粒の火山灰層からなること、重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、このテフラは約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出したと考えられている浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) に同定される。

Hm-2：As-YPより上位にあること、重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、このテフラは約1.1万年前に浅間火山から噴出したと考えられている浅間総社軽石 (As-Sj, 早田, 1990, 1991) に同定される。なお前にHm-2'とした軽石については、屈折率測定の結果Hm-2との間に有意な違いは認められなかった(前述)。別のテフラとして認定するためには、異なる2層準に一次堆積層の存在を確認する必要がある。

Hm-3：層相や軽石の岩相などから、4世紀中葉に浅間火山から噴出したと考えられている浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979) に同定される。

Hm-4：層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に同定される。

Hm-5：層相から6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) の最上部の火山灰層 (I-36, 早田, 1993) に同定される。

Hm-6：層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) に同定される。

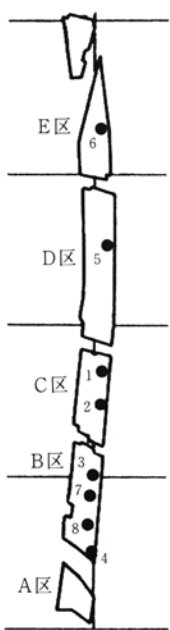
Hm-7：層相から1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられる浅間-粕川テフラ (As-Kk, 早田, 1991, 1994) に同定される。

これらのテフラとの層位関係からB区26号住居跡は、Hr-FAにより直接覆われていることが明らかになった。また本遺跡では、As-YPの下位、As-Sjの上位でAs-Cの下位、さらにHr-FAの直上の3層準に洪水などの氾濫堆積物の存在が認められた。示標テフラとの層位関係から、下位より順に相馬ヶ原扇状地堆積物(早田, 1990)、総社砂層(早田, 1990)、Hr-FAの堆積に伴う洪水堆積物に各々対比される可能性が大きいと考えられる。C区北寄深掘地点では、総社砂層(早田, 1990)に対比される成層した氾濫堆積物直下の黒色土から、 $9,630 \pm 60$ 年BP (Beta-81737)の14C年代が得られている(後述)。したがって、総社砂層に対比される可能性の大きい氾濫堆積物の堆積開始年代については、約9,600年前と推定される。

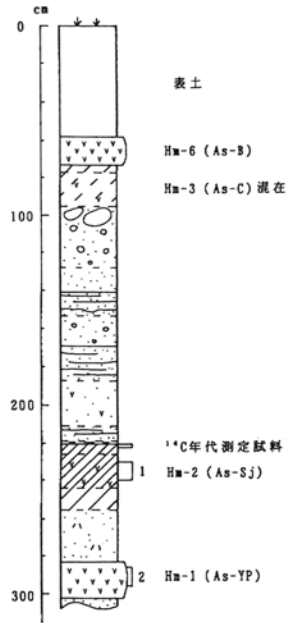
5. 小結

冷水村東遺跡において地質調査と屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3～1.4万年前)、浅間総社軽石 (As-Sj, 約1.1万年前)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年) など少なくとも7層の示標テフラを検出することができた。これらのテフラとの層位を合わせて考慮すると、本遺跡には下位より順に相馬ヶ原扇状地堆積物(早田, 1990)、総社砂層(早田, 1990)、Hr-FAの堆積に伴う洪水堆積物に各々対比される可能性が大きい氾濫堆積物が堆積していることが明らかになった。

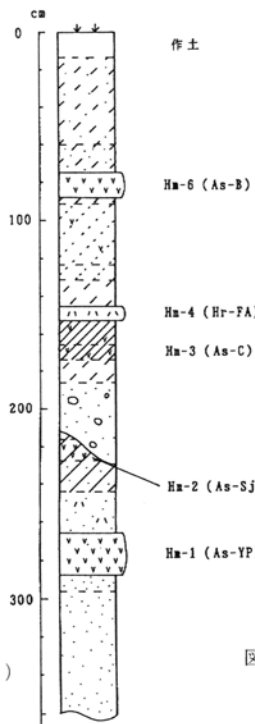
4. 冷水村東遺跡の自然科学分析



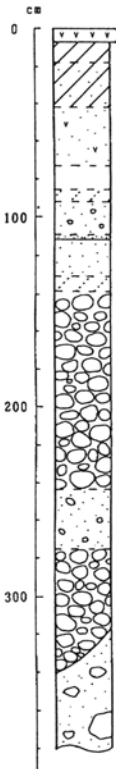
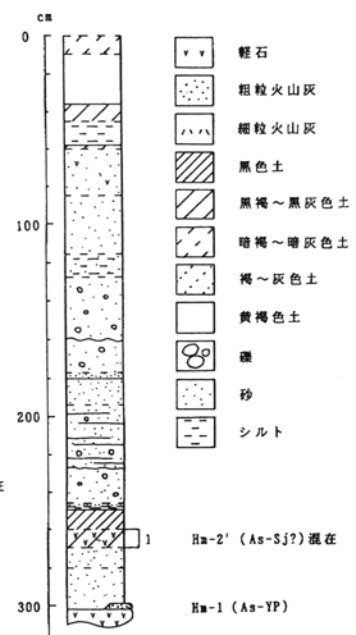
図A 冷水村東遺跡C区
北寄深掘トレンチの地質柱状図(地点1)
数字はテフラ分析の試料番号



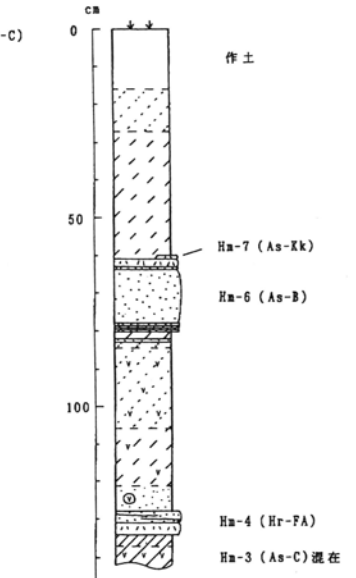
図B 冷水村東遺跡C区中央谷部
深掘トレンチの地質柱状図(地点2)



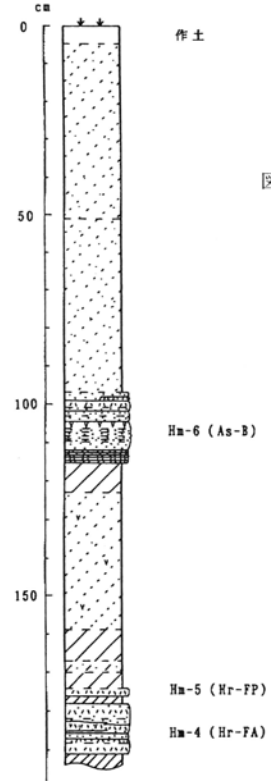
図C 冷水村東遺跡B区
北深掘トレンチの地質柱状図(地点3)
数字はテフラ分析の試料番号



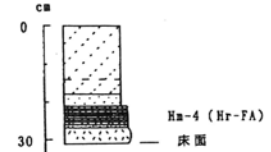
図D 冷水村東遺跡B区南深掘トレンチの
地質柱状図(地点4)



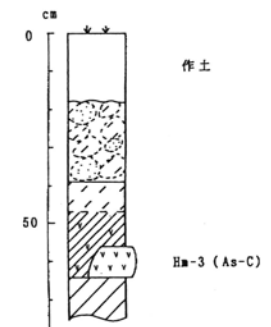
図E 冷水村東遺跡D区
東端トレンチの地質柱状図(地点5)



図F 冷水村東遺跡E区
谷部の地質柱状図(地点6)



図G 冷水村東遺跡B区
26号住居跡の地質柱状図(地点7)



図H 冷水村東遺跡B区
深掘トレンチ(上部)の
地質柱状図(地点8)

第7章 自然科学分析

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, p276.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史, 通史編, 1, p.37-129.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉 (1993) 古墳時代におこった榛名山二ツ岳の噴火. 新井房夫編「火山灰考古学」, 古今書院, p.128-150.
- 早田 勉 (1994) テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌, 自然編, p.22-43.

表 冷水村東遺跡の屈折率測定結果

地点	試料	テフラ	重鉱物	屈折率
C区北寄深掘	1	Hm-1	opx>cpx,mt	gl(n): 1.504-1.505 opx(γ): 1.706-1.711
C区北寄深掘	2	Hm-2	opx>cpx,mt	opx(γ): 1.707-1.711
B区北深掘	1	Hm-2'	opx>cpx,mt	gl(n): 1.504-1.506 opx(γ): 1.706-1.710

屈折率の測定は、位相差法（新井，1972）による。opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, mt: 磁鉄鉱。

II. 冷水村東遺跡の放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	C区北寄深掘 トレンチ	黒色土	酸洗浄・低濃度処理 ベンゼン合成	β線法 (標準)

2. 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	歴年代	測定No. (Beta-)
No.1	9,640±60	-25.6	9,630±60	BC8,945±45/-100 BC8,825-8,630	81737

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5,568年を用いた。

2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

δ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を補正することにより、歴年代を算出する。補正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

Ⅲ. 冷水村東遺跡の植物珪酸体分析

1. 試料

試料は、E地区谷部のAs-B直下層（試料1）、Hr-FP直下層（試料2）、Hr-FA直下層（試料3）の3点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m、約0.02g）
 - ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表および図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、Aタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

4. 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

E地区谷部のAs-B直下層、Hr-FP直下層、Hr-FA直下層について分析を行った。その結果、As-B直下層（試

料1)とHr-FA直下層(試料3)からイネが検出された。密度は、前者で2,900個/g、後者で700個/gと比較的低い値であるが、それぞれ直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくい。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネの密度が低い原因としては、1)稲作が行われていた期間が短かったこと、2)洪水などによって耕作土が流出したこと、3)土層の堆積速度が速かったこと、4)稲藁が耕作地以外に持ち出されていたこと、5)採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

5. 植物珪酸体分析からみた植生・環境

イネ以外の分類群では、全体的に棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族(ススキ属など)やウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ヨシ属なども検出され、Hr-FA直下層などではブナ科(ブナ属やコナラ属など)に由来する植物珪酸体も検出された。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、Hr-FP直下層とHr-FA直下層ではヨシ属が卓越しているが、As-B直下層ではウシクサ族(ススキ属など)が優勢となっていることが分かる。

以上の結果から、Hr-FA直下層の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたものと推定される。また、周辺にはススキ属などが生育する乾燥した部分も見られ、ブナ科(ブナ属やコナラ属など)などの樹木もある程度生育していたものと推定される。Hr-FP直下層の時期もおおむね同様の状況であったと考えられるが、As-B直下層では乾燥地を好むススキ属が比較的多く見られたものと推定される。

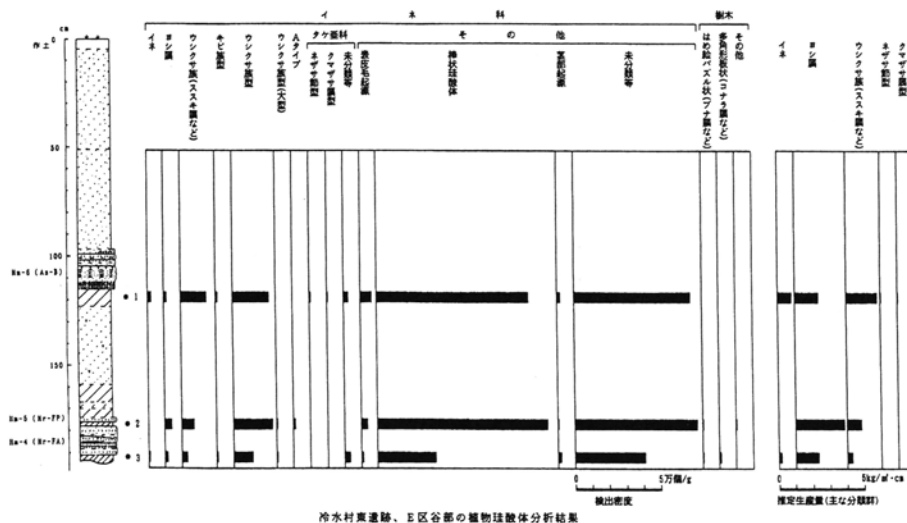
表 群馬県、冷水村東遺跡E区谷部の植物珪酸体分析結果
検出密度(単位:×100個/g)

分類群	試料 1	試料 2	試料 3
イネ科			
イネ	29		7
ヨシ属	22	46	22
ウシクサ族(ススキ属など)	147	77	30
キビ族型	15		7
ウシクサ族型	213	231	112
ウシクサ族型(大型)		8	7
Aタイプ		15	
タケ亜科			
ネザサ節型	7		
クマザサ属型	7		
未分類等	29		37
その他のイネ科			
表皮毛起源	73	46	15
棒状珪酸体	894	964	344
茎部起源	22	8	22
未分類等	689	725	419
樹木起源			
はめ輪バズル状(ブナ属など)		8	7
多角形板状(コナラ属など)			15
その他		8	
植物珪酸体総数	2148	2136	1047

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ	0.86		0.22
ヨシ属	1.39	2.92	1.42
ウシクサ族(ススキ属など)	1.82	0.96	0.37
ネザサ節型	0.04		
クマザサ属型	0.05		

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



冷水村東遺跡、E区谷部の植物珪酸体分析結果

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号:p.27-37.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9:p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-. 考古学と自然科学, 17:p.73-85.
 近藤錬三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)-双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について-. 帯広畜産大学研究報, 12:p.217-229.

IV. 冷水村東遺跡における花粉分析

1. 試料

試料は、E地区谷部のAs-B直下層(試料1)、Hr-FP直下層(試料2)、Hr-FA直下層(試料3)の3点である。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974,1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結果

分析の結果、樹木花粉10、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉6、シダ植物孢子2形態の計19分類群が同定された。結果を花粉遺体一覧表に示す。試料3は花粉総数が200個以下であったが、100個以上であったため、傾向を調べるために花粉総数を基数とする百分率を算定して組成図に示した。以下に同定された分類群を示す。

〔樹木花粉〕

スギ、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

第7章 自然科学分析

バラ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

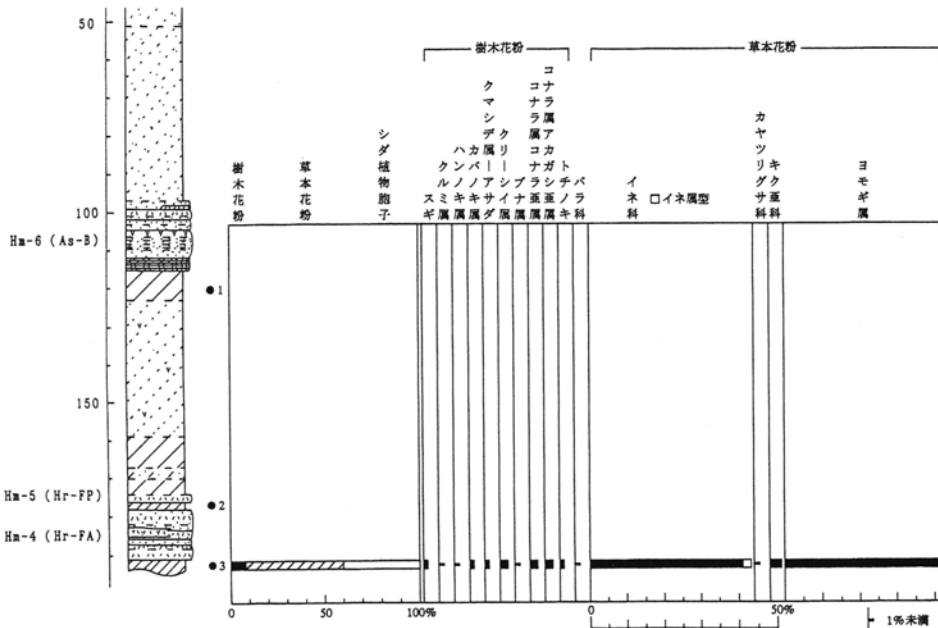
試料1・2は花粉数が少ないが、イネ科とヨモギ属が多い傾向を示し、シダ植物胞子も多い。試料3は草本花粉とシダ植物胞子の占める割合が高く、樹木花粉の割合は低い。草本花粉ではイネ科とヨモギ属がきわめて優占しており、イネ属型も低率ながら出現する。樹木花粉では低率ながらクリーシイ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属などが出現する。

4. 花粉分析からみた植生・環境

Hr-FA直下層の堆積当時は、イネ科とヨモギ属・シダ植物が優勢な草地の状態であったと考えられ、イネも近くで栽培されていたものと推定される。周囲には樹木があまり分布しておらず、やや遠方にクリーシイ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属などの樹木が分布していたと推定される。Hr-FP直下層とAs-B直下層の時期も、おおむね同様の状況であったものと推定される。

表 冷水村東遺跡における花粉分析結果

学名	和名	E区谷		
		1	2	3
分類群				
樹木花粉				
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ			2
<i>Juglans</i>	クルミ属			1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1
<i>Betula</i>	カバノキ属			2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサダ		1	2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ・シイ属	1		3
<i>Fagus</i>	ブナ属			1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			4
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1	3
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	2
樹木・草本花粉				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Rosaceae	バラ科			1
草本花粉				
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	9	20	76
<i>Oryza type</i>	イネ属型			3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1		1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	1		
Asteroidae	キク亜科	1	1	5
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	31	22	77
シダ植物胞子				
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	4	40	114
Trilate type spore	三条溝胞子	1		9
樹木花粉				
Arboreal pollen	樹木花粉	0	4	21
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	43	43	162
Total pollen	花粉総数	43	47	184
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	1
Fern spore	シダ植物胞子	5	40	123



冷水村東遺跡 (E区谷) における主要花粉組成図 (花粉総数が基数)

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院.
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店.
 日本第四紀学会編 (1993) 第四紀試料分析法, 東京大学出版会.
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集.
 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集.
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究13.
 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学 第10号.

5. 金古北十三町遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 金古北十三町遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

金古北十三町遺跡では遺構が検出されるとともに良好な土層断面が作成された。土層断面には複数の層準にテフラ（火山灰碎屑物、いわゆる火山灰）の堆積が認められた。そこで地質調査を行って土層の記載を行うとともに、テフラについて屈折率測定を合わせて行って示標テフラとの同定を試み、土層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、0区旧河道部(1)、0区旧河道部(2)、7区1号溝、8区6J-28グリッド、8区採掘場、6区5S-26グリッドの5地点である。

2. 土層の層序

(1) 0区旧河道部(1)

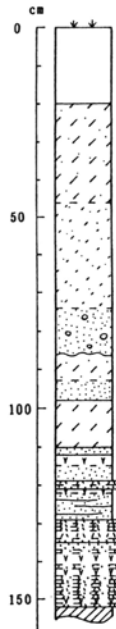
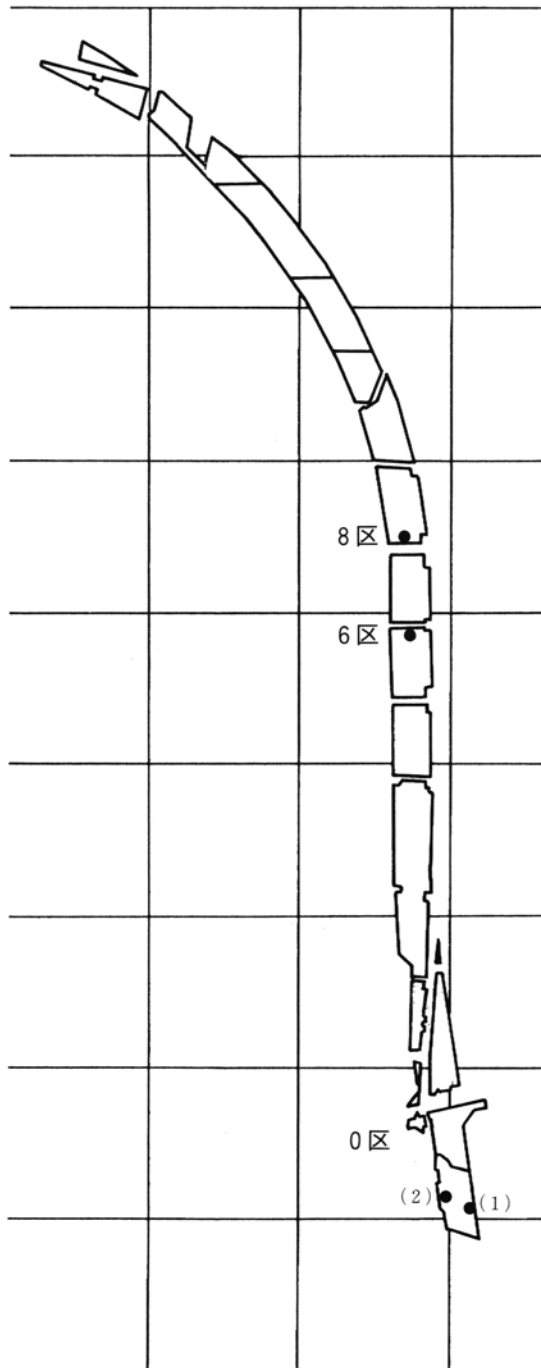
この地点では、下位より黒色土（層厚3cm以上）、成層したテフラ層、斜層理の発達した灰色砂層（層厚7cm）、暗褐色土（層厚0.8cm）、成層したテフラ層、灰色砂層（層厚4cm）、黒灰色土（層厚3cm）、灰色砂層（層厚2cm）、暗灰褐色土（層厚12cm）、灰色砂層（層厚5cm）、暗灰褐色砂質土（層厚12cm）、亜円礫混じり灰色砂層（層厚12cm、礫の最大径12mm）、褐灰色砂質土（層厚28cm）、暗灰褐色砂質土（層厚26cm）、盛土（層厚23cm）が認められる（図A）。

2層認められる成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色軽石を含む黄灰色粗粒火山灰層（層厚1cm、軽石の最大径6mm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、桃色細粒軽石層（層厚1cm、軽石の最大径2mm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黄色細粒軽石層（層厚2cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色土粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄色細粒軽石層（層厚3cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、かすかに成層した黄灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、暗灰色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃色細粒火山灰層（層厚2cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、桃色細粒火山灰層（層厚0.3cm）の連続から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-C, 新井, 1979）に同定される。

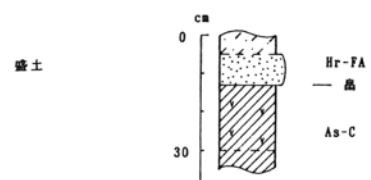
一方、上位のテフラ層は、下部の暗灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）と上部の灰色細粒火山灰層（層厚0.8cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ層（As-Kk, 早田, 1991, 1995）に同定される。

(2) 0区旧河道部(2)

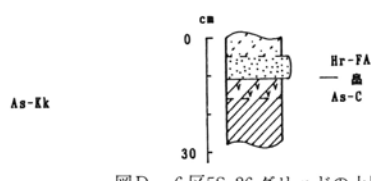
この地点では、亜円礫層（層厚5cm、礫の最大径189mm）の上位に、下位より黒色土（層厚10cm）、灰白色軽石に富む黒褐色土（層厚9cm、軽石の最大径14mm）、灰白色軽石混じり黒褐色土（層厚13cm、軽石の最大径12mm）、



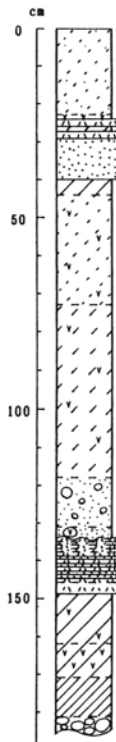
図A 0区旧河道部(1) 東壁の土層柱状図



図C 8区6J-28グリッドの土層柱状図



図D 6区5S-26グリッドの土層柱状図



図B 0区旧河道部(2) 西壁の土層柱状図

- 軽石
- 粗粒火山灰
- 細粒火山灰
- 黒色土
- 黒褐色土
- 暗褐色～暗灰色土
- 灰褐色土
- 礫
- 砂
- 泥炭

第355図 金古北十三町遺跡土層柱状図

5. 金古北十三町遺跡の自然科学分析

成層したテフラ層、灰色砂層（層厚3cm）、円磨された白色軽石混じり灰色泥流堆積物（層厚13cm、軽石の最大径49mm）、白色軽石混じり暗灰褐色土（層厚43cm、軽石の最大径28mm）、白色軽石混じり灰褐色土（層厚29cm、軽石の最大径14mm）、黒褐色土（層厚4cm）、成層したテフラ層、暗褐色土（層厚0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚1cm）、黒褐色土（層厚0.3cm）、灰褐色砂質土（層厚23cm）が認められる（図B）。

2層認められる成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より桃褐色細粒火山灰層（層厚3cm）、黄色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、白色軽石混じり灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.6cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.6cm）の連続から構成されている。このテフラ層は層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に同定される。

一方上位の成層したテフラ層は、下位より細かく成層した粗粒火山灰層（層厚11cm）と桃色細粒火山灰層（層厚2cm）から構成される。このテフラ層は、その層相から浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に同定される。最上位の灰色細粒火山灰層は、層相からAs-Kkに同定される。

(3) 8区6J-28グリッド

この地点では、下位より黒色土（層厚5cm以上）、灰白色軽石に富む黒色土（層厚17cm、軽石の最大径14mm）、細かく成層した黄色火山灰層（層厚8cm）、暗灰色砂質土（層厚5cm以上）が認められる。これらのうち、灰白色軽石は岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また、成層した黄色火山灰層は、層相からHr-FAに同定される。この地点では、Hr-FAの直下から畠遺構が検出されている。

(4) 6区5S-26グリッド

ここでは、下位より黒色土（層厚12cm）、灰白色軽石に富む黒色土（層厚5cm、軽石の最大径14mm）、細かく成層した黄色火山灰層（層厚6cm）、灰色砂質土（層厚5cm以上）が認められる。これらのうち、灰白色軽石は岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また成層した黄色火山灰層は、層相からHr-FAに同定される。この地点でも、Hr-FAの直下から畠遺構が検出されている。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

7区1号溝および8区採掘坑は、層理の発達した軽石粒子により埋没している。そこでこれらの2遺構を埋めた軽石について、位相差法（新井, 1972）により屈折率の測定を行い、年代が明らかにされている示標テフラとの同定を行った。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表に示す。7区1号溝資料番号1には、重鉍物として斜方輝石のほか単斜輝石が含まれている。火山ガラスの屈折率（ n ）は1.532-1.534、斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.708-1.712である。これらの値は、軽石がAs-Bに由来していることを示している。したがってこの遺構の構築年代に関しては、1108（天仁元）年以降の可能性が考えられる。

一方、8区採掘坑試料番号1には、斜方輝石や単斜輝石さらに少量の角閃石が含まれている。火山ガラスの屈折率（ n ）は1.516-1.527、斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.708-1.712、さらに角閃石の屈折率（ n_2 ）は1.672-1.677である。重鉍物の組み合わせや屈折率の値は、As-B起源の軽石およびHr-FAまたは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新

第7章 自然科学分析

井, 1992) 起源の軽石の混入を示唆している。また斜方輝石の屈折率は1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)の混入している可能性も若干ながら示唆している。したがって本遺構に関しては、1783(天明3)年以降の可能性が考えられる。

4. 小結

金古北十三町遺跡において地質調査と屈折率の測定を行った。その結果、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間柏川軽石(As-Kk, 1128年)に由来するテフラ粒子やテフラ層が検出された。本遺跡で検出された畠遺構は、Hr-FA直下に層位がある。また7区1号溝については1108(天仁元)年以降に、また8区採掘壕については1783(天明3)年以降に構築された可能性が指摘された。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, p.276.
 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.303-319.
 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火と災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
 早田 勉(1995) テフラからさぐる浅間火山の活動史. 御代田町誌自然編, p.22-43.

II. 金古北十三町遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、0区旧河道部(1)で4点、0区旧河道部(2)で9点、8区6J-28グリッドで2点、6区5S-26グリッドで1点の計16点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm・約0.02g)
 ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42kHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥

表 金古北十三町遺跡の屈折率測定結果

地点	試料 重鉱物	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)	角閃石(n ₂)
7区1号溝	1 opx>cpx	1.532-1.534	1.708-1.712	-
8区採掘壕	1 opx>cpx(ho)	1.516-1.527	1.708-1.712	1.672-1.677

屈折率の測定は位相差法(新井, 1972)による。gl: 火山ガラス, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。

6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属型 (ススキ) は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表および図A~Dに示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科] 機動細胞由来: イネ、キビ族型、キビ族型A (エノコログサ属など)、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型 (ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族 (大型)、シバ属、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (おもにクマザサ属)、タケ亜科 (未分類等)

その他: 表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

[樹木] はめ絵パズル状 (ブナ科ブナ属など)、多角形板状 (ブナ科コナラ属など)

表 群馬県、金古北十三町遺跡の植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	0区										9区		6区				
	旧河道部(1)東壁				旧河道部(2)西壁						6J-287/11ト*		5S-26				
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	1	1
イネ科																	
イネ	38			16	15			51	47	7					22	28	44
キビ族型		15	22	8		22		14		15		22	21		21		7
キビ族型A (エノコログサ属など)							15										7
ジュズダマ属							15										7
ヨシ属	38	193	95	85	82	96	260	72	8	22	15	80	14				
ススキ属型	77	30		39	44	7	14	80		45	85	15	64		60	42	81
ウシクサ族	61	44	58	147	119	111	55	130	39	67	185	160	136		105	126	206
ウシクサ族(大型)			7						8						7		
シバ属																	7
タケ亜科																	
ネザサ節型	77	7	7	8	15		7	29	47	7	39	29	93			56	177
クマザサ属型	15		22	8						15							
未分類等	23	30	15	93	156	74	55	116	63	45	254	305	315	202	84		500
その他のイネ科																	
表皮毛起源	15			16	7		7	43	16	22	15	36	43	45	7		29
棒状珪酸体	184	385	357	636	630	643	471	710	259	374	762	684	702	621	756		905
茎部起源	8	44		54		44	14	29	39	7	46	58	64				28
地下茎部起源	8			70		22	20	7			39	22	7				
未分類等	368	415	430	551	438	495	417	521	377	411	585	596	551	449	476		603
樹木起源																	
はめ絵パズル状(ブナ属など)											15				7		
多角形板状(コナラ属など)	8										39	58	21				
植物珪酸体総数	920	1163	1014	1731	1505	1529	1318	1803	902	1054	2079	2065	2041	1518	1623		2567

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	1.13			0.46	0.44			1.49	1.38	0.22							
ヨシ属	2.42	12.15	5.98	5.39	5.15	6.06	16.38	4.57	0.49	1.42	0.97	5.05	0.90				
ススキ属型	0.95	0.37		0.48	0.55	0.09	0.17	0.99		0.56	1.05	0.18	0.80	0.74	0.52		1.00
ネザサ節型	0.37	0.04	0.04	0.04	0.07		0.03	0.14	0.23	0.04	0.18	0.14	0.45		0.27		0.85
クマザサ属型	0.11		0.16	0.06						0.11							

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、群馬県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

第7章 自然科学分析

1) 0区旧河道部(1)地点 (図A)

As-Kkの上層(試料1)からAs-B直下層(試料4)までの層準について分析を行った。その結果、As-Kkの上層(試料1)とAs-B直下層(試料4)からイネが検出された。このうち、As-Kkの上層(試料1)では密度が3,800個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-B直下層(試料4)では、密度が1,600個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をAs-B層で厚く覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) 0区旧河道部(2)地点 (図B)

As-Kkの上層(試料1)からAs-C直下層(試料9)までの層準について分析を行った。その結果、As-Kkの上層(試料1)、As-B直下層(試料4)、およびその下層(試料5、6)からイネが検出された。このうち、As-B直下層(試料4)とその下層(試料5)では密度が5,000個/g前後と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が1,000個/g前後と低いことから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

3) 8区6J-28グリッド (図C)

Hr-FA直上層(試料1)とHr-FA直下層(試料2)について分析を行った。その結果、いずれの試料からもイネは検出されなかった。

4) 6区5S-26グリッド (図D)

Hr-FA直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

6. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、キビ族型A(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属、トウモロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族型Aとジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

(1) キビ族型A

キビ族型A(エノコログサ属など)は、8区6J-28グリッドのHr-FA直下層(試料2)と6区5S-26グリッドのHr-FA直下層(試料1)から検出された。これらの層ではそれぞれ畝跡が検出されている。密度は前者で2,100個/g、後者で700個/gとやや低い値であるが、エノコログサ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。エノコログサ属には栽培種のアワが含まれるが、現時点では栽培種とエノコログサなどの野生種とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。ただし、ここでは畝跡の試料のみから検出されていることから、栽培種(アワ)の可能性が高いと考えられる。

(2) ジュズダマ属

ジュズダマ属は、0区旧河道部(2)地点のAs-Kk直上層(試料2)と6区5S-26グリッドのHr-FA直下層(試料1)から検出された。同属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も1,000個/g前後と低い値であることから、各層でハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植

物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

7. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

0区旧河道部(1)地点のAs-C直下層からHr-FA直下層にかけては、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、キビ族型やヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族、ネザサ節型なども検出されたが、いずれも比較的少量である。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。また、イネ科以外にもブナ科(コナラ亜属)などの樹木に由来する植物珪酸体が検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

As-B直下層およびその下層でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、樹木起源の植物珪酸体は見られなくなり、前述のようにイネが出現・増加している。As-Kkの上下層ではヨシ属が比較的多く検出された。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、As-C混層、As-B直下層、As-Kkの上下層ではヨシ属が優勢となっており、とくにAs-Kkの上下層ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、金古北十三町遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)およびその前後の堆積当時は、ヨシ属が生育するようなやや湿った堆積環境であり、遺跡周辺にはブナ科(コナラ亜属)などの森林が分布していたと推定される。浅間Bテフラ(As-B, 1108年)の下層の時期には稲作が開始されていたと考えられるが、As-B直下層の時期には何らかの原因でヨシ属が多く見られるようになったものと推定される。このように、As-B直下層でヨシ属が増加する現象は、前橋市周辺などでも一般に認められており、比較的広い範囲に及ぶ現象として注目される。

浅間粕川軽石(As-Kk, 1128年)の前後層の堆積当時は、ヨシ属が繁茂する湿地的な状況であったが、As-Kkの上層では再び稲作が行われるようになったものと推定される。

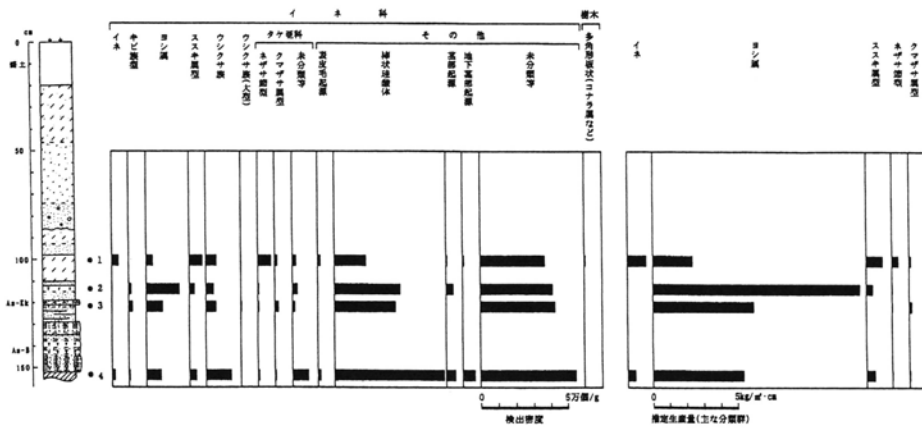
8. まとめ

以上のように、0区旧河道部(1)地点のAs-Kk上層、0区旧河道部(2)地点のAs-B直下層とその下層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

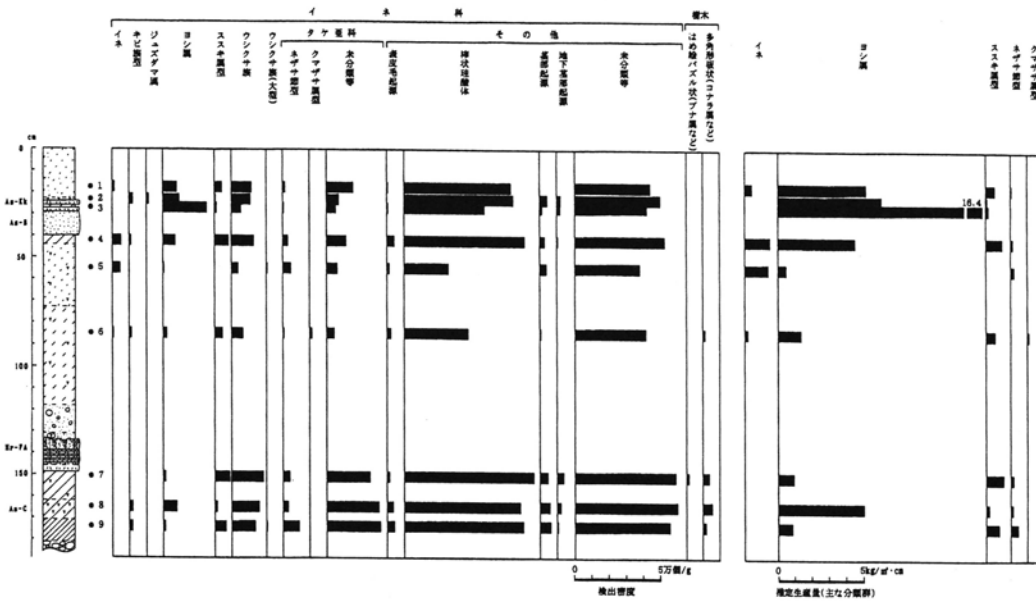
また、Hr-FA直下の畠跡では、キビ族型A(エノコログサ属など)やジュズダマ属が検出され、アワヤハトムギが栽培されていた可能性が示唆された。

参考文献

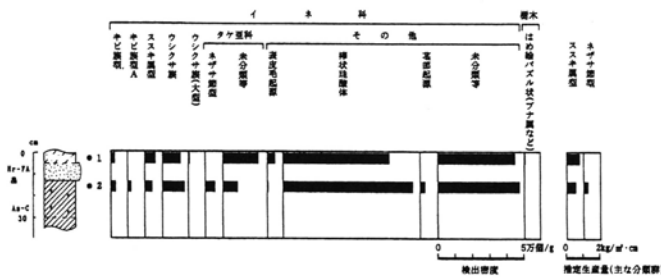
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―。考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- 近藤錬三・ピアスン友子(1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)―双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について―。帯広畜産大学研究報, 12, p.217-229.
- 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究, 第2号, p.27-37.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追究のための基礎資料として―。考古学と自然科学, 20, p.81-92.



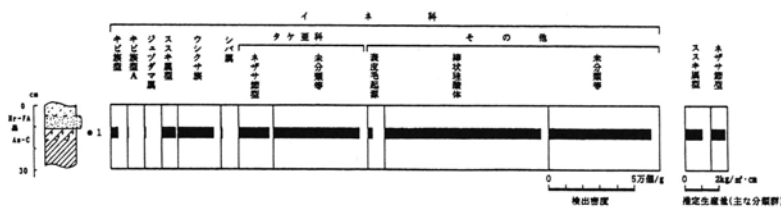
図A 群馬県、金古北十三町遺跡0区旧河道部(1)東壁の植物珪酸体分析結果



図B 群馬県、金古北十三町遺跡0区旧河道部(2)西壁の植物珪酸体分析結果



図C 群馬県、金古北十三町遺跡8区6J-28グリッドの植物珪酸体分析結果



図D 群馬県、金古北十三町遺跡6区6S-26グリッドの植物珪酸体分析結果

第356図 金古北十三町遺跡植物珪酸体分析関係図

第8章 考察

1. 金古北十三町遺跡3・4区検出の区画堀について

(1) はじめに

3区1号堀及び4区1号・2号堀は、形態から一連の遺構であり区画堀と解される。また、この区画堀のうち北限は今回検出できたが、南限と西限は不明のまま残ってしまった。したがって、本稿はこの区画堀の走行位置の推定と、その性格を考える試みである。なお、本稿が扱う事例の背景に所在する問題として、中世遺構として検出される館及び環濠屋敷、環濠遺構群などをどう捉えていくかということがある。県内で年々着実に増加しつつあるこれらの遺構の発掘事例は、堀や内部施設の規模・形態、出土遺物、伝承などを基準にその類別がなされてきている。しかし、そうした証拠も各々がうまく揃うわけではなく、時に有力在地武士の館と推定しているにもかかわらず、出土遺物や内部建物遺構の貧弱さが持つ矛盾に困惑してしまうこともあったりする。本遺構も伝承は無いのに加えて、区画規模が大きい内部施設は不明という事態に陥っている。そうした中、本遺構について留意される点などを中心に検討を加え、今後の類型化及び性格付けを期したいと考える。

(2) 位置の推定

本区画堀の規模のうち、北側の東西軸は長さ外側で20.50m、内側で17.90m、南北軸は長さ外側で176.10m、内側で174.20mを測る。また、南北軸では北角から117.60mの部分で4区1号堀は終わり、3.92mの土橋を設けて4区2号堀が始まる。したがって、水路である可能性はない。また、本遺構の南側1区・2区でもほぼその延長線上に位置する部分を調査したが、区画堀検出には至らなかった。なお、2区では隣接する住宅の移転の際、若干西側調査区域外の遺構面を観察できており、本区画堀が直線的に南進する可能性はない。したがって、本区画堀は3区南の町道で西に折れた後、第357図のBのよう

に西進するか、或はCのように再度折れて南進するものと考ええる。

形態的に奇抜なCルートを設定した理由としては、一つに地割との関係がある。第357図でわかるとおり、3区・4区とも区画堀の部分は南北に長い地割となっており、埋没する区画堀を意識した地割としか考えられない。そこで、2区以南の地割を見ると、この細長い地割はCルートを辿って連続することが読み取れるのである。また、前述のとおり南北軸の北角から117.60mに土橋があり、これと対称的に南側に同じ距離をとるとやはりCルートで、しかも南北の全長はほぼ216mつまり2町となり、区画堀の規格としては非常に計画性を持ったものとなるのである。したがって、敢えてCルートを走行位置の第1候補としておく。なお、区画堀の西限は判断材料が少なく推定を断念せざるをえないが、4区西方約130mで群馬町教委が確認調査を行った調査地では、本遺構に符合するような堀や溝は東西軸・南北軸とも発見されておらず、おそらく西限となるべき南北軸の堀は更に西方に存在するにちがいない。加えて、本区画遺構が方2町の規模を持つとしたときに、内側に内堀のように区画を細分する堀などが想定されるけれども、これも町調査地の状況から見て可能性が低いと言える。

(3) 留意点

区画堀は傑出した遺構であるが、主要部分はそれに区画された内部部分であることはほぼ間違いのない。本遺跡では内部で幾つかのピットは検出されたが、明確な関連性を認めることはできず、掘立柱建物跡として復元できたものもなかったのである。したがって、区画堀の内部施設は不明のまま残ることとなった。そこで、内部の状況を考える上で参考となる留意点について触れたい。

1つは、南北軸に設けられた土橋から西側に伸び

第8章 考察

る径道である。これは現状として一部くぼみ程度しか旧状をとどめないものもあるが、ほぼ位置を確認することができる。この径道は位置からみて、明らかに埋没している区画堀と土橋を意識しており、区画堀内部全体としても、この径道で南北に区分されるものとする。

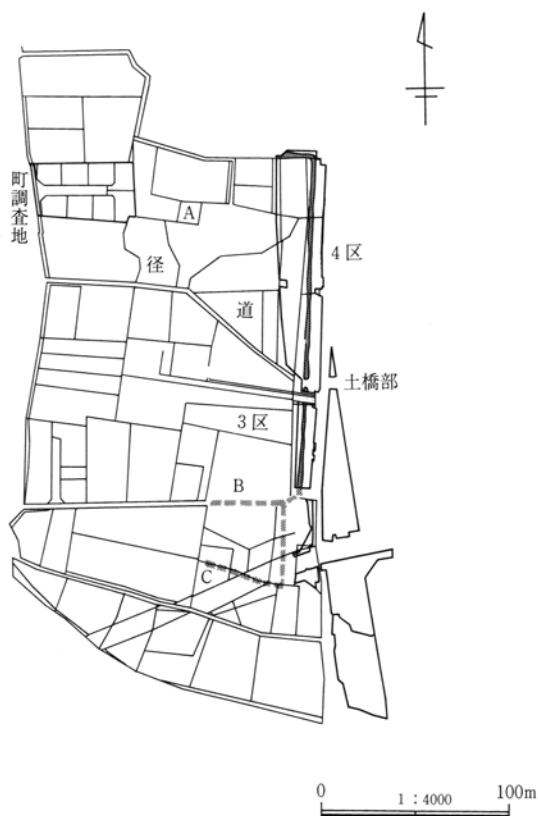
次に、この径道が屈曲する辺りの真北にA地点がある。そこは地目上墓地なのだが、現状で2基の石祠が建てられている。一つには「施主上宿田中文蔵 文政二年己卯十一月吉日」と彫られ(PL116-5)、もう一方には「慶応四年戊辰正月」とあり(PL116-6)、内には「新井筑後守源朝臣」と彫られた石製の板札が納められている。この2基を金稲^{きんとう}治稲荷^{じいなり}と呼ぶらしい⁽¹⁾。「群馬町誌」によれば、上宿が祭っているものらしい。また、明治2年の「金古宿略絵図」⁽²⁾では字【愛宕】に金東司稲荷があり、現在でも神主が居住しA地点も祭っているという。この字【愛宕】の稲荷とA地点との本末関係はどののだろうか。この点は、「群馬町誌」の記載もなく、聞き取り調査もできていない。しかし、もう一つ注目されるのは、隣接地主の話として、「この付近はややこんもりと盛り上がっていたものを、削平して現在のような畑にした」ということがある。こうして見ると、地割がこの付近でやや不規則に弧状をなしているのが気になり、かつて盛り上がった地形であったことを示す痕跡と見られるのである。そして、この区画の内側にこうした稲荷があるのは、この区画遺構の性格を反映している可能性がある一方、4区1号堀からの出土遺物も近世しかも18世紀以降が主という状況にあつては、近世に稲荷を中心として区画堀が廻っていたことは明らかであろう。しかし、本遺構の発生が中世以前に遡る可能性も皆無ではなく、何らかの遺構が稲荷へと転用されたとも見られ、今後とも中世の環濠遺構も視野に入れて検討していく必要がある。

最後にもう一つ付け加えておきたいのは、この区画堀の位置であり、南北軸の堀つまり区画遺構の東限は、群馬町と前橋市の行政区画境界となっている。

この点で区画堀は、近世金古宿の東方境界を画する堀としての性格も合わせ持っていたのである。

註

- (1) 近藤義雄氏にご教授いただいた。
- (2) 南雲栄治「三国街道金古宿の地理学的研究」(群馬県立前橋女子高校『紀要』創立記念60周年記念号 1970)掲載図



第357図 区画堀推定及び地割図

2. 用水路（溝）から見た金古宿の形成

(1) はじめに

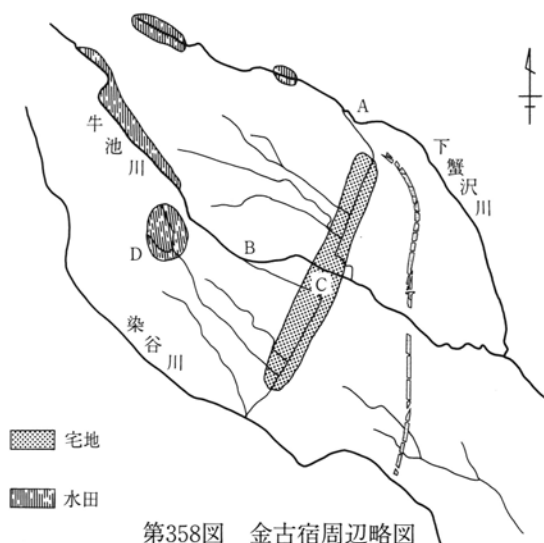
金古宿は、文禄・慶長年間（1592～1614）に、三国街道の宿場として成立したと言われる。当初は高崎領であったが、宝永2年（1704）から旗本の三氏に給され、北から上給・中給・下給と呼ばれるようになった。

近世金古宿に関しては天田伝七郎氏の広範な研究⁽¹⁾があり、また南雲栄治氏は従来の文献史料からの検討に加えて、地理学の立場から屋敷地割や家屋の形態、井戸などについて現地調査を行い、その成果を基に集落景観の考察をされている。筆者は最近同町内「井出」（以下「」は大字を示す）集落の江戸初期における集落移動を検討したが⁽²⁾、ここでは新しく用水を他所から導水したことが契機となって、新田開発と集落移動・宿用水整備がなされたと見られる。また、その中で金古宿についても三国街道整備に伴う集落移動としておいた。集落移動の概念に関しては、木村礎氏の言う『集落移動』とは同一村落内において集落のみがほぼ全面的に移動することであり、村落外の他地域に新田村を造成することではない⁽³⁾という定義に拠っている。なお、県内の事例として集落移動を扱ったのは、同じ井出集落を扱った南雲氏論文がおそらく最初であり、筆者はその多大な影響下にあることは言うまでもない。ただし、その南雲氏でさえ、金古宿については、明確に集落移動という用語を使用していないのである。それは、金古宿では移動前集落に関する伝承がないためであり、慎重になっているものと察せられる。しかし、筆者は敢えて金古宿についても、集落移動として扱うこととしたい。それは、集落移動が一つの集落に偶発的に起こった現象ではなく、社会的現象としてある程度の条件を備えた集落に対し、広範に採用された政策或は運動と見ているからである。このため、金古宿は三国街道整備という幕府政策に起因した事例として重要であり、集落移動の政策的発生を考える好例と考えるからである。

(2) 金古宿の成立と用水路の特色

金古宿の成立過程を物語る最古の史料としては、南雲氏も検討された文政8年（1825）の「旅籠屋再建願⁽⁵⁾」があり、その記載に「（前略）文禄より慶長の度迄御取立ニ相成候処、至って土地柄不宜故渡世向格別御勤弁有之候ニ付、所々より罷出家業致間宿方ニ相成り、其之砌より追々建込み（後略）」とあり、金古宿成立時の事情がよく記されている。中でも、土地柄が良くなかったので、渡世（小規模な商人）は格別所々から通いで家業することが許された点が注目され、当初金古宿が居住に適さない土地柄であったこと、またそうした事情がなければ、元来宿方として居住することを強要されたことが知れるのである。一方、金古宿が追々建て込んで行く過程で、土地柄は改善されていったのであろうか。また、土地柄とは具体的にはどのようなことを指すのだろうか。通いで対処できるのであるから、周辺農地の農作物収穫に係わる地味を問題としたのではなく、その狭い地域に限られた居住環境に関するものと解され、おそらく水利ではないかと考える。それは、他の要件が想起されないこともあるが、その後の改善策を見ることができる点で証明される。

金古宿の宿用水は、大きく二つの水系によって構



第358図 金古宿周辺略図

成されている。一つは下蟹沢川のA地点（第358図）から取水するもので、上木戸付近から三国街道の西沿いを南流して牛池川に落とされる。もう一つはその牛池川の上流B地点から取水するもので、【諏訪】（以下【】は小字を指す）と【多家】の字境に建ち並ぶ屋敷前を通り、三国街道で直角に曲がって南流し、やがて染谷川に落とされる。なお、宿用水が欠損しているC地点は、土俵と呼ばれる地域で、牛池川に土俵を積んで取水した⁽⁶⁾という。また、この他西側所々から湧水路のような小用水が東南流し宿用水に合流するが、その流路も屋敷地を選択して流れていることが読み取れる。現在用水と言え、即農業用水を想起してしまうが、水道用水が完備される以前は、飲料用の井戸と同様、生活用水を供給する用水はとくに町場では重要であったにちがいない。そうした意味で、金古宿では宿用水の整備によって土地柄は改善されたのである。

ところで、用水を考えるには農業用水の整備状況も見ておく必要がある。「金古」の農地は、最古の史料である寛文5年(1665)の検地帳⁽⁷⁾に、田2町5反7畝16歩、畑265町7畝16歩とあり、また明治初期の状況を記す郡村誌では田3町3反5畝17歩、畑271町21歩とある。この結果、農地では畑が卓越していたことがわかると共に、寛文5年以降でも新田開発は余りなされていないと見られる。その上、田地の立地は第358図でわかるとおり、上蟹沢川や下蟹沢川、牛池川、染谷川周辺の後背湿地に集中しており、水田耕作に適している点で、江戸期以前から伝統的に水田化されていたと見て間違いのないだろう。そのような中、唯一特異な立地条件にあるのが、第358図D地点の【安良田】の水田であり、地名からも新田であることがわかる。しかも、前述の寛文5年の検地帳でも地名として記載があることから、それ以前の⁽⁸⁾新田と見られる。その用水を見ると取水点は明確ではないが、牛池川から取水していたはずで、その後東南流して【多家】の家並に導水されており、宿用水としての機能も加味される。したがって、【安良田】は金古宿の形成と時期を同じくして

なされた新田開発であると考えたい。また、【安良田】の水田と宿用水の関係は、他の水田でも本質は変わらないのであって、その分布を見ると全て金古宿よりも西側、つまり用水の上流に位置しており、宿用水によって水質が悪化することを考慮した配置となっている。ただし、整備面で卓越しているのはあくまで宿用水であり、農業用水はほぼ旧態依然の様相をなしてるとしなくてはならない。

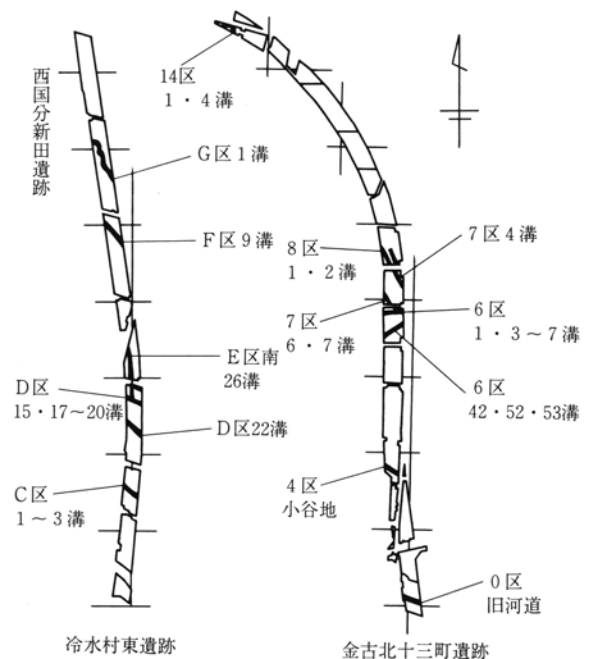
(3) 本遺跡で検出された用水路（溝）

遺跡で検出される溝から、用水路を選別するのは困難であり確定は不可能に近い。ここでは、流水痕跡をとどめるものを、仮に用水路と認定し検討を加える。それは用水路とイコールではないが、全てをその範ちゅうに含む分類と考えるからである。以下、走向方向によって区分して検討する。

①北西—南東方向のもの（以下方向の記載順は流水方向も示す。例：北西→南東）

ア 谷地形の底部を利用するもの

(ア) 冷水D区1・2・3号溝 旧河道であったが、As-CやFAなどで埋没し、As-B降下直前には水田化されていた。その後、本遺構が形成され、



第359図 溝位置図

2. 用水路（溝）から見た金古宿の形成

第7図のとおり土地改良前まで踏襲使用されていた。

(イ) 冷水D区18・19・20号溝 小谷地が埋没し、FA降下直前は水田化され、また再度水田化されたがAs-B降下により放棄される。その後、本遺構が形成された。

イ 谷地形の肩部（落ち際）を利用するもの

(ア) 冷水D区22号溝 中近世の遺物を多く含み、中世の1号井戸との関連も想起される。第7図のとおり土地改良前まで踏襲使用されていた。

(イ) 西国分F区9号溝 遺物・埋土等から8世紀後半代に比定される。

(ウ) 西国分G区1号溝 As-B降下時には既に埋没が進み、くぼみ程度が残っているに過ぎなかった。また、底部・壁部とも浸食作用が著しく、流路も蛇行しており、相当量の流水量が見込まれる。中世では1・2号井戸が新しく重複して設けられ、周辺でも3・4号井戸が分布する。

(エ) 金古6区1・6・7号溝、7区4・6・7号溝、8区1・2号溝、14区4号溝 遺物・埋土等から平安時代に比定される。

②北南、東西・西東方向のもの（傾斜に対して斜め）

ア 道路側溝かと考えられるもの

(ア) 冷水D区17号溝、E区12・14号溝 第7図に見られる径道の側溝であろう。

(イ) 金古14区1号溝 形状は箱堀状で四角く整っており、宿用水の一部として道路の路肩を走行していたと見られる。埋土の状況から流入した土砂をさらずに廃棄したことが窺える。

イ 農耕痕跡と考えられるもの

(ア) D区15号・E区26号溝 両溝は調査区の違いにより別遺構名を付したが、同一の溝と見られる。両溝はAs-B下水田跡以前に造られ、形状は北から南へ走行した後、D区で18・19・20号溝同様に谷地形底面を利用して東にはほぼ直角に折れる。したがって、北側の谷筋から南の谷筋への導水路と考えるが、As-B下水田跡面でもくぼみとして残っており（埋没後の陥没の可能性もある）、水田の水路として踏襲利用されていた可能性もある。

(イ) 金古6区・7区FA上溝群 中軸となるのは7区5・17号溝などのやや規模が大きい北西-南東方向の溝であろうが、これに連結する形で南北・東西方向の溝が分岐・重複しており、複数の用水路と言うよりもむしろ、谷地形を利用した水田等の耕作痕跡とした方が妥当である。

③ 南西-北東方向のもの

ア 谷地形の肩部（落ち際）を利用するもの

(ア) 金古6区42・52・53号溝 この走行方向で流水痕跡をもつものは本遺構しかない。状況からみて①-イ-（エ）6・7区と同様の谷筋へ向かって走行するが、傾斜が逆転した結果方向も変化したに過ぎない。遺物・埋土から平安時代に比定される。

以上を整理すると、流水痕跡を持つ溝は①の北西-南東方向のものが圧倒的に多く、③の南西-北東方向のものは例外的で、②の北南、東西・西東方向のものは性格が若干異なることとなる。なお、①が多いのは地形の傾斜方向から見て、極めて当然の結果である。

流水量に着目し、流水痕跡の程度や溝の規模を比較すると、金古北十三町遺跡よりも冷水村東・西国分新田遺跡の方が際立っている。それは、水田跡の検出分布とよく符合しており、前者では皆無であるのに対して、後者では古墳時代及び平安時代の水田跡が検出された。したがって、後者は元来用水にやや恵まれていたと思われ、何等かの条件変更により近年まで畑地化されていたのではないかと推測している。また、後者のD区18・19・20号溝、22号溝は、土地改良以前まで用水路として存続していたが、特に直接宿用水から引水していない点は注意を要する。なお、本遺跡検出の用水路（溝）はほとんど平安時代以前のものであり、D区のものも例外的である。この傾向は自然流路においても見られ、金古4区小谷地や7～8区のⅢ'(As-B二次堆積)の堆積の状況は、As-B降下に近い時期谷地へ表流水によりAs-Bが集積されたことを示すと共に、それ以降はこうした顕著な水性堆積を土層観察で確認することはなかったのである。

(4) まとめと課題

本遺跡で調査された用水路（溝）には、時期的な偏りが認められた。それは、中世以降の検出例が極めて少ないことであり、宿用水の形成と無関係とは考えられない。第7図でも分かるとおり、宿用水は主要河川からの引水以外にも軽微な湧水路さえ引き込んでおり、まるでダムのように傾斜なりに東南流する流路を遮断しているのである。したがって、宿用水の形成は、下流の用水系への影響と不可分であり、下流の水利権への配慮なくしては成立できない。この点で金古宿の母体となる集落移動前集落の有力な候補地が、引間城の東隣地に広がる「後疋間」の中世石造物分布地を中心とする地域ではないかと考えるのである。そして、そこから谷筋に集落が分布していた痕跡として、冷水D区や西国分G区の中世井戸を考えておきたい。

(2)で述べたとおり、金古宿が江戸初期に成立するに伴って、【安良田】という新田が形成されたと考えたが、面積的に少なく地形的に開田の余地も残されていると見られるので、河川の水量の限界もさることながら、宿用水の確保の方が優先したのではないかと考えるのである。宿場を維持するには、それほど用水が必要不可欠であったにちがいない。また、「金古」は元来水田が少なく、集落移動に際しても用水系の再編を伴わず、比較的容易に伝統的な集落や農地を離れられる素因があったのではないだろうか。

金古宿の集落移動では、宿場整備が優先し大規模な新田開発はなされなかった。これは、宿場整備に伴う集落移動の特色として見ておく必要があると考える。したがって、今後更に三国街道沿道或は榛名山東南麓における江戸初期の集落移動の検討作業を蓄積してゆき、集落移動と新田開発、宿用水整備との相互の位置づけを見てゆくことを課題としておきたい。

註

- (1) 天田伝七郎「そのかみの金古」『群馬県群馬郡金古町誌』十日会編 1963
- (2) 南雲栄治「三国街道金古宿の地理学的研究」群馬県立前橋女子高校『紀要』創立60周年記念号 1970
- (3) 拙稿「江戸初期の井出集落移動に関する一視点 ―周辺遺跡調査の井戸跡深さをめぐって―」『研究紀要 15』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- (4) 木村礎「集落移動の話」『村の世界 村の景観 木村礎著作集Ⅶ』179頁
- (5) 「旅籠屋再建願」（前掲）「そのかみの金古」所載
- (6) 近藤義雄氏に御教授頂いた。
- (7) 「金古町の歴史概観」（『群馬県群馬郡金古町誌』十日会編 1963）16頁の記載による。
- (8) 取水口と推測される部分は、現在既に護岸工事がなされている上、該当する【安良田】の水田も現在は中部用水を利用しておりその痕跡をとどめない。

3. 金古北十三町遺跡 8 区 1 号掘立柱建物址の検討

石井 榮一

(1) はじめに

本報告は、金古北十三町遺跡 8 区より検出された掘立柱建物と推定できる 1 号掘立柱を、建築学的見地から検討したものである。

金古北十三町遺跡は、三国街道に開かれた金古宿の東に位置し、南側には染谷川、また東側には牛池川小河川がある。また金古宿及び河川に囲まれた範囲内で最も地盤が高まった位置には現在集落がある。この集落は天正年間には既に存在していたことが古文書等から確認されており、金古宿共々江戸時代初期には既に人々の生活が営まれていた。一方 1 号掘立柱建物址のある 8 区の遺構は、浅間山が天明 3 年（1783）に爆発したさいに噴出された軽石（以降、天明の軽石と略す）が堆積していることが確認されており、本遺構はその前後に廃棄された可能性が推定されている。詳細は第 3 章に詳しいが、それ以降建物の痕跡はみられなかったようで少なくとも明治初期の地図（第 7 図）には畑地となっており、現在まで続いていた。

そこで、18 世紀後期からそれ以前と推定される 1 号掘立柱建物址に付いて建築学的見地からその特徴を検討して見たいと思う。なお、筆者は発掘調査には立ち合っていない。そのため、検討に必要なデータは調査資料を元とし、詳細な内容や疑問点については調査担当者より情報を得たうえで検討したことを先に記しておく。

また、検討を加えるにあたり必要に応じて寸法の記述を尺を優先させて記述した。これは復元検討の概要を知る上で理解しやすいと考えるからである。また長さを記述する場合は 1 間（6 尺・1.82メートル）とし、柱間の間を表記する場合は一間と漢数字により記述とし区別することを了承願いたい。

(2) 1 号掘立柱建物址と他の遺構

1 号掘立柱建物址の規模を推定できる範囲は東西方向 8.5メートル、南北方向 6.7メートル程度である。

建物址周辺の他の遺構の検出状況を見ると、西側は耕作痕が遺構の西側を攪乱しながら調査区域境まで続いている。また東側は 18 世紀後半以降と推定されている 5・64・65 号土壌が隣接し確認されている。北東側には 5 号溝が建物址の中程まで若干湾曲しながら東側より延びてきている。さらにその外側 6メートル程の位置には、建物址とほぼ平行に 4 号溝がほぼ調査区域一杯に東西に掘られている。この溝の西端は粘土の採掘坑まで延びている他、中程に 1 号井戸内側に 3 号井戸が接して確認されている。なおこの 1 及び 3 号井戸については、筆者は井戸と断定しにくいと考えている。

その他、建物址西南側には 2 号井戸が確認されている。これらの周辺遺構中、耕作痕を除きいずれも 18 世紀後半以降の年代推定がなされている。

(3) 建物址の検討

1 号掘立柱建物址は、南北に延びる調査区域の中央やや東寄りに検出されている。検出された柱穴上におおよその軸線を設定し、それに重なる柱穴にはそれぞれに番号を付すると共に推定される規模を検討した（第 360 図参照）。残念ながら前述したように遺構の西側は畑の耕作が行われたため、攪乱されそれ以上の内容は確認できなかった。遺構の検討はまず軸線の設定を東西軸、南北軸に分けそれぞれ行った。まず東西軸をみると、最も北側の軸線は P 1～P 8 までが想定できた。続いて 1 列南に下がり P 32～P 13 間、P 16～P 20 間、P 22～P 24 間、そして最南列は P 25～P 31 間がそれぞれ想定できた。

一方、南北軸は最東列は P 8～P 31 間、続いて一列西側に P 7～P 29 間、P 6～P 28 間、P 5～P 27 間、P 4～P 26 間、P 3～P 25 間である。

さてこの推定範囲から建物址としてまとまりある規模を検討すると P 3～P 8 間（東西軸）は 6.58メートル、P 8～P 31 間（南北軸）は 6.67メートルとなる。これを曲尺寸法（30.3cm）に換算すると P 3

第8章 考察

～P 8間は21.7尺、P 8～P 31間は22尺となる。またP 1及びP 2はいずれも北側の東西軸線上に重なるがそれと直交する南北軸線上が攪乱のため柱穴等の確認できていない。そのため推定の域を出ないが、P 1～P 3間の想定柱間寸法は1.88メートル（6.2尺）あり、後述するが推定範囲内の柱間寸法とも合致する。このことからして、1号掘立柱建物址はさらに西側に延びていた可能性が強く、東西軸を桁方向南北軸を梁方向とする建物であったとみることができる。

次に各軸線設定を元に平面的特徴をみてみることにする。まず桁方向の南北側柱筋より3.1尺（94cm）内に入った位置に柱列が認められるのである。柱穴番号では北側P 32～P 13間に5つの柱穴、南側ではP 22～P 24間に3カ所の柱穴がそれぞれである。また梁方向中央には、やはり東西に柱列が認められ、P 22～P 24間の5カ所の柱穴が存在しているが、これは恐らく棟通りと一致するものである。この通りから南・北の柱間寸法はいずれも7.9尺（3.33m）となっている。よって梁方向の柱間割りとは、棟通りよりそれぞれ7.9尺の位置に上屋柱通り、さらに3.1尺外側に側柱通りが位置し、総体の梁方向長さは22尺（6.67m）となっている。

次に桁方向をみると、東側寄りP 27～P 31間の9.3尺（2.82m）を3.1尺の等間割りとしている。P 25・P 26・P 27の各柱穴間は二間割とし、一間当たり6.2尺（1.88m）としている。これらの寸法から、1間を6.2尺、半間を3.1尺とする基準寸法により本遺構は計画されたと推定できる。

よって先にもふれたが、北桁側通りの延長にあるP 1はP 3から6.2尺、1間の位置に有り、通芯上に乗っていることから、本遺構の一部とみることができる。想定される建物の桁行寸法は4.5間（8.46m）までは認めることができ、さらにP 1の存在により西側に桁行が延びる可能性もあったが、畑の耕作による攪乱で柱穴は検出されていない。

以上のことから、おおよその柱の軸線が設定できた。これらの情報からある程度建物の特徴を検討す

ることができる。まず一番の特徴は桁方向東より三間（P 31～P 27）までの間は、各軸線の交点に柱穴が多数検出されているのに比べ、桁方向西より二間（P 27～P 25）は側通りの軸線交点及び棟通りのみである。これは東側は間仕切り等のある部屋が存在したこと、それに比べ西側は土間或いは土座等の比較的大きな空間を有する部屋であったことが考えられる。

次に、東妻側及び南北の桁通りより3.1尺（94cm）それぞれ内側に柱通りが認められるが、これは上屋柱の通りである。つまり梁方向の断面を想定した場合、柱間7.9尺（3.33m）二間に上屋梁が架かり、その外側3.1尺出た通りに側柱が建つ軸組構造になるのである。

(4) 建築時期の検討

そこで本遺構の建築時期であるが、直接推定できる資料等がないため、8区内での年代を検討できる情報を整理して見る。本遺構は全体的に年代を特定できる遺物が少ないが、まず表土より陶磁器が採取されている。本陶磁器片は17世紀を上限としていることが推定されている。

次に1号掘立柱建物址北西側に確認された粘土層の採掘跡が18世紀前半から後半にかかる時期のものであること。北側に東西に走る4号溝及び1号・3号井戸から天明の軽石が検出されていることから、18世紀後半頃に埋った可能性が高いこと。また1号掘立柱建物址及び2号井戸も同様である。また、1号掘立柱建物址の西側は格子上に耕作痕が入っているが、これはやはり東側に接して土壌状に検出された芋室（イモムロ）共々に18世紀後半以降の時期であることなどが判明した。

以上のことを考慮し検討する限り、少なくとも浅間山が噴火した天明3年（1783）前後には1号掘立柱建物址に建っていた建物は現存せず、また周辺の構築物等も廃棄された可能性が極めて高いことが推定できる。

(5) 他の例との比較

そこで上屋の存在時期の検討であるが、前述のよ

うに下限を18世紀後半とするなら、上限がどの程度遡れるかについてであるが、まず現存する古民家で建築年代が近い建物を参考としてみる。まず、旧茂木家住宅（富岡市・重要文化財）では建築規模は、桁行16.2メートル、梁間8.6メートル（復元後）で建築年代は17世紀後半（修理後の復元時期）とされている。当初材には墨書により大永7年（1527）の年紀が記されていた。間取りは広間型三つ間取で、屋根は切り妻造り、板葺き、昭和52年に修理、床上は全て板敷きである。

次に赤城山南麓になるが、旧阿久沢家住宅（宮城村）がある。建築規模は桁行15.33メートル（8間）、梁間8.21メートル（4間半）（復元後）、屋根は寄棟造り茅葺き、建築年代は17世紀後半である。

間取りは広間型三つ間取りで、コザには畳が入る。軸組では上屋柱が良く残っている。柱間寸法は、桁行では土間が一間6尺、広間が一間7尺、コザが一間6.2尺としている。桁行は上屋梁間を15尺の等間割とし、前後に各々6尺の下屋を出している。コザは畳敷きであったと思われる6.2尺の柱間を用いている（『重要文化財 阿久沢家住宅保存修理工事報告書 昭和51年刊』）。

これらの現存建物のうち、特に旧阿久沢家は本遺構に近似点がみられるが、まずは上屋柱であろう。この柱が残る建物は比較的古形式で、少なくとも江戸時代中期或いはそれ以前とみることができる。

次に柱間寸法であるが、本遺構は桁行の柱間を6.2尺＝1間としてかなり正確に用いられているのに対し、旧阿久沢家では「コザ」は畳を用いているため6.2尺の柱間寸法を用い、他はそれぞれに違いがある。本遺構にみられる6.2尺を基準寸法とする形式に比べ、旧阿久沢家にみられるように柱間寸法を室内の仕様により違える形式はむしろ古形式といえる。

以上のように他の事例と比較して1号掘立柱建物址の上屋を検討したが、旧阿久沢家に比べると柱間寸法を1間6.2尺で設定している等はかなり技術的な発展を窺わせる。旧阿久沢家に比べると、時代的

3. 金古北十三町遺跡8区1号掘立柱建物址の検討

な新しさを想定せざるをえず、やはり18世紀以降とみるのが妥当であろう。

(6) まとめ

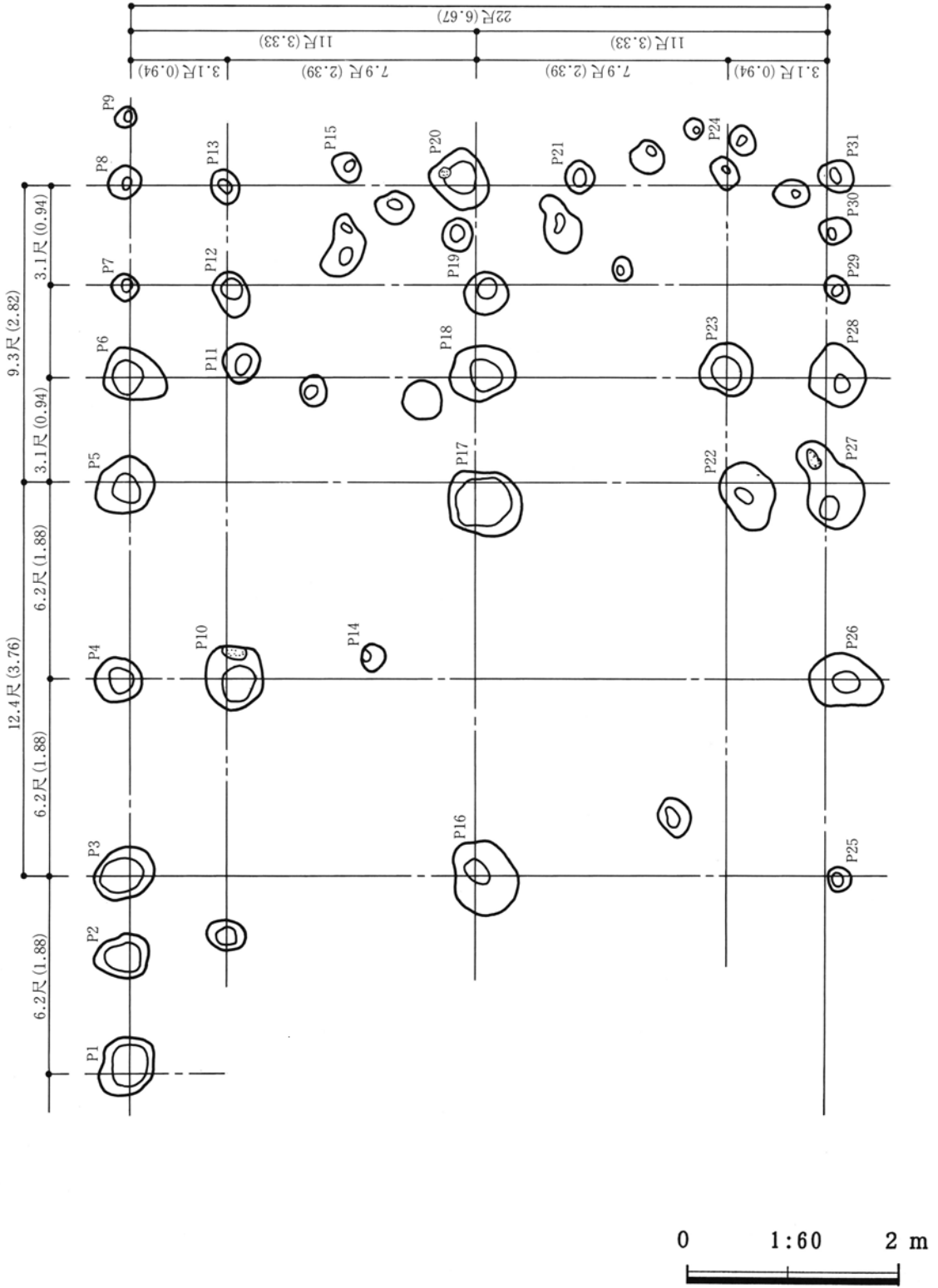
検出された遺物等からの時代推定では下限を18世紀後半とせざるをえず、一般的にはこの時期にこれほどの規模を持つ建物が掘立柱であったとは考えにくい。先に紹介した宮城村の阿久沢家は17世紀後半の建立年代を持つ古民家であるが、既に柱の下に玉石を置く石場立ての基礎を持っている。内容的にみてもむしろ旧阿久沢家に比べて新しい時期の特徴を持っているとすれば、本遺構は掘立柱建物とするより基礎を持ちその上に柱を建てる上家構造（一般的に石場建てと呼ぶ）の建物であったとみるのが妥当と思われる。

この場合、柱穴と思われていた穴の形状等から考えると、基礎は玉石を据えていたとみるのが自然である。柱穴径の不揃い具合や、確認面からの掘込みのバラツキも玉石の形状による違いとみることができ

以上のように、1号掘立柱建物址を検討してきたが、残念ながら西側部分が攪乱により遺構全体を理解することはできなかった。しかし、18世紀前期から後期の建物であったことが推定されることから、間取りも旧阿久沢家等にみられるような土間・ヒロマ・コザ等を持つ民家であったことが十分に窺えるのである。調査により検出された範囲は恐らくコザ及びヒロマ部分と思われる。

また柱穴の配列から想定できる架構方法は、中央の棟通りより南北にそれぞれ7.9尺の位置に上屋柱を建て上屋梁を架け、その外3.1尺の位置に側柱を建てる繋ぎ梁を架けるものと思われる。

このような点から推定する限り、本遺構は少なくとも18世紀中期以降の建築的特徴を持った建物で、玉石等の基礎の上に建つ建物であったことが推定できるのである。



第360图 8区1号掘立柱建物跡想定計画寸法图

遺構計測表

第3表 冷水村東遺跡 A区3号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	66	56	42	150	4	63	48	41	160	7	84	60	70	—
2	53	48	38	140	5	53	48	46	—					
3	50	43	31	140	6	57	47	47	145					

第4表 冷水村東遺跡 A区4号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	34	32	20	133	4	47	39	27	150	7	(52)	(22)	31	153
2	42	37	51	115	5	46	43	31	135	8	64	54	25	No. 1へ140
3	49	45	35	150	6	41	36	45	124					

第5表 冷水村東遺跡 B区1号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	48	60	0	206	5	90	78	64	187	9	108	70	70	202
2	70	66	0	205	6	102	80	58	208	10	76	64	50	No. 1へ213
3	68	60	54	200	7	104	72	56	218	11	75	58	52	—
4	78	38	72	208	8	130	84	60	204					

第6表 冷水村東遺跡 B区2号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	48	46	60	150	4	28	26	14	—	7	48	38	24	No. 1へ236
2	48	44	46	156	5	42	(30)	28	183					
3	28	24	16	228	6	50	44	44	210					

第7表 冷水村東遺跡 B区1号柱列 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	50	41	28	134	3	42	40	21	187					
2	40	38	48	184	4	37	34	34	—					

第8表 冷水村東遺跡 D区5号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	45	43	43	211	3	38	35	21	141	5	54	49	33	170
2	52	50	16	167	4	48	42	24	203	6	39	29	23	No. 1へ178

第9表 冷水村東遺跡 D区6号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	103	74	64	332	3	92	75	60	171	5	118	97	55	180
2	120	76	51	169	4	95	77	44	340	6	80	78	62	No. 1へ158

第10表 冷水村東遺跡 土坑(1) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
A区					42	1G-21	29	28	16	31	1M-20	43	39	48
9	1D-22	264	106	44	43	1G-20・21	34	33	37	D区				
10	1I-23	200	100	24	44	1G-21	61	41	32	7	1G-20・21	142	103	48
11	1F-20	134	112	45	45	1G-20・21	34	28	21	8	2T-19・20	52	48	29
32	1I-23	52	47	36	46	1G-21	45	39	34	13	2T-19	43	37	20
33	1I-23	43	36	18	47	1D-22	32	26	17	14	1G-20	232	105	26
34	1H-21	50	38	10	48	1E-22	35	15	10	15	1G-20	240	88	58
35	1G-21・22	32	25	48	B区					16	2T-19	125	99	24
36	1G・1H-21	31	24	27	1	1L-19・20	81	66	38	17	6号掘立P5			
37	1G・1H-21	25	—	7	2	1S・1T-21	78	73	16	18	6号掘立P6			
38	1G・1H-21	40	—	12	3	2B-22	57	55	11	19	6号掘立P1			
39	1G・1H-21	31	—	10	4	2B-22	116	56	17	20	2S-18	133	61	14
40	1G・1H-21	33	29	22	5	2B・2C-22	92	76	5	21	2S-18	53	40	17
41	1G-21	36	34	23	6	1S-20	206	122	14	22	2S-18	94	60	14

遺構計測表

冷水村東遺跡 土坑(2) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
23	2S-17-18	107	54	10	4	7I-7J-28	108	78	43	30	8F-31	90	40	8
24	2S-18	48	47	7	5	7M-7N-31-32	108	63	30	31	8F-31	153	84	11
25	2T-17-18	115	79	23	6	7N-30	180	63	33	32	8E-31	55	25	15
26	5号掘立P 1				7	7N-29	199	37	14	33	8E-8F-31	87	60	32
27	5号掘立P 3				8	7M-30	97	81	43	34	8F-31	42	20	10
28	5号掘立P 2				9	7M-29	121	58	26	35	8E-31-32	69	30	23
29	6号掘立P 3				10	7K-7L-31	62	52	17	36	8E-32	50	46	26
30	6号掘立P 4				11	7R-7S-33	76	47	33	37	8E-8F-32	140	72	30
G区					12	欠番				38	8F-32	49	34	22
1	6O-26	67	65	47	13	7S-31-32	74	31	33	39	8F-8G-30-31	126	51	21
2	6G-6H-26-27	350	70	—	14	7S-32	58	41	21	40	8G-31	37	34	14
3	6Q-6R-26	126	70	22	15	7S-32	75	46	15	41	8G-8H-31	307	107	34
4	6M-28-29	545	70	16	16	7S-32	63	40	29	42	8I-8J-31-32	178	87	53
5	6J-27-28	540	44	17	17	7T-32	32	22	16	43	8I-8J-32	184	96	25
6	6I-26-27	100	90	32	18	7T-32	24	22	10	44	8H-8I-33-34	136	57	7
7	6K-6M-28	683	75	12	19	7T-32	55	24	11	45	8H-33-34	61	52	7
8	6Q-29-30	70	6	—	20	7T-33	62	37	17	46	8F-33	81	56	24
9	6O-29	(302)	80	17	21	欠番				47	8A-33	252	83	60
10	6R-26	(145)	81	—	22	8B-30	72	35	12	48	7J-7K-31	538	56	80
11	6O-27	68	52	—	23	8B-30	74	44	12	49	7J-7K-31	212	69	23
12	6S-6T-27-28	293	227	95	24	8B-30	36	29	10	G区 火葬土壇				
13	6Q-28-29	(97)	92	28	25	8B-31-32	82	60	7	1	7A-28	189	75	23
H区					26	8C-30	36	29	16	H区 竪穴状遺構				
1	7J-7K-30	218	71	51	27	8D-30-31	42	34	15	1	7L-7M-31-32	283	270	25
2	7J-29	63	60	19	28	8D-30	22	27	13					
3	7J-28-29	71	46	16	29	8E-30	55	35	7					

第11表 冷水村東遺跡 D区F A下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(7.44)	2.00	(10.592)	3	5.80	5.20	13.333	5	3.36	3.32	7.040
2	10.32	3.56	31.380	4	2.80	2.58	6.890	6	6.40	4.89	26.549

第12表 冷水村東遺跡 E区F A下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(2.91)	2.80	(6.032)	7	(1.36)	1.02	(1.424)	13	2.02	1.59	3.029
2	2.69	2.58	6.940	8	(0.59)	(0.52)	(0.165)	14	2.92	1.33	3.968
3	2.62	2.32	5.866	9	(1.82)	(0.73)	(0.896)	15	(4.02)	0.62	(2.709)
4	2.25	2.03	4.240	10	(2.07)	1.82	(2.992)	16	2.33	(0.82)	(1.824)
5	(4.91)	2.40	(9.727)	11	3.11	1.61	4.010	17	3.51	(0.92)	(3.226)
6	(3.03)	1.19	(2.970)	12	2.55	1.94	4.810				

第13表 冷水村東遺跡 C区A s-B下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(6.22)	(4.95)	(16.950)	3	(8.05)	(5.20)	(33.067)	5	(5.20)	(3.48)	(8.750)
2	(10.80)	5.82	(48.667)	4	(7.08)	5.71	(30.350)				

第14表 冷水村東遺跡 D区A s-B下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(6.50)	(5.20)	(18.600)	2	(13.30)	7.50	(74.496)				

第15表 冷水村東遺跡 E区A s-B下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(7.68)	(1.68)	(10.720)	3	10.10	(4.82)	(41.312)	5	(24.80)	7.84	(199.168)
2	(18.00)	(7.36)	(93.867)	4	13.20	(11.60)	(135.040)	6	(10.60)	(4.60)	(48.992)

第16表 冷水村東遺跡 F区A s - B下水田跡 面積等計測表

水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	水田 No.	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)
1	(13.80)	10.30	(95.400)	3	(10.00)	(8.50)	(62.160)	5	(13.40)	(4.70)	(47.650)
2	(11.20)	(1.20)	(12.400)	4	(7.20)	3.60	(23.800)				

第17表 金古北十三町遺跡 1区1号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	42	34	58	198	5	62	54	42	208	9	76	61	48	218
2	68	51	50	212	6	70	70	40	146	10	60	53	55	182
3	58	41	40	196	7	53	48	42	148	11	50	48	42	No. 1 ~ 215
4	62	56	36	190	8	66	(40)	45	124					

第18表 金古北十三町遺跡 1区2号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	38	26	22	168	5	50	35	20	155	9	34	32	20	152
2	33	31	12	181	6	44	40	32	134	10	40	36	24	No. 1 ~ 155
3	41	31	25	144	7	45	42	30	204					
4	40	36	24	170	8	34	31	22	163					

第19表 金古北十三町遺跡 1区3号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	66	48	34	190	4	55	51	34	222	7	(38)	47	33	No. 1 ~ 278
2	42	28	25	178	5	54	45	40	187					
3	60	60	28	204	6	50	48	27	—					

第20表 金古北十三町遺跡 1区4号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	54	37	33	167	5	47	41	30	168	9	37	33	23	152
2	47	41	22	156	6	55	32	24	158	10	42	36	24	No. 1 ~ 152
3	40	36	30	165	7	34	33	25	166					
4	40	38	27	150	8	40	35	24	165					

第21表 金古北十三町遺跡 1区5号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	71	55	40	214	6	27	24	26	167	11	58	52	18	218
2	55	49	18	187	7	41	37	28	133	12	50	48	15	170
3	54	45	20	175	8	25	24	18	226	13	64	60	33	No. 1 ~ 204
4	32	30	18	131	9	20	18	21	190					
5	30	29	55	154	10	30	24	22	158					

第22表 金古北十三町遺跡 1区6号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	47	45	39	192	5	86	68	42	186	9	60	43	35	147
2	48	44	30	185	6	75	68	36	181	10	53	47	40	No. 1 ~ 152
3	98	76	28	143	7	65	62	48	197					
4	86	75	43	151	8	105	96	63	173					

第23表 金古北十三町遺跡 2区1号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	55	53	51	188	5	58	53	51	214	9	58	53	56	194
2	63	52	52	220	6	65	58	54	242	10	55	50	61	No. 1 ~ 210
3	70	65	57	210	7	58	55	50	188					
4	65	60	52	180	8	73	58	59	202					

第24表 金古北十三町遺跡 2区1号柱列 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	25	24	26	184	2	35	27	41	163	3	31	22	34	—

遺構計測表

第25表 金古北十三町遺跡 5区1号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	38	32	56	140	4	35	32	70	170	7	33	32	52	170
2	34	30	19	127	5	31	30	58	128	8	35	32	52	No. 1へ168
3	25	24	55	156	6	30	28	9	152					

第26表 金古北十三町遺跡 5区2号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	42	34	40	158	4	32	30	42	180	7	46	36	46	188
2	46	26	34	171	5	54	34	54	178	8	32	28	42	No. 1へ198
3	65	45	44	196	6	28	25	50	150					

第27表 金古北十三町遺跡 5区3号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	37	36	14	180	3	26	25	29	130	5	22	22	23	—
2	37	32	28	160	4	26	26	24	164					

第28表 金古北十三町遺跡 5区4号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	33	32	44	116	4	32	30	26	129	7	35	32	25	131
2	34	33	18	180	5	41	36	43	166	8	33	32	22	No. 1へ160
3	47	41	26	161	6	28	27	24	116					

第29表 金古北十三町遺跡 5区1号柱列 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	38	22	26	170	2	32	30	24	166	3	30	23	35	—

第30表 金古北十三町遺跡 6区1号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	20	18	20	348	3	18	18	14	—	5	22	21	20	No. 1へ166
2	20	18	14	188	4	22	19	13	146					

第31表 金古北十三町遺跡 6区2号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	38	32	58	140	4	54	48	61	160	7	36	30	43	—
2	26	23	53	200	5	50	43	56	170					
3	34	34	77	188	6	27	25	42	No. 1へ191					

第32表 金古北十三町遺跡 6区3号掘立柱建物跡 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	30	20	21	174	4	48	44	36	No. 1へ238	7	29	24	14	—
2	28	26	26	298	5	34	30	16	—	8	20	16	10	—
3	40	32	15	190	6	33	28	36	—					

第33表 金古北十三町遺跡 8区1号掘立柱建物跡(1) 計測表

ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)	ビット No.	規模 (cm)			次 No. との 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	25	22	10	336					No. 22へ100	15	28	26	21	55
				No. 19へ186	8	34	33	16	96					No. 26へ358
2	72	60	17	345					No. 31へ66	16	24	24	23	90
				No. 23へ357	9	35	24	18	120					No. 25へ336
3	51	46	26	181					No. 22へ100	17	58	56	26	116
				No. 30へ40	10	33	23	27	108					No. 28へ108
4	47	42	16	181					116	18	82	54	18	168
				No. 20へ113	11	58	56	21	116					No. 27へ82
5	58	53	25	109					No. 25へ110					No. 33へ62
				No. 23へ342	12	33	29	18	136	19	66	48	25	580
6	62	48	24	88					106	20	62	51	24	320
				No. 21へ110	13	30	29	25	106					No. 32へ238
7	25	25	25	98					No. 28へ194	21	39	35	18	72
					14	35	29	26	57					

金古北十三町遺跡 8区1号掘立柱建物跡(2) 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
22	40	32	31	No.24~232	25	39	39	33	No.28~232	29	57	51	23	106
23	68	60	20	No.25~243	26	29	28	24	62	30	52	41	16	No.32~102
				118	27	63	53	27	117	31	21	21	24	
24	61	53	26	No.27~247	28	49	47	24		32	35	30	8	
				80						33	35	31	22	

第34表 金古北十三町遺跡 8区2号掘立柱建物跡 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	44	39	46	222	3	31	30	47	138	5	38	35	56	145
2	39	28	51	162	4	33	33	37	254	6	39	33	38	No.1~127

第35表 金古北十三町遺跡 8区3号掘立柱建物跡 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	29	25	31	159	5	30	29	36	177					No.10~163
				No.9~67					No.10~86	8	17	16	17	168
2	26	21	20	154					No.11~54	9	26	25	31	93
3	26	24	35	58	6	39	35	36	80	10	35	34	35	
				No.10~169					No.12~62	11	20	19	29	160
4	33	31	27	148	7	27	21	29	85	12	25	21	33	

第36表 金古北十三町遺跡 9区1号掘立柱建物跡 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	44	36	39	154	4	43	38	28	230	7	64	50	50	116
2	(50)	40	36	184	5	58	42	36	97	8	44	40	32	204
3	36	36	38	218	6	47	30	16	136	9	47	44	41	No.1~242

第37表 金古北十三町遺跡 14区1号掘立柱建物跡 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	46	44	24	132	3	40	37	37	205	5	47	45	33	No.1~215
2	61	40	32	66	4	48	45	34	198	6	30	30	20	No.4~80

第38表 金古北十三町遺跡 14区1号柱列 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	127	97	52	262	2	104	97	52	264	3	107	100	52	—

第39表 金古北十三町遺跡 15区1号掘立柱建物跡 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	23	23	26	184	3	27	23	26	220	5	23	20	24	185
2	27	26	26	199	4	27	26	28	210	6	33	28	21	200

第40表 金古北十三町遺跡 15区1号柱列 計測表

ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)	ピット No.	規模 (cm)			次 No. の 間隔 (cm)
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	46	39	44	152	3	51	33	34	179	5	33	30	22	—
2	34	33	28	199	4	40	28	35	106					

第41表 金古北十三町遺跡 土坑(1) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
0区					9	2G-20	33	31	7	4	2J-21	29	28	10
1	2D-18-19	78	57	7	10	2G-20	31	26	6	5	2K-20-21	38	31	7
2	2I-20	24	20	10	11	2H-20	35	29	12	6	2M-2N-19	220	72	9
3	2I-20	23	19	8	12	2H-20	32	30	20	7	2N-19	208	61	16
4	2I-20	40	29	14	13	2H-20	33	31	16	8	2O-18-19	226	135	65
5	2H-20	40	32	12	1区				9	1号掘立P6				
6	2I-20	23	20	16	1	2J-21	107	58	17	10	1号掘立P5			
7	2H-20	48	38	7	2	2K-21	76	50	11	11	1号掘立P4			
8	2H-20	45	31	11	3	2J-21	30	29	11	12	1号掘立P3			

遺構計測表

金古北十三町遺跡 土坑(2) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
13	2M-21	61	38	36	71	4号掘立P 8				129	2L-20	24	20	10
14	2M-21	62	49	32	72	4号掘立P 9				130	1号掘立P 2			
15	3号掘立P 3				73	4号掘立P 2				131	1号掘立P 1			
16	2M-21	54	32	16	74	4号掘立P 1				132	2L-20	20	17	10
17	3号掘立P 2				75	2M-19	28	26	7	133	2M-18	84	65	42
18	1号掘立P 9				76	2N-19	25	21	10	134	5号掘立P 7			
19	2M-21	54	48	27	77	2N-19	22	22	14	135	2K-18	(39)	(27)	13
20	1号掘立P 10				78	2N-19	39	30	13	136				
21	2O-19	33	32	25	79	2N-19-20	47	32	12		欠番			
22	2O-19	53	35	24	80	2N-20	36	29	11	138				
23	2O-19	43	28	12	81	2N-20	30	23	19	139	4号掘立P 3			
24	2O-19	33	21	24	82	2N-2O-20	34	33	15	140	4号掘立P 4			
25	2O-19	31	24	14	83	2N-2O-20	41	39	25	141	欠番			
26	2N-2O-19	48	31	11	84	2N-2O-20	65	33	13	142	2L-2M-19	218	146	49
27	2N-19	42	40	13	85	2N-20	50	49	16	143	2L-2M-19	225	121	7
28	2N-19	23	20	13	86	2N-21	41	33	11	144	4号掘立P 10			
29	2N-19	33	30	13	87	2N-21	34	32	15	145	2N-21	32	26	6
30	2N-19	32	30	13	88	2M-2N-21	37	35	29	146	2N-21	38	32	10
31	2N-19	28	24	8	89	2M-21	32	26	20	147	5号掘立P 5			
32	2N-19	49	35	30	90	2M-21	30	25	18	148	5号掘立P 6			
33	2M-19	26	24	9	91	2M-20	64	57	17	149	5号掘立P 12			
34	2M-19	46	45	14	92	2M-20	28	27	23	150	2J-19	19	17	8
35	2M-19	40	29	6	93	2M-20	29	28	27	151	2J-19	87	57	11
36	2M-18	28	27	9	94	2M-20	39	30	—	152	2J-19	23	22	12
37	2M-18	32	30	17	95	2M-21	63	40	39	153	2J-19	28	22	5
38	2M-19	32	26	11	96	欠番				154	2J-19	33	32	22
39	2L-2M-18	32	27	17	97	1号掘立P 7				155	5号掘立P 8			
40	2K-18	110	(61)	18	98	2M-21	37	(20)	17	156	5号掘立P 9			
41	2L-19	29	22	16	99	2M-21	29	24	14	157	2J-18	20	20	12
42	4号掘立P 5				100	3号掘立P 4				158	2J-18	22	21	7
43	4号掘立P 6				101	欠番				159	2I-19	18	16	21
44	2号掘立P 3				102	2M-21	32	29	2	160	2I-19	26	24	6
45	2K-19	35	32	30	103	2M-21	38	36	20	161	5号掘立P 10			
46	5号掘立P 4				104	2M-21	28	26	16	162	5号掘立P 11			
47	2号掘立P 4				105	3号掘立P 1				163	2N-19	26	24	23
48	2K-19	84	65	43	106	2M-22	(28)	(11)	5	164	2N-18	23	20	20
49	2号掘立P 5				107	3号掘立P 7				165	2K-21	60	44	19
50	5号掘立P 3				108	2L-22	48	37	17	166	2K-21	28	24	16
51	2号掘立P 6				109	2O-21	51	48	16	167	6号掘立P 3			
52	5号掘立P 2				110	2N-2O-21	67	62	29	168	6号掘立P 2			
53	5号掘立P 1				111	3号掘立P 6				169	2M-24	30	28	18
54	5号掘立P 13				112	3号掘立P 5				170	2N-24	25	22	16
55	2J-18-19	46	41	72	113	2K-22	38	25	12	171	2N-23-24	30	28	23
56	2K-18-19	45	41	70	114	2K-21	55	49	14	172	2N-23	54	41	17
57	2J-18-19	39	38	35	115	2K-21	52	(23)	37	173	2N-23	41	38	20
58	2J-19	33	32	18	116	2N-21	75	(35)	40	174	6号掘立P 4			
59	2J-19	62	51	19	117	1号掘立P 11				175	6号掘立P 5			
60	2J-20	38	32	17	118	1号掘立P 8				176	2M-2N-24	(63)	45	17
61	2号掘立P 7				119	2M-20	51	33	21	177	2M-24	37	24	15
62	2号掘立P 8				120	2L-21	37	34	15	178	2M-23-24	74	63	17
63	2号掘立P 9				121	2L-21	43	30	10	179	2M-23	68	61	9
64	2K-19-20	27	24	23	122	2M-20	43	(30)	33	180	2M-24	32	28	9
65	2号掘立P 10				123	2I-20	53	50	18	181	2M-24	88	68	23
66	2K-2L-19	40	31	27	124	2I-19	37	26	16	182	6号掘立P 10			
67	2L-19	49	50	22	125	2J-21	55	32	21	183	2M-24	22	20	10
68	2L-19	34	32	31	126	2J-21	36	33	12	184	2M-24	57	35	9
69	2号掘立P 1				127	2J-21	49	27	12	185	2L-2M-24	27	24	14
70	4号掘立P 7				128	欠番				186	6号掘立P 9			

金古北十三町遺跡 土坑(3) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
187	2M-23	46	34	29	93	2R-20	44	37	31	2	3C-24	75	56	17
188	2L・2M-23	48	35	27	94	2R-20	28	28	15	3	3G-25	48	44	22
189	2L-23	43	42	20	95	2Q-20	31	28	12	4区				
190	2L-23	40	35	13	96	2R-20	37	26	20	1	4E-23	30	24	13
191	2L-23	25	20	12	97	2R-20	40	31	13	2	4E-23	29	28	20
192	2M-23	28	21	14	98	2R-20・21	20	19	12	3	4E-23	57	56	7
193	2L-23	33	30	9	99	2R-21	40	32	23	4	4E-23	66	48	54
194	2L-23	30	24	7	100	2R-21	48	43	16	5	4E-23	37	36	15
195	2M-23	63	58	13	101	欠番				6	4E-23	65	25	15
196	6号掘立P 8				102	2S-21	40	26	32	7	4E-23	34	22	15
197	2M-23	48	51	15	103	2S-20	71	30	8	8	4E-23	28	24	18
198	2L・2M-23	24	21	7	104	2S-20	39	26	34	9	4E-23	28	24	18
199	2M-23	29	22	10	105	2S-19	28	27	37	10	4D・4E-23	39	26	32
200	2M-23	27	23	13	106	2R-21	42	35	11	11	4D-23	37	27	12
201	6号掘立P 6				107	1号掘立P 2				12	4D-23	23	22	19
202	2M-23	25	24	14	108	2R-21・22	103	96	25	13	4D-23	32	30	23
203	2M-23	(58)	43	13	109	欠番				14	4D-23	29	25	24
204	6号掘立P 7				110	2R-22	32	28	26	15	4D-23	53	33	9
205	2M-23	30	29	13	111	2R-22	28	25	23	16	3R-24	195	(125)	32
206	2M-23	18	16	14	112	2R・2S-21	36	33	5	17	3Q-24	141	(55)	33
207	2M-23	31	30	9	113	2S-22	29	25	14	18	3P-24	30	27	33
208	2M-24	37	28	11	114	2S-22	24	19	11	19	3P-24	26	23	18
209	6号掘立P 1				115	2S-21	20	19	4	20	3S・3T-23	52	31	21
210	欠番				116	2R-22	31	25	14	21	3T-23	40	37	38
211	2L-23	42	36	6	117	2R・2S-22	42	34	28	22	3T-23	(30)	38	19
212	2L・2M-23	(29)	38	13	118	2S-22	45	29	20	23	3T-23	32	31	14
213	2N-23	38	34	14	119	2S-22	39	35	52	24	4A・23・24	46	28	14
214	2N-24	41	40	19	120	2S-22	34	29	23	25	4A-23	73	48	8
2区					121	2S-22	48	39	11	26	4A-23	60	42	49
1	欠番				122	2S-22	32	27	6	27	4B-23	75	48	15
66					123	2S-22	17	17	8	28	4B-23	30	22	18
67	1号掘立P 8				124	2T-22	36	34	32	29	4B-23	83	63	16
68	1号掘立P 7				125	欠番				30	4B-23	31	22	9
69	2Q-22	37	34	42	126	2T-20	66	57	11	31	4B・4C-23	129	(38)	48
70	1号掘立P 9				127	欠番				32	4C-23	27	26	4
71	2R-22	41	34	50	129					33	4B-23	110	53	8
72	1号掘立P 10				130	2R-22	45	34	16	34	4B-23	72	48	10
73	2R-22	(82)	67	19	131	3B-21	29	28	28	35	3Q-25	27	19	25
74	2R-22	28	27	28	132	3B-21	30	30	34	36	3Q-25	38	12	16
75	2R-22	41	32	13	133	3A-22	(49)	27	52	37	3Q-25	14	11	20
76	2R-22	52	28	13	134	2P・2Q-24	62	53	9	38	3Q-25	38	24	38
77	1号掘立P 1				135	2Q-23・24	(69)	(75)	8	39	3Q-26	41	30	33
78	2R-22	57	(36)	8	136	2Q-24	54	39	13	40	3Q-25	19	16	19
79	2R-22	96	93	9	137	2Q-23・24	(43)	(59)	8	41	3R-26	54	48	17
80	欠番				138	2Q-23・24	(75)	(111)	13	42	3R-26	19	19	12
81	2R-21・22	98	70	16	139	2Q-24	(91)	(75)	14	43	3R-26	23	17	9
82	1号掘立P 5				140	2R-24	115	77	36	44	3R-26	19	17	11
83	1号掘立P 4				141	2S-24	35	25	11	45	3R-26	27	19	17
84	2R-21	22	22	20	142	2S-23	28	22	10	46	3R-26	26	25	19
85	欠番				143	2S-24	85	(63)	23	47	3R-26	23	17	23
86	2R-21	86	76	19	144	1号柱列P 2				48	3R-26	24	22	26
87	1号掘立P 3				145	1号柱列P 1				49	3T-27	48	26	17
88	2Q-21	38	32	11	146	2T-24	25	20	36	50	3T-26	33	25	17
89	2R-21	40	38	16	147	1号柱列P 3				51	3T-26	32	31	30
90	2R-21	25	18	10	148	2P-25	(115)	(39)	(41)	52	4A-26	41	37	22
91	2Q・2R-20	36	34	19	3区					53	4A-25	52	29	11
92	2R-20	33	26	40	1	3L-25	125	(66)	105	54	4A-25	39	19	8
										55	4A-25	38	22	7

遺構計測表

金古北十三町遺跡 土坑(4) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
56	4B-25	42	29	12	114	4H-26	29	28	8	172	4F-25	34	32	18
57	4B-25	55	39	8	115	4I-26・27	24	17	8	173	4F-26	116	64	16
58	4B-25	33	28	21	116	4H-27	34	26	10	174	4G-26	52	40	28
59	4B-25	53	31	22	117	4I-27	27	23	15	175	4G-25	39	34	24
60	4A・4B-24	113	98	29	118	4I-27	47	38	16	176	4G-25	25	25	12
61	4B-24	25	18	19	119	4I-26	34	33	39	177	4F-25	28	15	8
62	4B-24	39	35	24	120	4I-27	33	31	8	178	4G-25	34	32	20
63	4B・4C-25	39	28	10	121	4I-27	34	23	13	179	4D-27	(35)	31	26
64	4C-25	58	26	7	122	4I-27	27	22	20	180	4G-25	34	25	35
65	4C-26	48	43	10	123	4I-26・27	33	27	11	181	4G-25	53	45	9
66	4C-26	38	29	25	124	4I-26	33	33	7	182	4G-25	153	140	15
67	4C-26	28	24	34	125	4I-26	66	52	10	183	4G・4H-25	49	36	16
68	4C-26・27	25	22	33	126	4I-25	21	14	8	184	4H-25	24	18	30
69	4C-27	45	24	28	127	4I-25・26	55	43	38	185	4H-25・26	29	23	13
70	4C-27	24	22	22	128	4I-25・26	59	45	17	186	4I-25	24	22	28
71	4C-27	33	25	18	129	4I-25	63	42	9	187	4I-25	21	20	6
72	4C・4D-27	88	76	20	130	4I・4J-25	53	50	16	188	4K-27	38	35	32
73	4D-27	35	20	12	131	4J-25	47	31	19	189	4K-27	41	39	22
74	3S-25	33	28	12	132	4J-26	31	25	7	190	4K-27	36	21	18
75	3S-25	38	21	9	133	4I・4J-26	96	52	32	191	4K-27	25	23	20
76	3T-25	35	19	18	134	4I・4J-26	24	20	13	192	4K-26	33	27	14
77	4B・4C-24	97	63	26	135	4J-26	35	34	18	193	4L-27	19	18	17
78	4C-24	43	35	22	136	4I-26	40	31	12	194	4L-27	28	27	13
79	4E-24	87	45	16	137	4I-26	(43)	45	10	195	4L-27	18	17	17
80	4C-25	27	24	22	138	4J-26	25	24	19	196	4L-27	30	25	20
81	4B-27	47	34	35	139	4J-26	23	23	20	197	4M-27	26	23	29
82	3P-23	50	46	22	140	4J-26	13	12	16	198	4M-27	30	30	32
83	3P-23	160	109	14	141	4J-26	36	33	36	199	4M-26	33	32	23
84	4B-23	(127)	75	44	142	4J-26	35	32	30	200	4M-27	(18)	17	17
85	4E-27	32	28	18	143	4J-27	31	27	33	201	4M-26	40	25	11
86	4E-26	31	30	20	144	4J-27	26	24	24	202	4M-26	25	25	19
87	4E-27	49	38	26	145	4J-27	16	15	20	203	4M-26	27	25	19
88	4E-26	48	36	40	146	4J・4K-26	27	23	9	204	4M-25	38	34	24
89	4E-26	40	30	14	147	4J-26	34	28	18	205	欠番			
90	4E-26	25	25	6	148	4J-26	31	27	9	206	4N-26	93	60	11
91	4E-26	22	20	4	149	4J-25	32	22	13	207	4N-25	28	22	10
92	4E-26	35	24	20	150	4J-25	28	23	18	208	4N-25	23	20	14
93	4E-25	46	31	4	151	4J-25	22	16	27	209	4N-25	39	31	24
94	4E-25	40	40	9	152	4J-25	(19)	17	9	210	4N-25	35	27	23
95	4E-25	30	24	4	153	4J-25	20	18	8	211	4N-25	27	19	21
96	4E-25・26	36	35	28	154	4J-25	33	28	29	212	4N-25	66	54	26
97	4F-26	21	21	11	155	4J-25	41	36	21	213	4N-25	41	35	18
98	4E・4F-26	32	22	21	156	4J-25	36	34	25	214	4N-26	40	35	28
99	4F-26	105	70	8	157	4J-25	50	39	28	215	4N-26	27	22	17
100	4F-26	21	17	4	158	4J-25	22	21	17	216	4N-26	33	27	24
101	4F-26	55	45	8	159	4J-25	29	27	44	217	4N-25	66	67	11
102	4F-26	35	28	12	160	4J-25	39	33	31	218	4N-25	22	21	21
103	4G-26	36	35	16	161	4J・4K-24・25	150	60	37	219	4N-25	37	35	19
104	4F・4G-27	23	23	12	162	4J-25	35	28	35	220	4N-26	41	33	25
105	4F-27	23	20	9	163	4J-25	32	21	8	221	4N-26	36	28	23
106	4G-27	28	26	13	164	4E-26	23	20	9	222	4N-26	36	32	22
107	4F-26	33	30	23	165	4E-26	51	29	14	223	4N-27	89	65	20
108	4G-26	57	46	31	166	4E-26	43	33	36	224	4N・4O-26	44	39	18
109	4G・4H-27	43	30	14	167	4F-25	62	49	9	225	4O-26	91	82	84
110	4H-26	58	39	15	168	4F-25	23	23	17	226	4O-26	36	29	28
111	4H-26	75	65	23	169	4F-25	42	32	30	227	4N-26	28	23	24
112	4H-26	43	24	5	170	4F-25	36	28	6	228	4N-26	21	19	17
113	4H-27	32	20	12	171	4F-25	23	20	9	229	4N-26	19	18	11

金古北十三町遺跡 土坑(5) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
230	4O-26	21	17	21	288	4D-23・24	136	62	67	39	5D-23	42	25	12
231	4O-26	30	26	21	289	4J-26	49	38	42	40	5E-23	47	28	10
232	4O-26	41	27	26	290	4I-26	25	22	18	41	5D-23・24	40	38	31
233	4O-26	25	22	16	291	4I-26	40	25	19	42	4T-23	22	20	17
234	4O-25・26	49	35	32	292	4I-26	21	17	20	43	4S・4T-24	26	18	50
235	4N・4O-25	40	29	29	293	4J-26	25	24	16	44	5G-26	33	30	6
236	4O-25	41	35	24	294	4I-25	33	14	20	45	5F-26	22	21	12
237	4O-26	42	27	20	295	4J-25	20	12	11	46	5D-24・25	39	35	15
238	4O-25	28	23	14	296	4H-25	20	18	12	47	5D-25	33	26	14
239	4O-26	29	27	14	297	4H-25	19	15	13	48	5F-25	29	21	19
240	4O-26	30	23	20	298	4H-25	28	21	16	49	5F-25	42	37	12
241	4O-26	27	24	33	299	4H-25	26	22	16	50	5F-24	31	29	41
242	4O-25	54	45	7	300	4H-25	25	21	18	51	5E-23	33	27	42
243	4O-25	29	28	14	301	4I-26	28	20	18	52	4S-27	52	47	52
244	4O-26	26	25	38	302	4L-26	25	21	30	53	4S-26	23	22	41
245	4O-26	97	72	21	303	4J-26	25	23	25	54	欠番			
246	4P-27	20	19	38	304	4F・4G-25	25	25	24	55	欠番			
247	4P-27	36	22	20	305	4F-25	27	26	40	56	5H-26	33	31	8
248	4P-27	27	19	24	306	3T-24	41	35	13	6区				
249	4Q-26	44	33	23	5区					1	5R-25	172	74	68
250	4K-26	28	24	20	1	3号掘立P 4				2	5P-26・27	42	34	10
251	4K-26	36	25	12	2	3号掘立P 5				3	5O-25	67	50	39
252	4K-25	30	28	23	3	3号掘立P 3				4	5Q・5R-25	(82)	(60)	7
253	4K-26	27	23	8	4	1号柱列P 1				5	5R-25	36	27	4
254	4K-26	117	72	18	5	3号掘立P 2				6	5O・5P-25	167	74	14
255	4L-25	39	31	7	6	1号柱列P 2				7	5O・5P-24	275	87	11
256	4L-25	55	51	10	7	5E-27	30	29	39	8	5O-24	260	88	16
257	4M-25	25	23	25	8	1号柱列P 3				9	5O-25	23	21	10
258	4M-25	29	29	14	9	欠番				10	1号掘立P 1			
259	4L-24	42	29	16	10	5B-25	45	13	20	11	1号掘立P 5			
260	4L-26	38	26	11	11	5B-25	25	24	21	12	1号掘立P 4			
261	4M-25	83	41	5	12	5C-25	29	21	23	13	5N-26	23	21	25
262	4M-25	35	34	35	13	5D-25	47	46	24	14	1号掘立P 2			
263	4M-24・25	43	35	30	14	5G-27	97	58	13	15	5O-25	25	22	13
264	4M-24・25	26	18	18	15	5G-27	162	20	8	16	1号掘立P 3			
265	4J-26	28	20	15	16	5G-26	113	20	5	17	5N-26	28	27	33
266	4K・4L-24	105	74	47	17	5D-26	31	23	27	18	5L-27	57	50	7
267	4L-24	43	32	32	18	5E-25	36	27	11	19	5L-26・27	102	93	24
268	4L-24	24	23	26	19	4S-23	23	23	34	20	5P-25・26	155	137	12
269	4M-26	26	24	20	20	4T-25	18	16	12	21	2号掘立P 5			
270	4P-24	72	62	14	21	4S-24	100	41	21	22	2号掘立P 4			
271	4Q-25	28	24	21	22	4S-24	33	22	37	23	5M-26	117	115	28
272	4R-25	46	23	18	23	4S・4T-24	28	20	29	24	5M-25・26	95	87	8
273	4O-22・23	31	27	6	24	4T-24	43	25	31	25	2号掘立P 3			
274	4O-22	32	31	23	25	4T-24	48	21	41	26	2号掘立P 7			
275	4O-22	31	27	28	26	4T-24	24	20	7	27	2号掘立P 6			
276	4O-22	49	25	22	27	5B・5C-23	65	36	9	28	5L-26	34	34	47
277	4I-24	73	56	26	28	5D-24	26	26	45	29	5L-27	37	35	27
278	4P-23	22	15	37	29	5C・5D-24	27	19	30	30	5L-27	38	31	19
279	3N-21	29	27	24	30	5C・5D-23	30	27	37	31	2号掘立P 1			
280	3N-21	23	19	20	31	5C・5D-23	40	37	4	32	2号掘立P 2			
281	3P-21	25	16	10	32	5D-23	37	30	53	33	欠番			
282	3P-21	(28)	24	7	33	5D-23	48	40	38	34	5I-26	53	48	17
283	3P-21	26	20	9	34	5D-23	21	20	16	35	5I-26	37	(34)	9
284	3Q-21	(20)	34	22	35	5D-23	94	92	13	36	5I・5J-26	170	46	33
285	3R-23	90	50	49	36	5D-23	84	82	8	37	5I・5J-26	134	35	8
286	4Q-26	22	18	23	37	5D-23	30	24	13	38	5J・5K-26	157	56	8
287	4Q-27	23	19	28	38	5D-23	38	29	13	39	5M・5N-22	(53)	(52)	14

遺構計測表

金古北十三町遺跡 土坑(6) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
40	5I-26	59	51	44	34	6P-6Q-25	32	30	16	92	6O-26	30	27	9
41	5I-25	(111)	(46)	74	35	6P-25	43	23	10	93	6O-26	31	27	7
42	5I-25	(172)	(84)	51	36	6P-25	36	29	9	94	6N-26	24	22	23
43	欠番				37	1号掘立P23				95	6N-26	—	—	26
44	欠番				38	1号掘立P24				96	6N-26	—	—	21
45	5J-26	38	35	33	39	6P-26	38	37	26	97	6N-26	—	—	18
46	5I-26	32	31	7	40	1号掘立P25				98	6N-26	36	33	12
47	3号掘立P1				41	1号掘立P26				99	6N-27	—	—	9
48	3号掘立P4				42	1号掘立P11				100	6O-27	34	32	16
49	5K-25	181	114	14	43	欠番				101	6N-27	—	—	22
50	5I-26	30	25	18	44	6P-25	51	42	32	102	6N-27	—	—	30
51	5J-25	29	28	28	45	6P-25	25	23	35	103	6N-27	—	—	12
52	3号掘立P3				46	6P-25	16	13	10	104	6N-27	—	—	16
53	3号掘立P6				47	欠番				105	6N-27	83	(52)	13
54	3号掘立P5				48	1号掘立P27				106	6N-27	—	—	11
55	3号掘立P8				49	1号掘立P28				107	6M-27	—	—	12
56	3号掘立P7				50	1号掘立P18				108	6L-28	43	41	23
57	5I-26	29	23	17	51	1号掘立P17				109	6L-26	44	33	13
7区					52	1号掘立P16				110	6L-25	34	28	42
1	6C-6D-27	(263)	(122)	54	53	1号掘立P15				111	6L-24	39	29	16
2	6F-6G-27	126	53	11	54	6N-24	262	105	37	112	6J-27	192	71	18
3	6F-25	84	78	5	55	1号掘立P14				113	6K-27	152	53	23
4	6H-24	38	35	10	56	1号掘立P13				114	欠番			
5	6G-25	34	24	16	57	6P-25	27	26	25	115	6O-26	(39)	32	23
8区					58	6P-25	34	32	24	116	6O-25	33	26	14
1	6Q-24	32	31	25	59	6P-25	25	19	13	117	欠番			
2	6P-24	45	29	22	60	6P-25	57	37	20	118	6N-26	—	—	12
3	6O-24	126	124	35	61	6O土坑と重複	—	—	—	119	6N-26	—	—	13
4	6O-24	30	28	31	62	1号掘立P12				120	6N-26	—	—	14
5	6O-6P-25	282	124	48	63	6P-25	36	31	10	121	6N-28	36	34	16
6	6O-24-25	316	140	61	64	6P-6Q-25	170	94	35	122	6N-6O-28	165	(91)	32
7	6M-6N-26	194	56	12	65	6Q-25	83	48	22	123	6Q-27	19	17	5
8	6M-26	224	56	50	66	欠番				124	6Q-25	36	35	26
9	6M-26	151	51	21	67	6J-25-26	187	41	15	125	6O-6P-25	34	27	20
10	6M-26	47	32	29	68	6J-6K-25	226	60	22	126	6Q-25-26	44	32	43
11	6N-26	178	78	9	69	6J-24	165	65	7	127	1号掘立P3			
12	6N-26	148	40	13	70	6J-24	165	(57)	30	128	1号掘立P30			
13	6N-26	104	44	12	71	6J-24	(198)	87	13	129	1号掘立P29			
14	欠番				72	1号掘立P10				130	1号掘立P2			
15	6N-27	138	42	13	73	6P-25	55	35	27	131	1号掘立P33			
16	6M-26-27	(224)	169	41	74	6P-25	24	19	13	132	6O-24	242	114	44
17	6M-28	(65)	54	22	75	6P-25	40	36	24	133	6P-26	25	24	43
18	6K-26	166	67	12	76	6Q-26	29	24	12	134	1号掘立P1			
19	6K-27	92	59	19	77	6Q-6R-28	—	—	4	135	6P-26	47	29	13
20	1号掘立P4				78	6R-28	—	—	22	136	1号掘立P19			
21	1号掘立P5				79	6R-28	—	—	7	137	6P-27	52	28	29
22	6Q-26	27	22	4	80	6R-28	—	—	13	138	1号掘立P32			
23	1号掘立P6				81	6O-26	54	43	17	139	6K-26	37	23	12
24	1号掘立P7				82	6P-25	23	19	15	140	6K-26	56	48	35
25	1号掘立P8				83	6O-26	24	23	12	141	6K-26	43	39	25
26	1号掘立P31				84	6O-26	38	35	17	142	欠番			
27	6P-26	29	25	34	85	6O-26	30	27	12	143	欠番			
28	1号掘立P21				86	6O-26	36	34	25	144	6K-26	38	37	43
29	1号掘立P22				87	6O-25	38	35	12	9区				
30	1号掘立P9				88	6O-26	52	37	18	1	7I-7J-28-29	200	190	60
31	1号掘立P20				89	6O-26	21	20	7	2	7I-29	218	92	35
32	6P-25	64	37	29	90	6O-26	24	22	5	3	7I-28	79	51	24
33	6Q-25	12	11	15	91	6O-26	24	22	2	4	7H-7I-28	(134)	99	17

金古北十三町遺跡 土坑(7) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
5	7G-29	85	82	33	63	6T・7A-30	79	66	50	1	7O-30	34	30	47	
6	7F-29	43	32	38	64	6T-29・30	34	33	30	2	7O-31	33	24	57	
7	7E-29	129	94	27	65	6T・7A-29	37	35	34	3	7O-31	48	44	56	
8	7G-30	169	96	18	66	7A-29	52	36	28	4	7N-31	48	33	37	
9	7G-31	189	62	38	67	7C-27	42	21	11	5	7N-32・33	56	33	9	
10	7G-32	29	28	45	68	7C-27	26	23	42	6	7N-33	58	44	31	
11	7E-31	(58)	(44)	19	69	7A-25	42	39	18	7	7M-32	24	22	18	
12	7H-27	53	42	27	70	7A・7B-28	(165)	—	22	8	7L-32	77	31	39	
13	7H-28	45	42	36	71	7F-31	110	44	4	9	7N-31・32	31	23	53	
14	7H-28	47	44	27	72	7E-31	18	18	21	10	7M・7N-31	29	25	21	
15	7H-27	64	59	33	73	7D-31	26	24	28	11	7N-30	81	78	20	
16	7G-28	37	33	39	74	1号掘立P 4				12	7M-31	42	33	32	
17	7F-28	38	29	36	75	7F-28	28	20	34	13	7M-33	29	28	8	
18	7G-29	42	30	46	76	7D-28	32	30	50	14	7K-30	134	100	44	
19	1号掘立P 9				77	7D-26	16	14	23	15	7K・7L-29	(126)	103	57	
20	1号掘立P 8				78	7C-27	22	17	21	16	7N-30・31	96	88	20	
21	1号掘立P 5				79	7B-26	25	22	17	17	7L-31	29	28	14	
22	7E-26	38	22	20	80	7B-25	29	26	60	18	7J-32	39	30	10	
23	1号掘立P 6				81	7B-26	28	25	39	19	7J-32	62	40	12	
24	7E-27	63	50	16	82	7B-26	26	22	12	20	7K-31	50	40	14	
25	7E-27・28	40	21	21	83	7A-26	36	17	28	21	7K-29・30	113	89	39	
26	7E-28	54	43	8	84	7A-27	46	44	9	22	7K-29	108	(70)	63	
27	7E-28・29	124	97	38	85	7A-27・28	36	33	37	23	7J-31	102	46	24	
28	7E-27	26	20	17	86	7A-27	27	22	19	24	7O-35	(34)	(29)	56	
29	7D-27	27	23	13	87	6T-27	44	41	34	11区					
30	7E-26・27	93	73	14	88	7A-28	31	30	42	1	7T-38	(118)	(180)	34	
31	7D・7E-26	(166)	138	27	89	7A-28	37	32	23	2	8A-38・39	140	(100)	26	
32	7D-28・29	41	38	12	90	7A-28	28	23	53	12区					
33	7D-28	42	38	7	91	7A-28	31	21	43	1	8E-41	(170)	95	90	
34	7C-29	75	72	13	92	7A-28	22	17	—	13区					
35	7C-29	34	26	10	93	7A-28	31	28	18	1	9G-57	154	(80)	61	
36	7C-28	40	34	8	94	7A-28	19	18	34	2	9E-57	58	50	43	
37	7B-29	116	108	24	95	7A-28	22	22	28	14区					
38	7B-29	82	69	15	96	7A-28	44	33	39	1	9K-71	197	167	55	
39	7B-28	31	24	49	97	7A-28	36	27	26		(張り出し)	65	109	35	
40	7B-28	37	30	55	98	7A-28	28	26	18	2	9K-70	145	116	65	
41	7B-27・28	70	43	54	99	7A-28	24	22	22	3	9K-69	211	159	45	
42	7A・7B-26・27	461	72	29	100	7A-29	32	25	14	4	9K-69	62	58	47	
43	7A・7B-25・26	134	78	48	101	7A-29	(49)	(44)	10	5	欠番				
44	7A-27	117	104	21	102	7A-29	23	17	34	6	9J-68	138	131	42	
45	6T-25	(113)	(79)	51	103	6T-30	34	34	48	7	1号掘立P 3				
46	6T-25	205	95	56	104	6T-30	(70)	(50)	26	8	1号掘立P 2				
47	6T-26	210	103	63	105	6T-28	(34)	(26)	21	9	1号掘立P 1				
48	6T・7A-26	181	92	54	106	7H-29	73	55	10	10	9M-67	32	29	15	
49	6T・7A-27	257	123	56	107	1号掘立P 2				11	1号掘立P 5				
50	7A-27・28	210	104	55	108	1号掘立P 3				12	1号掘立P 4				
51	6T-26	47	38	34	109	1号掘立P 1				13	1号掘立P 6				
52	7A-27	58	51	11	110	7E-29	30	20	32	14	欠番				
53	7B-27	44	41	14	111	7F-27	24	21	13	15	1号柱列P 1				
54	7B-27	43	39	59	112	7C-29	35	26	33	16	1号柱列P 2				
55	7B-28	28	28	12	113	7C-27	20	19	31	17	1号柱列P 3				
56	7A・7B-28	50	42	6	114	7C-27	25	22	39	18	9I-68	40	31	26	
57	7B-27	31	28	19	115	7A-28	61	47	38	19	9J-70	45	43	25	
58	7B-27	18	17	50	116	7A-28	24	21	21	20	9J-69	46	41	20	
59	7C-29	28	26	24	117	7A-29	39	27	50	21	9J-69	93	84	12	
60	7B-29	94	36	7	118	7A-29	26	23	50		(掘り方)	131	116	36	
61	7A-29	186	113	26	119	7I-29	124	86	50	22	9J-69	110	108	—	
62	欠番				10区							(掘り方)	116	(107)	9

遺物観察表

金古北十三町遺跡 土坑(8) 計測表

土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)			土坑 No.	位置	規模 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
23	9G-62-63	346	78	28	3	9L-66	32	31	27	21	1号柱列P 2			
24	欠番				4	9L-64	(142)	89	24	22	9M-9N-68	28	27	32
25					5	9K-61-62	(220)	74	60	23	9N-68-69	31	24	28
26				6	1号掘立P 4				24	9N-69	30	28	19	
27	9I-9J-63-64	531	95	50	7	1号掘立P 5				6区 被熱土坑				
28	9G-63	240	76	35	8	9M-67	24	22	18	1	5N-22	95	82	22
29	欠番				9	9M-67	30	26	23	8区 粘土採掘土坑				
30					10	1号柱列P 5				1	6Q-6R-29-30	(155)	195	63
31	9J-9K-69	115	59	37	11	1号掘立P 6				2	6Q-6R-29-30	(245)	(130)	33
32	9G-62-63	(200)	63	21	12	1号柱列P 4				3	6Q-6R-29-30	(75)	(280)	84
33	9G-61-62	(81)	88	11	13	1号掘立P 3				4	6Q-6R-29-30	(250)	(160)	87
34	9G-62-63	258	61	13	14	9M-67	23	21	19	5	6Q-6R-29-30	245	295	72
35	9F-9G-62	(304)	(52)	20	15	9M-68	34	31	33	6	6Q-6R-29-30	90	205	39
36	9I-9J-63-64	230	—	—	16	9M-68	18	17	8	7	6Q-6R-29-30	(140)	(230)	57
37	9I-9J-63-64	426	—	—	17	1号掘立P 1				11区 土墳墓				
15区					18	1号柱列P 3				1	7R-7S-33-34	240	126	82
1	9L-9M-69	240	(147)	32	19	1号掘立P 2				14区 竪穴状遺構				
2	9M-68	46	34	39	20	1号柱列P 1				1	9I-9J-68-69	262	219	55

遺物観察表

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
古墳時代					
A区14号住居跡					
-1	土師器 坏	床直 完形	①10.4③5.7	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-2	土師器 坏	床直 完形	①12.4③5.0	①並②酸化焰普通 ③褐	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 ヘラ撫で後、放射状のヘラ磨き。
-3	土師器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	①13.0③5.5	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-4	土師器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	①12.3③5.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 放射状のヘラ磨き。
-5	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①11.9③5.1	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 やや乱れた放射状のヘラ磨き。
-6	土師器 坏	床直 1/3	①(12.0)③4.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 放射状のヘラ磨き。
-7	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①12.3③3.7	①並②酸化焰硬質 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 横撫で。
-8	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①12.5③3.9	①並②酸化焰硬質 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 横撫で。底部は不規則なヘラ磨き。
-9	土師器 坏	+6 2/3	①12.8③4.2	①並②酸化焰普通 ③灰黄褐	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 縦方向のヘラ磨き。
-10	土師器 高坏	貯蔵穴 裾部一部 欠損	①坏12.1②脚9.1 ③10.9	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ撫で。脚部横撫で。内面 放射状のヘラ磨き。脚部上位ヘラ削り、裾部横撫で。内面黒色処理。
-11	土師器 高坏	貯蔵穴 ほぼ完形	①坏12.5②脚8.9 ③10.1	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ撫で。脚部横撫で。内面 放射状のヘラ磨き。脚部上位ヘラ撫で、裾部横撫で。内面黒色処理。
-12	土師器 高坏	床直 坏部一部 欠損	①坏12.5②脚8.3 ③11.1	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ撫で。脚部横撫で。内面 放射状のヘラ磨き、脚部横撫で。内面黒色処理。
-13	土師器 高坏	床直 3/5	①坏12.2②脚8.0 ③9.2	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。脚部横撫で。内面 横撫で。
-14	土師器 埴	埋土 体~底3/5	③(8.0)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 胴部下位は横方向のヘラ削り。内面 胴部ヘラ撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-15	土師器 甌	床直 口～胴部	①22.3③(23.8)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部にヘラ撫でが見られる。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-16	土師器 甕	床直 口～胴1/3	①(18.0) ③(13.8)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ削り、器面の荒れにより方向不明。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-17	土師器 甕	床直 口～胴1/3	①(19.6) ③(12.7)	①並②酸化焰軟質 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は上方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-18	こも編石	+6 一部欠損	①13.7②6.2 ③4.7④573g	粗粒輝石安山岩	
-19	こも編石	床直 完形	①13.6②6.7 ③4.9④710g	粗粒輝石安山岩	
A区25号住居跡					
-1	土師器 小型台付甕	床直 完形	①11.1②9.5 ③14.1	①並②酸化焰軟質 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は斜め方向のヘラ削り。裾部横撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で、裾部横撫で。
-2	土師器 甕	+18 口～胴2/5	①15.6③(17.5)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-3	こも編石	床直 完形	①11.2②7.3 ③5.1④693g	デイサイト	
A区27A号住居跡					
-1	土師器 坏	床直 完形	①10.9③5.7	①並②酸化焰普通 ③明褐	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-2	土師器 坏	カマド 完形	①10.4③5.3	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-3	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①12.4③5.4	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で。体部下位ヘラ削り後ヘラ磨き。内面 放射状のヘラ磨き。
-4	土師器 坏	+9 完形	①12.4③5.7	①並②酸化焰普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-5	土師器 坏	床直 完形	①11.7③5.5	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-6	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①12.8③5.0	①並②酸化焰普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で。体部下位ヘラ削り後ヘラ磨き。内面 体部上半放射状のヘラ磨き。体部下半ヘラ撫で。
-7	土師器 坏	床直 完形	①13.3③4.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で。体部ヘラ削り後ヘラ磨き。内面 放射状のヘラ磨き。
-8	土師器 坏	床直 完形	①13.8③5.0	①並②酸化焰普通 ③明褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。体部ヘラ削り後ヘラ磨き。内面 口縁部横撫で。体部は放射状のヘラ磨き、黒色処理。
-9	土師器 坏	カマド 完形	①14.5③6.9	①並②酸化焰普通 ③明褐	外面 口縁部から体部上位は横撫で、中位ヘラ撫で、下位ヘラ削り。内面 口縁部横撫で。体部は放射状のヘラ磨き。
-10	土師器 坏	貯蔵穴 完形	①14.8③7.6	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。体部ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面 口縁部横撫で。体部は放射状のヘラ磨き。
-11	土師器 坏	床直 完形	①12.8③5.7	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で。体部ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面 横方向のヘラ磨き。
-12	土師器 鉢	床直 1/2	①13.7③8.2	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。体部は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。体部ヘラ撫で。
-13	須恵器 坏	床直 ほぼ完形	①10.8③4.7	①密②酸化焰硬質 ③にぶい黄橙	ロクロ成形(右回転)。体部回転ヘラ削り。
-14	土師器 高坏	床直 4/5	①坏9.0 ②脚(7.0)③8.2	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位から脚部は横撫で。内面 放射状のヘラ磨き、黒色処理。脚部ヘラ削り後、横撫で。
-15	土師器 高坏	カマド 裾部欠損	①坏14.7③(9.3)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部は横方向のヘラ削り、脚部横撫で。内面 横撫で。脚部ヘラ削り後、横撫で。
-16	土師器 高坏	床直 ほぼ完形	①坏18.3 ②脚12.7③15.5	①密②酸化焰硬質 ③明赤褐	外面 口縁部から体部は横撫で。脚部は縦方向のヘラ磨き。内面 放射状のヘラ磨き。脚部ヘラ撫で、裾部横撫で。
-17	土師器 埴	+13 体～底部	③(8.2)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 胴部上位は横方向のヘラ磨き、下位はヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
-18	土師器 鉢	貯蔵穴 一部欠損	①18.1②6.9 ③12.9	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、胴部は上方向のヘラ削り。内面 口縁部横撫で、胴部ヘラ磨き、黒色処理。
-19	土師器 甌	床直 ほぼ完形	①24.2②8.9 ③31.7④孔径7.9	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
-20	土師器 甌	床直 ほぼ完形	①22.0②8.2 ③22.9④孔径7.4	①並②酸化焰普通 明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-21	土師器 小型甕	貯蔵穴 完形	①10.8②5.4 ③11.6	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は縦方向のヘラ削り、中位は横方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-22	土師器 小型甕	床直 完形	①12.4②5.8 ③13.5	①並②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で。胴部は縦方向のヘラ撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-23	土師器 小型甕	カマド 口～底4/5	①13.2②6.0 ③19.2	①並②酸化焙普通 ③にぶい褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-24	土師器 甕	+11 ほぼ完形	①18.6②5.4 ③30.0	①粗②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-25	土師器 甕	カマド ほぼ完形	①19.5②5.8 ③31.9	①並②酸化焙普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴上半部は縦方向のヘラ削り。胴部下位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-26	土師器 甕	カマド 口～底5/6	①16.3②5.6 ③36.2	①並②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上半は斜め方向のヘラ削り、下位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-27	土師器 甕	床直 胴～底2/5	②6.2③(13.8)	①粗②酸化焙普通 ③にぶい褐	外面 胴部中位は上方向のヘラ削り、下位は下方向のヘラ削り。内面 胴部ヘラ撫で。胎土に結晶片岩、石英を多量に含む。
-28	土師器 甕	床直 ほぼ完形	①19.2②5.8 ③34.2	①粗②酸化焙軟質 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-29	土師器 甕	床直 ほぼ完形	①16.6②6.6 ③37.0	①並②酸化焙軟質 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-30	須恵器 壺	+9 胴～底1/2	③(12.2)	①並②還元焙普通 ③灰	外面 胴部中位は横方向の叩き。底部は不規則に叩く。内面 青海波状の当て目。
-31	白玉	埋土 完形	①0.6②0.6③0.3	滑石	両面平坦。側面はうちかき後、磨く。
-32	白玉	埋土 完形	①0.7②0.6③0.3	滑石	両面平坦。側面はうちかき後、磨く。
-33	白玉	+14 完形	①0.7②0.7③0.3	滑石	両面平坦。側面はうちかき後、磨く。
-34	磨石	+37 完形	①12.4②11.5 ③3.6	粗粒輝石安山岩	上面は断面半円形のやや太い条痕が多く、よく磨られる。下面・側面は敲打痕が顕著。
-35	鉄釘	埋土 1/3	①(2.2)②0.5③0.4		
-36	こも編石	+6 完形	①15.8②7.0 ③5.7④1.000g	粗粒輝石安山岩	
-37	こも編石	+7 完形	①15.7②6.0 ③4.2④545g	粗粒輝石安山岩	
A区27B号住居跡					
-1	鉄釘	+50 ほぼ完形	①(7.1)②0.5③0.5		
A区28号住居跡					
-1	土師器 坏	床直 4/5	①11.0③5.3	①並②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-2	土師器 坏	+10 3/5	①11.4③5.1	①並②酸化焙普通 ③褐	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
-3	土師器 坏	床直 ほぼ完形	①12.8③5.2	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部上半は放射状のヘラ磨き。
-4	土師器 坏	カマド 2/5	①(12.2)③(5.6)	①並②酸化焙普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 横撫で。
-5	砥石	床直 完形	①7.0②4.3③2.2	砥沢石	6面使用。
-6	鉄器 不明	埋土 完形	①5.7②径1.1		棒状。錆の付着顕著で、断面は円形ではないと思われる。
-7	こも編石	床直 完形	①15.8②6.9③5.6 ④870g	粗粒輝石安山岩	
B区6号住居跡					
-1	土師器 坏	カマド 1/3	①(13.8)③5.3	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、体部は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、体部は放射状のヘラ磨き。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 2	土師器 高坏	床直 完形	①坏14.9②脚9.4 ③9.8	①並②酸化焰硬質 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部は縦方向のヘラ削り。脚部は貼り付け後撫で。脚部下位撫で。内面 口縁部横撫で、体部は放射状のヘラ磨き。内面黒色処理。
- 3	須恵器 高坏	貯蔵穴 坏部	①坏16.8③(6.2)	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体下半部は回転ヘラ削り。体部上位に1段の波状文。脚部は透かし孔を3か所施すか。
- 4	土師器 甔	床直 ほぼ完形	①15.4②6.8 ③12.0④孔径2.8	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で、胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 5	土師器 甔	床直 4/5	①16.5②3.4 ③15.2④孔径2.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 6	土師器 甔	床直 ほぼ完形	①26.6②9.5 ③28.5④孔径8.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 7	土師器 甔	床直 1/3	①(18.8)②(9.8) ③24.7 ④孔径(8.6)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は下方方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 8	土師器 壺	カマド 胴～底2/5	②7.0③(20.7)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	内外面ともヘラ磨き。外面は赤色塗彩。
- 9	土師器 壺	床直 口～頸部	①19.4③(7.3)	①並②酸化焰普通 ③橙	内外面とも口縁部横撫で。
- 10	土師器 壺	貯蔵穴 ほぼ完形	②5.0③(31.3)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は上方方向のヘラ磨き。下位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 11	土師器 壺	カマド 口～胴2/3	①(11.6) ③(28.2)	①粗②酸化焰軟質 ③暗赤褐	外面 頸部から胴部上位は斜め方向のヘラ削り、中位は横方向、中位から下位は縦方向のヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
- 12	土師器 小型甕	貯蔵穴 口～胴部	①11.9③(9.5)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ削り後撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 13	土師器 甕	貯蔵穴 ほぼ完形	①18.2②8.0 ③18.5	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴上半部は斜め方向のヘラ削り、胴下半部は上方方向のヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
- 14	土師器 甕	貯蔵穴 口～底4/5	①22.3②(8.6) ③14.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 15	土師器 甕	床直 ほぼ完形	①19.7②6.3 ③33.2	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴上半部は縦方向のヘラ撫で後、一部横方向のヘラ撫でを施す。下半は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 16	土師器 甕	カマド ほぼ完形	①18.2②6.0 ③33.2	①粗②酸化焰軟質 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は縦方向のヘラ削り、下半は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 17	土師器 甕	床直 口～胴2/3	①20.0③(31.8)	①粗②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴上半部は上方方向のヘラ削り、下半は下方方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 18	土師器 甕	床直 口～胴2/3	①17.6③(30.5)	①粗②酸化焰普通 ③にぶい黄	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、下半は下方方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
B区20号住居跡					
- 1	土師器 坏	+24 2/3	①12.0③5.3	①並②酸化焰普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で、体部上位はヘラ撫で、下位はヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
- 2	土師器 坏	床直 ほぼ完形	①12.4③5.3	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
- 3	土師器 坏	床直 3/4	①(12.4)③5.4	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部下位ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
- 4	土師器 坏	カマド 3/4	①12.0③(5.2)	①並②酸化焰普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で、体部は横方向のヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。
- 5	土師器 坏	床直 3/4	①(13.0)③5.3	①並②酸化焰硬質 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、体部は横方向のヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部は放射状のヘラ磨き。
- 6	須恵器 坏	床直 ほぼ完形	①12.7③5.0	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。体部下位は回転ヘラ削り。
- 7	須恵器 坏	+ 6 2/3	①10.0③4.4	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。体部下位は回転ヘラ削り。
- 8	土師器 高坏	床直 2/3	①坏(10.4) ②脚7.8③7.9	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部下位から脚部は横撫で。内面 口縁部ヘラ撫で後、放射状のヘラ磨き。脚部上位ヘラ削り、裾部横撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-9	土師器 高杯	床直 4/5	①杯10.6②脚8.4 ③8.1	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部ヘラ削り。脚部は縦方向のヘラ削り。裾部横撫で。内面 口縁部横撫で。
-10	土師器 高杯	カマド 2/3	①杯(11.4) ②脚8.4③8.9	①密②酸化焙普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で、脚部横撫で。内面 横撫で。
-11	土師器 高杯	+8 杯部1/2	①杯(12.4) ③(6.0)	①並②酸化焙普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で、体部は横方向のヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き、黒色処理。
-12	土師器 高杯	床直 2/3	②脚9.6③(9.2)	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 体部斜め方向の撫で。脚部縦方向の撫で、裾部横撫で。内面 体部は縦方向のヘラ磨き。脚部横撫で。
-13	土師器 高杯	床直 4/5	①杯12.4 ②脚10.0③8.5	①密②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で、脚部横撫で。内面 口縁部横撫で。裾部横撫で。
-14	土師器 小型甕	床直 口~胴4/5	①10.4③(8.2)	①並②酸化焙普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-15	土師器 小型甕	床直 口~胴2/3	①11.2③(10.5)	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部から胴部上位は横撫で。胴部中位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-16	土師器 甕	床直 ほぼ完形	①19.6②7.4 ③35.3	①並②酸化焙軟質 ③にぶい黄褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、中位は斜め方向のヘラ削り、下位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-17	土師器 甕	床直 口~胴4/5	①16.2③(29.0)	①並②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、中位から下位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-18	土師器 甕	+27 口~胴1/2	①19.0③(17.8)	①並②酸化焙普通 ③にぶい褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部中位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
B区26号住居跡					
-1	こも編石	床直 完形	①13.8②6.7 ③3.1④468g	ひん岩	
B区29号住居跡					
-1	土師器 杯	床直 1/3	①(15.0)③(7.5)	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。
-2	土師器 甕	床直 完形	①17.8②6.8 ③15.6	①粗②酸化焙軟質 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
D区31号住居跡					
-1	土師器 杯	カマド 2/5	①(13.0)③5.2	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。
-2	こも編石	+7 完形	①15.3②6.8 ③5.1④810g	変質安山岩	
-3	こも編石	+7 完形	①11.6②5.6 ③3.4④278g	粗粒輝石安山岩	
-4	こも編石	+6 完形	①12.1②6.9 ③4.2④468g	溶結凝灰岩	
-5	こも編石	+7 完形	①9.7②5.5 ③4.2④322g	粗粒輝石安山岩	
-6	こも編石	+7 完形	①10.9②4.8 ③3.1④224g	粗粒輝石安山岩	
-7	こも編石	+7 完形	①13.4②7.2 ③6.6④891g	粗粒輝石安山岩	
-8	こも編石	+7 完形	①10.6②6.0 ③4.9④420g	ホルンフェルス	
-9	こも編石	+8 完形	①12.1②6.8 ③4.3④550g	粗粒輝石安山岩	
D区32号住居跡					
-1	土師器 杯	カマド 2/3	①13.6③5.2	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から体部上位は横撫で。底部ヘラ削り。内面 口縁部横撫で。体部は放射状のヘラ磨き。
-2	土師器 杯	床直 1/2	①(14.0)③4.7	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部放射状のヘラ磨き。
-3	土師器 甕	床直 口~胴1/3	①(23.0) ③(13.0)	①粗②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 胴部は斜め方向のヘラ削り。器面の荒れ著しい。
D区33号住居跡					
-1	土師器 杯	床直 4/5	①13.0③4.9	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
D区34号住居跡					
-1	土師器 坏	カマド 完形	①10.8③5.5	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部へら削り。内面 放射状のへら磨き。
-2	土師器 坏	床直 ほぼ完形	①11.2③5.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部へら削り。内面 放射状のへら磨き。 内面の器面の荒れが著しい。被熱か。
-3	土師器 坏	床直 4/5	①13.8③5.6	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部に指頭痕が見られる。底部へら削り。 内面 放射状のへら磨き。
-4	土師器 坏	床直 1/3	①(13.4)③5.4	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はへら削り。
-5	土師器 坏	床直 1/3	①(16.2)③(6.8)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はへら削り。
-6	土師器 坏	カマド ほぼ完形	①15.5③7.0	①並②酸化焰普通 ③赤褐	外面 口縁部横撫で、底部へら削り。
-7	土師器 小型壺	カマド 口～底4/5	①11.3③11.4	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は斜め方向のへら削り。
-8	土師器 甕	床直 口～底4/5	①14.5②6.6 ③30.8	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のへら削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
-9	土師器 甕	床直 口～胴1/2	①(18.4) ③(17.0)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のへら削り。
奈良・平安時代					
A区15号住居跡					
-1	須恵器 坏	埋土 2/5	①(13.2)②9.3 ③4.5	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転へら切り後撫で調整。
-2	須恵器 壺	埋土 2/5	①(15.0)②6.6 ③5.5	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。高台貼り付け。 底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-3	須恵器 小型甕	カマド 口～胴1/2	①(10.8)③(9.5)	①並②酸化焰普通 ③明褐	ロクロ成形、回転方向不明。
-4	土師器 甕	床直 2/3	①19.0②(3.8) ③26.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴上 半部は横方向のへら削り、下位は下方向のへら削り。内面 口縁 部から頸部は横撫で。胴部へら撫で。
-5	土師器 甕	カマド 口～胴1/3	①(19.8) ③(17.0)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のへら削り、 下位は下方向のへら削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部 へら撫で。
-6	土師器 甕	+9 口～胴1/3	①(18.9) ③(13.2)	①密②酸化焰普通 ③にぶい黄褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のへら削り。 内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部へら撫で。
-7	鉄製品 刀子	+20 2/3	①(9.2)②1.3③0.5		
-8	鉄釘?	埋土 1/2	①(6.8)②0.7③0.4		
A区16号住居跡					
-1	土師器 坏	ピット2 1/2	①13.2③3.0	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部へら削り。内面 横撫で、体部に指頭 痕が見られる。
-2	須恵器 蓋	+10 1/4	①(13.8)③3.4 ④摘4.0	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付け。天井部上半まで 回転へら削り。
-3	須恵器 坏	床直 完形	①13.0②7.8 ③3.7	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転へら切り後撫で調整。
-4	須恵器 坏	+13 一部欠損	①12.2②7.5 ③3.6	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転へら切り後撫で調整。
-5	須恵器 坏	床直 3/5	①13.0②8.6 ③3.6	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-6	須恵器 坏	+10 1/6	①(12.6)②(7.2) ③3.4	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-7	須恵器 壺	+22 1/6	①(9.5)②(6.2) ③5.2	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。
-8	土師器 甕	床直 口～頸1/2	①(18.8)③(6.2)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は斜め方向のへら削り。 内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部へら撫で。
-9	須恵器 甕	床直 頸～胴1/3	③(26.5)	①密②還元焰普通 ③灰白	外面 叩き後、横方向の撫で。内面 青海波状の当て目。
-10	鉄器 不明	ピット1 2/3?	①(14.1)②(2.5)③0.3		板状。刃を持つか。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
A区17号住居跡					
-1	土師器 坏	+18 3/4	①12.7③(3.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で、底部に指頭痕が見られる。
-2	土師器 坏	完形 貯蔵穴	①11.6②8.0 ③3.4	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 体部から底部はヘラ削り。内面 横撫で、体部下位に指頭痕が見られる。
-3	土師器 坏	+12 2/5	①12.3②7.2 ③3.9	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で。体部から底部はヘラ削り。内面 横撫で後、斜め方向のヘラ磨き。
-4	須恵器 坏	+18 一部欠損	①12.8②7.6 ③4.0	①密②還元焰普通 ③黒褐	ロクロ成形(右回転)。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。
-5	須恵器 坏	+10 1/3	①(13.2)②(7.8) ③4.5	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
-6	須恵器 坏	埋土 1/3	①(13.4)②7.5 ③3.2	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体部下位に回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
-7	須恵器 坏	埋土 1/4	①(13.1)②(7.6) ③3.2	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-8	須恵器 坏	+26 1/4	①(12.8)②8.6 ③4.1	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-9	須恵器 坏	埋土 1/4	①(11.4)②(7.2) ③3.4	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は撫で。
-10	須恵器 壺	+6 1/4	①(13.5)②9.3 ③4.6	①粗②還元焰普通 ③にぶい橙	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-11	鉄製品 鋸	床直 一部欠損	①長さ29.8 ②幅3.4 ③刃厚元0.3先0.24 ④茎厚元0.4尻0.1⑤目釘穴径0.25 ⑥アサリ幅最大0.2		先端は欠損と思われるが整形して再利用したと思われる。茎は目釘穴1か所、尻はやや丸い。柄の木質残存。目は素歯に近い。アサリの起こし方は交互だが深さ一律でない。錆色やや茶がかかるが、錆ぶくれ少なく良い鉄。硬度は3~3.5。
-12	鉄釘	埋土 2/3	①(5.8)②0.7③0.6		頭は面取りか。
A区18号住居跡					
-1	須恵器 坏	床直 2/3	①(12.3)②5.7 ③3.8	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。外面に墨書「山」。
-2	須恵器 坏	床直 1/3	①(13.3)②(7.0) ③4.5	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-3	須恵器 壺	+10 1/3	①(14.2)②(7.0) ③5.1	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは器面の荒れにより不明。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。内面に墨書、不明。
-4	須恵器 壺	床直 1/3	①(18.1)②(9.0) ③6.7	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。
-5	須恵器 壺	床直 1/5	①(14.4)②(7.0) ③5.7	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は撫で。
-6	灰釉陶器 壺	+7 1/6	①(16.5)③(9.3)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。施釉方法不明。釉調は不透明な緑灰色。
-7	灰釉陶器 皿	+7 1/3	②7.4③(1.7)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転ヘラ調整、高台貼り付け。内面見込み部に重ね焼き痕。施釉は刷け塗り。釉調は不透明な緑灰色。
-8	灰釉陶器 皿	埋土 1/6	②(6.8)③(2.0)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は撫で、高台貼り付け。内面見込み部に重ね焼き痕。施釉方法は不明。釉調は不透明な緑灰色。
-9	灰釉陶器 皿	埋土 口縁部片	—	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。釉調は不透明な緑灰色。
-10	土師器 甕	+12 口~頸1/3	①(18.8)③(6.6)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
-11	須恵器 壺	床直 頸~胴1/8	③(24.0)	①密②還元焰硬質 ③オリーブ灰	外面 胴部下位にヘラ撫でが見られる。頸部から胴上半部に自然釉かかる。
-12	こも編石	+6 完形	①7.0②6.3 ③3.3④211g		溶結凝灰岩
A区19号住居跡					
-1	須恵器 蓋	カマド 2/3	①15.6③3.5 ④摘2.2	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付け。天井部の3分の1ほどまで回転ヘラ削り。
-2	須恵器 坏	+14 完形	①13.6②7.3 ③3.5	①密②酸化焰硬質 ③にぶい黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 3	土師器 台付甕	床直 脚部欠損	①11.5③(12.1)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、中位は斜め方向のヘラ削り、下位は下方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部ヘラ撫で。
- 4	土師器 甕	+ 6 口～頸1/2	①22.7③(7.9)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
A区21号住居跡					
- 1	土師器 坏	貯蔵穴 2/5	①(13.0)③3.3	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
- 2	須恵器 坏	+12 2/3	①13.2②7.4 ③4.0	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部切り離しは器面の荒れにより不鮮明だが、回転糸切り未調整。
- 3	須恵器 坏	+35 1/3	①(12.2)②8.0 ③3.5	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
- 4	須恵器 坏	+22 1/4	②(13.6)③(3.4)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。
- 5	須恵器 高坏	床直 2/3	①坏15.8 ②脚11.2③7.3	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体部下位は回転ヘラ削り。
- 6	土師器 甕	床下土坑2 口～胴2/3	①15.0③(11.3)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
- 7	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴2/3	①20.2③(21.0)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り。中位は斜め方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 8	土師器 甕	貯蔵穴 頸～底4/5	②4.8③(27.0)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 胴部上位は横方向のヘラ削り。中位から下位は斜め方向のヘラ削り。内面 胴部ヘラ撫で。
- 9	土師器 甕	カマド 口～胴1/3	①16.8③(10.6)	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 10	敲石	+16 完形	①12.4②10.2 ③10.1		粗粒輝石安山岩 敲き面2面、1面は砥石として使用。
- 11	こも縄石	+14 ほぼ完形	①9.9②5.5 ③3.0④225g		輝緑岩
A区22号住居跡					
- 1	須恵器 坏	床直 ほぼ完形	①11.3②8.0 ③4.0	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。底部に縄目痕及び直線的な圧痕が見られる。
- 2	須恵器 坏	床直 ほぼ完形	①12.3②7.0 ③3.9	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
- 3	土師器 甕	カマド 口～胴1/2	①20.0③(11.0)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
- 4	棒状鉄製品	埋土 1/3	①(4.3)②(0.9)③(0.6)		
- 5	鉄製品 刀子	埋土 1/3	①(5.1)②1.0③0.4		
A区23号住居跡					
- 1	須恵器 蓋	床直 2/5	①(17.7)③4.2 ④摘4.4	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付け。天井部上半まで回転ヘラ削り。
- 2	須恵器 坏	埋土 1/3	①(8.8)②5.7 ③4.1	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 3	土師器 甕	床直 口～胴2/3	①19.5③(18.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、下位は下方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 4	石製品 紡錘車	床直 完形	①3.4②3.3③1.6 ④孔径0.74		蛇紋岩 広面の磨きは粗く、狭面はよく磨かれ光沢を持つ。側面は面取り様に粗く成形後、よく磨く。
- 5	磨石	床直 完形	①18.1②13.5 ③11.5		粗粒輝石安山岩 1面使用、よく磨られる。
- 6	腕形鉄滓	+ 6	①5.1②5.0③2.9④75g		裏面に炉床痕あり。
B区1号住居跡					
- 1	土師器 坏	カマド 1/4	①(10.4)③2.8	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で。底部ヘラ削り。内面 横撫で。
- 2	土師器 坏	埋土 1/3	①(14.0)③(2.9)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で。底部ヘラ削り。内面 横撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 3	土師器 坏	埋土 1/3	①(14.0)③(4.0)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で。体部から底部はヘラ削り。内面 横撫で。
- 4	須恵器 坏	カマド 1/2	②7.6③(3.2)	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 5	須恵器 坏	+19 1/4	①(12.6)②(6.8) ③4.3	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 6	須恵器 坏	埋土 1/5	①(12.8)②(6.0) ③4.2	①密②還元焰硬質 ③灰黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 7	須恵器 碗	カマド 1/2	①12.8②7.8 ③4.3	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは器面の荒れにより不明。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 8	土製品 羽口	床直 一部欠損	①(15.9)②6.9 ③7.9④内径2.1	①並	ケイ化部分少。割れ口部分で酸化多。送風口先端径1.8cm、基側ヘラッパ状の広がり(フイゴ受け)。割れ口でスサ少。送風口に圧痕?条痕。簧の子巻き(寿司様)の製作か。
- 9	土製品 羽口	埋土 先端部1/3	①(8.8)②6.7 ③6.3④内径2.0	①並	先端にケイ化部分。割れ口で酸化部分多。送風口の径1.8cm。スサ少混入。送風口に圧痕?条痕。簧の子巻き(寿司様)の製作か。
-10	土製品 羽口	埋土 先端部1/3	①(7.0)②(6.0) ③(3.0) ④内径(2.1)	①並	先端にケイ化部分。他の2つより酸化部分少。送風口に大きな圧痕条痕(他の2つと相違)。
-11	石器 金敷	床直 完形	①35.9②24.5 ③25.1	アプライト	2面使用。敲打面はほぼ平坦で、鉄分の付着顕著。
-12	椀形鉄滓	床直	①7.4②4.2③2.3④104g		旧時に欠いた形跡。裏面は炉床か。
-13	椀形鉄滓	+12	①5.9②5.3③2.4④80g		裏面は炉床。やや軽い。
-14	チップ	埋土 完形	③0.155mm	③黒灰色	
-15	チップ	埋土 完形	③0.082mm	③黒灰色	
-16	鉄滓	+15	①7.6②5.7③1.1④57g		裏面は炉床か。表面は流動滓様。
-17	椀形鉄滓	+ 8	①3.4②3.0③2.0④14g		裏面は炉床か。
-18	椀形鉄滓か	+13	①4.9②4.0③2.1④25g		裏面は炉床か。
-19	鉄滓	+12	①4.5②2.3③2.1④24g		軽い鉄滓。
-20	椀形鉄滓	+11	①7.5②6.2③5.2④130g		裏面は炉床。
-21	椀形鉄滓	+ 6	①5.4②5.1③3.1④80g		裏面は炉床。
-22	椀形鉄滓か	床直	①4.4②3.6③2.1④58g		旧時に欠いた形跡。裏面は炉床か。
-23	椀形鉄滓か	床直	①4.8②4.4③3.0④71g		裏面は炉床か。
-24	椀形鉄滓	床直	①8.6②10.4③4.5④360g		二重鉾滓。炉床一部付着。
-25	鉄塊	床直	①2.9②2.5③2.0④13g		鉄分の凝集強い。
-26	鉄塊か	+13	①3.7②2.6③2.1④21g		やや軽いが鉄分の凝集の観。
-27	鉄滓	+18	①3.9②2.4③1.8④12g		軽い鉄滓。
-28	鉄滓	床直	①4.2②3.8③1.5④21g		軽い鉄滓。
-29	磨石	埋土 完形	①19.3②6.2 ③5.5④1.270g	粗粒輝石安山岩	
B区2号住居跡					
- 1	土師器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	①12.6②8.5 ③3.5	①密②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で。体部に指頭痕、ヘラ撫でが見られる。底部ヘラ削り。内面 横撫で。
- 2	須恵器 坏	貯蔵穴 1/4	①(13.4)②(6.8) ③3.9	①密②酸化焰普通 ③明赤褐	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。内面 体部は横方向のヘラ磨き。底部は縦方向のヘラ磨き。黒色処理。
- 3	須恵器 坏	床直 2/3	①(13.2)②7.6 ③3.1	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 4	須恵器 坏	床直 ほぼ完形	①13.8②7.8 ③3.6	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 5	須恵器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	①13.2②6.8 ③3.8	①並②還元焰普通 ③灰オリーブ	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 6	須恵器 碗	カマド 1/3	②6.8③(2.0)	①密②還元焰普通 ③灰オリーブ	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは撫でのため不明。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。内面 底部中央から放射状にヘラ磨き。黒色処理。
- 7	須恵器 碗	埋土 1/7	①(13.8)②(7.2) ③6.1	①密②還元焰硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 8	土師器 甕	床直 口~胴1/3	①(13.9) ③(12.0)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
B区3号住居跡					
- 1	須恵器 坏	+11 1/3	①(11.2)②(4.8) ③4.0	①密②還元焰普通 ③にぶい黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。口縁部に黒色付着物(すす?)が見られる。
- 2	緑釉陶器 椀	カマド 口縁部片	③(1.7)	①並②還元焰軟質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。体部は黄緑色。口縁部に緑色を施した緑釉緑彩陶。産地:洛北。
- 3	土師器 甕	床直 口~胴1/4	①(14.8)③(5.5)	①密②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 4	土師器 甕	カマド 口~胴1/3	①(20.0)③18.9	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
- 5	土師器 甕	+ 8 口~胴1/5	①(19.0) ③(15.0)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。頸部に指頭痕が見られる。胴部ヘラ撫で。
- 7	鉄製品 刀子	+15 1/3	①(5.2)②1.3③0.3		
- 8	鉄製品 刀子	+16 破片	①(5.7)②(0.8)③0.3		
- 9	鉄釘	埋土 4/5	①(4.9)②0.5③0.5		頭は逆台形に造り出し、角形か。
- 10	鉄金具 不明	床直 一部欠損	①8.0②2.0③2.0		留め具の頭の形は錆のため不明。
B区4号住居跡					
- 1	須恵器 坏	カマド 1/3	①(11.8)②5.5 ③4.5	①粗②還元焰軟質 ③灰黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 碗	+14 一部欠損	①12.8②6.7 ③5.2	①並②還元焰軟質 ③灰黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。刻書「真」。
- 3	須恵器 羽釜	床直 口~胴1/5	①(23.6)③(9.8)	①粗②還元焰軟質 ③灰黄	ロクロ成形、回転方向不明。
B区5号住居跡					
- 1	土師器 坏	床直 1/4	①(13.0) ②(10.0)③3.9	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部に指頭痕が見られる。底部ヘラ削り。内面 横撫で。
- 2	土師器 坏	床直 1/3	①13.8③(4.0)	①並②酸化焰普通 ③灰黄褐	外面 口縁部横撫で。体部中位から底部はヘラ削り。内面 斜め方向のヘラ磨き。
- 3	土師器 坏	床直 2/3	①13.5②9.6 ③4.2	①密②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部中位から底部はヘラ削り。内面 斜め方向のヘラ磨き。
- 4	土師器 坏	床直 1/3	①(17.3)③(5.6)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部中位から底部はヘラ削り。内面 横方向のヘラ磨き。
- 5	須恵器 坏	床直 1/3	①(12.4)②(8.6) ③3.5	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
- 6	須恵器 坏	埋土 1/4	①(13.8)②(8.8) ③3.4	①密②還元焰硬質 ③灰黄	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 7	須恵器 碗	+ 9 2/3	①(11.4)②(8.3) ③4.7	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 8	土師器 甕	床直 口~胴1/4	①16.4③(9.2)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 9	砥石	床直 完形	①4.9②4.3③2.6	砥沢石	5面使用。
B区7号住居跡					
- 1	須恵器 坏	埋土 破片	②(6.2)③(1.5)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	ロクロ成形(右回転)。底部ヘラ削り。内面 縦方向のヘラ磨き。黒色処理。
- 2	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	①16.0③(4.9)	①粗②酸化焰軟質 ③暗灰黄	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
B区8号住居跡					
- 1	須恵器 坏	+12 4/5	①11.3②5.4 ③4.0	①粗②還元焰軟質 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 坏	床直 3/5	①11.0②5.0 ③3.4	①並②酸化焰硬質 ③明黄褐	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 3	須恵器 坏	埋土 3/5	①(12.7)②6.0 ③4.6	①粗②酸化焰軟質 ③にぶい黄橙	ロクロ成形 (右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 4	灰釉陶器 段皿	床直 1/2	①(15.4)②(8.0) ③3.5	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向右か。底部切り離しは撫でにより不明。高台貼り付け。施釉方法は漬け掛け。釉調は乳白色。内面体部はよく磨られている。
- 5	須恵器 小型甕	埋土 口~胴1/3	①(10.2)③(9.6)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	ロクロ成形 (右回転)。
- 6	須恵器 羽釜	カマド 口~胴1/3	①21.4③(14.8)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	ロクロ成形 (右回転)。
- 7	須恵器 羽釜	+21 口縁部1/6	①(20.2)③(7.5)	①並②還元焰軟質 ③灰黄	ロクロ成形 (右回転)。
B区9号住居跡					
- 1	土師器 坏	カマド 完形	①12.5③3.6	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
- 2	須恵器 碗	+14 1/3	①(12.4)②(6.8) ③4.7	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体部下位回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。内面 自然釉かかる。
B区10号住居跡					
- 1	須恵器 碗	カマド 3/5	①15.5③4.9	①密②酸化焰硬質 ③橙	ロクロ成形 (右回転)。底部は回転ヘラ切り後撫で。高台貼り付け。内面体部上位は横方向のヘラ磨き。中位から底部は縦方向のヘラ磨き。内面は黒色処理か。
- 2	須恵器 碗	+39 1/3	①(12.6)②(6.0) ③4.7	①粗②還元焰軟質 ③浅黄	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。
- 3	須恵器 碗	カマド 1/6	①(13.5)②(7.0) ③4.7	①密②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは器面の荒れにより不明。高台貼り付け。
- 4	須恵器 碗	カマド 3/5	①(15.2)②10.4 ③6.2	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは撫でにより不明。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 5	須恵器 羽釜	カマド 口~底1/4	①(21.8)②(5.2) ③25.5	①並②酸化焰普通 ③灰黄褐	ロクロ成形 (右回転)。胴部下位は斜め方向のヘラ削り。
- 6	須恵器 羽釜	カマド 口縁部1/5	①(20.0)③(7.2)	①並②酸化焰普通 ③橙	ロクロ成形、回転方向不明。内面胴部にヘラ撫でが見られる。
- 7	須恵器 羽釜	カマド 口縁部1/7	①(20.0)③(6.8)	①粗②還元焰軟質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。
- 8	須恵器 甕	カマド 底部1/4	②(18.0)③(8.8)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。ゆがみが著しい。
- 9	こも編石	埋土 完形	①13.4②5.2 ③3.0④380g	粗粒輝石安山岩	
- 10	こも編石	埋土 一部欠損	①13.8②5.6 ③3.7④420g	角閃石安山岩	
B区11号住居跡					
- 1	須恵器 坏	掘り方 3/5	①12.7②5.4 ③5.5	①並②還元焰軟質 ③にぶい黄橙	ロクロ成形 (右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 坏	カマド 1/4	①(11.7)②(4.3) ③4.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄褐	ロクロ成形 (右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 3	須恵器 碗	カマド 1/6	①(11.4)②5.4 ③3.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	ロクロ成形 (右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。
- 4	須恵器 羽釜	カマド 口~胴1/3	①18.9③(17.3)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	ロクロ成形、回転方向不明。胴部は上位から下方向にヘラ削り。
- 5	須恵器 羽釜	カマド 口~胴1/6	①(19.2) ③(10.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	ロクロ成形、回転方向不明。
B区12号住居跡					
- 1	須恵器 羽釜	+13 口~胴1/6	①(21.9)③(9.5)	①粗②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。胴部にヘラ撫でが見られる。
- 2	須恵器 羽釜	カマド 口~胴1/5	①(21.4) ③(10.0)	①粗②還元焰普通 ③にぶい黄橙	ロクロ成形、回転方向不明。胴部にヘラ撫でが見られる。
B区13号住居跡					
- 1	灰釉陶器 長頸壺	床直 胴~底1/3	②9.0③(7.7)	①密②還元焰硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。胴部下位は回転ヘラ削り。底部撫で。高台貼り付け。釉調は透明。内面 底部に自然釉付着。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
D区36号住居跡					
ー1	土師器 坏	貯蔵穴 2/3	①16.0③4.7	①密②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で、体部に指頭痕が見られる。底部ヘラ削り。 内面 ヘラ撫で。
ー2	土師器 甕	カマド 胴～底1/3	②7.5③(20.6)	①並②酸化焰軟質 ③にぶい橙	外面 胴部は縦方向のヘラ削り。器面の荒れ著しい。
H区1号住居跡					
ー1	土師器 坏	床直 2/5	①12.8③(3.4)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
ー2	土師器 坏	カマド 1/4	①(11.7)③3.2	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部に指頭痕が見られる。底部ヘラ削り。 内面 横撫で、体部に指頭痕が見られる。
ー3	土師器 坏	埋土 1/5	①(11.9)③2.8	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
ー4	土師器 坏	埋土 1/3	①(12.2)③4.6	①並②酸化焰軟質 ③灰白	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 横撫で。
ー5	土師器 坏	埋土 口縁部片	①(13.0)③(2.5)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で。内面 横撫で。
ー6	須恵器 蓋	カマド 1/2	①(16.0)③4.0 ④摘3.9	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。つまみは貼り付け、つまみの周辺は貼り 付けによる撫で。天井部の2分の1程度まで回転ヘラ削り。
ー7	須恵器 坏	埋土 1/5	①(13.0)②(6.8) ③3.3	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。内面底部に漆?付着。
ー8	須恵器 埴	埋土 2/3	①13.9②6.8 ③6.0	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。 底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
ー9	須恵器 埴	床直 ほぼ完形	①15.5②10.3 ③7.5	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。 底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
ー10	須恵器 埴	床直 ほぼ完形	①15.0②9.0 ③7.1	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。 底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
ー11	須恵器 埴	床直 ほぼ完形	①15.2②8.5 ③9.3	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。 底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
ー12	須恵器 埴	カマド 4/5	①15.3②10.3 ③8.5	①密②酸化焰軟質 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。高台貼り付け。底部は回転糸切り未調整か、 器面の荒れ著しい。
ー13	土師器 小型甕	埋土 口～胴1/3	①(10.4)③(4.0)	①並②酸化焰普通 ③褐灰	外面 口縁部から胴部は横撫で。内面 横撫で。
ー14	土師器 小型甕	カマド 口縁部1/3	①(12.0)③(4.1)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 器面の荒れにより不明。内面 横撫で。
ー15	土師器 甕	カマド 口縁部	①21.8③(8.9)	①並②酸化焰普通 ③明褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。頸部に指頭痕が見られる。胴部 上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。
ー16	砥石	床直 完形	①4.5②5.0③3.8	砥沢石	6面使用。断面半円形の深い溝がやや多い。
ー17	石裂支脚	カマド 完形	①25.2②9.1 ③6.4	未固結凝灰岩	側面は面取り様の成形。上面は平坦でやや丸みを持つ。
ー18	鉄器 不明	カマド 破片	①(15.5)②(2.4)③(0.3)		錆により層状に剝離、鍛造か。
ー19	鉄器 不明	埋土 破片	①(5.3)②(3.0)③(0.4)		板状。錆により層状に剝離、鍛造か。
D区23号土坑					
ー1	土師器 坏	2/5	①(11.8)③3.7	①密②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 底部ヘラ削り。器面の荒れ著しい。
G区1号火葬土壙					
ー1	須恵器 埴	4/5	①15.1③(4.8)	①密②酸化焰普通 ③灰黄	ロクロ成形(右回転)。高台貼り付け。
H区1号竪穴状遺構					
ー1	土師器 坏	1/3	①(13.2)③3.7	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
ー2	須恵器 坏	ほぼ完形	①12.7②7.8 ③4.0	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
ー3	須恵器 坏	1/2	①(14.1)②8.1 ③3.6	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
ー4	須恵器 坏	1/2	①12.1②6.6 ③3.7	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-5	須恵器 坏	2/5	①(13.0)②7.5 ③3.6	①密②還元焰軟質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
-6	須恵器 坏	1/3	①(13.4)②(4.5) ③3.8	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
-7	須恵器 塊	ほぼ完形	①11.2②5.3 ③7.0	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
C区1号溝					
-5	砥石	完形	①8.9②3.9③2.8	砥沢石	4面使用。両端部欠損。中程に稜を持ち、半分づつ使用。
-6	石製品 板碑?	破片	①(9.5)②(6.2) ③(2.3)	緑色片岩	
-7	石塔	笠部 一部欠損	①25.0②24.5 ③10.0	粗粒輝石安山岩	上面に残る刃物類による削り痕は2次使用。
-8	銅製品 キセル	吸口 ほぼ完形	①5.9②径1.0③0.1		
-9	銅製品 キセル	吸口 完形	①5.4②径1.1③0.1		
-10	銅製品 キセル	吸口 完形	①3.8②径1.0③0.1		
-11	銅銭	完形	①長25.06②孔径5.38 ③厚1.24~1.31④重3.34g		「寛永通宝」。裏字「文」。
-12	銅銭	一部欠損	①長19.99②孔径7.53 ③厚1.24~1.31④重1.17g		「寛永通宝」。
D区17号溝					
-1	棒状鉄製品	破片	①(3.3)②(0.5)③(0.5)		
D区22号溝					
-1	竜泉窯系 青磁碗	口縁部片	③(2.2)	①黒色粒僅か②良 ③胎土：灰白色	釉は光沢があり釉厚厚い。貫入顕著。
-2	常滑 焼締陶器甕	口縁部片	③(8.3)	①密②良好 ③胎土：灰色	ロクロ成形。外面 頸部下位から肩部にかけて自然釉。釉は緑灰色。内面 頸部横撫で。
-3	在地土器 鉢	底部1/3	②(12.0)③(2.5)	①白色岩片含む ②良好③灰色	ロクロ成形。外面 底部回転糸切り未調整(右回転)。底部縁辺は使用により摩滅。内面 底部縁辺が良く擦られ著しく窪む。
-6	泥面子	完形	①2.0②1.6③0.6	①密②酸化焰普通 ③橙	人面。裏面撫で。
-7	銅製品 キセル	雁首 1/2	①(1.8)③0.1		
E区8号溝					
-1	棒状鉄製品	完形	①5.4②1.3③1.0		
E区9号溝					
-1	在地土器 鉢	口~体片	③(10.2)	①黒・白色岩片含む ②良好③灰色	ロクロ成形。内面 体部2/3以下は良く擦られる。
E区10号溝					
-1	銅製品 キセル	吸口 完形	①7.5②径1.1③0.1		羅字残存、長2.5cm 径0.8cm。
-2	鉄釘	ほぼ完形	①4.2②0.7③0.5		
F区5号溝					
-2	鉄製品 刀子	破片	①(5.3)②(1.5)③(0.4)		
F区9号溝					
-1	土師器 坏	1/4	①(12.3)③3.7	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 口縁部横撫で。
G区2号溝					
-1	須恵器 長頸壺	胴部1/3	③(12.8)	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。
D区1号井戸					
-1	在地土器 鉢	口縁部1/3 底部2/3	①(27.7) ②(11.8)③10.7	①白色粘土粒含む ②良好③青灰色	ロクロ成形。外面 底部回転糸切り未調整。内面 体部1/2以下良く磨られる。
G区3号井戸					
-1	在地土器 片口鉢	口縁部片	①(29.3)②(6.8)	①白色粒僅か ②良好③灰色	ロクロ成形。体部1/2以下擦られる。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 2	在地位器 鉢	口縁部片	①(32.0)③(6.5)		
- 3	在地位器 鉢	体~底1/5	②11.0③(9.0)		
- 5	不明石器	完形	①20.0②13.2 ③9.3	粗粒輝石安山岩 (相馬)	4面に削り痕を持ち、2面は自然面を残す。成形は自然面を除いて、ブロック様に平坦な面を作る。使用面に残る削り痕は成形痕を多く含む。
G区4号井戸					
- 1	陶器 鉢	底部片	②(9.8)③(2.5)	①白色粒含む ②焼締③黒灰色	ロクロ形成。外面 底部回転糸切り。内面 良く磨られる。
- 2	敲石	完形	①10.6②9.6 ③2.6	粗粒輝石安山岩	6面使用。各面一様に小規模な敲打痕と条痕が見られる。
- 3	不明石器	一部欠損	①12.5②11.4 ③6.4	粗粒輝石安山岩	上下面とも平滑に丸く仕上げる。側面は荒れており、一部二次的に敲き使用か。
- 4	台石か	1/2	①24.5②(19.0) ③(13.6)	二ツ岳軽石	成形は平滑ではないが丁寧に仕上げる。上面の凹部は石鑿様の工具により穿孔され、側面・底面ともに工具痕を残す。
C区1号土器集積					
- 1	土師器 坏	2/3	①13.7③(3.8)	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部は放射状のヘラ磨き。
- 2	土師器 坏	1/3	①(13.2)③(4.5)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部は縦方向のヘラ磨き。
- 3	土師器 坏	1/3	①(12.7)③5.0	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部は縦方向のヘラ磨き。
- 4	土師器 坏	1/3	①(14.8)③(5.7)	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。
- 5	土師器 高坏	1/2	①坏(23.4) ②脚(17.0) ③18.9	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 体部に縦方向のヘラ磨きが見られる。脚部は縦方向のヘラ磨き。内外面とも器面の荒れ著しい。
- 6	土師器 高坏	1/3	①坏(14.8) ②脚(10.0) ③9.7	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 体部は下方向のヘラ撫で。脚部は縦方向のヘラ磨き。内面 体部は縦方向のヘラ磨き。脚部横撫で。
- 7	土師器 高坏	口縁部・裾部欠損	③(9.8)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 体部にヘラ削り後ヘラ磨きが見られる。脚部撫で。内面 体部は斜め方向のヘラ磨き。
- 8	土師器 高坏	脚部	②脚9.2③(5.2)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 脚部横撫で後、縦方向のヘラ磨きが見られる。内面 脚部はヘラ撫で。裾部横撫で。
- 9	土師器 甕	口~胴1/3	①16.0③(11.1)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部は縦方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で。胴部ヘラ撫で。
E区As-B下6・7号溝					
- 1	石帯 巡方	1/2	①(3.9)②(2.3) ③0.6	珪質頁岩	裏面の留め穿孔は1箇所残る。表面と側面は丁寧に磨いてある。
C区旧河道					
- 1	土師器 坏	2/3	①10.7③5.5	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 放射状のヘラ磨き。器面の荒れ著しい。
縄文土器					
- 1	深鉢	H区 胴部	③(6.3)	①細砂粒②良好 ③明赤褐	太さ3ミリの刻みを付けた浮線を3条単位で横位に施文。地文の縄文はRL。諸磯b式土器。
- 2	深鉢	H区 口縁部	③(7.0)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	太さ5ミリの沈線を頸部に横位に施文し、無文の口縁部と区画する。胴部には、同じ沈線で縦位の区画を作る。Lrの燃糸文を縦位に施文。加曾利EⅢ式。
- 3	深鉢	G区 口縁部	③(8.0)	①金雲母含②良好 ③赤褐	波状口縁になり、口縁に沿って竹管による押し引きの爪形文。内面横位の磨き。阿玉台式土器。
- 4	深鉢	A区 胴部	③(7.7)	①砂粒②良好 ③明黄褐	太さ6ミリの沈線で「J」字上の文様を描く。LRの横位施文の縄文。称名寺式土器。
- 5	深鉢	A区 口縁部	③(14.7)	①径2~5ミリの 小石②良好 ③明赤褐	口縁部に粘土紐で長方形の区画を作る。頸部以下は無文。
- 6	深鉢	H区 口縁部	③(18.2)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	口縁部を折り返し口縁にしている。器面全体に指頭圧痕が見られる。安行Ⅲb~cの粗製土器。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 7	深鉢	H区 底部欠損	①39.4③(34.2)	①径2～5ミリの 小石③にぶい橙	口縁部に8単位の小突起を持つ。突起からは、一つおきに棒状の貼付文が付けられる。口縁部には、太さ4ミリの沈線で文様を描き沈線の交点に円形の貼付がされる。胴部との境には、横位の沈線と刺突が施文される。安行Ⅲb～c式土器。
弥生土器					
- 1	壺	B区 胴部片	③(5.1)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙色	斜め方向に貝殻条痕を施す。
石器					
- 1	石鏃	B区 完形	①2.7②1.5③0.5	黒曜石	
- 2	石鏃	H区 完形	①2.8②1.6③0.4	チャート	
- 3	石鏃	B区 完形	①2.8②1.9③0.3	黒色安山岩	
- 4	石鏃	F区 完形	①2.4②1.3③0.3	珪質頁岩	
- 5	打製石斧	H区 完形	①14.3②6.1 ③3.4	細粒輝石安山岩	
- 6	打製石斧	B区 完形	①12.2②6.4 ③1.6	細粒輝石安山岩	
- 7	打製石斧	C区 完形	①14.4②5.7 ③3.0	黒色頁岩	
- 8	打製石斧	C区 完形	①17.8②9.3 ③2.7	黒色頁岩	
古墳時代遺物					
- 1	土師器 坏	F区 1/3	①(14.0)③(5.1)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。体部ヘラ撫で、底部ヘラ削り。 内面 口縁部から頸部は横撫で。体部は放射状のヘラ磨き。
- 2	土師器 坏	F区 1/2	①(15.0)③5.3	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。体部ヘラ撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で。体部斜め方向のヘラ磨き。
- 3	土師器 坏	F区 2/3	①(12.6)③5.3	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ撫で。内面 口縁部から底部まで横撫で。
- 4	須恵器 甕	F区5J-22 体～底1/4	③(4.7)	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体部中に波状文1段、下位はヘラ撫で。
奈良・平安時代遺物					
- 1	土師器 坏	H区 1/4	③(0.6)	①並②酸化焰普通 ③明褐	外面 底部ヘラ撫で。底部に墨書、不明。
- 2	須恵器 坏	G区 4/5	①12.3②7.0 ③4.0	①密②還元焰普通 ③黄灰	ロクロ成形、回転方向不明。
- 3	灰釉陶器 碗	F区5L-23 1/3	②(6.9)③(2.8)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転か)。体部下位は回転ヘラ調整。高台貼り付け。施釉方法は刷け塗りか。釉調は不透明な灰白色。
- 4	奈良三彩 小壺	F区 1/5	②4.0③(2.9)	①密②酸化焰軟質 ③灰白	ロクロ成形(右回転か)。高台貼り付け。褐釉は見られない。緑釉の色調はオリブ灰色。二次焼成のためか釉の剥落が激しい。
-11	銅銭	B区10-22 完形	①長26.49②孔径6.08 ③厚1.67～1.80④重3.84g		「萬年通宝」。
中世以降出土遺物					
- 1	青磁 香炉	E区 口縁部片	③(2.1)	①黒色粒僅か②良好③胎土：灰白色	釉は光沢有り、釉厚厚い。
- 2	陶器 碗	B区1R-22 体部片	③(2.8)	①密②無焼成か ③にぶい橙色	内面 草花文。
- 3	焼締陶器 すり鉢	H区 破片	③(3.3)	①白色岩片多い ②良好③黒灰色	ロクロ成形。
- 4	在地土器 鉢	F区 口縁部片	③(5.5)	①黒・白色岩片含む②軟質③黄褐色	内外面 黒色処理。
- 5	銅銭	B区10-22 完形	①長24.50②孔径6.37 ③厚1.30～1.56④重3.19g		「治平元宝」。
- 6	銅銭	B区 完形	①長23.08②孔径6.11 ③厚1.03～1.12④重2.62g		「寛永通宝」。
- 7	鉄製品 火打金	E区 破片	①(7.2)②(2.3)③(0.7)		

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 8	鉄製品 火打金	H区 一部欠損	①7.0②2.5③0.7		吊し穴1か所。
- 9	鉄釘	F区 完形?	①3.6②1.1③1.1		頭は角形。
-10	鉄釘?	F区 破片	①(3.6)②0.6③0.7		
-11	棒状鉄製品	B区1N-22 破片	①(3.8)②0.5③0.3		
-12	銅製品 キセル	A区 吸口2/3	①(3.0)②径1.1③0.1		
-13	銅製品 キセル	F区 雁首 一部欠損	①(6.6)②径0.9③0.1		
-14	銅製品 キセル	A区 吸口完形	①5.3②径1.0③0.1		
-15	銅製品 キセル	H区 吸口完形	①2.5②径0.9③0.1		

金古北十三町遺跡 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
1区1号住居跡					
- 1	土師器 坏	床直 1/5	①(10.8)③(1.9)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。体部にヘラ撫でが見られる。 内面 口縁部から体部は横撫で。
1区2号住居跡					
- 1	須恵器 坏	床直 4/5	①12.4②7.7 ③3.2	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 2	土師器 甕	カマド 口~胴1/4	①(15.8)③(9.3)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り後、 斜め方向にヘラ撫でが見られる。内面 口縁部から頸部は横撫で、 胴部ヘラ撫で。
- 3	土師器 甕	カマド 胴~底1/4	②4.5③(7.6)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 胴部下位は下方向のヘラ削り。底部ヘラ削り。内面 胴部 ヘラ撫で。
- 4	土師器 甕	カマド 底部1/3	②7.2③(3.8)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 胴部下位は下方向のヘラ削り。底部ヘラ削り。内面 胴部 ヘラ撫で。
1区3号住居跡					
- 1	須恵器 埴	+10 1/4	①(15.8)②7.4 ③5.1	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り 付けによる撫で。
- 2	須恵器 埴	内土坑 1/3	①(14.5)②(7.0) ③5.7	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付け による撫で。
- 3	須恵器 埴	埋土 2/5	①(15.4)②(7.6) ③4.8	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付け による撫で。
- 4	須恵器 埴	+9 1/4	①(14.8)③(4.5)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。
- 5	須恵器 埴	貯蔵穴 1/4	①(12.4)②(5.6) ③(4.0)	①密②還元焰軟質 ③灰黄	ロクロ成形、回転方向不明。
- 6	須恵器 埴	+7 1/3	②7.0③(3.1)	①密②酸化焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離しは器面の荒れのため見 えない。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 7	須恵器 皿	内土坑 1/3	②6.1③(2.3)	①密②酸化焰硬質 ③灰黄褐	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り 付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 8	須恵器 壺	内土坑 口~胴1/3	②16.6③(24.5)	①密②還元焰硬質 ③灰白	ロクロ成形。外面 頸部に刷毛目状の条痕。内面 口縁部横撫で、 頸部ヘラ撫で。
- 9	土師器 甕	内土坑 口~頸2/3	①(19.8)③(7.1)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。 内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-10	土師器 甕	内土坑 口~頸2/3	①(19.4)③(5.9)	①並②酸化焰普通 ③灰黄	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。 内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
1区4号住居跡					
- 1	土師器 坏	床直 1/3	①(13.6)③(4.0)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部横撫で、体部から底部はヘラ削り。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 2	須恵器 蓋	埋土 1/8	①(15.0)③(1.4)	①密②還元焰硬質 ③黄灰	ロクロ成形、回転方向不明。
1区5号住居跡					
- 1	土師器 坏	カマド 3/5	①11.4③3.9	①密②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 口縁部は横撫で、体部は指撫でで指頭痕が見られる。底部ヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で。
- 2	土師器 坏	埋土 1/4	①(12.0)③(2.7)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から体部上位は横撫で、体部下半ヘラ撫で、底部ヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で。
- 3	須恵器 坏	+17 2/3	②7.8③(3.5)	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 4	須恵器 碗	+ 9 1/3	①(15.2)③(4.5)	①並②還元焰普通 ③灰オリーブ	ロクロ成形、回転方向不明。
- 5	土師器 小型甕	カマド 口～胴1/6	①(12.2)③(6.7)	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、体部上半は横方向のヘラ削り。内面 口縁部横撫で、体部ヘラ撫で。
- 6	土師器 台付甕	カマド 脚部	③(3.7)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 脚部横撫で、脚部上位にヘラ状工具での削り成形痕が見られる。内面 底部脚部ともヘラ撫で。
- 7	土師器 甕	床下土坑1 底部	②2.8③(2.4)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 体部下位は縦位ヘラ削り、底部ヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
- 8	土師器 甕	カマド 口～胴1/3	①(18.8) ③(24.5)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は底部から上方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で頸部に指頭痕が見られる。胴部ヘラ撫で。
- 9	砥石	床直 1/2	①(11.9)②6.2 ③6.7	砥沢石	小口を除いて4面使用。小口面に削り様の成形痕が見られる。
-10	石製支脚	カマド 完形	①23.2②7.9 ③8.0	未固結凝灰岩	上面・側面とも面取り様の成形。側面に断面円形の孔が2か所見られる。
1区6号住居跡					
- 1	須恵器 坏	埋土 1/4	①(12.0)②(7.9) ③4.0	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 蓋	埋土 1/8	①(18.4)③(2.2) ④摘(11.6)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付け。
- 3	須恵器 壺	カマド 底部	②11.3③(2.3) ③灰	①並②還元焰硬質	高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 4	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴2/3	①(18.7) ③(20.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 5	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴1/2	①(19.2) ③(23.5)	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 6	土師器 甕	カマド 口～胴1/3	①(19.8) ③(15.8)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 7	土師器 甕	カマド 口～胴1/4	①(20.4)③(9.0)	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 8	土師器 甕	+ 6 口～胴1/4	①(20.5)③(8.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 9	土師器 甕	内土坑 口～胴1/5	①(20.0)③(6.5)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-10	土師器 甕	カマド 胴～底1/3	②(3.2)③(10.5)	①密②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。底部ヘラ削り。内面 胴部ヘラ撫で。
-11	緑釉陶器 碗	埋土 底部片	②(5.1)③(0.9)	①密②酸化焰軟質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。高台は削りだしによる。釉薬は磨滅により高台部外面にのみ残る。色調はオリーブ黄色。産地洛北。
-12	鉄製品 刀子	埋土 1/2	①(6.9)②1.2③0.4		
1区7号住居跡					
- 1	土師器 坏	埋土 1/5	①(12.6)③(3.4)	①密②酸化焰軟質 ③灰黄	外面 口縁部横撫で、体部の整形はヘラ削りが施されているが、磨耗のため単位は不明。
- 2	土師器 坏	埋土 1/5	①(13.8)③(2.4)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 3	須恵器 坏	埋土 1/5	①(12.8)②(8.0) ③3.3	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
- 4	須恵器 坏	埋土 1/2	②8.5③(3.0)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。
- 5	須恵器 蓋	埋土 2/3	①14.6③3.2 ④摘4.1	①粗②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付けで、つまみの周辺は貼り付けによる撫で。天井部上半まで回転ヘラ削り。
- 6	須恵器 埴	+ 8 完形	①16.7②10.1 ③9.0	①密②還元焰焼締 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 7	須恵器 短頸壺	床直 口～肩1/4	①(10.8)③(5.5)	①密②酸化焰硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。
- 8	須恵器 壺	+18 胴部片	③(9.4)	①並②還元焰焼締 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。外面 胴下半部は回転ヘラ削り、胴部上位に自然釉付着。
- 9	土師器 甕	埋土 口縁部1/3	①(12.7)③(4.9)	①並②酸化焰普通 ③褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位ヘラ撫で。
-10	土師器 台付甕	+14 脚部1/3	②(8.6)③(2.5)	①密②酸化焰普通 ③赤褐	外面内面とも脚部横撫で。
-11	須恵器 甕	+ 6 口～胴1/4	①(26.7) ③(23.1)	①密②還元焰硬質 ③灰	外面 口縁部から頸部にカキ目状のロクロ条痕、胴部叩き。
2区1号住居跡					
- 1	土師器 坏	床直 2/5	①(13.3)③3.5	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部は横撫で、底部ヘラ削り。内面 口縁部から体部は横撫で。外面底部に墨書「吉」。
- 2	須恵器 坏	掘り方 完形	①13.7②9.4 ③4.2	①粗②還元焰軟質 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転ヘラ切り後指撫で。
- 3	磨石	床直 1/2	①30.2②(23.7) ③9.9	粗粒輝石安山岩	上面のみよく磨られる。
4区1号住居跡					
- 1	土師器 坏	床直 1/6	①(9.6)③(2.8)	①密②酸化焰普通 ③赤	外面 口縁部は横撫で、底部ヘラ削り。
- 2	土師器 小型甕	床直 口～胴1/4	①(12.0) ③(11.8)	①密②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 3	土師器 甕	カマド 頸～胴1/3	③(14.5)	①密②酸化焰普通 ③暗赤褐	外面 頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
4区2号住居跡					
- 1	土師器 坏	埋土 1/8	①(13.0)③(2.2)	①密②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部は横撫で。内面 口縁部から体部上位は横撫で。
- 2	須恵器 坏	埋土 1/6	①(12.2)②(5.8) ③3.5	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
- 3	灰釉陶器 皿	床直 1/4	①(14.8)③(1.9)	①並②還元焰硬質 ③灰黄	ロクロ成形、回転方向不明。施釉方法は刷け塗りか。釉調はやや透明感のある緑灰色。
- 4	土師器 甕	床直 口縁部1/4	①(19.0)③(5.8)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 5	土師器 甕	埋土 胴～底1/4	②(4.4)③(8.3)	①並②酸化焰普通 ③褐灰	外面 胴部下位は下方向にヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
- 6	鉄釘か	不明 1/2	①(5.9)②0.4③0.5		
4区3号住居跡					
- 1	須恵器 埴	貯蔵穴 2/3	①14.6②7.0 ③5.1	①並②還元焰軟質 ③灰オリーブ	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
- 2	土師器 甕	床直 口～胴2/5	①19.7③(20.0)	①密②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。ヘラ整形後やや間隔をとって、胴部上位から下方向にヘラ撫であり。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 3	土師器 甕	カマド 口～胴1/8	①(19.4) ③(10.4)	①密②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
- 4	土師器 甕	床直 底部片	②4.0③(4.8)	①密②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 下方向にヘラ削り、底部周辺ヘラ撫で。内面 ヘラ撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
4区4号住居跡					
-1	土師器 坏	埋土 1/3	①(11.8)②(7.4) ③5.4	①並②酸化焙普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部は横撫で、体部上位に指頭痕が見られる。底部はヘラ削り。内面 横撫で。一部にヘラ撫で見られる。
-2	須恵器 皿	貯蔵穴 1/2	①6.3③(3.1)	①密②還元焙軟質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。
-3	須恵器 碗	+20 2/5	①(14.6)②8.0 ③5.8	①密②還元焙硬質 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-4	須恵器 碗	埋土 1/3	①(7.0)③(5.2)	①密②還元焙・燻 焼成③黒	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。
-5	須恵器 皿	床直 2/3	①(13.8)②7.0 ③2.4	①密②酸化焙硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-6	土師器 甕	貯蔵穴 口~胴3/5	①19.6③(18.0)	①密②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-7	土師器 甕	貯蔵穴 口~胴1/4	①(19.0) ③(13.4)	①並②酸化焙普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-8	鉄製品 刀子	+32 1/2	①(6.7)②1.5③0.4		
-9	鉄器 不明	埋土 完形?	①3.2②径0.5		棒状。
-10	土製品 羽口	+45 送風口片	①(5.7)②(3.9)③(3.4)		ケイ化物付着。ササ混入。
-11	椀形鉄滓	+9	①4.8②3.6③1.4④重45g		裏面は炉床か。
-12	鉄製銚帯	+18 完形	①4.8②4.6③0.7		接合部は不明。
5区1号住居跡					
-1	土師器 甕	カマド 口~底2/5	①(20.8)②4.1 ③27.8	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向、中位は斜め方向、下位は下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-2	土師器 甕	床直 口~頸部	①18.4③(7.3)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-3	土師器 甕	カマド 口~胴1/2	①(19.8) ③(10.5)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-4	土師器 甕	カマド 口~胴1/4	①(19.8)③(8.0)	①並②酸化焙普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
5区2号住居跡					
-1	須恵器 坏	掘り方 3/4	①13.0②7.8 ③3.2	①並②還元焙普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-2	須恵器 坏	床直 1/3	①(13.6)②(8.0) ③3.9	①並②還元焙普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-3	須恵器 坏	床直 1/5	①(13.6)②(8.6) ③3.7	①密②還元焙硬質 ③オリーブ灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
-4	須恵器 碗	カマド 2/3	①15.7②8.5 ③5.8	①並②酸化焙硬質 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-5	須恵器 皿	床直 4/5	①13.2②7.5 ③2.2	①密②還元焙硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-6	須恵器 皿	貯蔵穴 4/5	①13.5②7.9 ③2.1	①密②還元焙硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-7	須恵器 皿	掘り方 4/5	①13.4②7.3 ③3.6	①密②還元焙硬質 ③オリーブ灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-8	須恵器 皿	床直 2/3	①12.2②6.1 ③3.8	①密②酸化焙軟質 ③にぶい黄橙	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-9	土師器 小型甕	カマド 口~胴1/5	①(14.5)③(9.1)	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向、中位は斜め方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-10	土師器 甕	床直 口～底2/5	①18.8②4.0 ③25.3	①密②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-11	土師器 甕	カマド 口～頸1/2	①(19.6)③(7.0)	①並②酸化焰軟質 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-12	土師器 甕	床直 口～胴1/4	①(22.1) ③(19.0)	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、頸部に指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-13	土師器 甕	カマド 口縁部1/4	①(19.0)③(3.1)	①密②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で。
-14	土師器 甕	カマド 底部	②3.0③(2.5)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 下方向にヘラ削り。内面 ヘラ撫で。
-15	敲石 完形	カマド	①19.1②7.1 ③5.3	粗粒輝石安山岩	5面に孔状の使用痕あり。上部小口は被熱している。カマド内の支脚として転用。
-16	鉄製品 刀子	+10 1/2	①(6.5)②1.4③0.3		
5区3号住居跡					
-1	須恵器 坏	床直 完形	①13.0②6.0 ③3.6	①密②還元焰硬質 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-2	須恵器 坏	カマド ほぼ完形	①13.8②8.4 ③3.2	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-3	須恵器 坏	床直 1/4	①(12.2)②(6.8) ③3.3	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
-4	須恵器 壺	床直 1/2	①(15.0)②(7.4) ③7.1	①並②還元焰普通 ③灰オリーブ	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-5	須恵器 皿	カマド掘り 方完形	①14.0②7.2 ③3.2	①密②還元焰普通 ③黄灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-6	土師器 甕	床直 口～胴2/3	①13.2③(11.2)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-7	土師器 台付甕	床直 脚部欠損	①13.0③(16.0)	①密②酸化焰普通 ③灰褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部は器面の荒れにより不明。
-8	土師器 甕	カマド 口～胴1/3	①21.2③(26.5)	①並②酸化焰普通 ③灰褐	外面 口縁部から頸部は横撫で。胴部上位は横方向のヘラ削り、胴部下位は胴部から下方向にヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
-9	土師器 甕	カマド 胴～底3/4	②4.2③(18.3)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 下方向にヘラ削り。内面 胴部ヘラ撫で。
-10	須恵器 壺	床直 底部	②16.2③(10.8)	①並②還元焰硬質 ③灰	外面 叩き後撫で。内面 ヘラ撫で。
-11	磨石	カマド掘り 方完形	①16.7②7.9 ③4.9	文象斑岩	2面に条線様の磨減痕が見られ、小口2面と後部に敲打痕あり。カマド材に転用。
10区1号住居跡					
-1	須恵器 壺	+26 底部	②7.2③(1.7)	①粗②還元焰普通 ③黄灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-2	土師器 甕	+11 口縁部1/3	①(19.2)③(6.6)	①並②酸化焰普通 ③灰褐	外面 口縁部から頸部は横撫で、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面 口縁部から頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
15区1号住居跡					
-1	土師器 坏	貯蔵穴 1/6	①(13.3)③(3.4)	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 口縁部は横撫で、体部に指頭痕が見られる。底部はヘラ削り。内面 横撫で。
-2	土師器 坏	埋土 1/6	①(12.9)③(2.6)	①並②酸化焰普通 ③にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で、底部ヘラ削り。内面 横撫で。
-3	須恵器 坏	貯蔵穴 1/3	①(11.8)②(8.1) ③4.1	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。
-4	須恵器 坏	貯蔵穴 1/2	①(12.1)②(6.0) ③3.7	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
-5	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部1/5	①(21.0)③4.6	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は横撫で。内面 口縁部から頸部は横撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 6	こも編石	埋土 1/2	①(11.5)②4.4 ③(0.9)	雲母石英片岩	上部小口に敲打痕見られる。
1区6号掘立柱建物跡					
- 1	須恵器 甕	P 1 胴部片	③(18.7)	①並②還元焰硬質 ③灰	外面 刷毛目様のロクロ条痕。内面 青海波状の当て目。
1区6号掘立柱建物跡周辺遺物					
- 1	須恵器 坏	2L-23 1/4	①(12.7)②6.0 ③3.8	①並②還元焰硬質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。
- 2	須恵器 坏	2M-23 1/2	①(11.4)②5.9 ③4.8	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。体部下位は回転ヘラ削り。高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。内面 底部周辺に黒灰色の付着物が見られる。
- 3	須恵器 蓋	2M-23 1/4	①(17.0)③(2.6)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。
- 4	須恵器 葉壺蓋	2M-23 口縁部片	①(14.8)③(3.0)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。鑄状の突起貼り付け。外面に自然釉付着。
- 5	須恵器 短頸壺	2M-23 口~胴1/4	①(10.8)③(5.3)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。
- 6	須恵器 壺	2M-23 底部2/3	②13.5③(6.2)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。高台貼り付け。外面 胴部下位は横方向のヘラ削り。
2区1号掘立柱建物跡					
- 1	須恵器 坏	P 1 1/4	①(12.8)②(6.3) ③3.9	①粗②還元焰硬質 ③褐灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
14区1号掘立柱建物跡					
- 1	須恵器 壺	P 6 ほぼ完形	①15.5②7.1 ③5.0	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
15区1号掘立柱建物跡					
- 1	瀬戸・美濃 灰釉陶器皿	P 2 口縁部1/6	①(13.6)③(1.5)	①密②良好 ③胎土：灰色	ロクロ成形。釉は光沢有り、釉厚薄い。
15区1号柱列					
- 1	敲石	P 2 完形	①11.1②11.0 ③4.1	石英閃緑岩	面部2面は中央部に顕著な敲打痕があり、摩擦による条痕も不規則に見られる。小口は全面に使用。裏面に酸化した鉄分が極わずか付着。
1区114号土坑					
- 1	須恵器 蓋	1/4	③(2.7)④摘4.0	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。つまみは貼り付けで、つまみの周辺は貼り付けによる撫で。天井部の3分の2程までは回転ヘラ削り。
1区121号土坑					
- 1	土師器 甕	頸部片	③(3.4)	①粗②酸化焰普通 ③灰黄	頸部から胴部は縦方向の刷毛目。
1区133号土坑					
- 1	須恵器 坏	2/3	①12.3②6.2 ③3.9	①並②還元焰普通 ③灰黄	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 坏	1/3	②(7.8)③(2.5)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
1区169号土坑					
- 1	鉄滓		①2.8②2.0③1.5 ④重5g		軽い鉄滓。酸化分多。
2区104号土坑					
- 1	須恵器 坏	1/4	①(13.0)②(7.2) ③(3.0)	①密②還元焰軟質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
2区148号土坑					
- 1	土師器 坏	1/4	①(12.7)③(3.7)	①密②酸化焰普通 ③にぶい褐	外面 体部ヘラ撫で、底部ヘラ削り。内面 斜め方向の磨き。
3区2号土坑					
- 1	須恵器 把手付瓶	把手部	③(9.2)	①密②還元焰普通 ③灰	手捻り成形、ヘラ状工具による面取り後撫で調整。
4区79号土坑					
- 1	須恵器 壺	1/3	②(7.6)③(1.9)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
5区17号土坑					
-1	土師器 甕	頸~胴1/4	③(9.5)	①並②酸化焰普通 ③橙	外面 頸部は横撫でで、指頭痕が見られる。胴部上位は横方向のヘラ削り、中位から下方向のヘラ削り。内面 頸部は横撫で、胴部ヘラ撫で。
5区28号土坑					
-1	須恵器 碗	底部片	②(6.8)③(2.6)	①密②還元焰硬質 ③オリーブ灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。底部に絵画様のヘラ痕あり。
6区3号土坑					
-1	管状鉄製品	破片	①(4.2)②径0.5× 0.4		
8区1号粘土採掘坑群					
-1	肥前陶器 碗	体~底1/4	②(4.9)③(3.6)	①やや緻密②普通 ③青灰色	陶胎染付碗。外面雑な染め付け。釉に粗い貫入入る。
-2	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部片	②(4.9)③(1.9)	①緻密②良好 ③灰白色	内面に鉛釉を施す。高台内と高台周辺には化粧的に薄く施す。
-3	瀬戸・美濃 陶器 皿	底部1/5	②(7.9)③(1.0)	①粗い②不良 ③淡黄色	内外面に釉を施すが、焼成不良により種類は不詳。丸皿である。
8区1号土坑					
-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	高台部	②4.5③(1.2)	①緻密②普通 ③淡黄色	内面に鉄釉を施す。高台部は無釉。高台端部は狭い。
8区5号土坑					
-1	丹波陶器 すり鉢	体部片	③(6.4)	①礫含む②良好 ③灰白色	体部外面下位に撫でが認められる。
-2	銅銭	完形	①長23.47②孔径5.80 ③厚1.75~2.06④重2.21g		文字不明。
-3	銅銭	完形	①長24.40②孔径5.71 ③厚1.16~1.33④重2.60g		「寛永通宝」。
8区64号土坑					
-1	肥前陶器 碗	口縁部片	①(12.3)③(4.1)	①やや緻密②良好 ③青灰色	陶胎染付碗。外面雑な染め付け。釉に粗い貫入入る。
11区1号土坑墓					
-1	須恵器 碗	床直 ほぼ完形	①15.6②7.2 ③5.6	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
-2	石皿	床直 完形	①28.9②19.8 ③13.2	粗粒輝石安山岩	1面使用。棺の台石として転用。
14区1号竪穴状遺構					
-1	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	口~体片	①(32.8)③(8.1)	①緻密②良好 ③淡黄色	内外面に鉄泥を施す。内面にすり目を施す。
-2	銅銭	埋土 完形	①長22.68②孔径6.60 ③厚2.41~2.80④重2.46g		文字不明。
-3	銅銭	埋土 完形	①長24.78②孔径5.47 ③厚1.38~1.40④重3.85g		「寛永通宝」。
-4	銅銭	埋土 完形	①長22.69②孔径6.45 ③厚1.16~1.24④重2.16g		「寛永通宝」。
14区1号土坑					
-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部	②7.0③(2.5)	①やや緻密②良好 ③淡黄色	内面に鉄釉を施し、底部には2カ所目痕が残る。外面は無釉。
-2	陶器 焙烙	口~底片	①(30.8) ②(30.8)③2.1	①やや密②酸化焰 普通③赤褐色	内外面体部横撫で。
-3	在地土器 焜炉	体部片	③(8.2)	①やや緻密②普通 ③青灰色	焜炉の内側。空気用の円孔が認められる。
14区3号土坑					
-1	瀬戸・美濃 陶器 小杯	1/4	①(6.9)②(3.1) ③4.9	①緻密②良好 ③白色	外面に鹿と山野を描く。呉須は天然であろう。
-2	在地土器 焙烙	口縁部片	③(5.6)	①やや緻密②普通 ③鈍黄橙	体部外面下位斲削り。補修穴あり。器表黒灰色。
14区6号土坑					
-1	肥前陶器 火入れ	3/5	①9.5②5.2 ③6.8	①緻密②良好 ③青灰色	外面白土掛け、高台脇以下と内面は無釉。高台は蛇の目高台。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 2	美濃・瀬戸 陶器片口鉢	3/4	①(19.0)②10.2 ③11.6	①やや緻密②普通 ③淡黄色	外面の高台脇以下は無釉。他には鉄釉を施す。口縁部内面使用により磨滅する。
15区1号土坑					
- 1	敲石	1/2	①(8.5)②5.5 ③3.2	変質安山岩	稜部に敲打痕あり。全面が磨滅している。
4区1号堀					
- 1	瀬戸・美濃 陶器 菊皿	口縁部片	③(1.7)	①やや緻密②普通 ③淡黄色	内面型押し、外面はノミによる削り。灰釉を施す。
- 2	瀬戸・美濃 陶器香炉?	口~体片	②(12.0)③(3.1)	①やや緻密②良好 ③灰白色	体部外面と口縁部外面に鉄釉を施す。体部外面の轆轤目顕著。外面屈曲部以下は無釉。
- 3	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	口縁部片	③(4.8)	①やや緻密②普通 ③灰白色	片口部小片。内外面に鉄泥を施す。
- 4	益子・笠間 陶器すり鉢	底部1/4	②(7.0)③(1.8)	①緻密②良好 ③淡黄色	内面から体部外面下位まで鉄釉を施す。底部外面と体部外面下位は回転削り。
- 5	台石?	1/3	①(26.1) ②(17.5)③9.4	角閃石安山岩 (二ツ岳)	上面の成形は粗く、平坦ながら凹凸を残す。側面は2面ともに平坦に磨く。上面・側面に見られる条痕は、転用後の刃物類などによる擦り痕と見られる。
- 6	椀形鉄滓		①6.6②6.4③5.1④重230g		裏面は炉床痕。
4区6号溝					
- 1	鉄製品 刀子?	1/3	①(3.7)②0.9③0.4		
5区1号溝					
- 1	須恵器 壺	底部片	②(7.3)③(2.6)	①並②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
6区1号溝					
- 1	須恵器 坏	1/3	①(13.5)②7.5 ③2.7	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
6区42号溝					
- 1	須恵器 壺	1/2	②6.5③(2.5)	①並②還元焰軟質 ③暗灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。燻し焼成。
- 2	須恵器 壺	底部	②7.1③(1.6)	①密②還元焰軟質 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。
6区53号溝					
- 1	土師器 坏	1/6	①(11.6)③(3.4)	①並②酸化焰軟質 ③にぶい黄橙	外面 底部ヘラ削り。内面 口縁部から体部は横撫で。
- 2	鉄器 不明	1/2	①(3.2)②0.7③0.5		棒状。断面方形で先端まで良く整形する。湾曲した形状は変形ではない。錆少ない。
7区6号溝					
- 1	須恵器 蓋	1/8	①14.4③(1.4)	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。
7区7号溝					
- 1	石製支脚	1/2	①(14.4)②8.4 ③9.1	未固結凝灰岩	側面は面取り様の成形。
- 2	椀形鉄滓		①8.0②6.6③4.5④重230g		旧時に欠いた形跡。裏面は炉床痕。
8区2号溝					
- 1	須恵器 坏	1/4	①(13.4)②(7.4) ③3.2	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
- 2	須恵器 坏	2/5	②6.0③(2.4)	①密②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
9区4号溝					
- 1	土師器 坏	1/6	①(13.4)③(3.3)	①並②酸化焰普通 ③にぶい赤褐	外面 口縁部横撫で、体部は横方向のヘラ撫で。内面 横撫で。
11区3号溝					
- 1	肥前磁器 碗	1/6	①(9.9)②(3.8) ③5.1	①緻密②良好 ③灰白色	外面コンニャク判により施文。高台内は簡略化した「渦福か」。波佐見系。
- 2	銅銭	完形	①長22.82②孔径7.63 ③厚1.12~1.15④重2.39g		「寛永通宝」。裏面は波文。
15区1号堀					
- 1	在地土器 焙烙	破片(内耳)	③5.9	①白色粒含む ②普通③黄橙	内耳部の小片。内耳の下部は底部に付かず、体部下位に接合する。器表は灰黒色。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
15区1号溝					
-1	銅銭	完形	①長28.22②孔径6.44 ③厚1.15~1.23④重4.43g		「寛永通宝」。
6区1号井戸					
-1	鉄器 不明	破片	①(5.0)②(3.0)③(0.9)		上端は折り返して袋状を成す。鍛造か。錆が顕著。
8区1号井戸					
-1	肥前陶器 鉢・皿	頸部片		①やや緻密②良好 ③鈍赤褐色	いわゆる唐津三島手。内面に緑釉を一部流している可能性があるが、小片のため不詳。
-2	銅製品 不明	破片	①(5.1)②(1.4)③(0.1)		
8区2号井戸					
-1	砥石	1/2?	①(10.9)②(9.0) ③6.3	粗粒輝石安山岩	4面使用。石臼の転用か。
14区1号井戸					
-1	肥前磁器 碗	底部1/3	②4.1③(2.5)	①緻密②普通 ③青灰色	外面2重網目文。波佐見系。
-2	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	体~底1/8	②(15.2)③(5.3)	①やや緻密②普通 ③灰白色	内外面に鉄泥を施す。体部外面回転削り。内面のすり目使用により摩滅する。
-3	丹波・信楽 陶器すり鉢	体部片	③(6.0)	①鉾物含む②良好 ③灰白色	体部下位片。内面自然釉付着。器表鉄錆色。
-4	在地土器 焙烙	口~体片	③5.4	①緻密②普通 ③黒灰色	口縁部外反する。体部外面轆轤目顕著。
-5	銅製品 切羽	一部欠損	①3.2②2.0③0.1		短刀用、柄側。
-6	銅銭	完形	①長22.70②孔径6.26 ③厚0.96~1.01④重1.87g		「寛永通宝」。
15区1号井戸					
-1	製作地不詳 陶器湯飲み	体~底片	②2.4③(1.9)	①緻密②普通 ③灰白色	内外面にクリーム色の釉を施す。外面は斑点状に施釉する。高台は3カ所に切り込みを入れている。時期不詳。
-2	肥前陶器 鉢・皿	底部片	②(8.3)③(3.9)	①緻密②良好 ③鈍赤褐色	いわゆる唐津の三島手。底部内面に目痕1カ所残る。
15区2号井戸					
-1	石製品 不明	一部欠損	①(11.5)②(7.1) ③(6.4)	二ツ岳軽石	欠損が著しいが、上部端部は丸く平滑に仕上げる。磨石の可能性あり。
7区1号道路跡					
-1	須恵器 鉢	口縁部片	③(6.6)	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。内面は口縁部まで横方向によく磨り使用されている。
0区旧河道跡					
-1	須恵器 坏	1/3	①(14.0)②(8.4) ③3.5	①密②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-2	須恵器 坏	2/5	②7.0③(2.8)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
-3	須恵器 坏	1/3	①(10.6)②6.2 ③(2.1)	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整。
-4	須恵器 坏	1/4	①(11.2)②(2.9) ③3.6	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。
-5	須恵器 高坏	1/3	③(2.9)	①粗②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形、回転方向不明。脚部貼り付け。外面 体部下位は回転ヘラ削り。
-6	須恵器 甕	胴部片	③(16.0)	①密②還元焰硬質 ③灰	外面 斜め方向の疑似格子目叩き。内面 青海波状の当て目。
縄文土器					
-1	深鉢	4区3Q-25 胴部	③(7.5)	①細砂粒②良好 ③明赤褐	太さ2ミリの集合沈線で横位に区画し、間を縦位に充填している。諸磯b式土器。
-2	深鉢	1区 胴部	③(7.1)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	幅3ミリの平行沈線で横位に区画。地文はLrの縄文。諸磯b式土器。
-3	深鉢	3区 胴部	③(3.0)	①細砂粒②良好 ③にぶい赤褐	幅8ミリの平行沈線により文様を描く。貝殻腹縁による施文。興津式土器。
-4	深鉢	9区7E-31 胴部	③(2.2)	①細砂粒②良好 ③暗赤	lrの燃糸施文。諸磯b式土器。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-5	深鉢	15区 胴部	③(3.2)	①細砂粒②良好 ③明赤褐	太さ2ミリの集合沈線を横位施文。地文の縄文は、RL。諸磯b式土器。
-6	深鉢	15区 胴部	③(3.5)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	幅3ミリの平行沈線で横位に区画。地文の縄文は、Lr。諸磯b式土器。
-7	深鉢	11区 胴部	③(4.8)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	幅5ミリの平行沈線で曲線・弧線を描く。地文の縄文は、RL。諸磯b式土器。
-8	深鉢	8区6P-26 口縁部	③(18.5)	①径2~5ミリの 小石②良好 ③にぶい橙	口縁部は無文。胴部に沈線と隆線の長楕円の文様区画。縄文は、LRLの横位施文。加曾利EⅢ式土器。
-9	深鉢	9区 胴部	③(4.2)	①細砂粒②良好 ③明赤褐	太さ6ミリの沈線で文様を描く。縄文は、RLの縦位施文。加曾利EⅢ式土器。
-10	深鉢	11区 突起	③(6.6)	①細砂粒②良好 ③暗赤	沈線による弧線。加曾利E式土器。
-11	深鉢	12区8P-43 胴部	③(4.0)	①細砂粒②良好 ③明赤褐	太さ6ミリの沈線で文様を描く。縄文は、RLの縦位施文。加曾利EⅢ式土器。
-12	深鉢	11区 口縁	③(4.5)	①細砂粒②良好 ③明赤褐色	太さ4ミリの横位の沈線。
-13	深鉢	10区7M-32 口縁	③(34.4)	①細砂粒②良好 ③橙	太さ12ミリ程の刻みを持った隆線で口縁部を方形に区画する。頸部以下は、内外面ともへら上の工具で削られている。安行Ⅲb~c式土器。
-14	深鉢	4区4A-25 底部欠	③(47.6)	①細砂粒②良好 ③にぶい褐	器面にへらによるケズリ。安行Ⅲb~c式土器。
-15	深鉢	4区4T-24 口縁	③(5.5)	①細砂粒②良好 ③にぶい橙	口縁に集合沈線による縦位の沈線、その下に貝殻腹縁をまねた竹管による爪型文が施文される。浮島Ⅲ式土器。
-16	深鉢	11区 底部	②(5.3)③(1.0)	①細砂粒②良好 ③暗褐	底面に網代痕を持つ。後期~晩期の土器。
弥生土器					
-1	甕	6区5Q-26 ほぼ完形	①15.7②6.2 ③23.3	①並②酸化焙普通 ③橙	外面 口縁部から頸部は波状文2段以上。頸部に10条1単位の3連止め簾状文を右廻りに施文。胴部上位は3段以上の波状文、下位はへら磨き。内面 へら磨き。
-2	甕	9区7D-26 ・27 完形	①18.2②7.3 ③25.0	①並②酸化焙普通 ③にぶい黄	外面 口縁部から頸部にかけて刷毛整形後、頸部に10条1単位の2連止め簾状文を右廻りに施文。胴部上位は3段の波状文、下位はへら磨き。内面 へら磨き。
石器					
-1	石鏃	4区4I-27 完形	①2.3②1.8③0.4		黒曜石
-2	石鏃	10区7N-32 完形	①1.5②1.1③0.3		黒曜石
-3	石鏃	8区6R-25 完形	①2.0②1.6③0.4		チャート
-4	石鏃	1区 完形	①2.4②1.4③0.6		珪質頁岩
-5	石鏃	10区 完形	①3.7②1.7③0.4		チャート
-6	石鏃	8区 完形	①3.6②1.9③0.3		黒色安山岩
-7	石鏃	7区6G-27 完形	①3.6②1.8③0.5		黒色頁岩
-8	石鏃	10区7K-30 一部欠損	①(2.9)②1.9 ③0.5		チャート
-9	石匙	5区5F-24 完形	①3.2②1.0③0.5		黒曜石
-10	石匙	4区4M-23 完形	①6.9②4.8③1.0		黒色頁岩
-11	スクレイパー	5区5A-26 完形	①10.6②7.9 ③1.4		珪質頁岩
-12	スクレイパー	12区 完形	①3.9②7.0③1.4		黒色安山岩
-13	打製石斧	4区4M-27 完形	①11.2②4.6 ③1.6		細粒輝石安山岩

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
-14	打製石斧	4区4A-25 完形	①11.7②5.6 ③1.3	黒色頁岩	
-15	打製石斧	12区8K-44 完形	①11.5②4.3 ③1.9	黒色頁岩	
-16	打製石斧	4区4A-25 完形	①16.3②7.5 ③2.5	輝緑岩	
-17	打製石斧	5区5A-26 ・27 完形	①12.4②7.5 ③2.9	砂岩	
-18	打製石斧	8区6N-27 完形	①17.7②9.3 ③4.0	黒色頁岩	
-19	スタンプ型 石器	4区 完形	①8.6②9.3③5.2	粗粒輝石安山岩	
-20	敲石	11区 完形	①19.5②6.0 ③4.7	黒色頁岩	端部2箇所使用。
-21	凹石	1区2O-19 完形	①7.6②7.0③5.6	粗粒輝石安山岩	6面に孔を有する。
-22	石皿	3区 1/4	①(14.0) ②(11.7)③5.8	粗粒輝石安山岩	4面に孔を有する。欠損後多孔石に転用。
古墳・奈良・平安時代遺物					
-1	土師器 坏	1区2L-20 1/4	①(12.6)③5.6	①並②酸化焰普通 ③明赤褐	外面 口縁部から体部上半は横撫で、底部ヘラ削り。内面に放射状のヘラ磨きあり。
-2	須恵器 坏	4区 底部片	②5.2③(2.0)	①並②酸化焰普通 ③にぶい橙	外面 体部下位は横方向のヘラ削り、底部ヘラ削り。底部にヘラ記号あり。内面 ヘラ磨き後、黒色処理。
-3	灰釉陶器 皿	6区 底部	②6.0③(1.6)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部ヘラ調整、高台貼り付け。底部周辺は高台貼り付けによる撫で。施釉は内面だけで刷け塗り。釉調は透明感のある緑灰色。
-4	灰釉陶器 皿	4区 1/5	①15.6②6.8 ③2.4	①並②還元焰硬質 ③灰黄	ロクロ成形、回転方向右か。底部は回転ヘラ調整、高台貼り付け。施釉方法は刷け塗り。釉調は不透明な灰オリープ色。
-5	須恵器 坏	8区 1/3	①(12.3)②7.8 ③3.7	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。底部に墨書「上万」。
-6	須恵器 壺	6区 2/5	③(2.8)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。底部は回転糸切り未調整、高台貼り付け。内面黒色処理。
-7	須恵器 壺	11区8C-36 1/3	①(15.0)③(4.0)	①並②還元焰普通 ③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。
-8	須恵器 蓋	15区 1/6	①(14.8)③(2.6)	①密②還元焰硬質 ③黒	ロクロ成形、回転方向不明。天井部は回転ヘラ削り。
-9	須恵器 広口壺	8区 口縁部1/4	①(12.8)③(1.8)	①密②還元焰硬質 ③灰	ロクロ成形。口縁部の突帯は貼り付け。
-10	須恵器 蓋	15区 摘部	③(1.2)	①並②還元焰普通 ③灰	つまみ貼り付け後、撫で。
-11	須恵器 甕	1区 頸部1/2	③(9.4)	①密②還元焰硬質 ③黄灰	外面 口縁部から頸部にロクロ条痕、胴部叩き。
-12	土製円盤	2区 完形	①3.0②2.3③0.8	①粗②酸化焰普通 ③にぶい橙	側縁はうちかき後に磨き整形、表裏に紐かけ様のきざみを持つ。
-13	土製円盤	11区8A-36 完形	①4.6②4.6③1.9	①密②還元焰普通 ③オリープ灰	側縁はうちかき。瓦の転用。
-14	土製円盤	9区 完形	①4.3②4.2③1.6	①粗②酸化焰普通 ③にぶい黄褐	側縁はうちかき後に粗く磨く。表裏にわずかに紐かけ様のきざみを持つ。
中世以降遺物					
-1	備前陶器 碗	8区 底部	②4.2③(3.1)	①密②良好 ③黄灰	見込み蛇ノ目釉刺ぎ。外面草花文を描く。呉須の発色は比較的良い。
-2	瀬戸・美濃 陶器 皿	6区 1/6	①(11.4)③2.5	①やや緻密②普通 ③淡黄	全面に長石釉を薄く施す。外面の轆轤目は顕著で、体部下半は回転削り。高台端部は磨滅する。
-3	瀬戸・美濃 陶器 皿	4区 底部1/4	②(6.0)③(1.0)	①やや緻密②良好 ③淡黄	全面に灰釉?を施す。外面体部下位回転削り。
-4	瀬戸・美濃 陶器 皿	7区 底部1/4	②(7.4)③(1.2)	①やや粗い②普通 ③淡黄	全面に長石釉を薄く施す。体部外面下位削り。底部外面目痕1ヶ所。
-5	瀬戸・美濃 陶器 皿	7区 底部1/4	②(6.0)③(0.9)	①やや密②普通 ③淡黄	高台内を除き長石釉を施す。高台内と底部内面に円錐ピン痕残る。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
- 6	瀬戸・美濃 陶器 皿	8区 1/6	①(12.0)③(2.3)	①やや密②普通 ③灰白	口縁部に灰釉を施す。口縁部は外反し、端部は短く立ち上がる。
- 7	瀬戸・美濃 陶器 碗	8区 口縁部片	①(10.5)③(3.9)	①密②良好 ③青灰	鉛釉を施す。
- 8	瀬戸・美濃 陶器 香炉	6区 体～底1/4	②(8.8)③(3.9)	①密②良好 ③青灰	鉛釉を施す。高台脇以下と体部内面下位無釉。
- 9	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	8区 口縁部片	③(2.1)	①やや緻密②普通 ③淡黄	鉄泥を施す。口縁端部は上方に引き上げる。
-10	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	15区 口～体片	③(5.3)	①やや緻密②普通 ③淡黄	鉄泥を施す。すり目は口縁部下まで引き上げる。口縁部は轆轤目が顕著である。
-11	丹波か信楽 系陶器 すり鉢	8区 底部片	③(3.1)	①鉱物粒含む ②普通③橙	内面使用により磨滅する。12と同一個体の可能性高い。
-12	丹波か信楽 系陶器 すり鉢	7区 底部片	②(12.6)③(2.6)	①鉱物粒含む ②普通③橙	内面使用により磨滅する。11と同一個体の可能性高い。
-13	在地土器 焙烙	8区 口縁部片	③(4.7)	①緻密②良好③器 表と断面中央黒灰	器表下は灰白色。内面に耳の貼り付け痕残る。
-14	在地土器 焙烙	15区 口～体片	③(5.3)	①緻密②良好③器 表と断面中央黒灰	器表下は灰白色。外面体部下位圧痕残る。
-15	在地土器 焙烙	7区 口縁部片	③5.3	①やや緻密②普通 ③灰白	口縁部回転横撫で。外面中位接合痕明瞭。
-16	軟質陶器 香炉	1区2M-23 脚部片	③(2.3)	①密②還元焰普通 ③灰黄	外面 脚部は貼り付け後ヘラ状工具による面取り。
-17	泥面子	5区 完形	①1.9②1.8③0.7	①密②酸化焰軟質 ③にぶい橙	人面。裏面撫で。
-18	土人形	8区6N-28 顔部	①(2.7)②(2.4) ③(2.5)	①密②酸化焰軟質 ③橙	型合せ。外面 雲母粉?付着。内面に指頭痕が見られる。
-19	磁器 サイコロ	8区6Q-26 完形	①1.7②1.7③1.7	①密	型作り。サイコロの目に一部赤色彩色が残る。
-20	銅製品 キセル	5区 雁首 一部欠損	①(4.0)②径1.0③0.1		
-21	銅製品 キセル	15区9M-68 雁首完形	①6.4②径0.9③0.1		
-22	銅銭	1区 1/2	③厚1.41～1.42④重1.35g		「□元通□」。
-23	銅銭	11区8D-40 完形	①長24.08②孔径5.98 ③厚1.04～1.20④重3.11g		「紹□元宝」。
-24	銅銭	6区 完形	①長25.04②孔径5.82 ③厚1.21～1.28④重3.21g		「寛永通宝」。裏「文」。
時期不明遺物					
- 1	砥石	7区 一部欠損	①(7.7)②3.9 ③2.7	流紋岩	5面使用。
- 2	砥石	15区 1/2	①(5.8)②4.1 ③1.9	流紋岩	4面使用。1面は磨滅なく、条痕のみ。
- 3	砥石	2区 完形	①3.0②2.9③2.2	砥沢石	6面使用。円孔部が2分の1程残る。欠損後の二次使用。
- 4	ケイ化物	4区3R-24	①3.1②2.4③1.4④重10g		ガラス分多。鉄製作関連か。
- 5	椀形鉄滓	4区	①8.3②7.7③3.0④重236g		裏面は炉床痕。

遺物観察表

動物遺存体観察表

通番	図版番号	遺構名	種類	部位	遺存状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	
1	G-1火壇-2	西国分G区1号火葬土壇	烧人骨	体肢骨	細片	2.25	1.12	
2	G-1火壇-3	西国分G区1号火葬土壇	烧人骨	脳頭蓋骨	細片	2.3		
通番	挿図番号 図版番号	遺構名	種類	部位	遺存状態	歯冠長(cm)	歯冠幅(cm)	歯冠高(cm)
1	E-6・7溝-2	冷水E区6・7号溝	馬歯	上顎P3かP4		(2.0)	(1.5)	(6.8)
2	G-3井-6	西国分G区3号井戸	馬歯	左下顎M1		(2.2)	(1.2)	(3.3)
3	G-3井-7	西国分G区3号井戸	馬歯	左下顎M2		2.2	1.3	(3.4)
4	G-3井-8	西国分G区3号井戸	馬歯	左下顎M3		(2.1)	(1.1)	(4.1)
5	G-3井-9	西国分G区3号井戸	馬歯	左下顎P3		(1.0)	(0.65)	(3.6)
6	G-3井-10	西国分G区3号井戸	馬歯	左下顎P4		(2.3)	1.4	(4.5)
7		冷水C区1号河道	馬歯	上顎	細片	最大長3.75ほか重9.3g		

瓦観察表

通番	挿図番号 図版番号	瓦種	生産地	作り	成形	整形		面取り 側端	粘 剝	胎 土	焼 成	色 調	厚 (cm)	布 目	出土遺構 摘要	
						整 形	叩 具									
1	C-1溝-3	男瓦	乗附	半截	轆轤					密	還	締	暗灰	1.8	並	冷水C区1号溝
2	C-1溝-2	女瓦	乗附	一作	型台		板目	2		並	還	硬	灰	2.0	並	冷水C区1号溝
3	C-1溝-4	女瓦	笠懸	一作	型台		繩単			並	酸	軟	黄橙	1.8	並	冷水C区1号溝
4	C-1溝-1	女瓦	笠懸	一作	型台	斜撫		2		並	還	並	灰	1.8	消	冷水C区1号溝
5	E-9溝-3	女瓦	笠懸	一作	型台		繩単	2		並	還	軟	黒灰	1.5	並	冷水E区9号溝
6	E-9溝-4	女瓦	秋間か	桶か	轆轤	斜撫				並	還	硬	灰白	1.5	並	冷水E区9号溝
7	E-9溝-2	男瓦	北毛・笠懸	半截	Z轆轤			3		密	還	硬	灰白	1.6	並	冷水E区9号溝
8	F-5溝-1	男瓦	秋間	半截	轆轤			1		並	還	並	灰白	1.9	並	西国分F区5号溝 凹赤橙色顔料付
9	D-22溝-4	女瓦	秋間	桶卷	轆轤		繩	2		密	還	硬	灰	2.0	並	冷水D区22号溝
10	D-22溝-5	女瓦	笠懸	一作	型台	縦撫		2		並	還	並	灰	1.6	消	冷水D区22号溝
11	6-42溝-3	男瓦	吉井	半截	轆轤		平行	1		粗	酸	軟	黄橙	2.2	並	金古6区42号溝
12	1-1住-2	女瓦	秋間	一作	型台		繩密			粗	還	軟	灰黄	1.4	並	金古1区1号住
13	B-3住-6	男瓦	乗附	半截	轆轤			2		並	還	並	灰白	1.7	並	冷水B区3号住 文字「一」が宛記号
14	1-7住-12	女瓦	乗附か	一か	不詳	縦撫				並	酸	硬	黄橙	1.3	並	金古1区7号住
15	D-32住-4	女瓦	笠懸	一か	不詳					密	還	並	灰白	1.1	並	冷水D区32号住
16	C-1河-3	男瓦	乗附	半截	轆轤		板目	3		並	還	並	灰白	2.0	粗	冷水C区旧河道
17	C-1河-2	女瓦	秋間	桶か	不詳	縦撫				粗	還	並	灰白	1.9	並	冷水C区旧河道
18	G-3井-4	女瓦	乗附	一作	型台	縦覧撫	板目			粗	還	並	暗灰	1.1	粗	西国分G区3号井
19	冷・奈-5	女瓦	秋間	一作	型台	撫	板目	1		並	中	軟	灰黄	1.8	並	冷水B区遺構外
20	冷・奈-6	女瓦	笠懸	一作	型台		板目	2		密	還	締	灰	1.1	消	冷水E区遺構外
21	冷・奈-7	女瓦	笠懸	一作	型台		繩単	2		並	酸	硬	鈍橙	1.4	並	西国分F区5J-22
22	冷・奈-8	女瓦	笠懸	一作	型台	斜撫		2		密	還	締	黒灰	1.5	消	西国分F区遺構外
23	冷・奈-9	男瓦	笠懸	半截	轆轤	縦撫		1		並	酸	並	黄橙	1.1	並	西国分F区遺構外
24	冷・奈-10	女瓦	乗附	桶卷	轆轤			1		密	還	締	暗灰	1.2	並	西国分F区遺構外
25	金・古-18	女瓦	秋間	桶か	不詳			1		並	酸	軟	黄灰	1.7	密	金古5区グリッド
26	金・古-15	女瓦	乗附	桶か	不詳				3	密	還	硬	暗灰	1.7	粗	金古0区遺構外
27	金・古-17	女瓦	乗附	一か	不詳			2		粗	還	軟	灰	0.9	粗	金古5区5A-23
28	金・古-16	男瓦	乗附	半截	轆轤			2		密	還	締	黒灰	1.6	粗	金古0区遺構外2

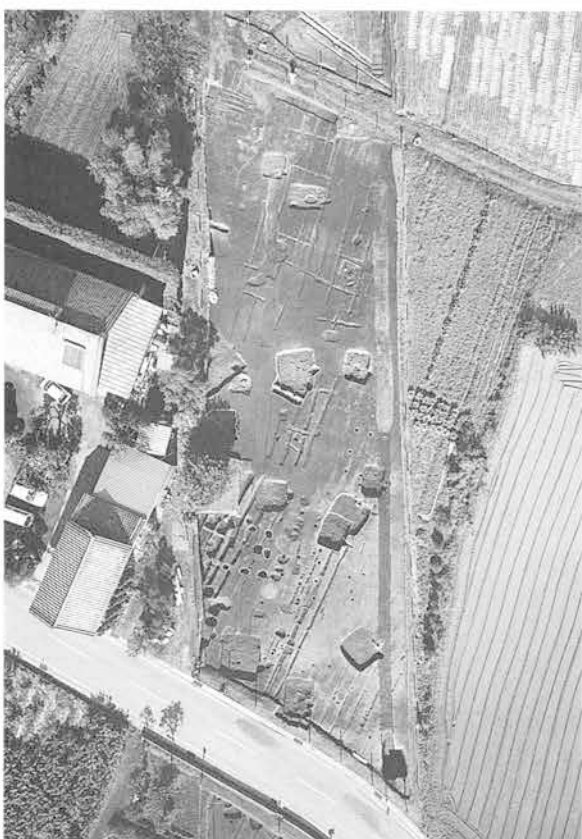
写 真 图 版



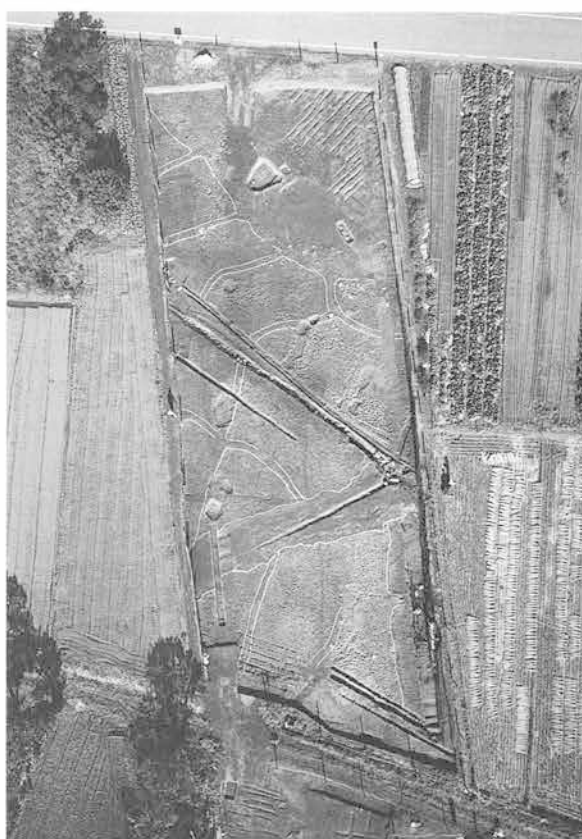
1. A～C区全景



2. A区全景



3. B区全景



4. C区全景



1. E区南全景



2. F区全景



3. G区全景



4. H区全景



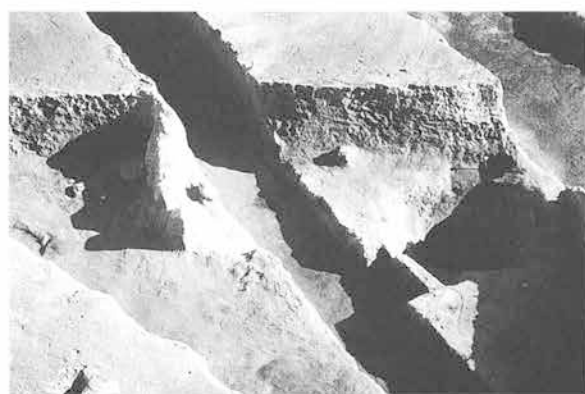
1. A区14号住居跡全景



2. A区14号住居跡掘り方



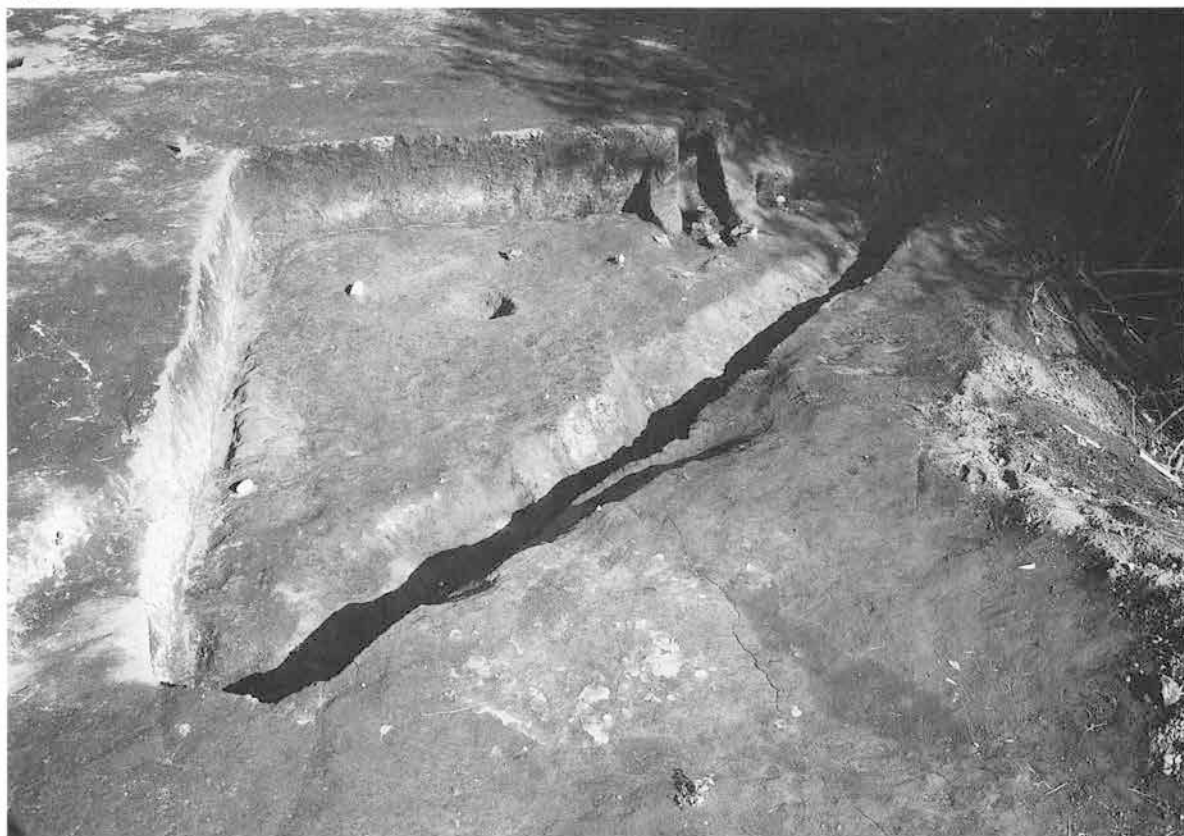
3. A区14号住居跡遺物出土状態



4. A区14号住居跡カマド



5. A区14号住居跡貯蔵穴



1. A区25号住居迹全景



2. A区27A号住居迹全景



1. A区27A号住居跡遺物出土状態 (1)



2. A区27A号住居跡掘り方



3. A区27A号住居跡カマド



4. A区27A号住居跡遺物出土状態 (2)



5. A区27A号住居跡カマド掘り方



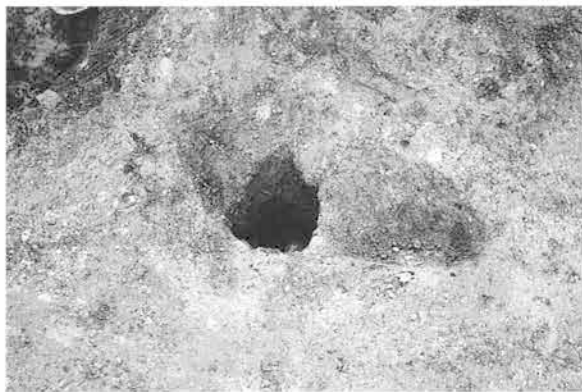
1. A区27A号住居跡遺物出土狀態 (3)



2. A区27A号住居跡遺物出土狀態 (4)



3. A区27A号住居跡貯藏穴



4. A区27A号住居跡柱穴1



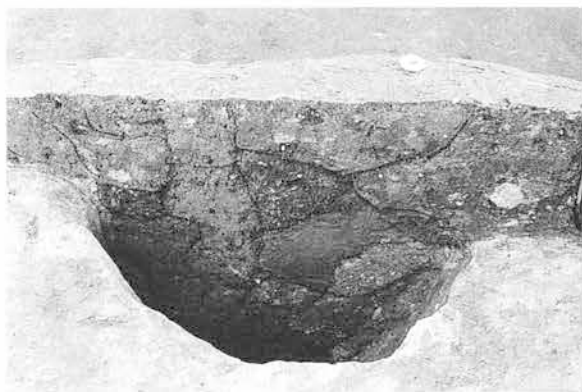
5. A区27A号住居跡柱穴2



6. A区27A号住居跡柱穴2土層断面



7. A区27A号住居跡柱穴4残存狀態



8. A区27A号住居跡柱穴4土層断面



1. A区28号住居跡全景



2. A区28号住居跡掘り方



3. A区28号住居跡カマド



4. A区28号住居跡遺物出土状態



5. A区28号住居跡貯蔵穴



1. A区30号住居跡全景



2. B区6号住居跡全景



1. B区6号住居跡遺物出土状態



2. B区6号住居跡カマド



3. B区6号住居跡掘り方



4. B区6号住居跡カマド遺物出土状態



5. B区6号住居跡遺物出土状態 (1)



6. B区6号住居跡遺物出土状態 (2)



7. B区6号住居跡遺物出土状態 (3)



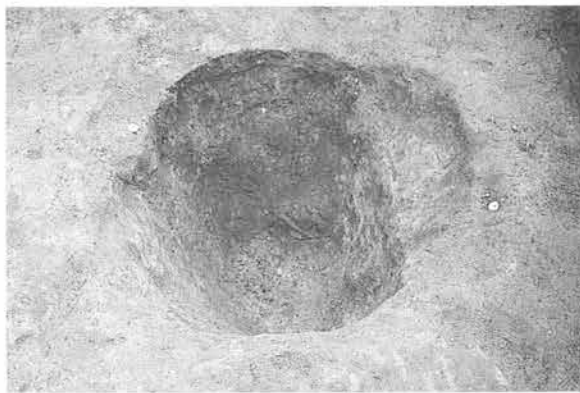
8. B区6号住居跡貯蔵穴



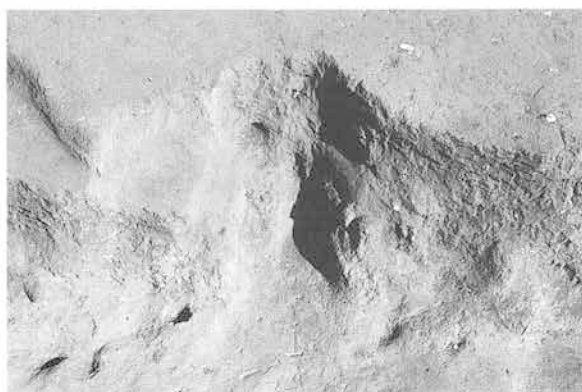
1. B区20号住居跡全景



2. B区20号住居跡カマド



3. B区20号住居跡貯蔵穴



4. B区20号住居跡カマド掘り方



5. B区20号住居跡遺物出土状態



1. B区26号住居跡全景



2. B区26号住居跡F A堆積状況



3. B区29号住居跡全景



4. B区29号住居跡カマド



5. B区29号住居跡F A堆積状況



1. B区29号住居跡貯蔵穴



2. B区29号住居跡貯蔵穴土層断面



3. D区31号住居跡全景



4. D区31号住居跡カマド



5. D区31号住居跡貯蔵穴土層断面



1. D区32号住居跡全景



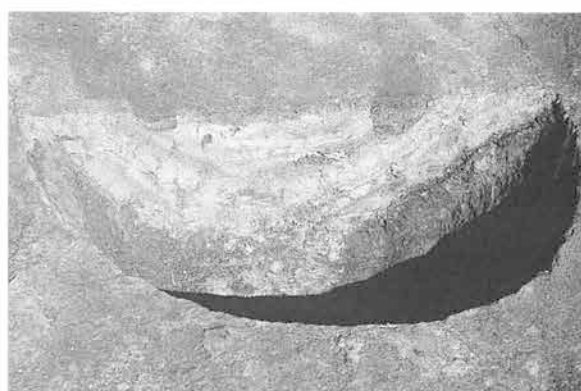
2. D区32号住居跡掘り方



3. D区32号住居跡カマド



4. D区32号住居跡遺物出土状態



5. D区32号住居跡貯蔵穴土層断面



1. D区33号住居跡全景



2. D区33号住居跡掘り方



3. D区33号住居跡カマド



4. D区33号住居跡土層断面



5. D区33号住居跡貯蔵穴



1. D区34号住居跡全景



2. D区34号住居跡掘り方



3. D区34号住居跡カマド



4. D区34号住居跡土層断面



5. D区34号住居跡遺物出土状態



1. A区15号住居跡全景



2. A区15号住居跡遺物出土状態 (1)



3. A区15号住居跡カマド



4. A区15号住居跡遺物出土状態 (2)



5. A区15号住居跡カマド土層断面



1. A区16号住居跡全景



2. A区16号住居跡掘り方



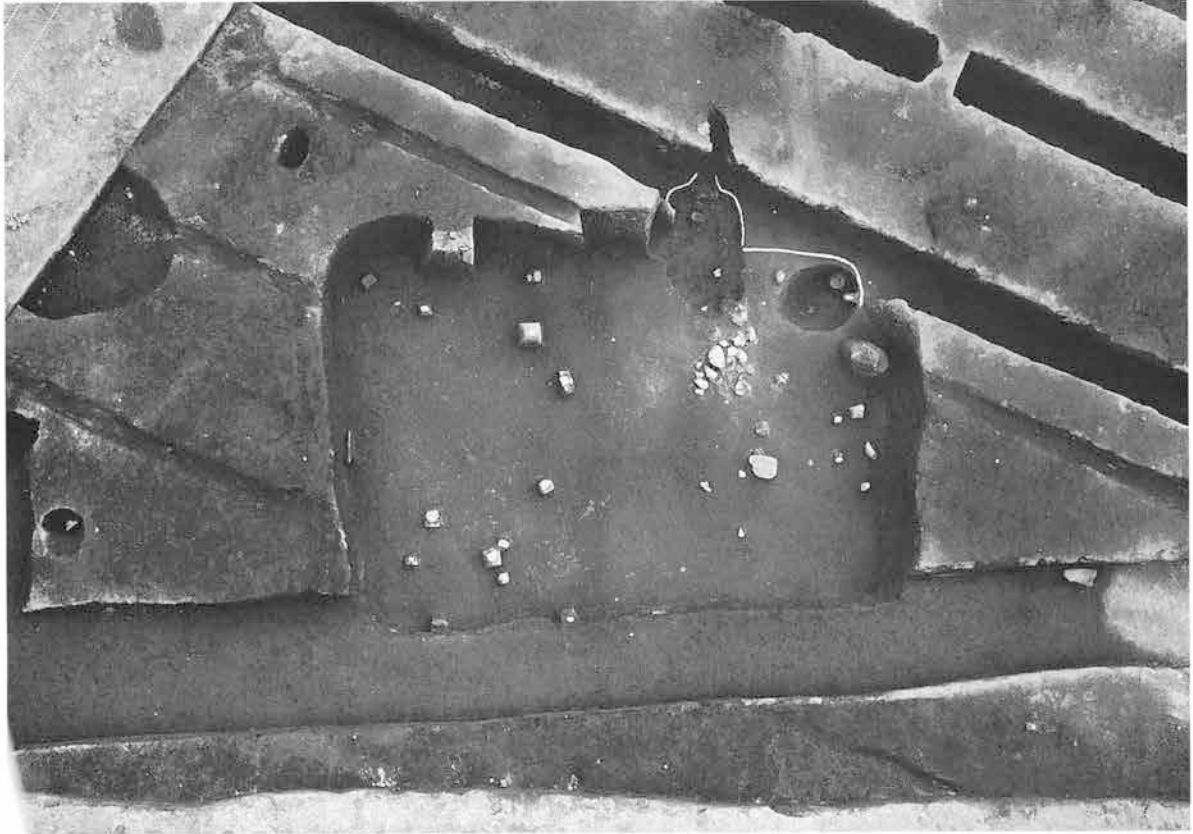
3. A区16号住居跡カマド



4. A区16号住居跡遺物出土状態



5. A区16号住居跡貯蔵穴



1. A区17号住居跡全景



2. A区17号住居跡掘り方



3. A区17号住居跡カマド



4. A区17号住居跡鋸出土状態



5. A区17号住居跡貯蔵穴



1. A区18号住居跡全景



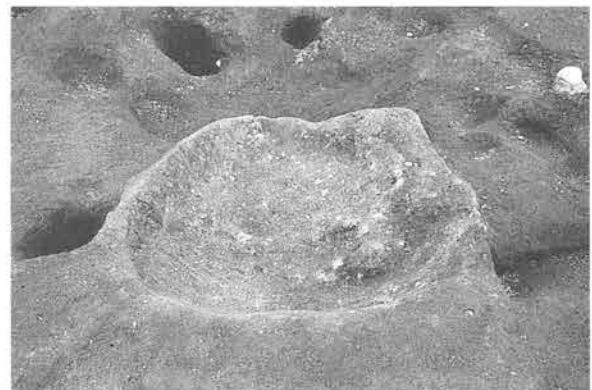
2. A区18号住居跡掘り方



3. A区18号住居跡遺物出土状態 (1)



4. A区18号住居跡遺物出土状態 (2)



5. A区18号住居跡床下土坑



1. A区19号住居跡全景



2. A区19号住居跡遺物出土状態 (1)



3. A区19号住居跡カマド



4. A区19号住居跡遺物出土状態 (2)



5. A区19号住居跡カマド遺物出土状態



1. A区21号住居跡全景



2. A区21号住居跡遺物出土状態



3. A区21号住居跡カマド



4. A区21号住居跡貯蔵穴



5. A区21号住居跡床下土坑



1. A区22号住居跡全景



2. A区22号住居跡遺物出土状態 (1)



3. A区22号住居跡カマド



4. A区22号住居跡貯蔵穴



5. A区22号住居跡遺物出土状態 (2)



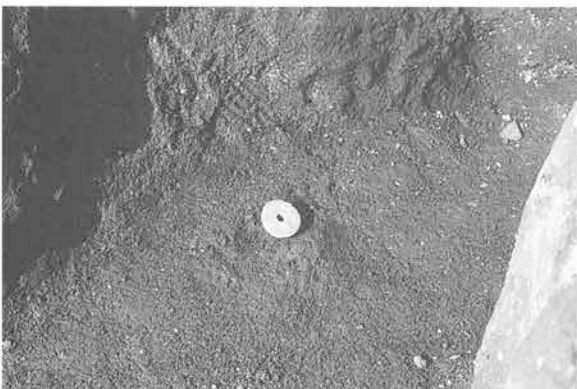
1. A区23号住居跡全景



2. A区23号住居跡カマド



3. A区23号住居跡遺物出土状態



4. A区23号住居跡紡錘車出土状態



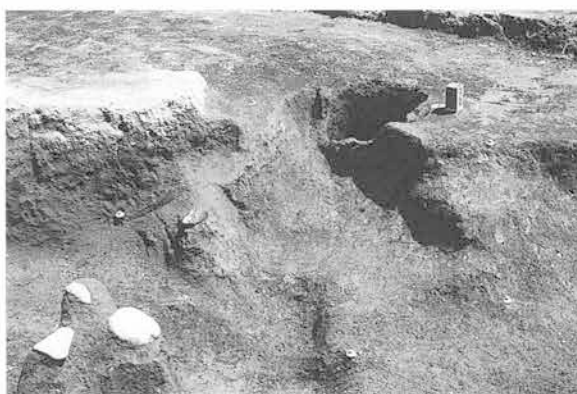
5. A区24号住居跡全景



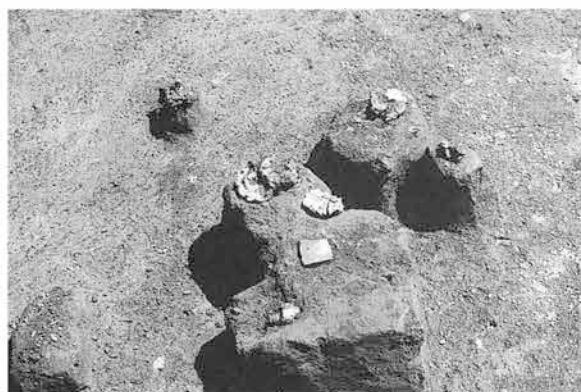
1. B区1号住居跡全景



2. B区1号住居跡掘り方



3. B区1号住居跡カマド



4. B区1号住居跡遺物出土状態



5. B区1号住居跡住居内土坑



1. B区2号住居跡全景



2. B区2号住居跡掘り方



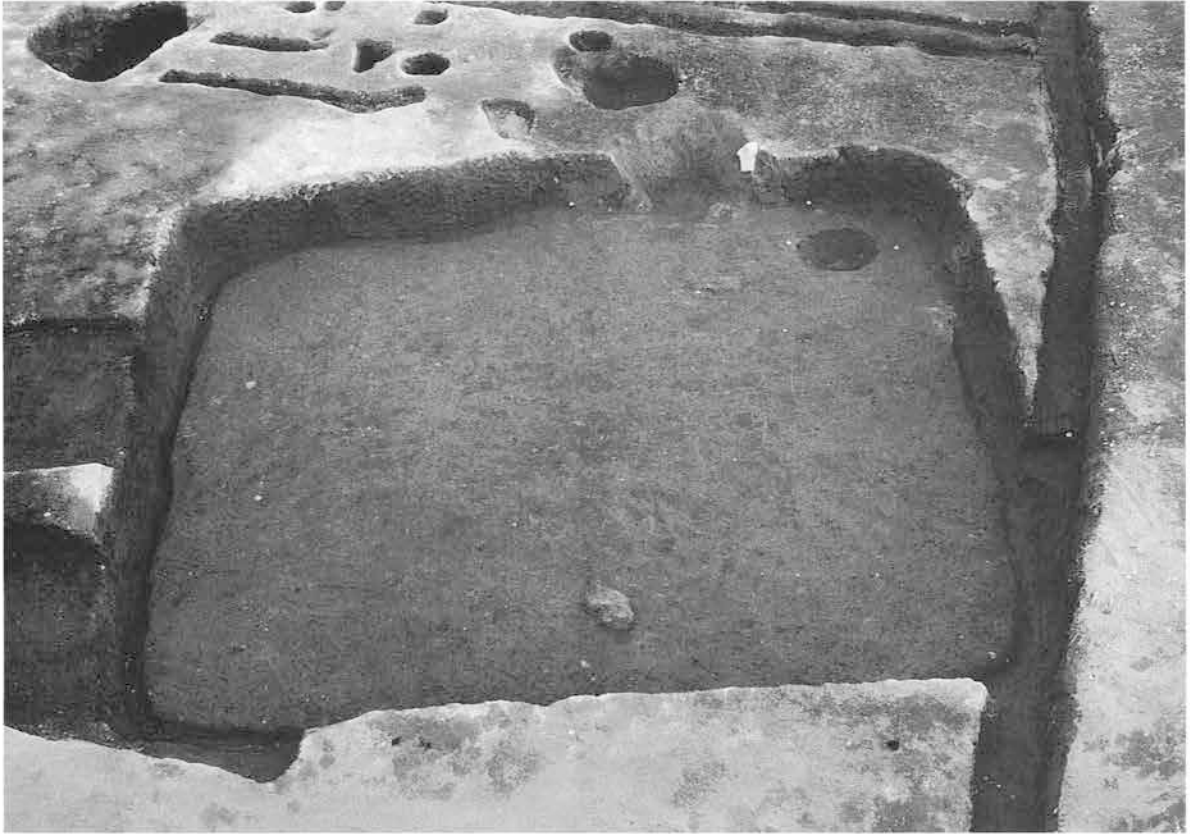
3. B区2号住居跡カマド



4. B区2号住居跡貯蔵穴



5. B区2号住居跡カマド土層断面



1. B区3号住居跡全景



2. B区3号住居跡遺物出土状態



3. B区3号住居跡掘り方



4. B区3号住居跡カマド



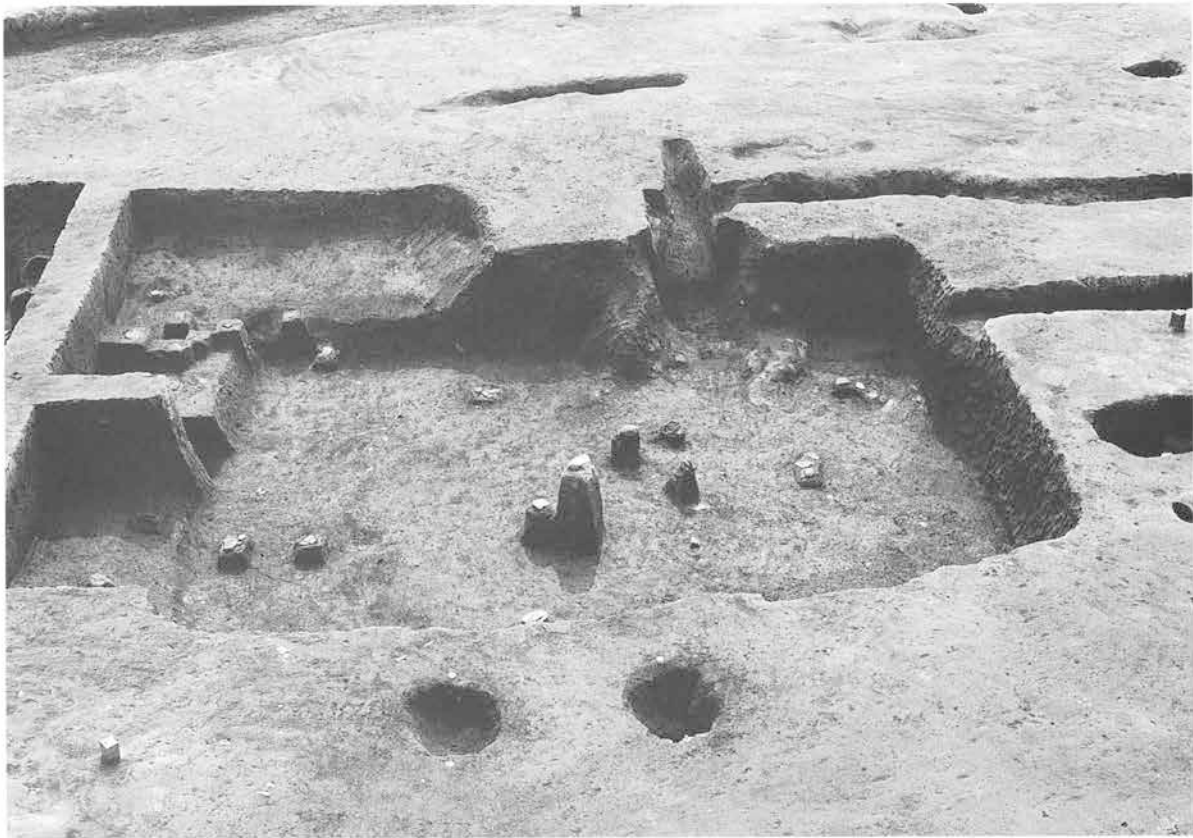
5. B区3号住居跡貯蔵穴



1. B区4号住居跡全景



2. B区4号住居跡カマド



3. B区5号住居跡全景



4. B区5号住居跡掘り方



5. B区5号住居跡カマド



1. B区7号住居跡全景



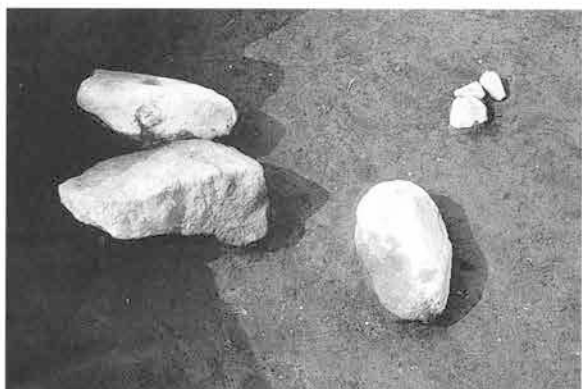
2. B区7号住居跡掘り方



3. B区7号住居跡カマド



4. B区7号住居跡土層断面



5. B区7号住居跡遺物出土状態



1. B区8号住居跡全景



2. B区8号住居跡掘り方



3. B区8号住居跡遺物出土状態 (1)



4. B区8号住居跡遺物出土状態 (2)



5. B区8号住居跡遺物出土状態 (3)



1. B区9号住居跡全景



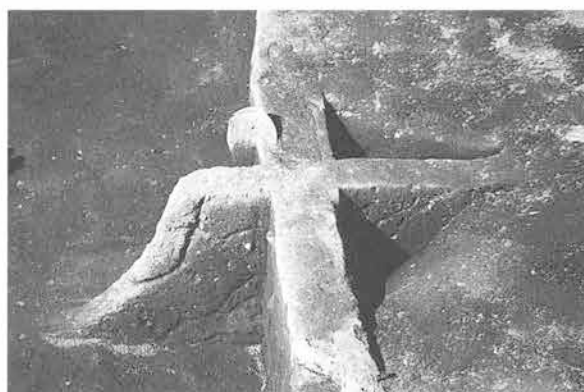
2. B区9号住居跡掘り方



3. B区9号住居跡カマド



4. B区9号住居跡貯蔵穴



5. B区9号住居跡カマド土層断面



1. B区10号住居跡全景



2. B区10号住居跡遺物出土状態



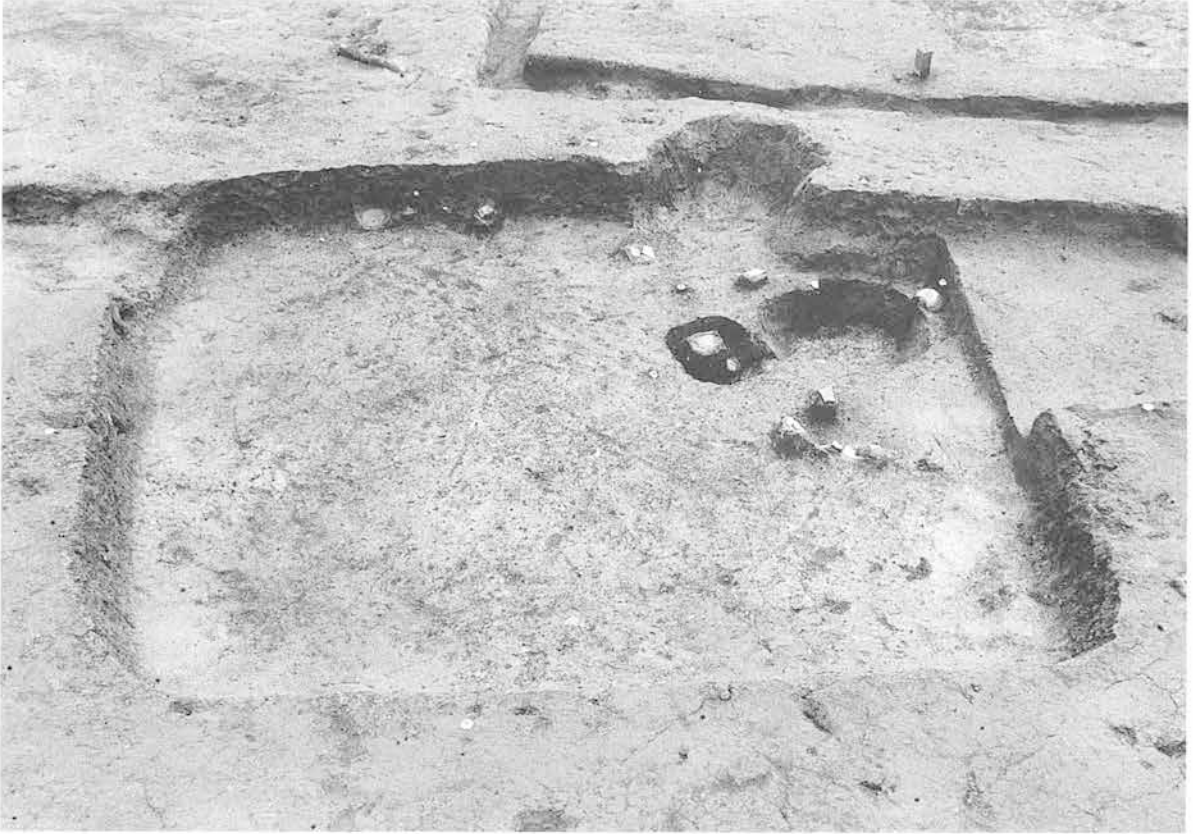
3. B区10号住居跡カマド



4. B区10号住居跡掘り方



5. B区10号住居跡カマド掘り方



1. B区11号住居跡全景



2. B区11号住居跡カマド



3. B区11号住居跡掘り方遺物出土状態 (1)



4. B区11号住居跡カマド土層断面



5. B区11号住居跡掘り方遺物出土状態 (2)



1. B区12号住居跡全景



2. B区12号住居跡掘り方



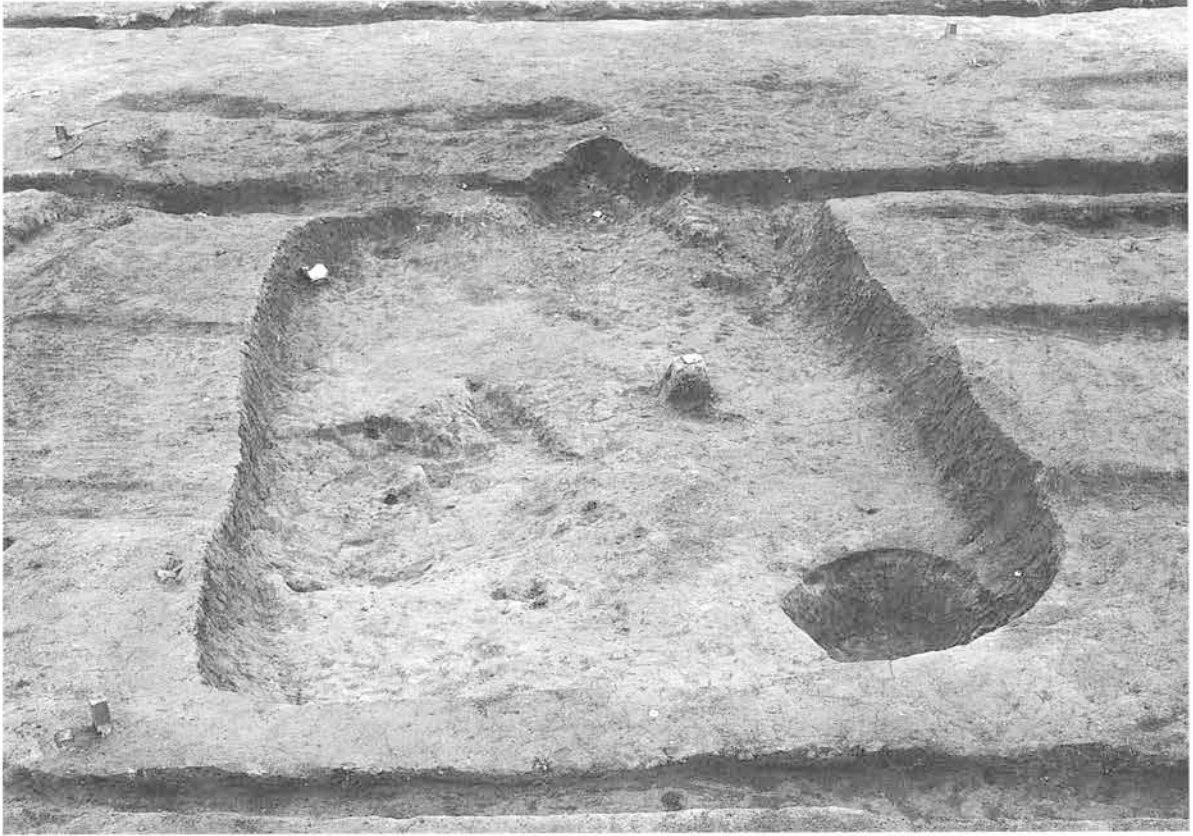
3. B区12号住居跡カマド



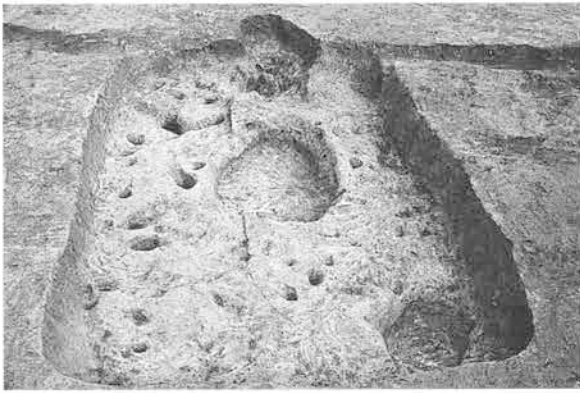
4. B区12号住居跡カマド遺物出土状態



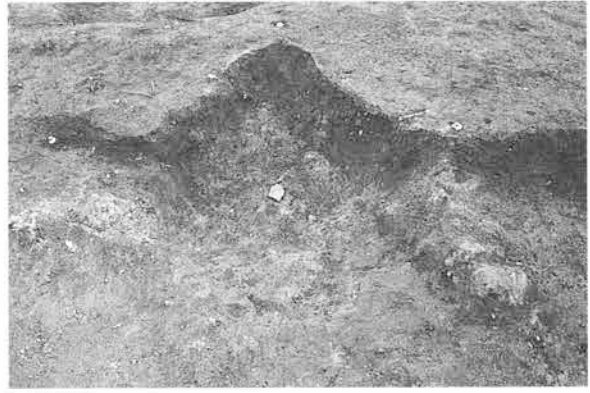
5. B区12号住居跡カマド掘り方



1. B区13号住居跡全景



2. B区13号住居跡掘り方



3. B区13号住居跡カマド



4. B区13号住居跡貯蔵穴



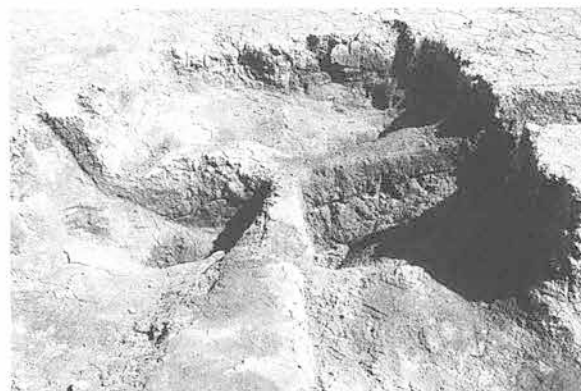
5. B区13号住居跡カマド土層断面



1. D区35号住居跡全景



2. D区35号住居跡カマド



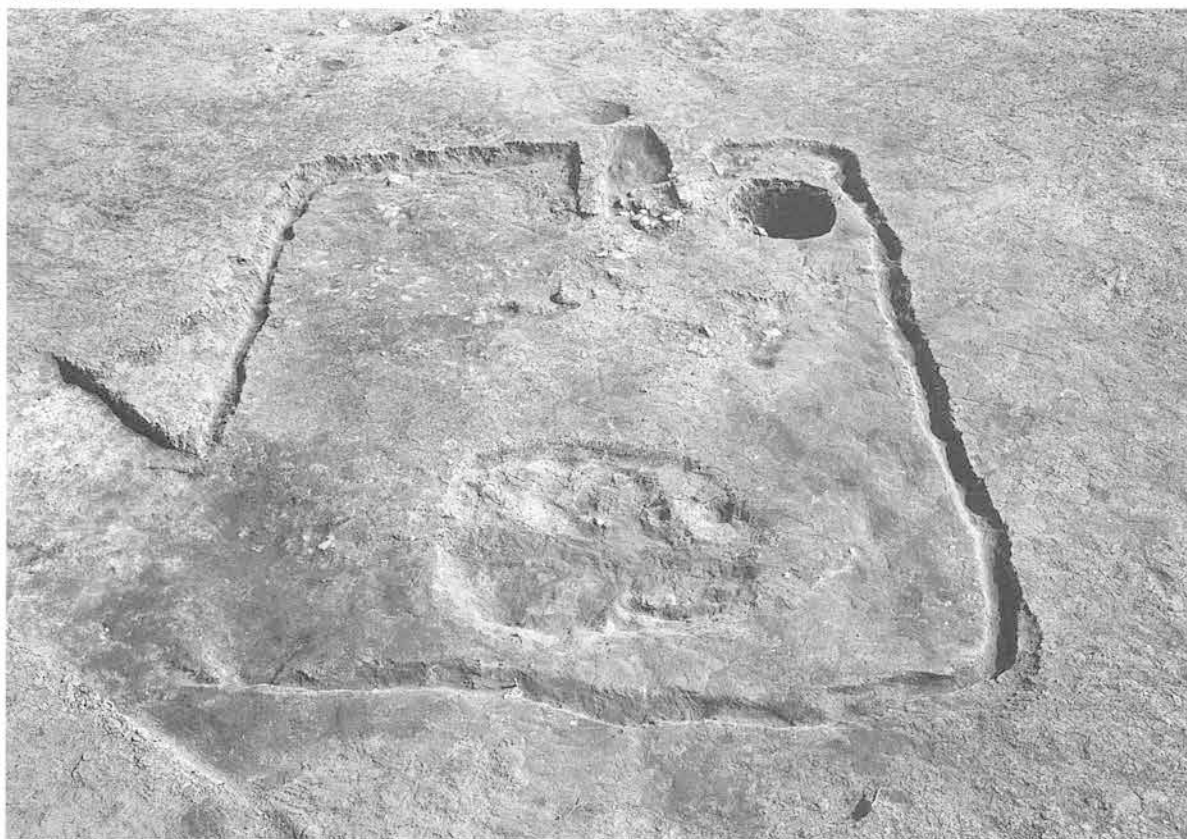
3. D区35号住居跡カマド掘り方



4. D区35号住居跡貯蔵穴



5. D区35号住居跡貯蔵穴土層断面



1. D区36号住居迹全景



2. D区37号住居迹全景



1. H区1号住居跡全景



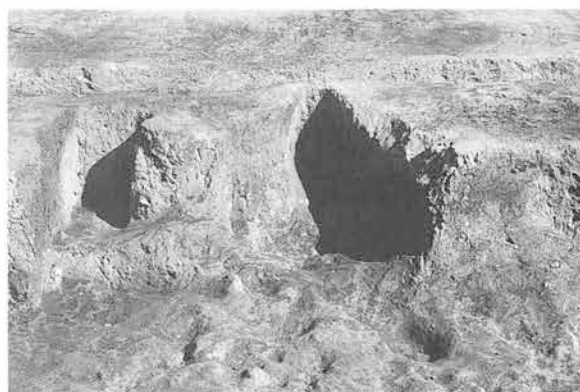
2. H区1号住居跡掘り方



3. H区1号住居跡カマド



4. H区1号住居跡遺物出土状態



5. H区1号住居跡カマド掘り方



1. A区3号掘立柱建物跡全景



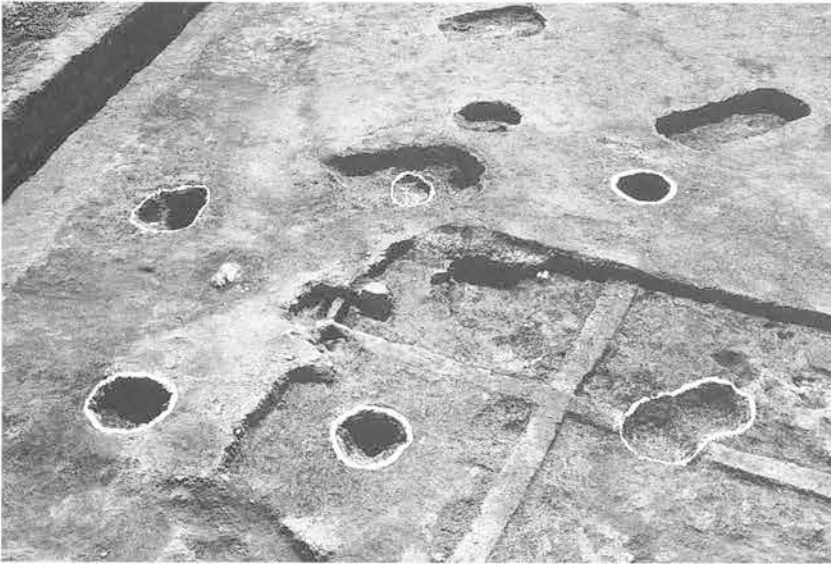
2. A区4号掘立柱建物跡全景



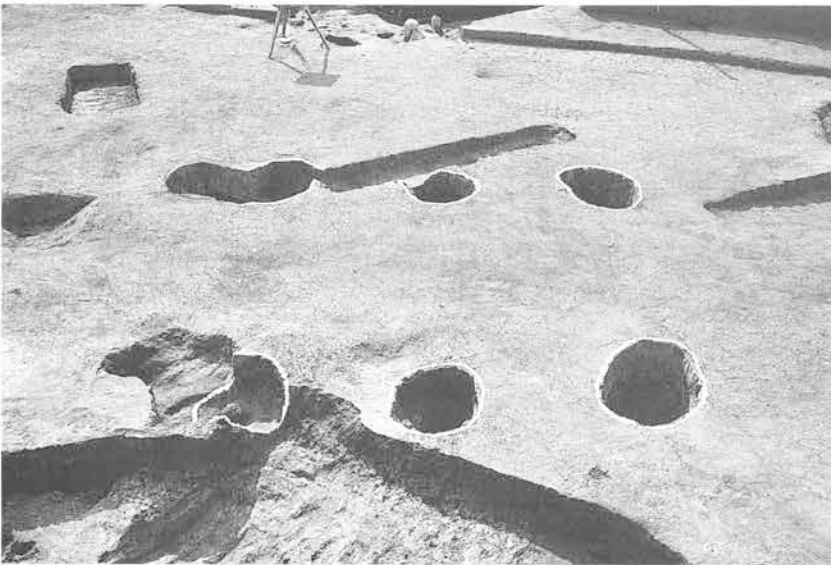
3. B区1号掘立柱建物跡全景



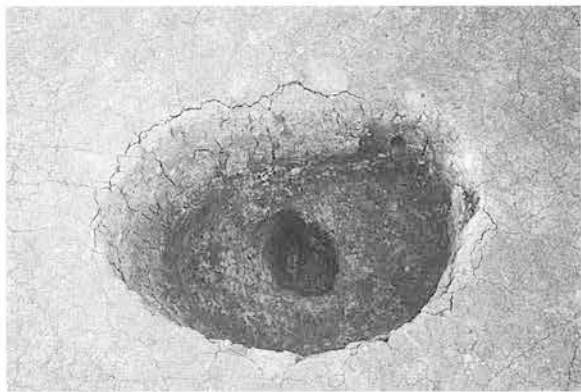
1. B区2号掘立柱建物跡全景



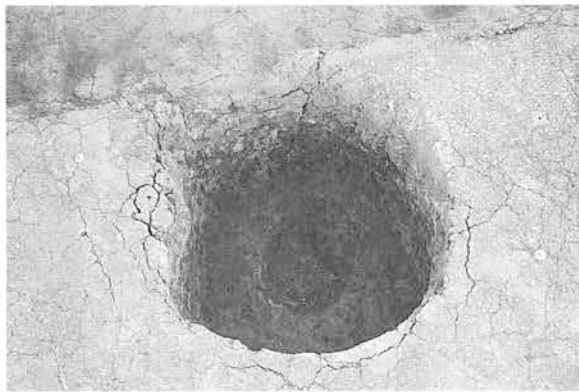
2. D区5号掘立柱建物跡全景



3. D区6号掘立柱建物跡全景



1. D区6号掘立柱建物跡P1



2. D区6号掘立柱建物跡P6



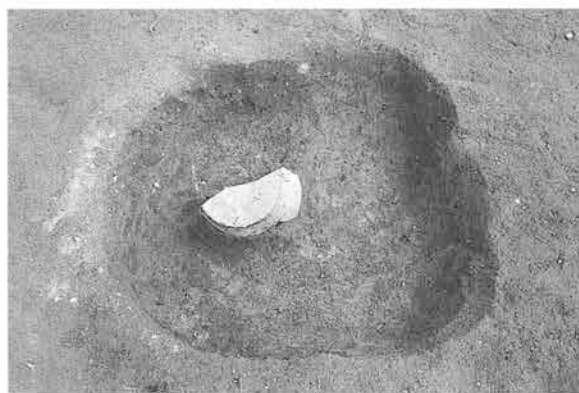
3. A区9号土坑全景



4. A区11号土坑全景



5. B区1号土坑全景



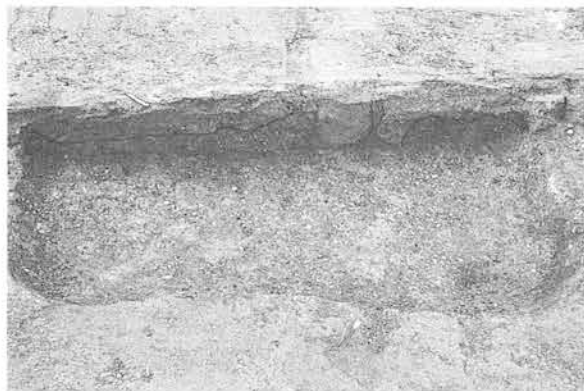
6. B区2号土坑全景



7. B区3号土坑全景



8. B区4号土坑全景



1. B区6号土坑全景



2. B区31号土坑全景



3. D区7号土坑全景



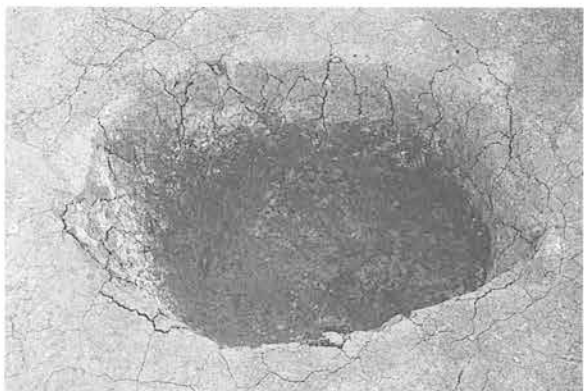
4. D区8号土坑全景



5. D区13号土坑全景



6. D区16号土坑全景



7. D区20号土坑全景



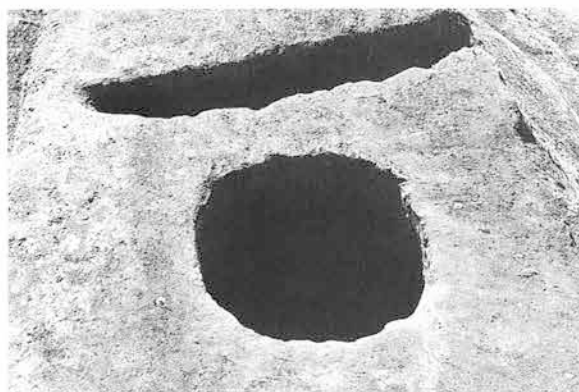
8. D区23号土坑全景



1. G区1号火葬土坑 (1)



2. G区1号火葬土坑 (2)



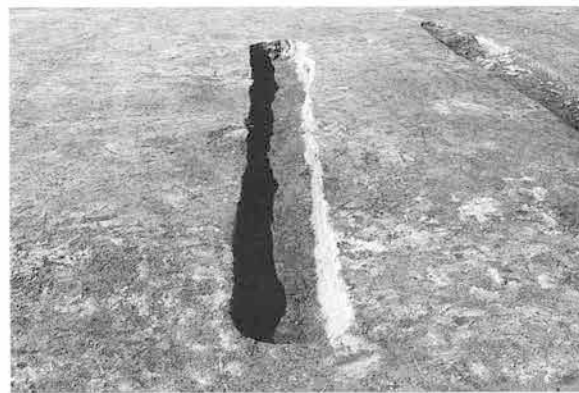
3. G区1号土坑全景



4. G区3号土坑全景



5. G区4号土坑全景



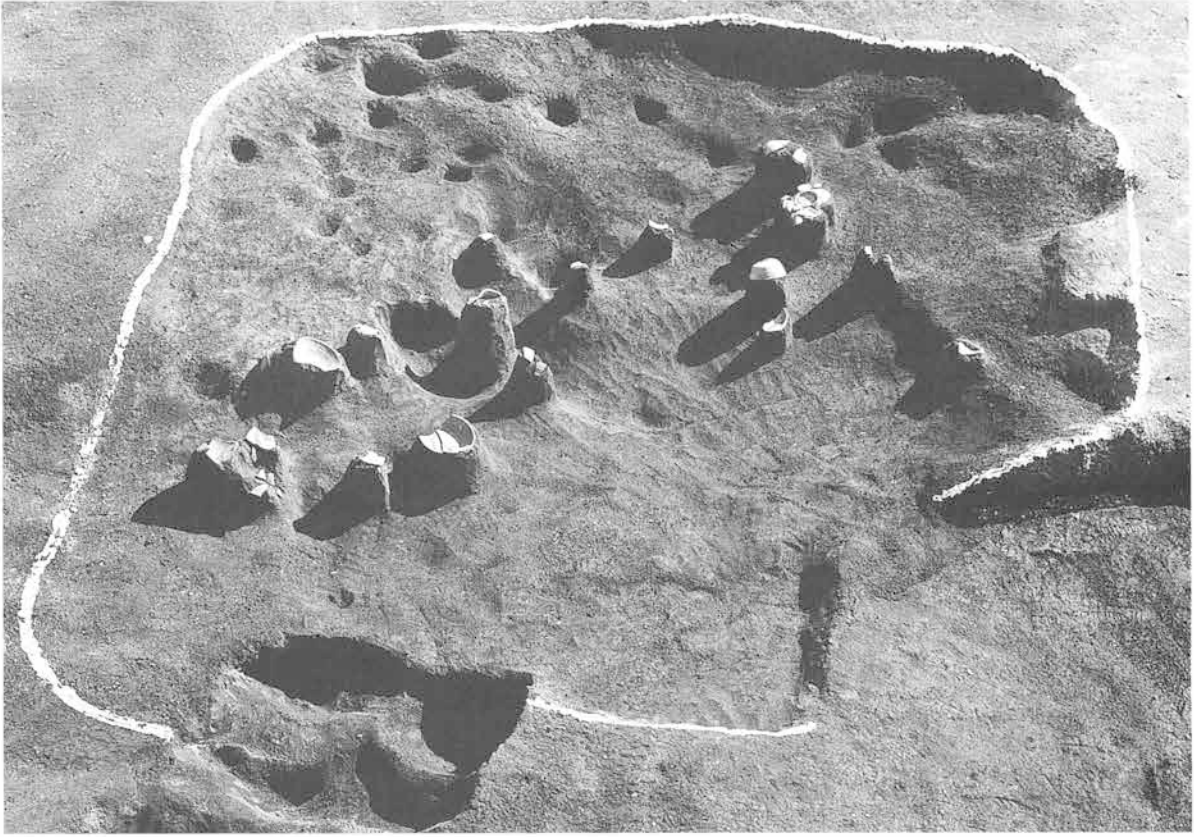
6. G区5号土坑全景



7. G区7号土坑全景



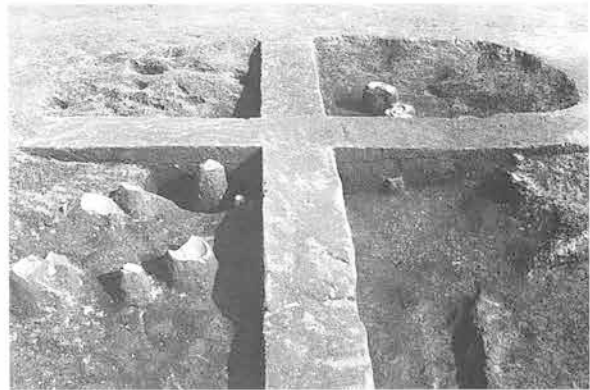
8. G区12号土坑全景



1. H区1号竖穴状遺構遺物出土状態 (1)



2. H区1号竖穴状遺構全景



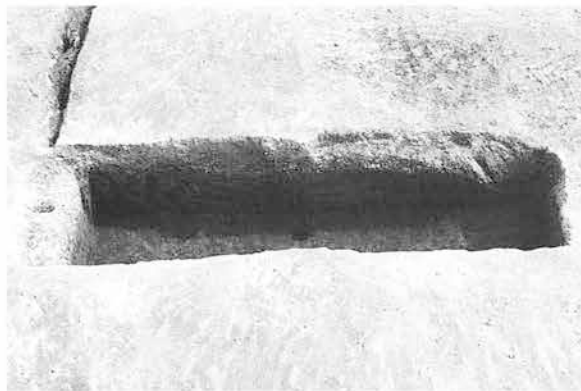
3. H区1号竖穴状遺構土層断面



4. H区1号竖穴状遺構遺物出土状態 (2)



5. H区1号竖穴状遺構遺物出土状態 (3)



1. H区1号土坑全景



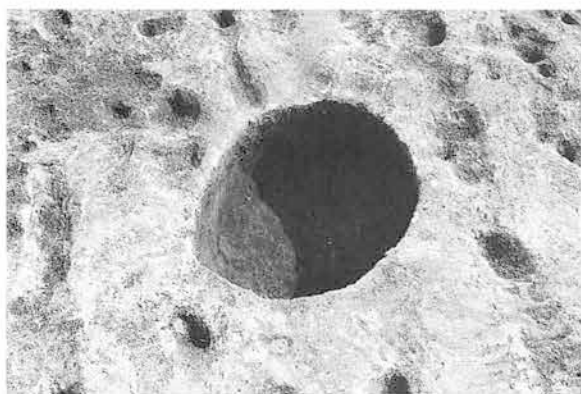
2. H区4号土坑全景



3. H区6号土坑全景



4. H区7号土坑全景



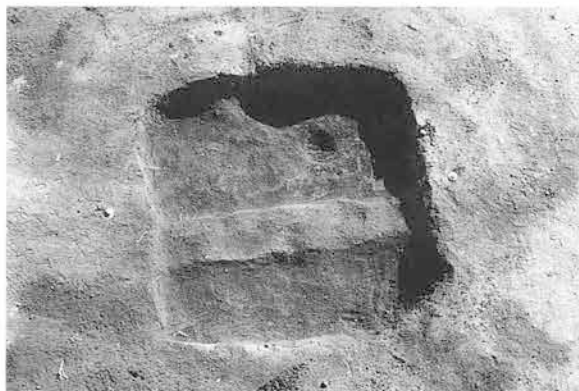
5. H区8号土坑全景



6. H区9号土坑全景



7. H区14~19号土坑全景



8. H区25号土坑全景



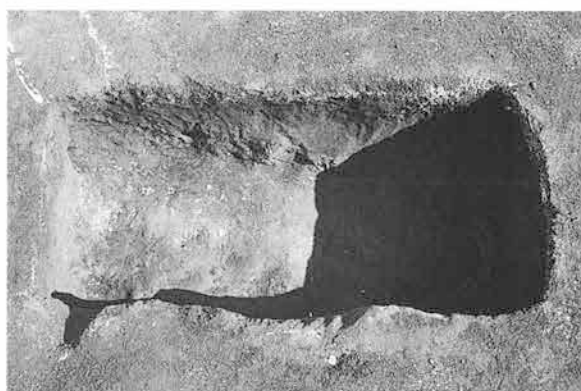
1. H区29号~31号土坑全景



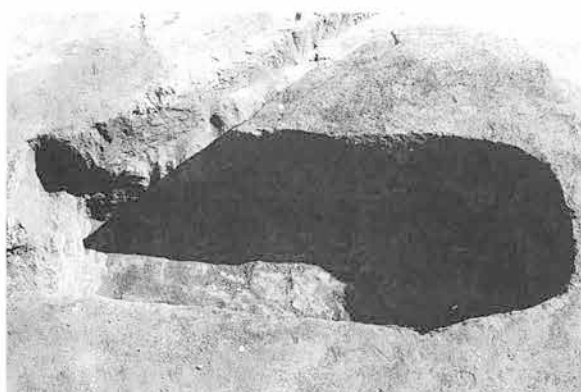
2. H区37号土坑全景



3. H区41号土坑全景



4. H区42号土坑全景



5. H区47号土坑全景



6. H区48号土坑全景



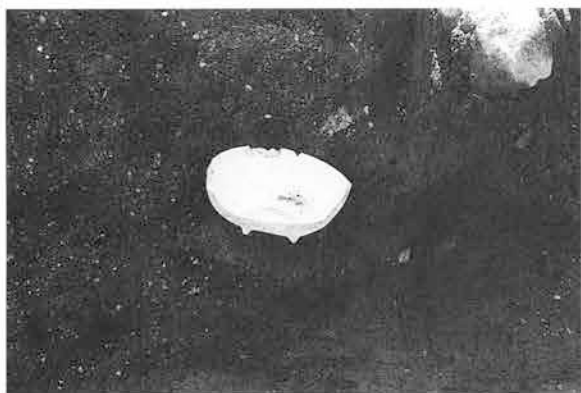
7. H区49号土坑全景



1. B区5号沟全景



2. C区1~4号沟全景



3. C区1号沟遗物出土状态 (1)



4. C区1号沟遗物出土状态 (2)



5. D区15号沟土层断面



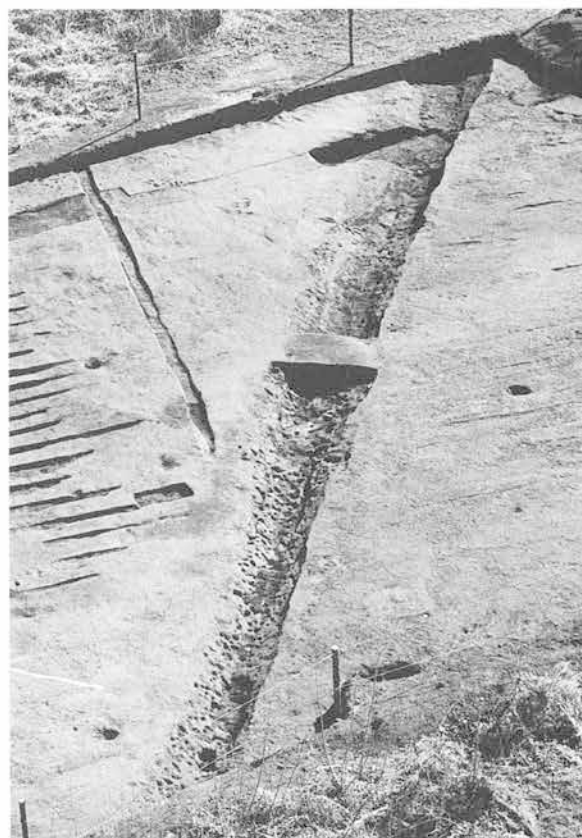
6. D区18号~20号沟全景



1. D区17号沟全景



2. D区17号沟土层断面



3. D区22号沟全景



4. E区8·9号沟全景



5. E区8·9号沟土层断面



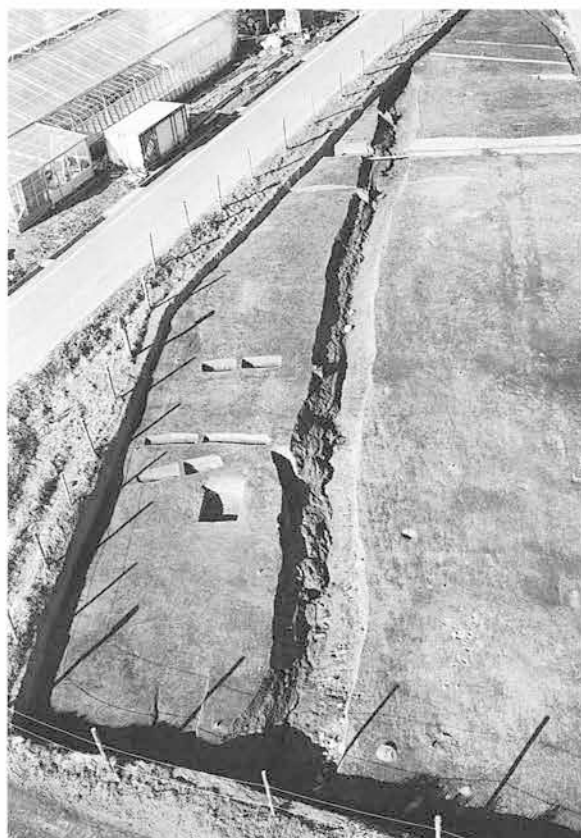
1. E区12·14号沟全景



2. E区25号沟全景



4. F区5号沟全景



3. E区26号沟全景



5. F区9号沟全景



6. G区1号沟全景



1. G区1号沟全景



2. G区1号沟土层断面



3. G区2号沟全景



4. G区4~6号沟全景



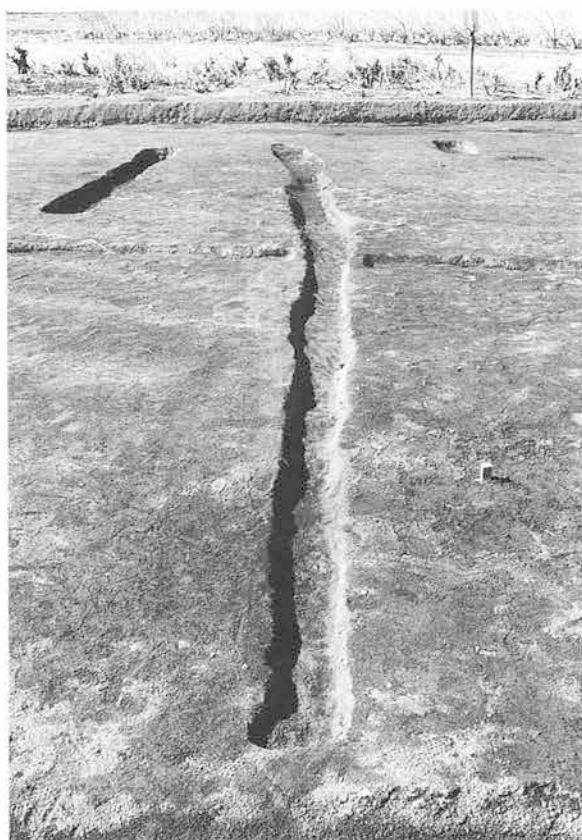
5. G区2号沟土层断面



1. G区3号沟全景



2. G区8号沟全景



4. G区10号沟全景



3. G区9号沟全景



5. H区1·2号沟全景



1. D区1号井戸全景



3. F区1号井戸全景



2. D区1号井戸土層断面



4. F区1号井戸土層断面



5. G区1号井戸全景



7. G区2号井戸土層断面



6. G区1号井戸土層断面



8. G区3号井戸全景



1. G区3号井戸石出土状態



3. G区4号井戸全景



2. G区3号井戸土層断面



4. G区4号井戸土層断面



5. H区1号井戸全景



7. C区1号土器集積遠景



6. H区1号井戸土層断面



8. C区1号土器集積近景



1. G区1·2号A s - C混黑色土下畝跡全景



2. G区3号A s - C混黑色土下畝跡全景



3. A区FA下畝跡全景



4. B区FA下畝跡全景



5. E区南FA下畝跡全景



6. G区FA下畝跡南侧全景



7. G区FA下畝跡北侧全景



8. G区FA下畝跡南侧



1. H区FA下畠跡全景



2. F区1号A s-B混凝土畠跡全景



3. F区2号A s-B混凝土畠跡全景



4. F区1号A s-B混凝土畠跡



5. G区1号A s-B混凝土畠跡全景



6. G区2号A s-B混凝土畠跡全景



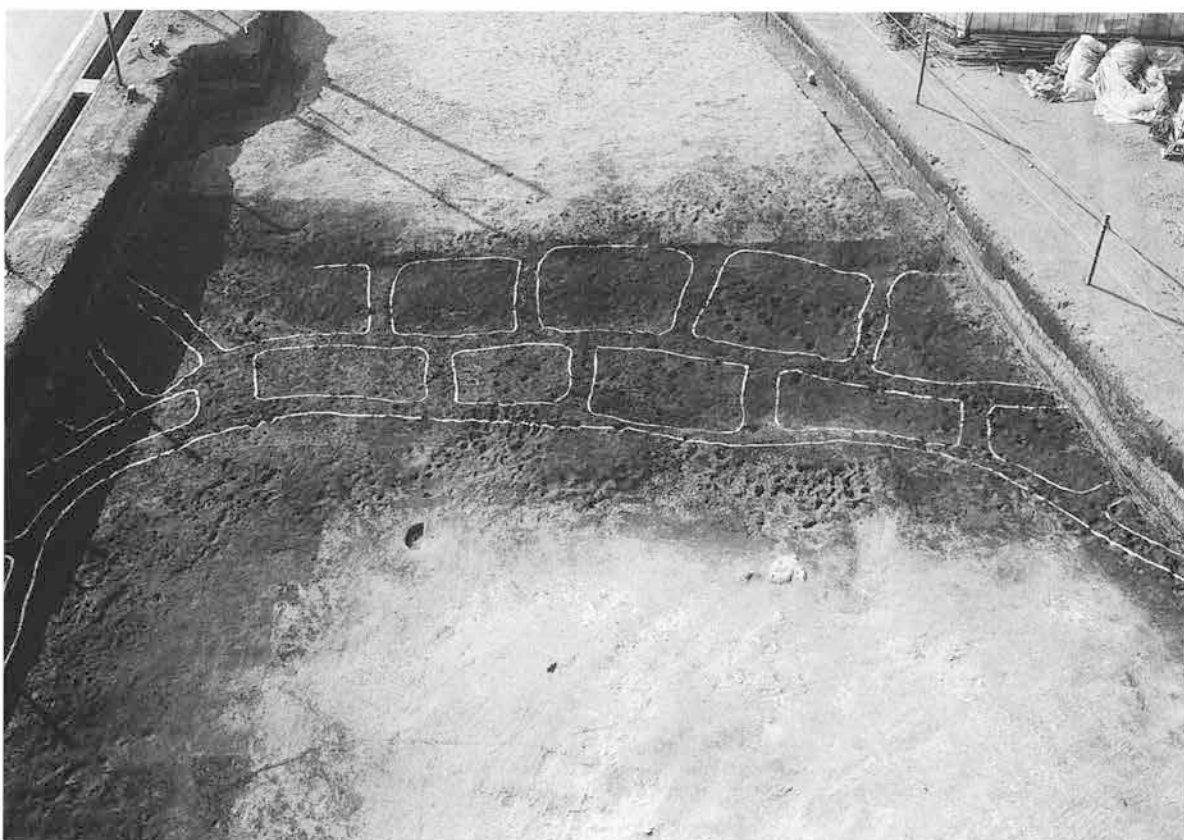
7. G区3号A s-B混凝土畠跡全景



8. H区1号A s-B混凝土畠跡全景



1. D区FA下水田跡全景



2. E区北FA下水田跡全景



1. C区As-B下水田跡全景



2. C区As-B下水田跡



3. D区As-B下水田跡と溝群全景 (1)



4. D区As-B下水田跡と溝群全景 (2)



6. E区南As-B下水田跡と溝群全景



5. D区As-B下水田跡と溝群全景 (3)



7. E区南As-B下6・7号溝土層断面



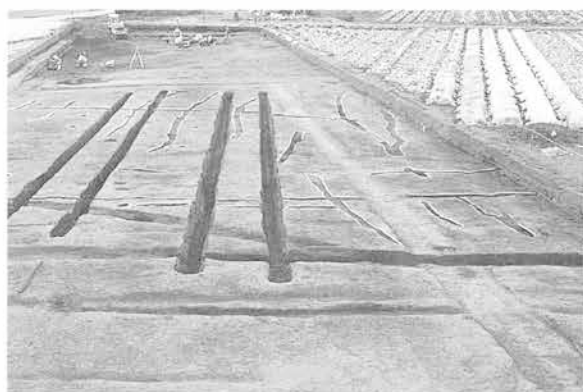
1. E区北A s - B下水田跡全景 (1)



2. E区北A s - B下水田跡全景 (2)



3. F区A s - B下水田跡全景



4. F区A s - B下溝群全景



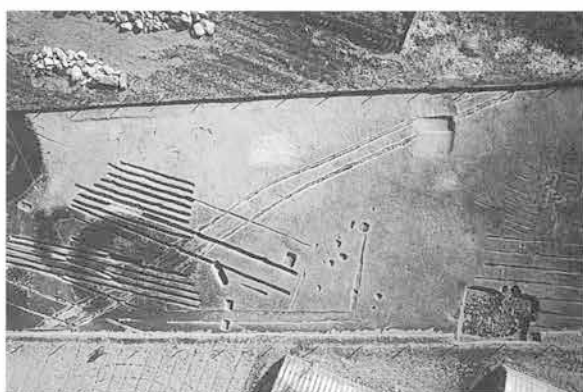
5. F区A s - B下11号溝全景



6. G区A s - B下11号溝全景



7. B区1号道路跡全景



8. H区1号道路跡全景



1. H区1号道路跡



2. H区1号道路跡土層断面



3. C区旧河道全景



4. C区旧河道近景



5. D区小谷地全景



6. F区小谷地全景



7. G区小谷地全景



8. H区縄文土器出土状態



1. 調査区遠景 (0区以北)



2. 調査区遠景 (6区以北)



1. 0区全景



2. 1区東側全景



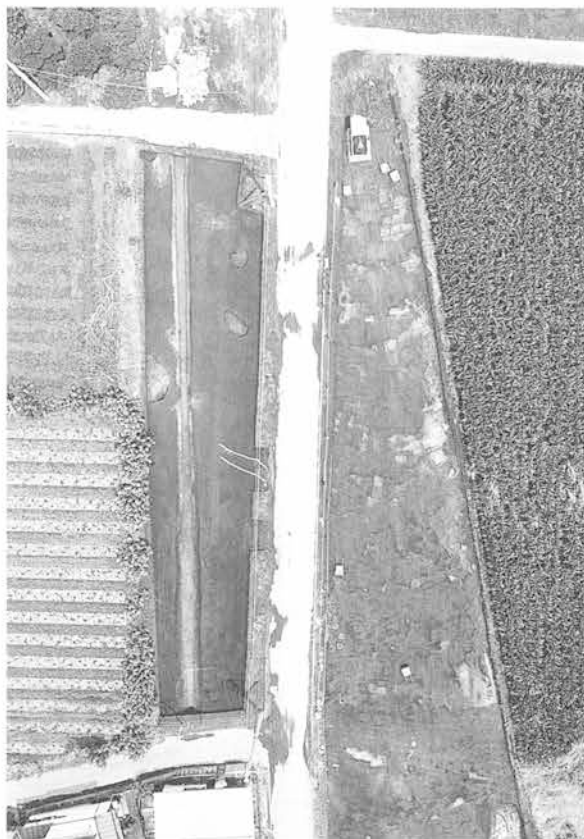
3. 1区西側全景



4. 2区西側全景



5. 2区東側全景



1. 3区全景



2. 4区全景



3. 4区遠景



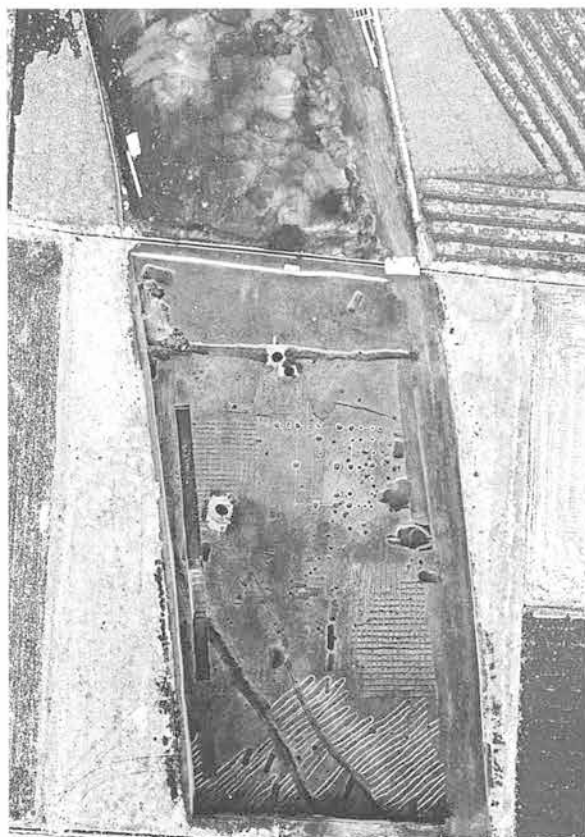
4. 5区全景



1. 6区全景



2. 7区全景



3. 8区全景



4. 9・10区全景



1. 11・12区全景



2. 13区全景



3. 14・15区全景



1. 1区1号住居跡全景



2. 1区1号住居跡掘り方



3. 1区1号住居跡カマド



4. 1区1号住居跡貯蔵穴



5. 1区1号住居跡カマド掘り方



1. 1区2号住居跡全景



2. 1区2号住居跡掘り方



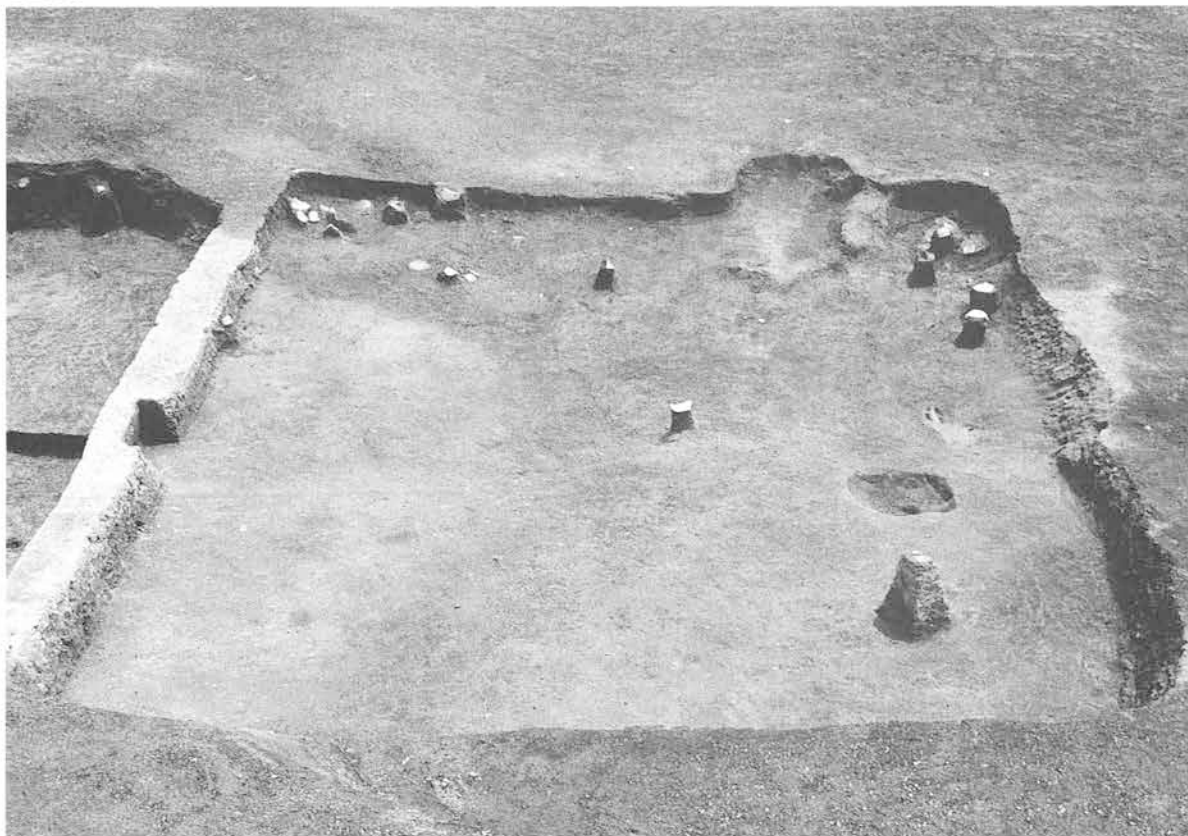
3. 1区2号住居跡カマド遺物出土状態



4. 1区2号住居跡遺物出土状態



5. 1区2号住居跡カマド掘り方



1. 1区3号住居跡全景



2. 1区3号住居跡掘り方



3. 1区3号住居跡貯蔵穴



4. 1区3号住居跡遺物出土状態



5. 1区3号住居跡住居内土坑



1. 1区4号住居跡全景



2. 1区3・4号住居跡全景



3. 1区4号住居跡カマド



4. 1区4号住居跡掘り方



5. 1区4号住居跡カマド掘り方



1. 1区5号住居跡全景



2. 1区5号住居跡掘り方



3. 1区5号住居跡カマド



4. 1区5号住居跡床下土坑1



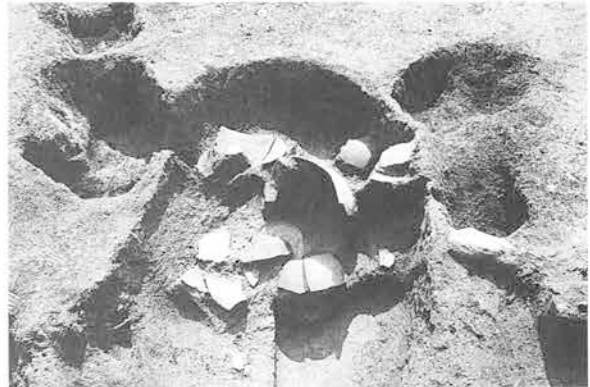
5. 1区5号住居跡カマド掘り方



1. 1区6号住居跡全景



2. 1区6号住居跡掘り方



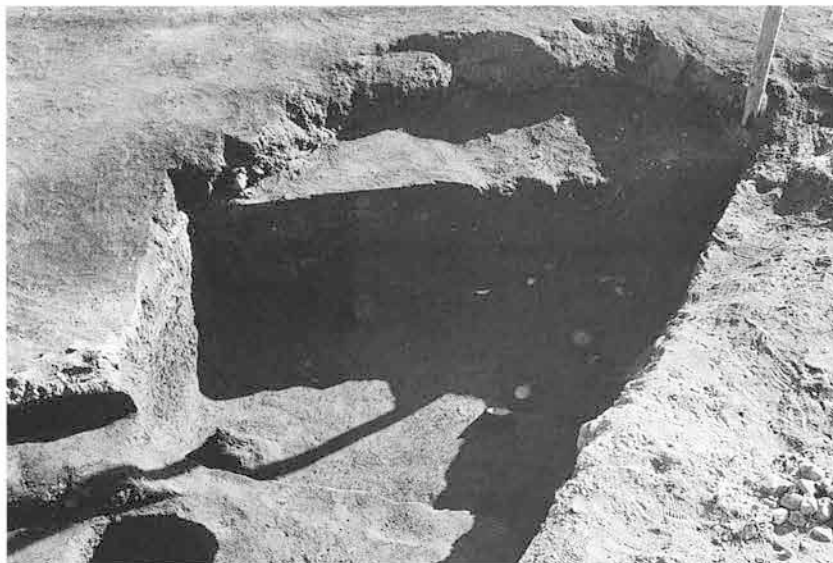
3. 1区6号住居跡カマド遺物出土状態



4. 1区6号住居跡貯蔵穴



5. 1区6号住居跡カマド掘り方



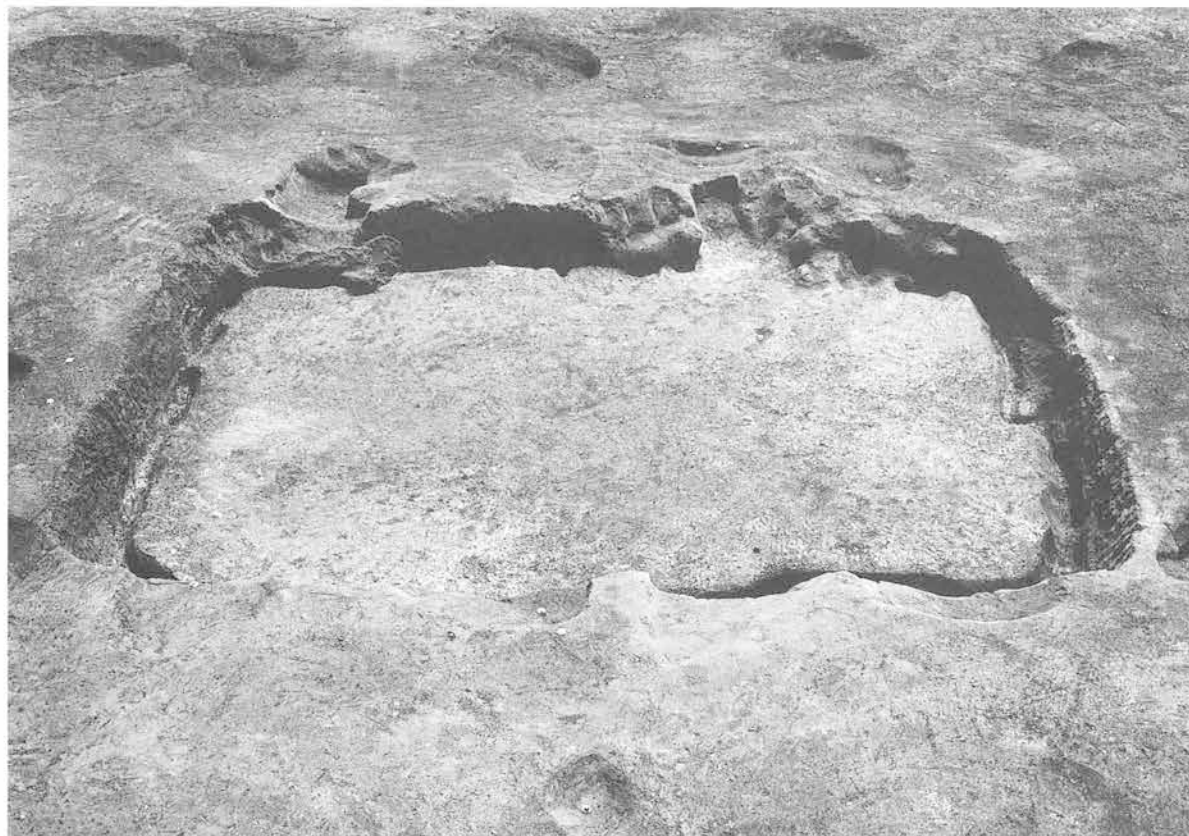
1. 1区7号住居跡全景



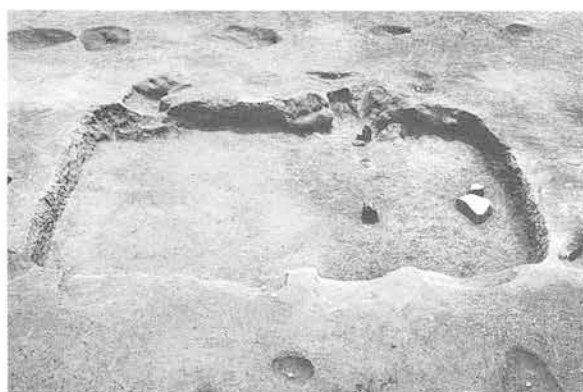
2. 1区7号住居跡掘り方



3. 1区7号住居跡遺物出土状態



1. 2区1号住居跡全景



2. 2区1号住居跡遺物出土状態



3. 2区1号住居跡カマド



4. 2区1号住居跡掘り方



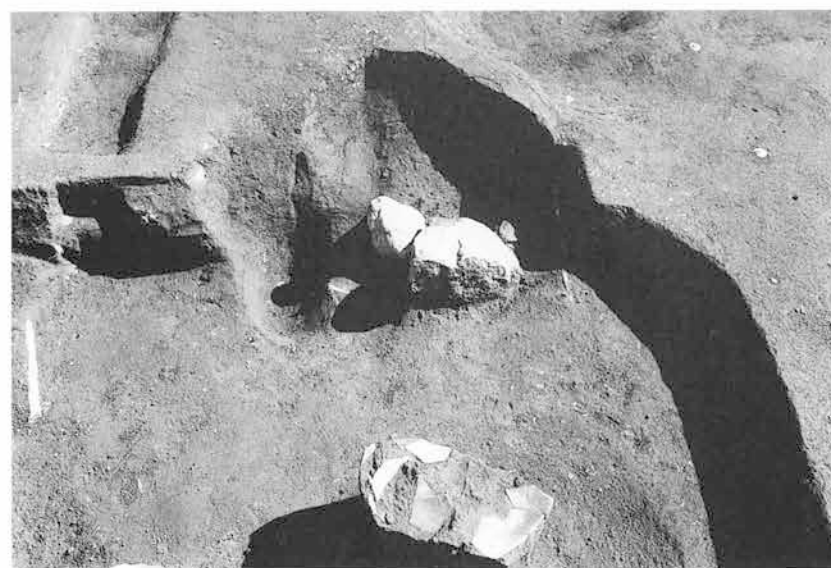
5. 2区1号住居跡カマド掘り方



1. 2区2号住居跡全景



2. 4区1号住居跡全景



3. 4区1号住居跡カマド



1. 4区2号住居跡全景



2. 4区2号住居跡土層断面



1. 4区3号住居跡全景



2. 4区3号住居跡遺物出土状態



3. 4区3号住居跡カマド



4. 4区3号住居跡掘り方



5. 4区3号住居跡カマド掘り方



1. 4区4号住居跡全景



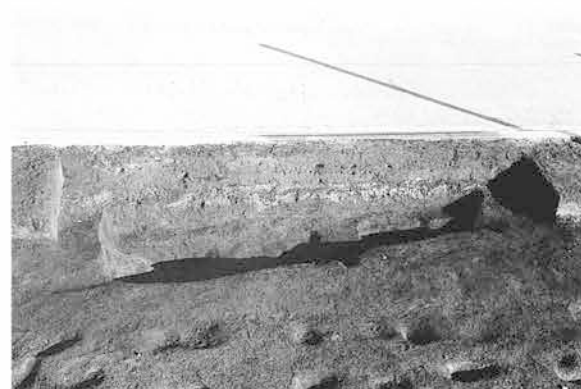
2. 4区4号住居跡遺物出土状態 (1)



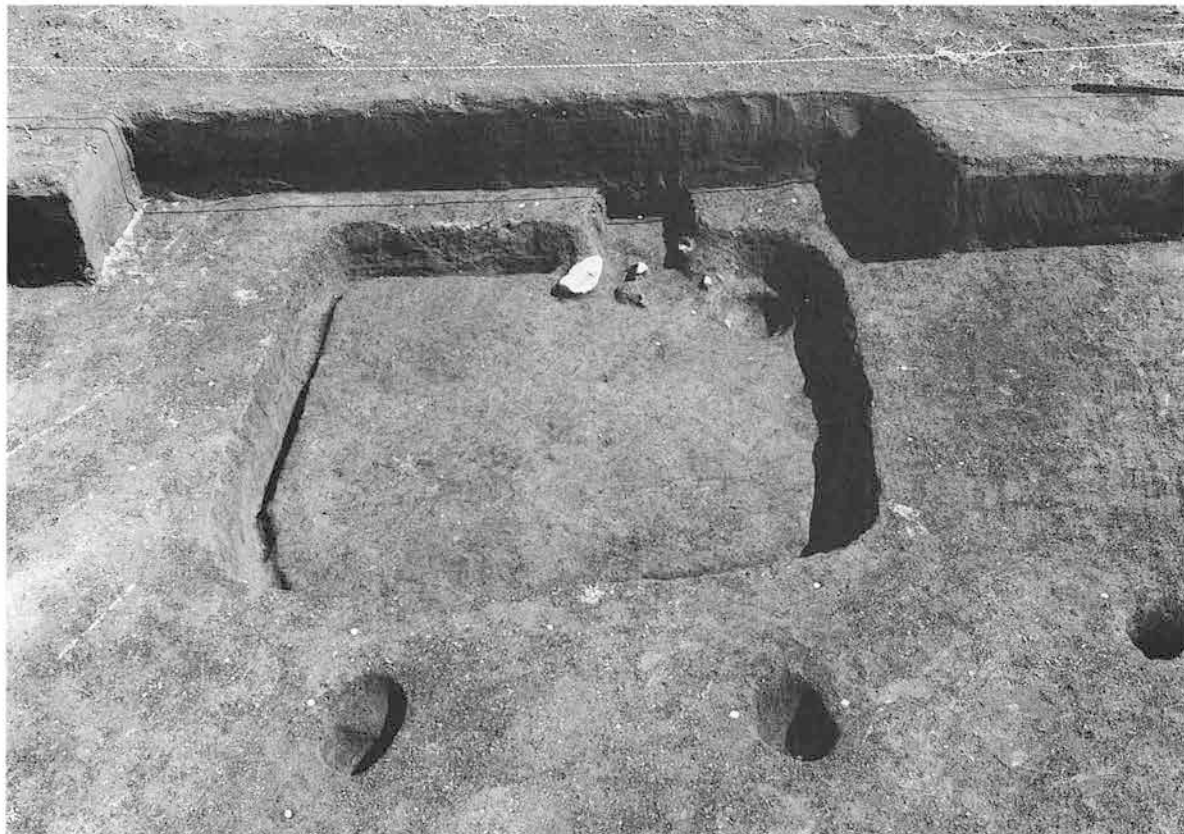
3. 4区4号住居跡遺物出土状態 (2)



4. 4区4号住居跡遺物出土状態 (3)



5. 4区5号住居跡全景



1. 5区1号住居跡全景



2. 5区1号住居跡掘り方



3. 5区1号住居跡カマド



4. 5区1号住居跡貯蔵穴



5. 5区1号住居跡カマド掘り方



1. 5区2号住居跡全景



2. 5区2号住居跡遺物出土状態



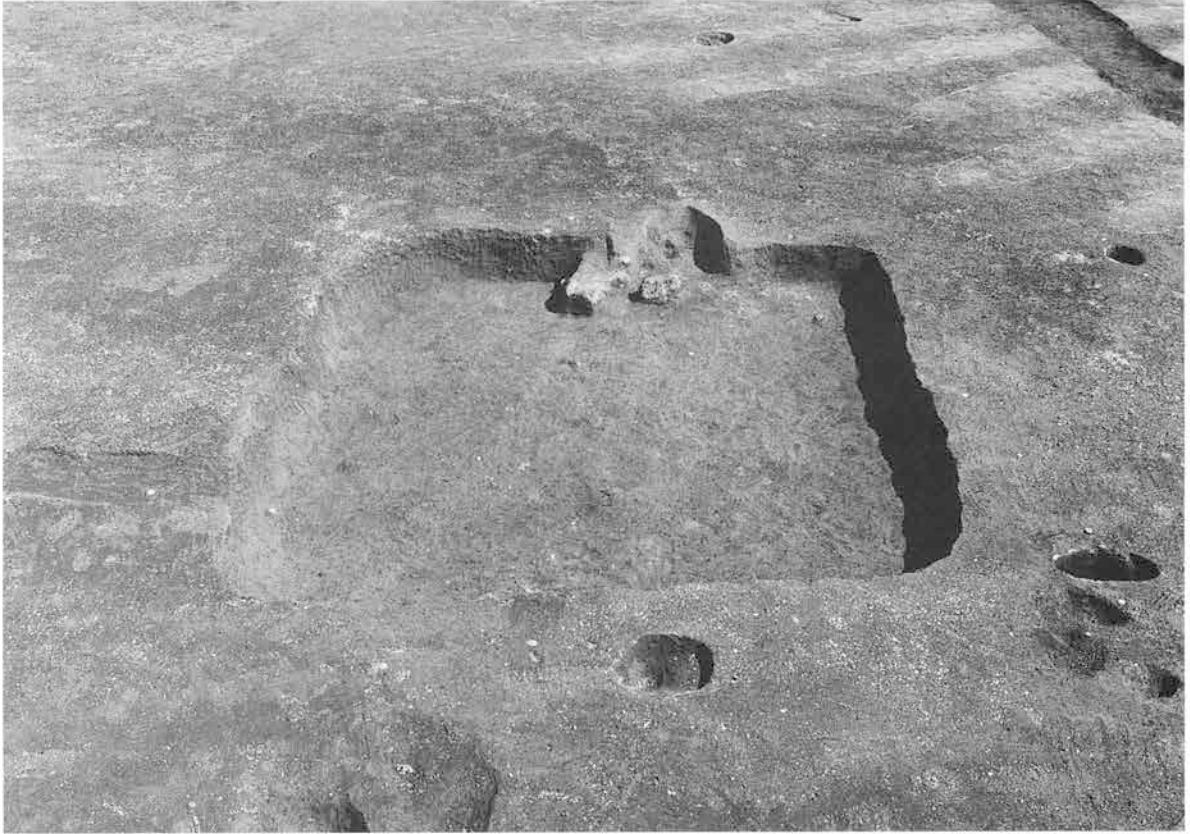
3. 5区2号住居跡カマド



4. 5区2号住居跡掘り方



5. 5区2号住居跡貯蔵穴



1. 5区3号住居跡全景



2. 5区3号住居跡遺物出土状態



3. 5区3号住居跡カマド



4. 5区3号住居跡掘り方



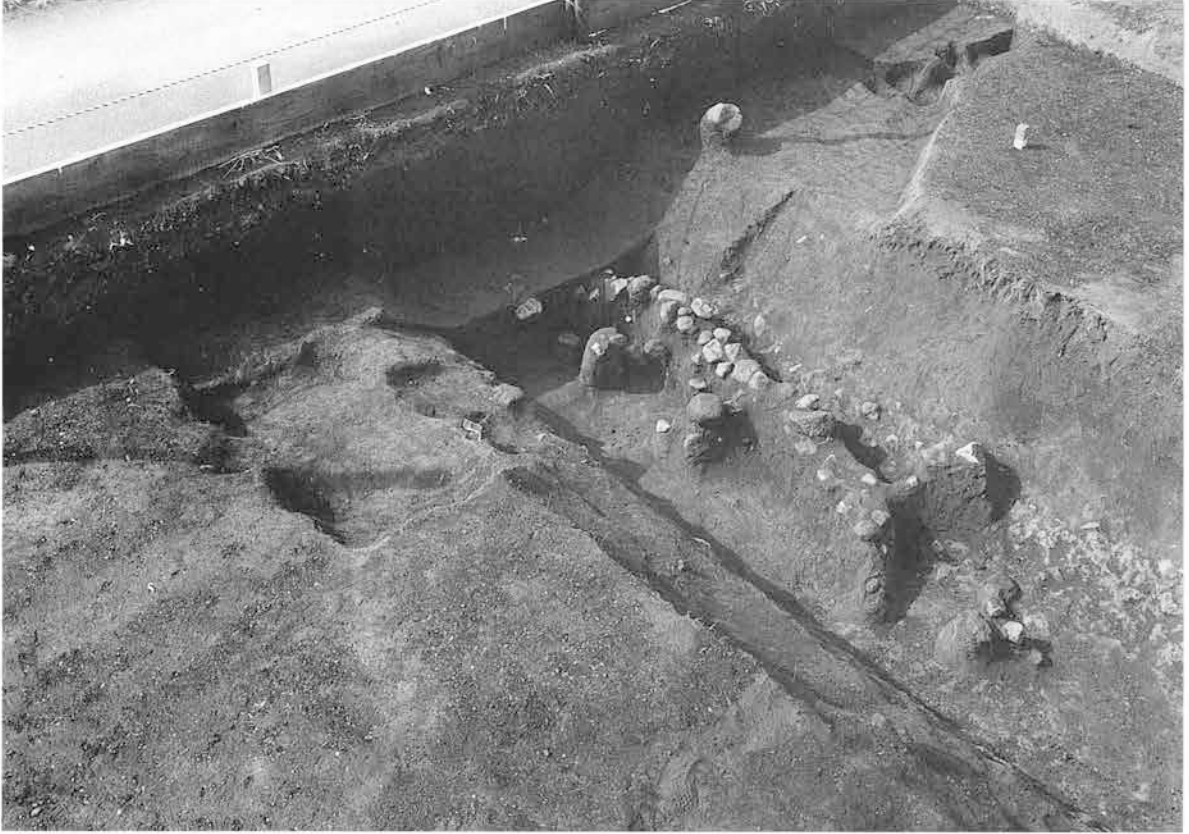
5. 5区3号住居跡カマド掘り方



1. 10区1号住居跡全景



2. 10区1号住居跡掘り方



1. 15区1号住居跡全景



2. 15区1号住居跡掘り方

1. 1区1号掘立柱建物跡全景

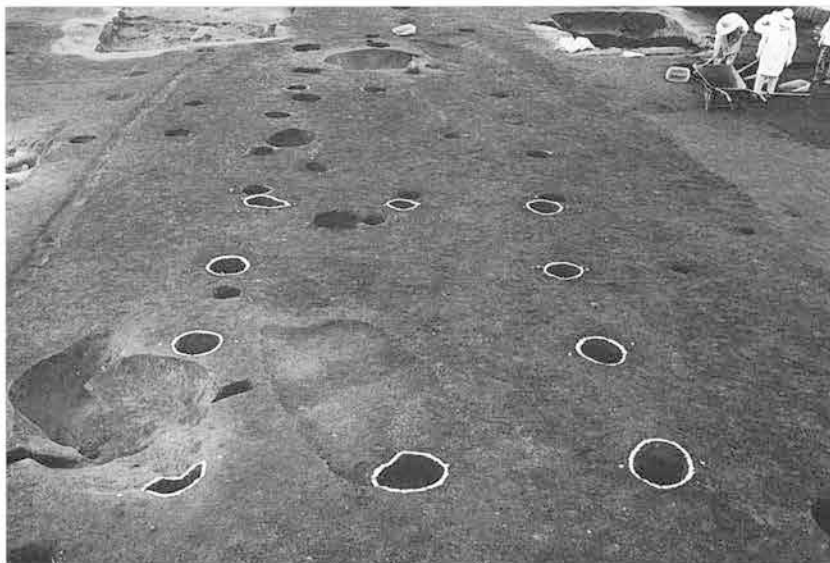


2. 1区2号掘立柱建物跡全景



3. 1区3号掘立柱建物跡全景





1. 1区4号掘立柱建物跡全景



2. 1区5号掘立柱建物跡全景



3. 1区6号掘立柱建物跡全景



1. 1区6号掘立柱建物跡 P6



2. 1区6号掘立柱建物跡 P6遺物出土状態



3. 2区1号掘立柱建物跡全景



4. 2区1号掘立柱建物跡 P3



5. 2区1号掘立柱建物跡 P5



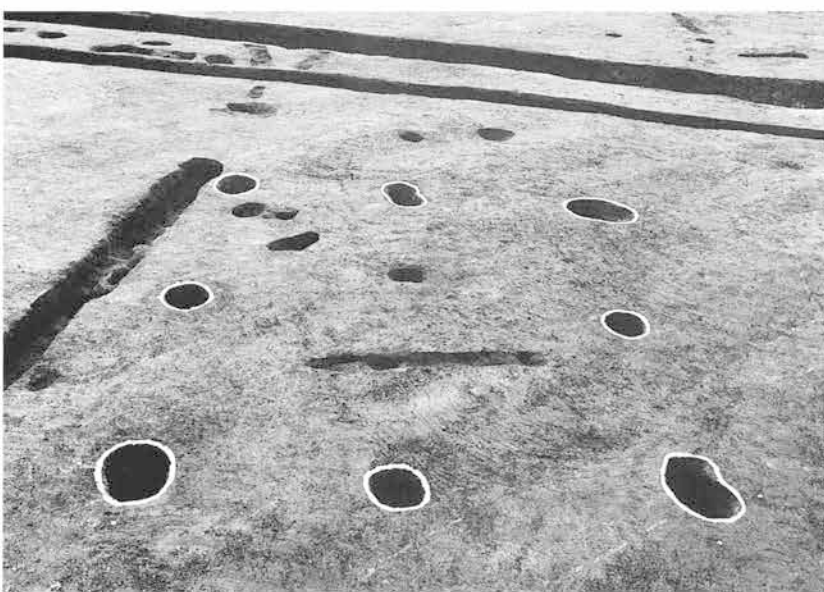
1. 2区1号掘立柱建物跡P7



2. 2区1号柱列全景



3. 5区1号掘立柱建物跡全景

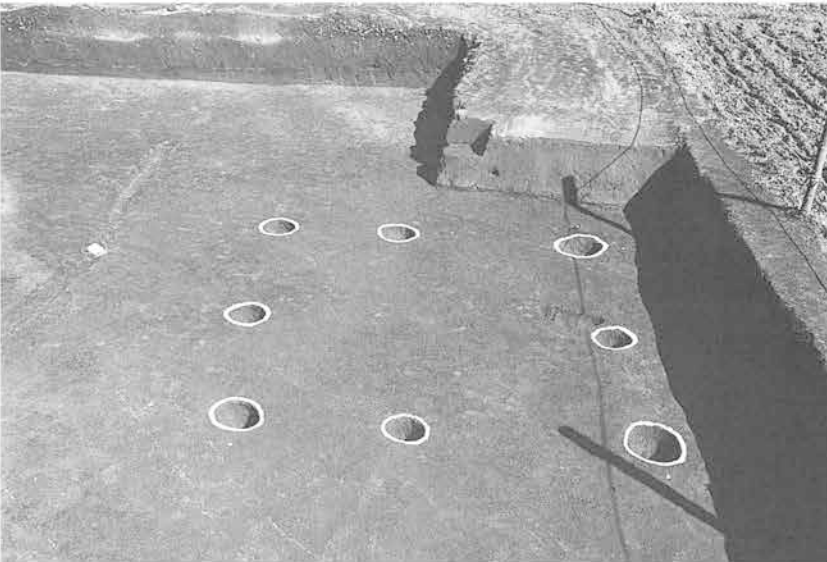


4. 5区2号掘立柱建物跡全景

1. 5区3号掘立柱建物跡全景



2. 5区4号掘立柱建物跡全景



3. 6区1号掘立柱建物跡全景

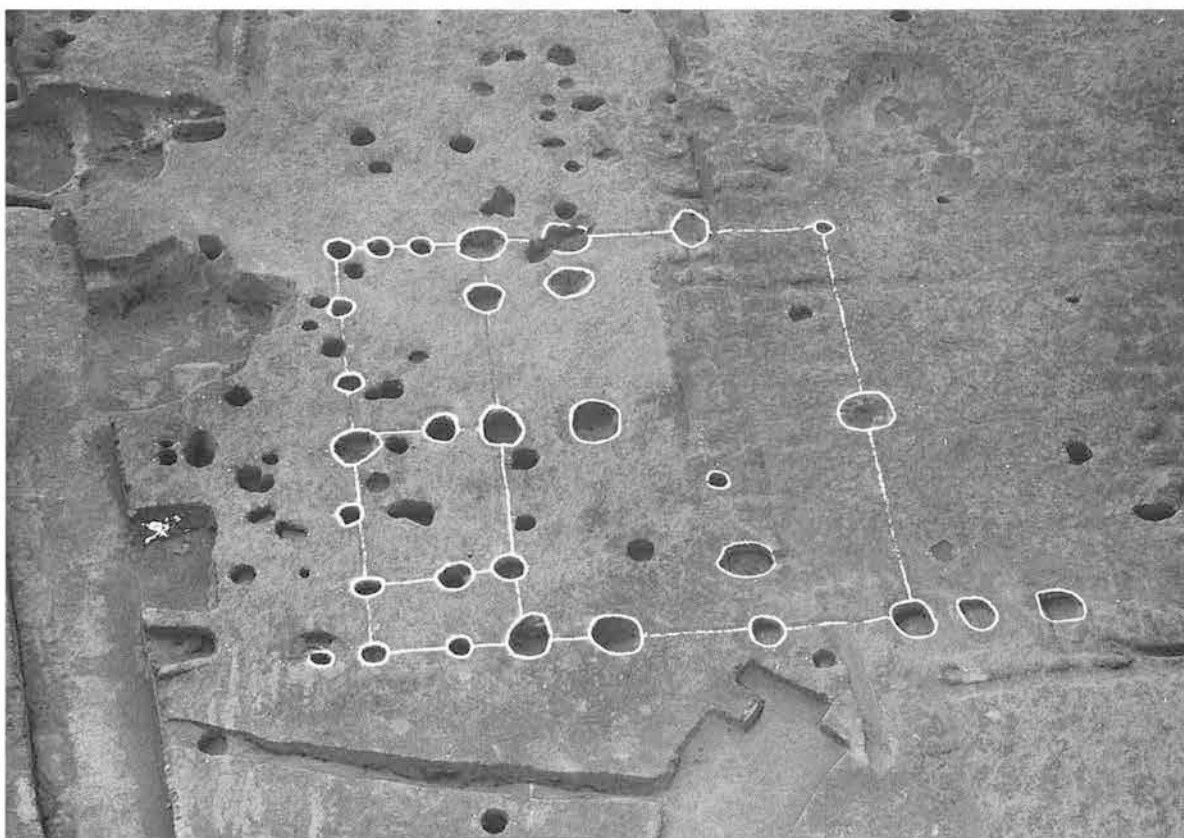




1. 6区2号掘立柱建物跡全景



2. 6区3号掘立柱建物跡全景



3. 8区1号掘立柱建物跡全景



1. 8区1号掘立柱建物跡 P11



2. 8区1号掘立柱建物跡 P20



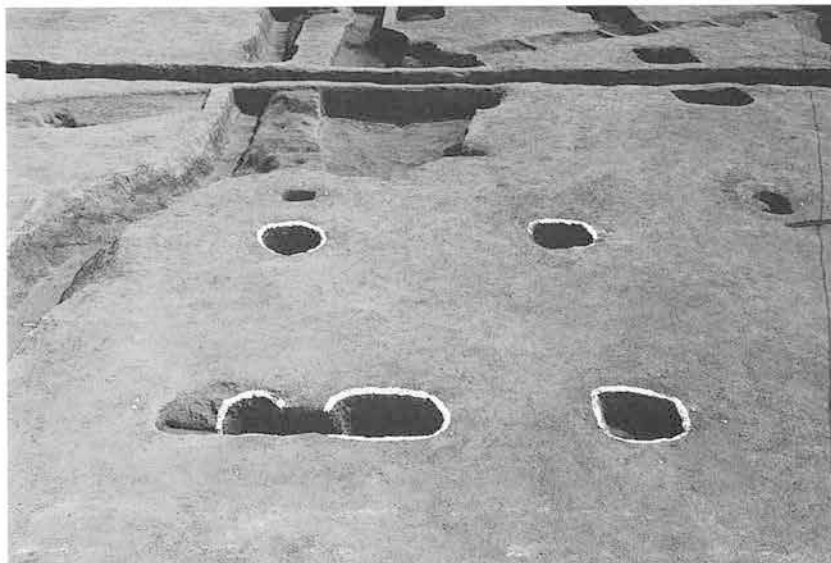
3. 8区2号掘立柱建物跡全景



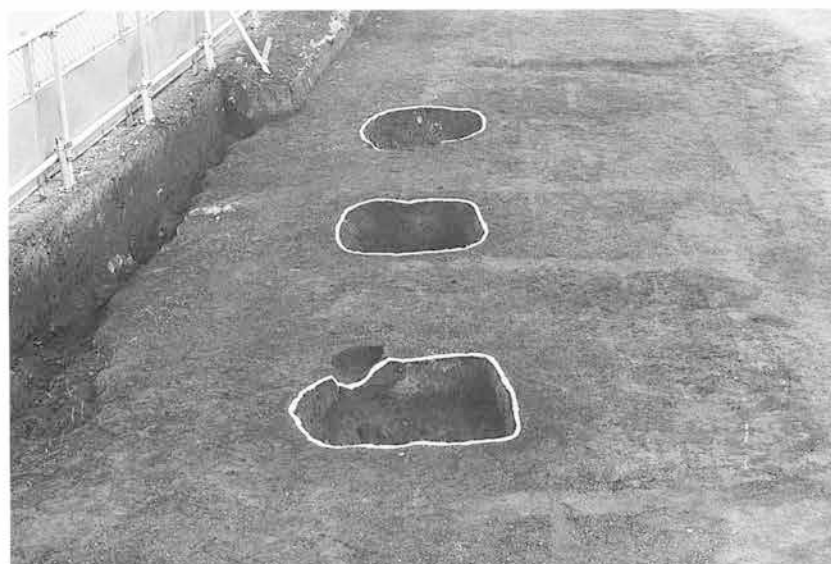
4. 8区3号掘立柱建物跡全景



5. 9区1号掘立柱建物跡全景



1. 14区1号掘立柱建物跡全景



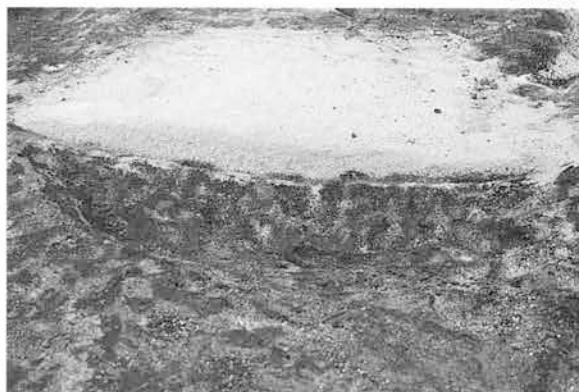
2. 14区1号柱列全景



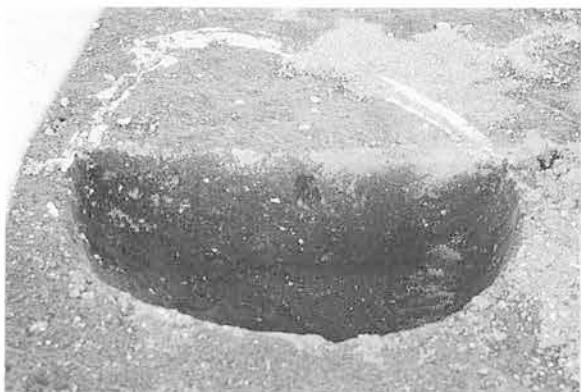
3. 15区1号掘立柱建物跡全景



1. 0区1号土坑全景



2. 0区1号土坑土层断面



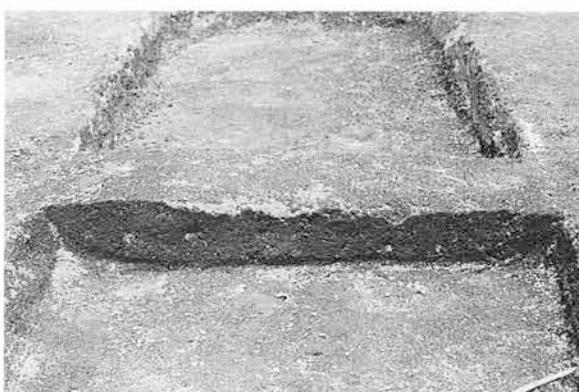
3. 0区11号土坑全景



4. 1区1号土坑全景



5. 1区2号土坑全景



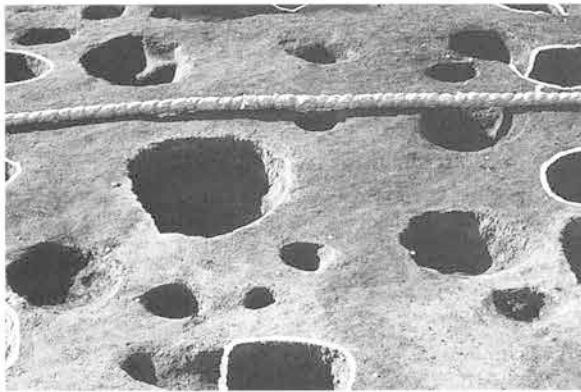
6. 1区6号土坑全景



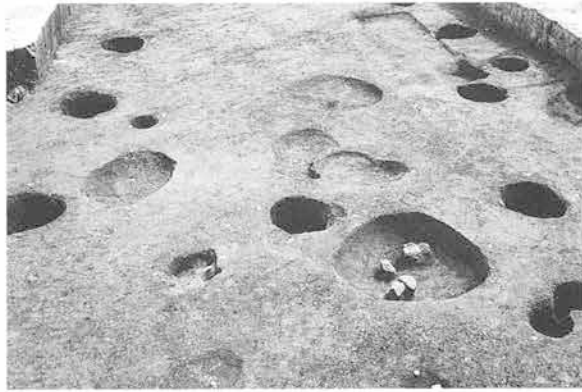
7. 1区8号土坑全景



8. 1区133号土坑全景



1. 1区176·178·179·181·195号土坑全景



2. 2区78·79·81·86·108·130号土坑全景



3. 2区104号土坑全景



4. 2区108号土坑全景



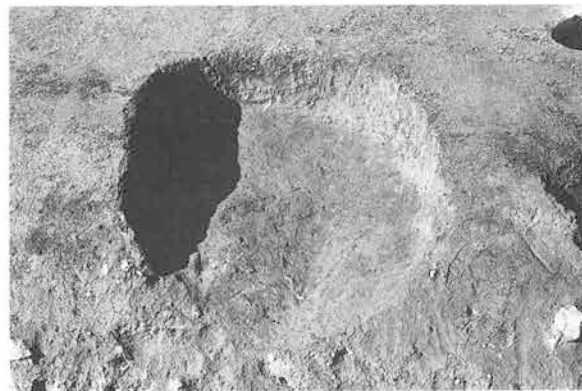
5. 3区2号土坑全景



6. 4区16号土坑全景



7. 4区17号土坑全景



8. 4区60号土坑全景



1. 4区72号土坑全景



2. 4区82号土坑全景



3. 4区83号土坑全景



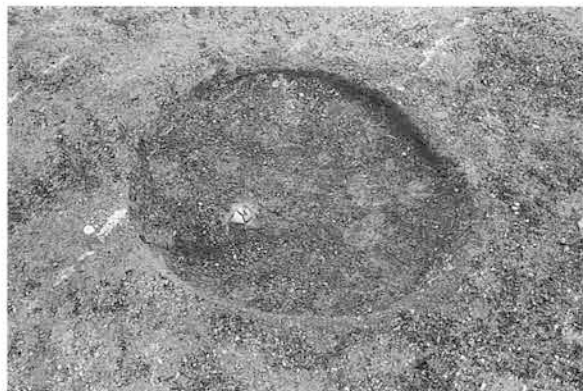
4. 4区182号土坑全景



5. 4区225号土坑全景



6. 5区17号土坑全景



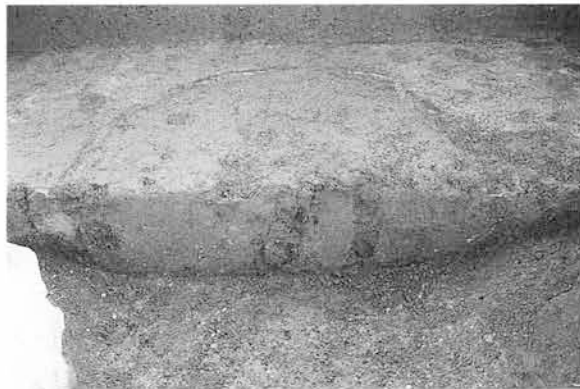
7. 5区35号土坑全景



8. 5区36号土坑全景



1. 6区1号被熟土坑全景



2. 6区1号被熟土坑土层断面



3. 6区1号土坑全景



4. 6区3号土坑全景



5. 6区19号土坑全景



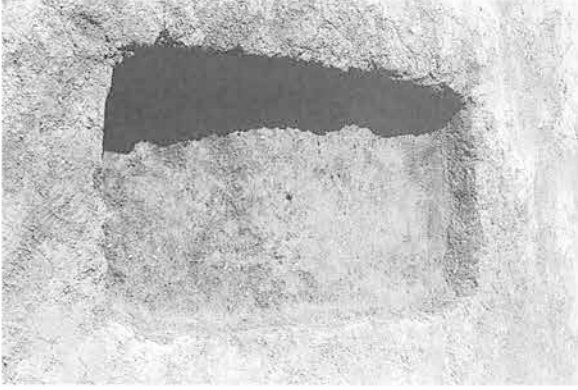
6. 6区23号土坑全景



7. 6区39号土坑全景



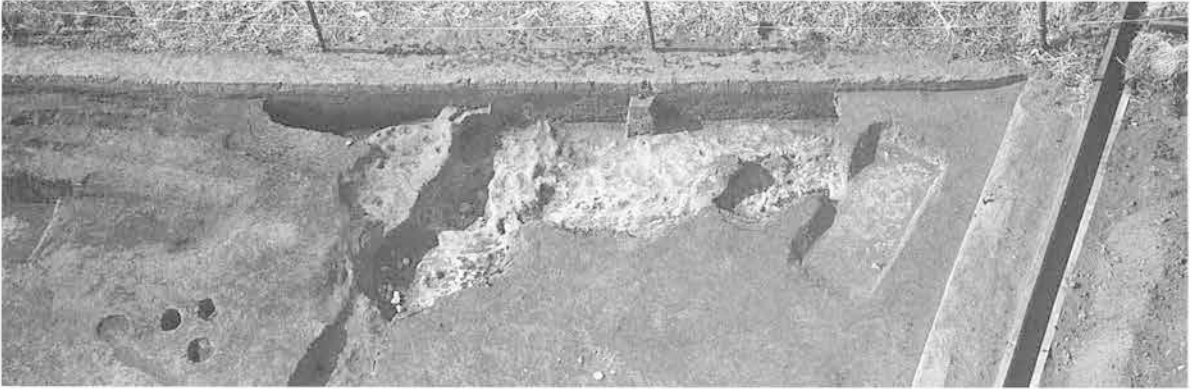
8. 6区49号土坑全景



1. 7区2号土坑全景



2. 7区5号土坑全景



3. 8区1号粘土採掘坑群全景



4. 8区1号粘土採掘坑群



5. 8区1号粘土採掘坑群遺物出土狀態



6. 8区1号粘土採掘坑群P1



1. 8区1号土坑全景



2. 8区3号土坑全景



3. 8区5号土坑全景



4. 8区5号土坑遺物出土狀態



5. 8区6·132号土坑全景



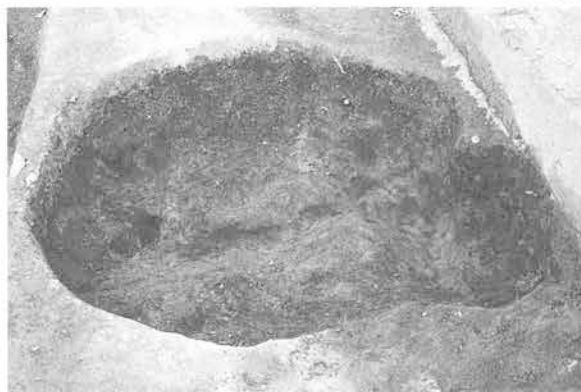
6. 8区64号土坑全景



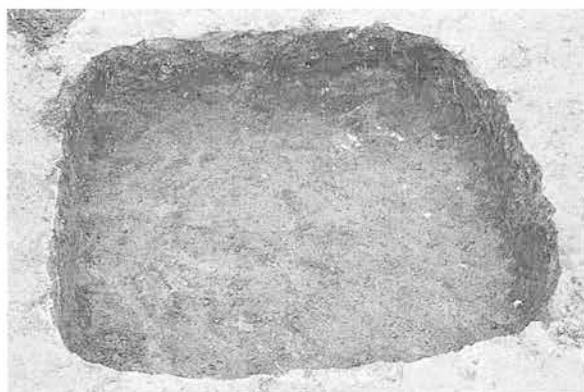
7. 8区65号土坑全景



1. 9区2号土坑全景



2. 9区31号土坑全景



3. 9区37号土坑全景



4. 9区43号土坑全景



5. 9区46号土坑全景



6. 9区119号土坑全景



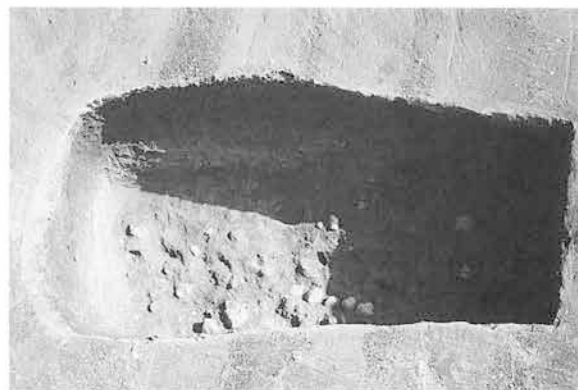
7. 10区16号土坑全景



8. 10区20号土坑全景



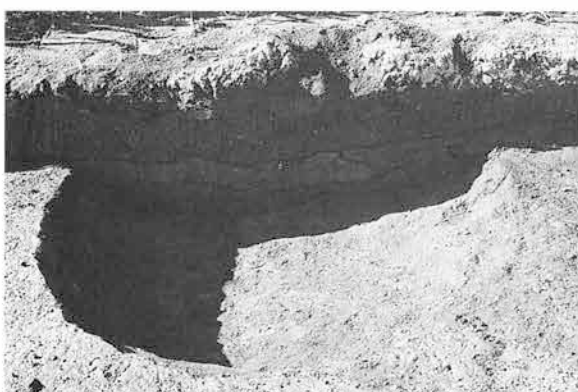
1. 11区1号土壙墓全景 (1)



2. 11区1号土壙墓全景 (2)



3. 11区1号土壙墓遺物出土狀態



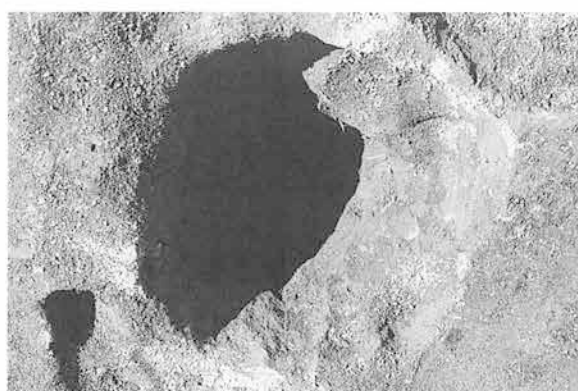
4. 11区2号土坑全景



5. 12区1号土坑全景



6. 13区1号土坑全景



7. 13区2号土坑全景

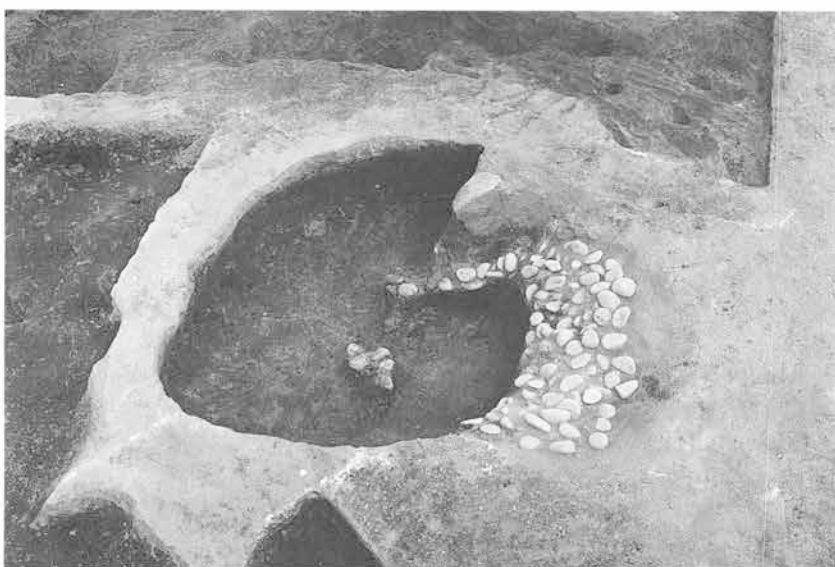
1. 14区1号竖穴状遺構全景



2. 14区1号竖穴状遺構掘り方



3. 14区1号土坑全景





1. 14区1号土坑下面全景



2. 14区2号土坑全景



3. 14区3号土坑全景



4. 14区6号土坑全景



5. 14区6号土坑掘り方



6. 14区6号土坑土層断面



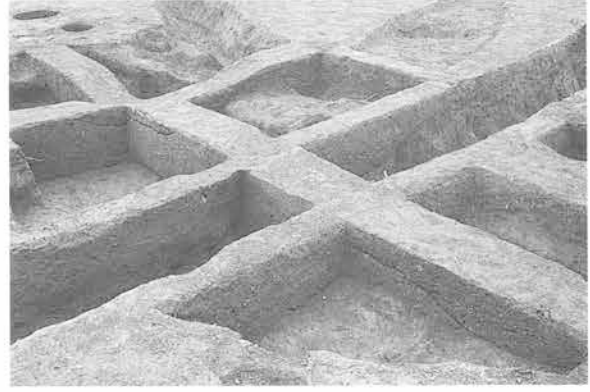
7. 14区21号土坑全景



8. 14区22号土坑全景



1. 14区21・22号土坑土層断面



2. 14区27号土坑全景



3. 15区1号土坑全景



4. 15区5号土坑全景



5. 3区1号堀全景



6. 3区1号堀土層断面



7. 4区1号堀全景



1. 4区1・2号堀間土橋全景



2. 4区1号堀北側近景 (1)



3. 4区1号堀北側近景 (2)



4. 4区1号堀土層断面 (1)



5. 4区1号堀土層断面 (2)



6. 4区1号堀遺物出土状態



7. 4区1号堀北東角



1. 4区1号堀工具痕



2. 4区2号溝全景



3. 4区4号溝全景 (1)



4. 4区4号溝全景 (2)



5. 4区4号溝土層断面



6. 4区6・7号溝全景



1. 5区1号溝全景



2. 5区2号溝全景



3. 6区1・3・5・6号溝全景



4. 6区7号溝全景



5. 6区42・52号溝全景



1. 6区42・50～53・57号溝全景



3. 6区53号溝全景



2. 6区42号溝遺物出土状態



4. 7区4号溝全景



6. 7区6・7・20号溝全景



5. 7区7号溝遺物出土状態



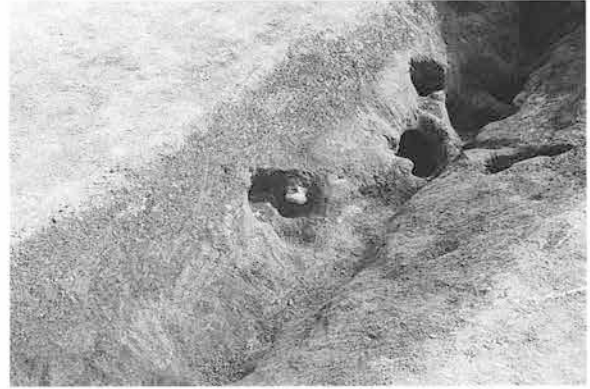
1. 7区20号沟全景



2. 8区1号沟全景



3. 8区2号沟全景



4. 8区2号沟遗物出土状态



6. 8区4号沟全景



7. 8区5号沟全景



1. 9区4·5·6号沟全景



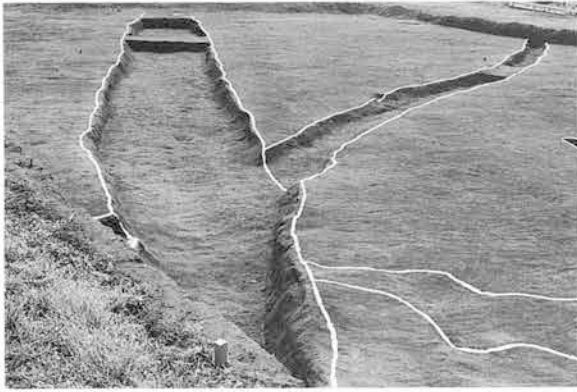
2. 9区9号沟全景



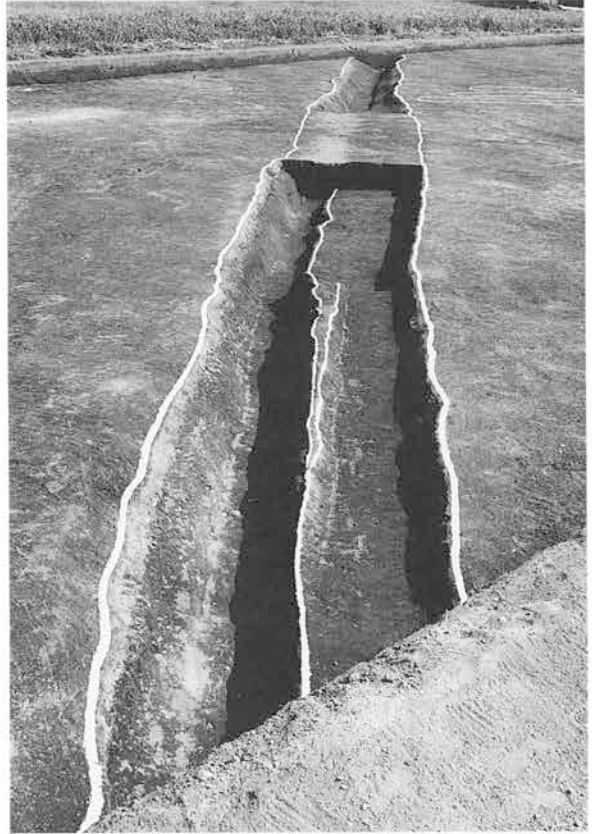
3. 11区1号沟全景



4. 11区2号沟全景



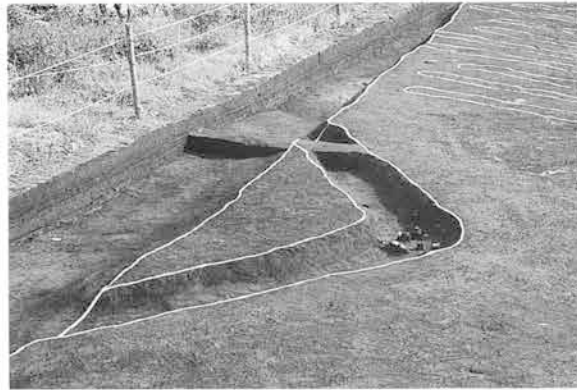
1. 11区3号溝全景



2. 12区1A・1B号溝全景



3. 12区2号溝全景



4. 13区2号溝全景



6. 14区1号溝土層断面



5. 14区1号溝全景



1. 14区2号溝全景



2. 14区4号溝全景



3. 15区1号堀全景



4. 15区1号堀土層断面



1. 6区1号井戸全景



3. 8区1・3号井戸全景



2. 6区1号井戸土層断面



4. 8区1号井戸土層断面



5. 8区2号井戸土層断面



6. 8区3号井戸土層断面



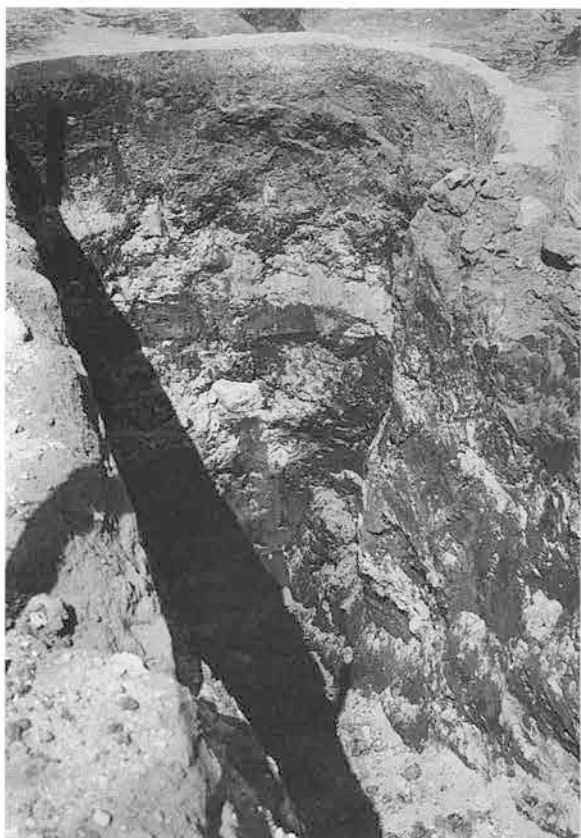
8. 8区3号井戸土層断面



1. 14区1号井戸全景



2. 14区1号井戸遺物出土状態



3. 14区1号井戸土層断面



4. 15区1号井戸土層断面



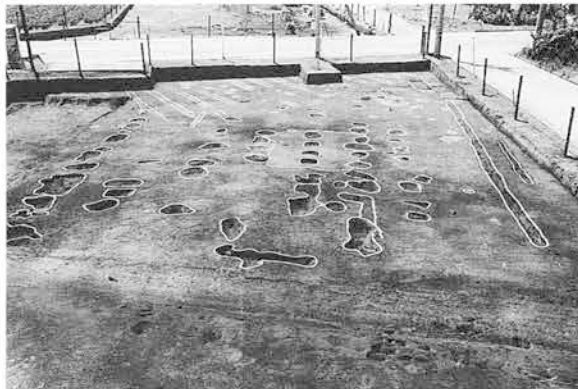
5. 15区2号井戸全景



6. 15区2号井戸土層断面



1. 1区F A下畠跡全景



2. 2区F A下畠跡全景



3. 4区F A下畠跡全景



4. 5区F A下畠跡全景



5. 6区F A下畠跡全景 (1)



6. 6区F A下畠跡全景 (2)



6. 7区F A下畠跡全景



8. 8区F A下畠跡全景



1. 9区F A下畠跡全景



2. 10区F A下畠跡全景



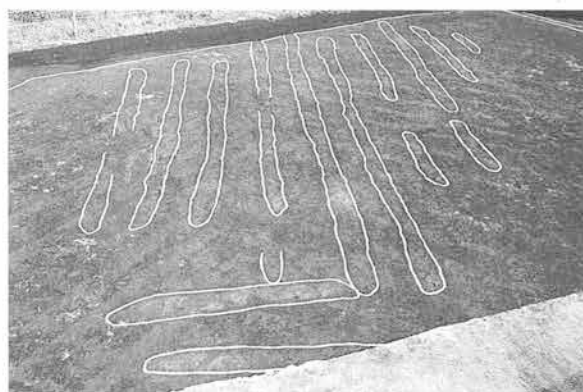
3. 12区1号F A下畠跡全景



4. 12区2号F A下畠跡全景



5. 12区3号F A下畠跡全景



6. 13区F A下畠跡全景



7. 6区F A上溝群全景



1. 7区F A上溝群全景



2. 7区F A上5号溝全景



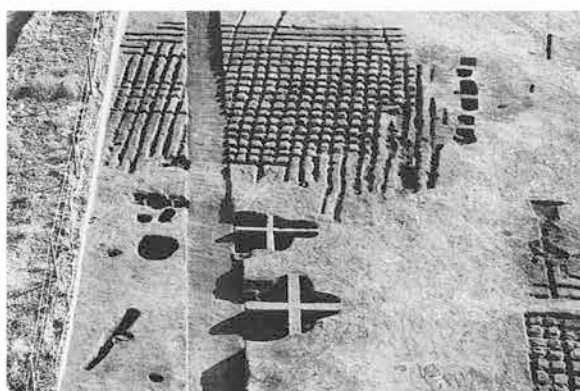
3. 7区F A上5号溝土層断面



4. 7区F A上26·27号溝全景



7. 9区F A上溝群全景



7. 8区1号A s-B混凝土島跡全景



6. 8区2号A s-B混凝土島跡全景



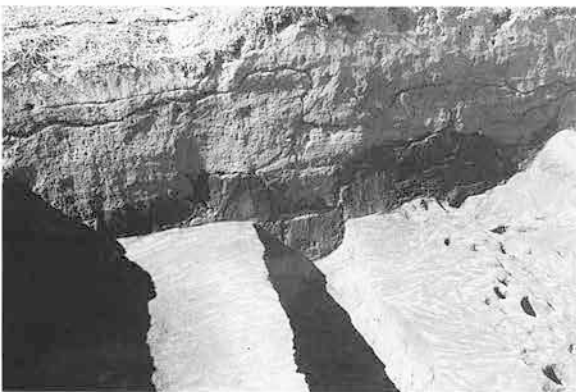
1. 2区1号道路跡全景



3. 7区1号道路跡全景



2. 7区1号道路跡下層面



4. 7区1号道路跡土層断面



6. 13区1号道路跡全景



5. 11区1号道路跡全景



1. 15区1号道路跡全景



2. 15区1号道路跡近景



3. 15区1号道路跡土層断面



4. 15区1号道路跡下層路面



5. 15区1号道路跡最下面



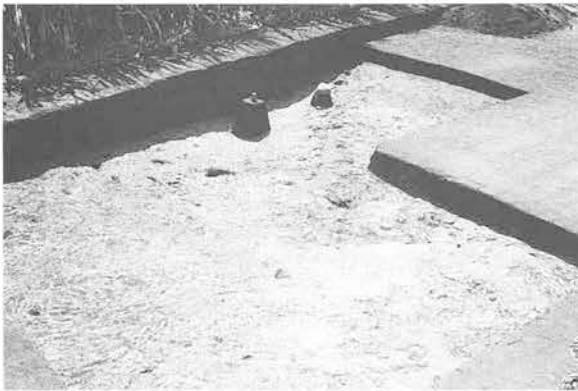
1. 0区A s - B 下旧河道全景



2. 0区F A 下旧河道全景



3. 0区F A 下旧河道土層断面



4. 2区小谷地全景



5. 4区小谷地全景 (1)



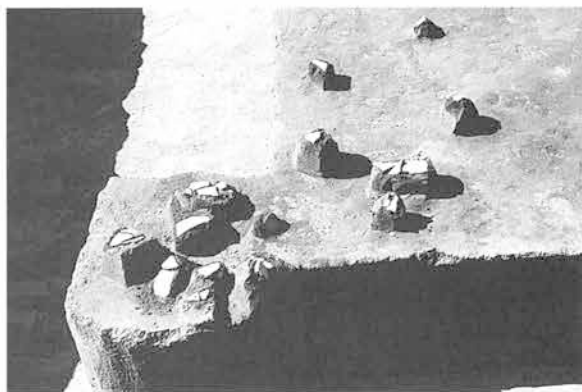
6. 4区小谷地全景 (2)



7. 4区小谷地土層断面



1. 4区縄文土器出土状態



2. 10区縄文土器出土状態



3. 6区弥生土器出土状態



4. 9区弥生土器出土状態



5. 4区西側隣地金稻治稻荷石祠No.1



6. 4区西側隣地金稻治稻荷石祠No.2



1. 13区東1号道路跡全景



2. 13区東1号道路跡土層断面

1. 竪穴住居跡 (1) 古墳時代





A-14住-17



A-14住-18



A-14住-19



A-25住-3



A-25住-1



A-25住-2



A-27A住-1



A-27A住-2



A-27A住-3



A-27A住-4



A-27A住-9



A-27A住-5



A-27A住-6



A-27A住-7



A-27A住-8



A-27A住-10



A-27A住-11



A-27A住-13



A-27A住-14



A-27A住-12



A-27A住-15



A-27A住-17



A-27A住-16



A-27A住-18



A-27A住-19



A-27A住-20



A-27A住-21



A-27A住-22



A-27A住-23



A-27A住-24



A-27A住-26



A-27A住-25



A-27A住-27



A-27A住-28



A-27A住-29



A-27A住-31



A-27A住-32



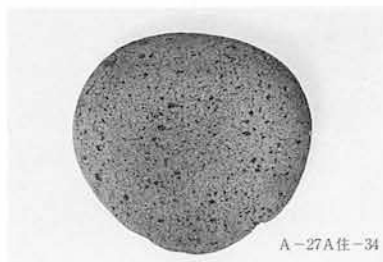
A-27A住-33



A-27A住-30



A-27A住-37



A-27A住-34



A-27A住-35



A-27B住-1



A-27A住-36



A-28住-1



A-28住-2



A-28住-3



A-28住-4





B-6住-8



B-6住-10



B-6住-9



B-6住-12



B-6住-13



B-6住-14



B-6住-11



B-6住-15



B-6住-16



B-6住-18



B-6住-17



B-20住-1



B-20住-4



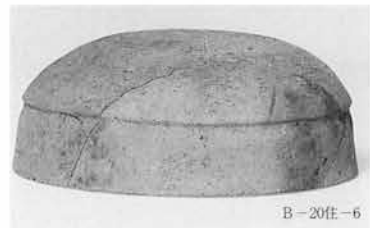
B-20住-2



B-20住-5



B-20住-3



B-20住-6



B-20住-8



B-20住-9



B-20住-7





B-26住-1



B-29住-1



B-29住-2



D-31住-1



D-31住-3



D-31住-4



D-31住-5



D-31住-2



D-31住-6



D-31住-7



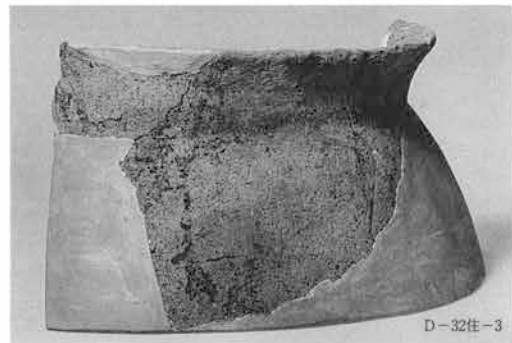
D-31住-8



D-31住-9



D-32住-1



D-32住-3



D-32住-2



D-32住-4





D-33住-1



D-34住-3



D-34住-4



D-34住-1



D-34住-5



D-34住-6



D-34住-2



D-34住-7



D-34住-8



D-34住-9

1. 竪穴住居跡 (2) 奈良・平安時代



A-15住-1



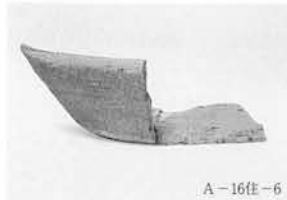
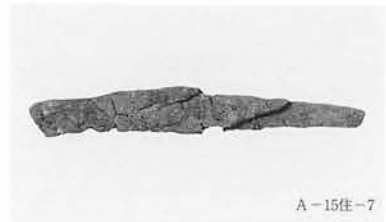
A-15住-2



A-15住-3



A-15住-4

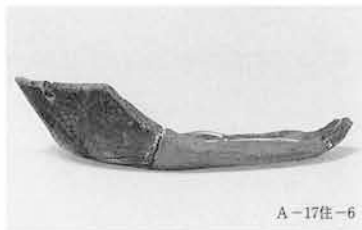




A-17住-4



A-17住-5



A-17住-6



A-17住-7



A-17住-8



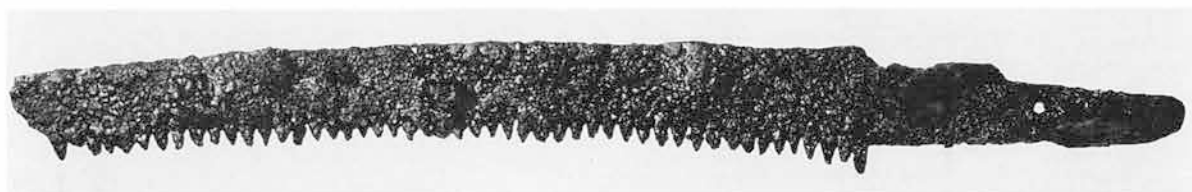
A-17住-9



A-17住-10



A-17住-12



A-17住-11



A-18住-1



A-18住-2



A-18住-3



A-18住-4



A-18住-5



A-18住-6



A-18住-7



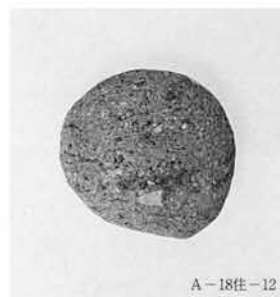
A-18住-8



A-18住-10



A-18住-11



A-18住-12



A-19住-2



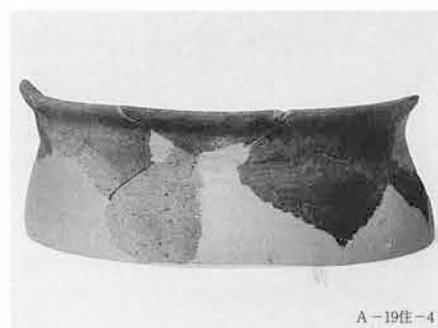
A-18住-9



A-19住-1



A-19住-3



A-19住-4



A-21住-1



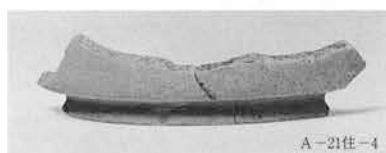
A-21住-3



A-21住-6



A-21住-2



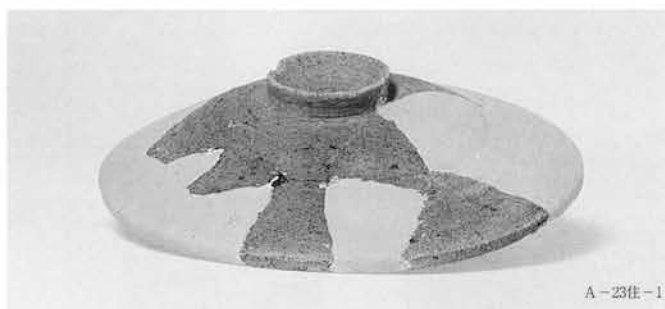
A-21住-4

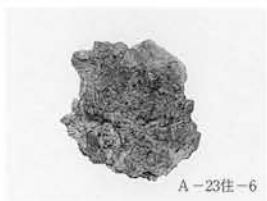


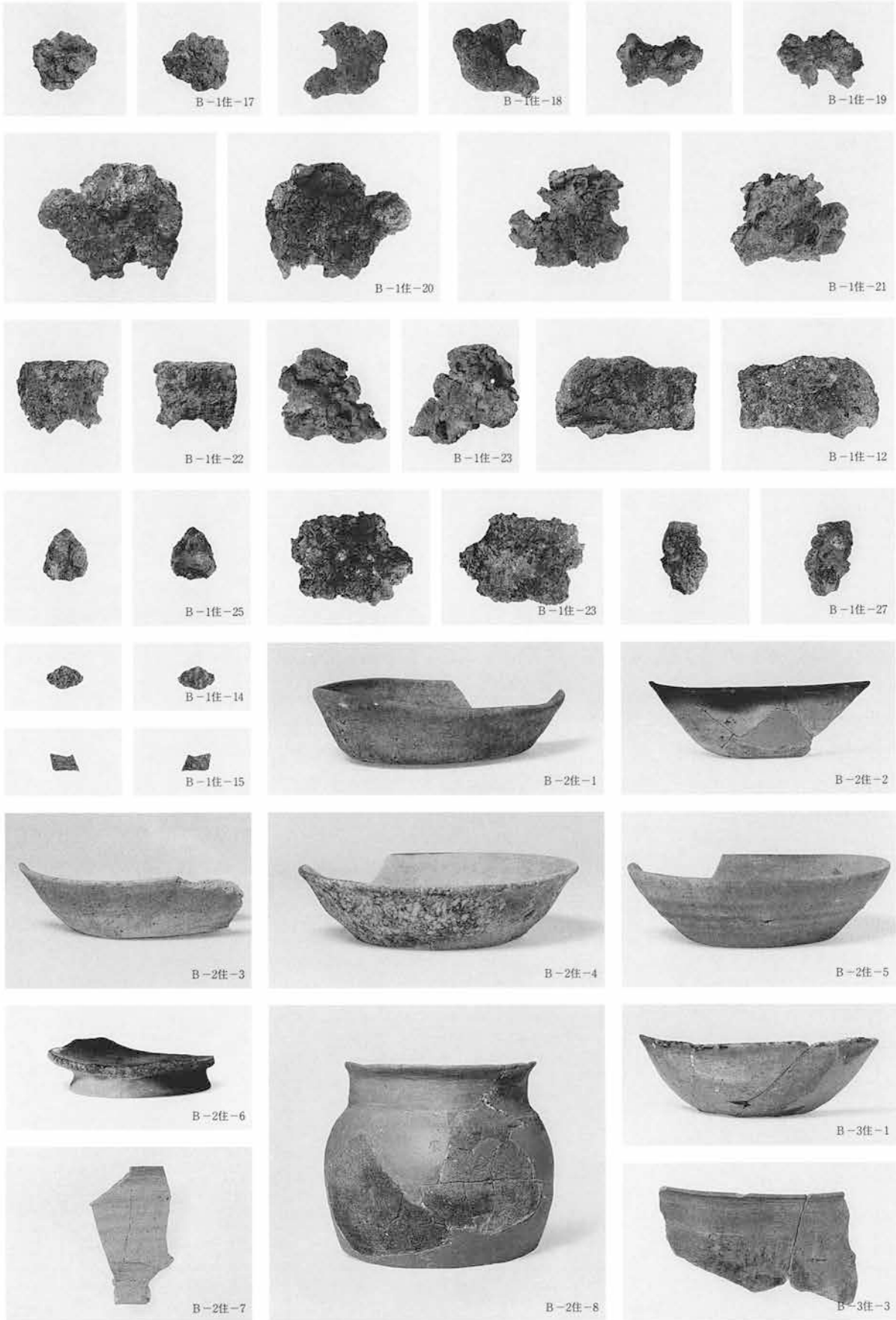
A-21住-5



A-21住-7









B-3住-4



B-3住-5



B-3住-7



B-3住-10



B-3住-6



B-3住-8



B-3住-9



B-4住-1



B-4住-2



B-5住-1



B-4住-3



B-3住-2



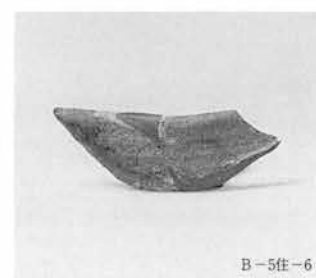
B-3住-3



B-5住-4



B-5住-5



B-5住-6



B-5住-7



B-5住-8



B-5住-9



B-7住-1



B-7住-2



B-8住-1



B-8住-2



B-8住-3



B-8住-4



B-8住-5



B-8住-6



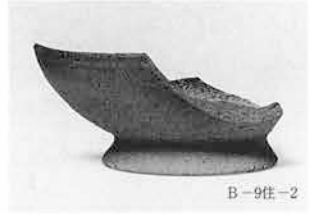
B-8住-7



B-9住-1



B-10住-3



B-9住-2



B-10住-1



B-10住-5



B-10住-2



B-10住-4



B-10住-6



B-10住-8



B-10住-7



B-10住-9



B-10住-10



B-11住-1



B-11住-2



B-11住-3



B-11住-4



B-11住-5



B-12住-1



B-12住-2



B-13住-1



D-36住-1



D-36住-2



H-1住-1



H-1住-2



H-1住-3



H-1住-5



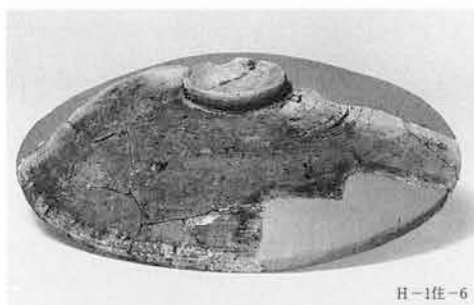
H-1住-4



H-1住-7



H-1住-8



H-1住-6



H-1住-9



H-1住-13



H-1住-10



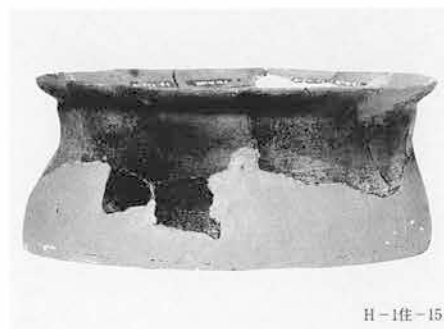
H-1住-11



H-1住-14



H-1住-12



H-1住-15



H-1住-16



H-1住-18

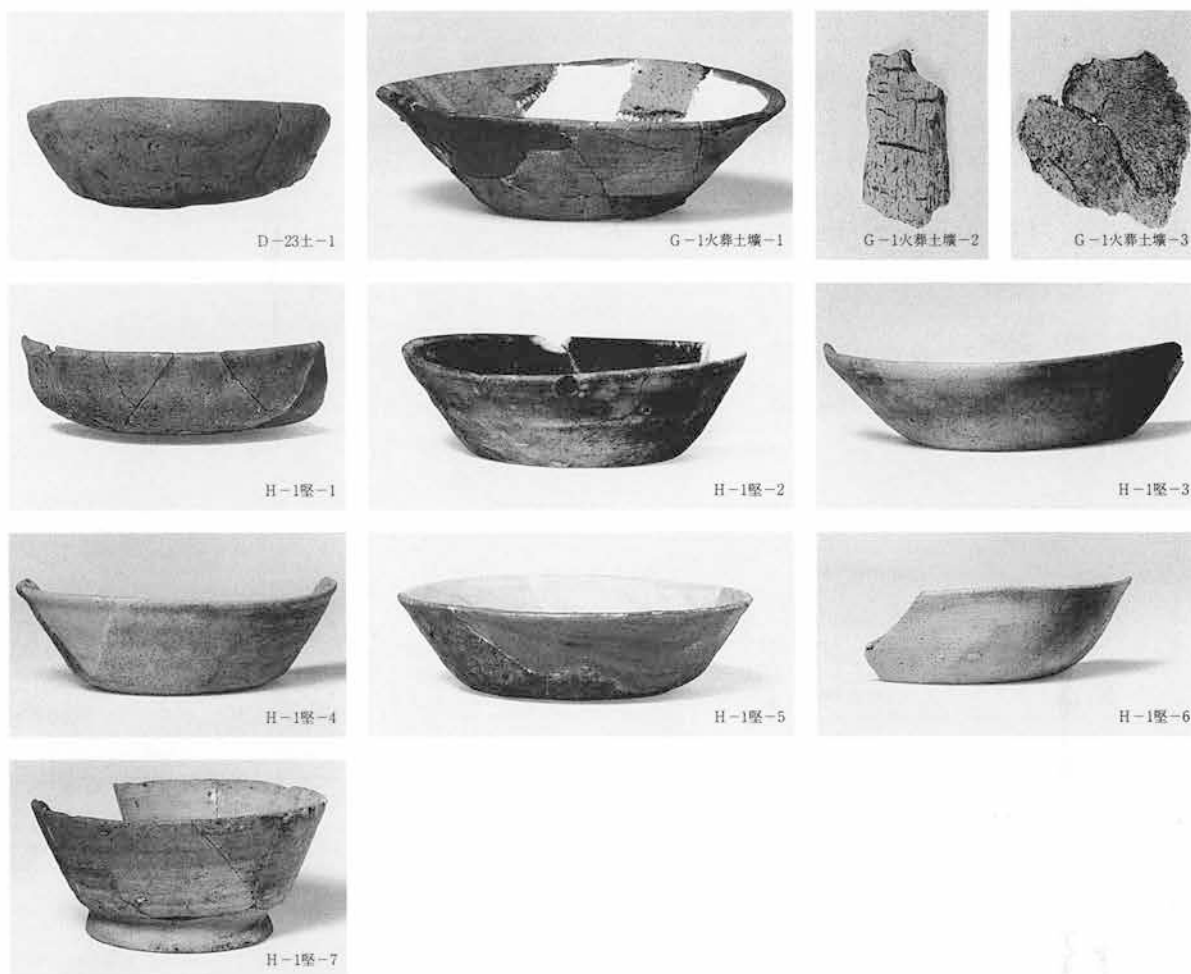


H-1住-19

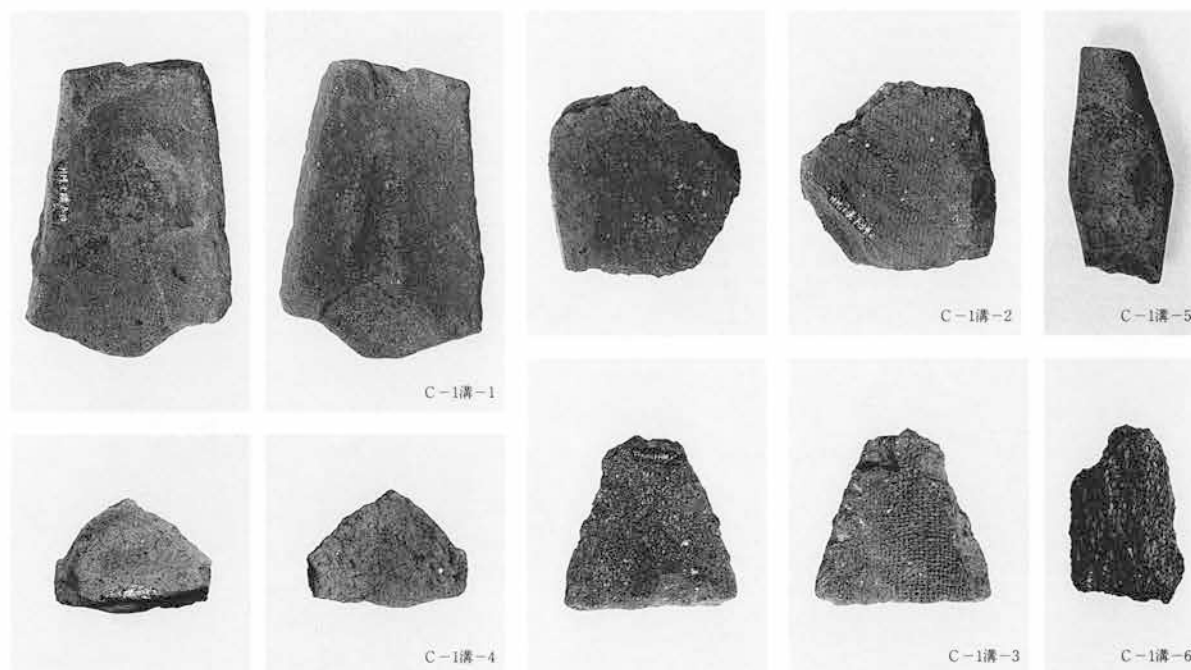


H-1住-17

3. 土坑・竖穴状遺構



4. 溝





C-1溝-7



C-1溝-8



C-1溝-10



C-1溝-11



C-1溝-12



C-1溝-9



D-17溝-1



D-22溝-2



D-22溝-3



D-22溝-5



D-22溝-1



D-22溝-6



D-22溝-7



D-22溝-4



E-8溝-1



E-9溝-2



E-9溝-1



E-9溝-3



E-9溝-4



E-10溝-1



E-10溝-2



F-5溝-1



F-5溝-2



F-9溝-1

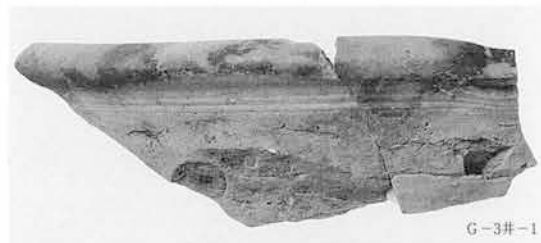


G-2溝-1

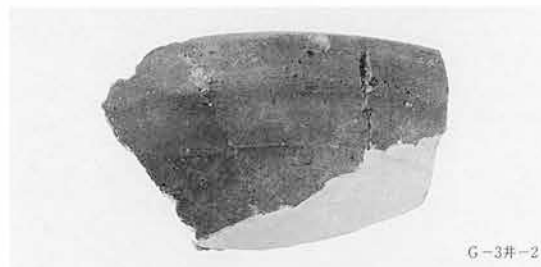


F-1井-1

5.井戸



G-3井-1



G-3井-2



G-3井-4



G-3井-5



G-3井-6



G-3井-7



G-3井-8



G-3井-9



G-3井-3



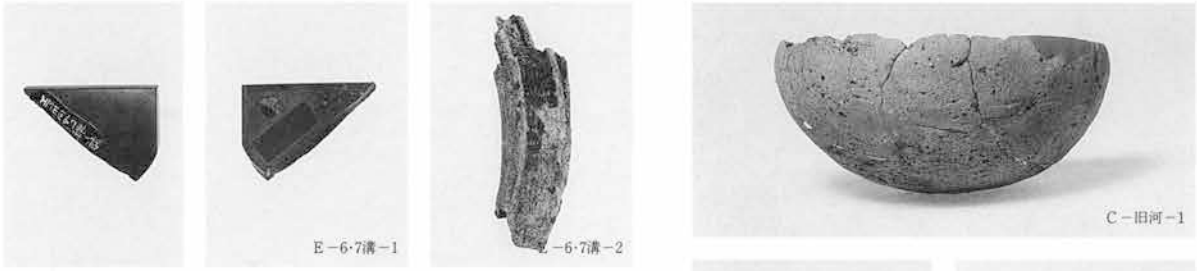
G-3井-10



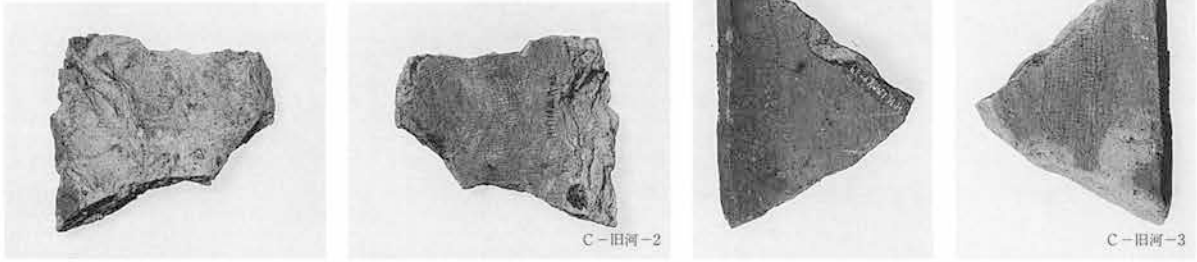
6.土器集積



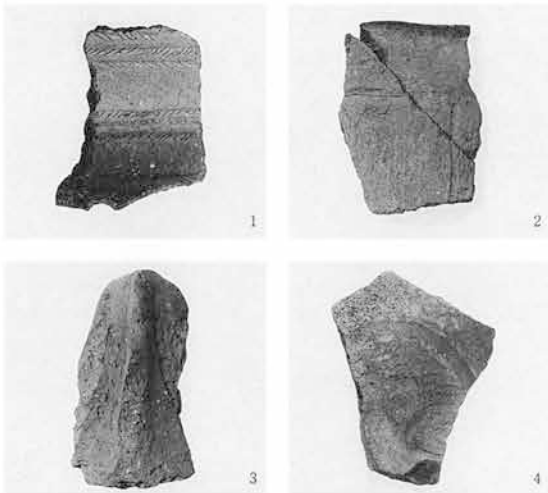
8.水田跡と溝群



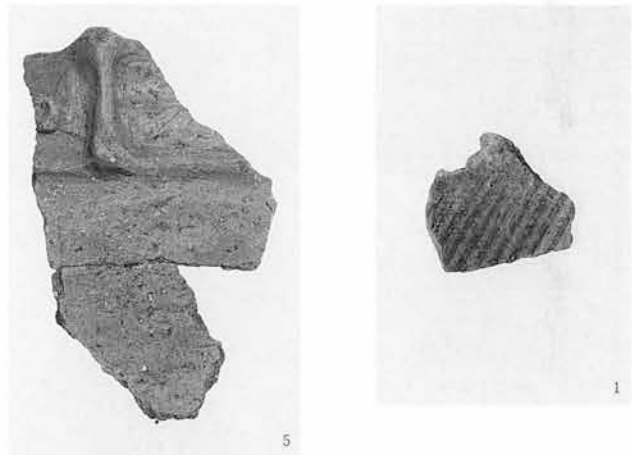
10.河道跡・小谷地



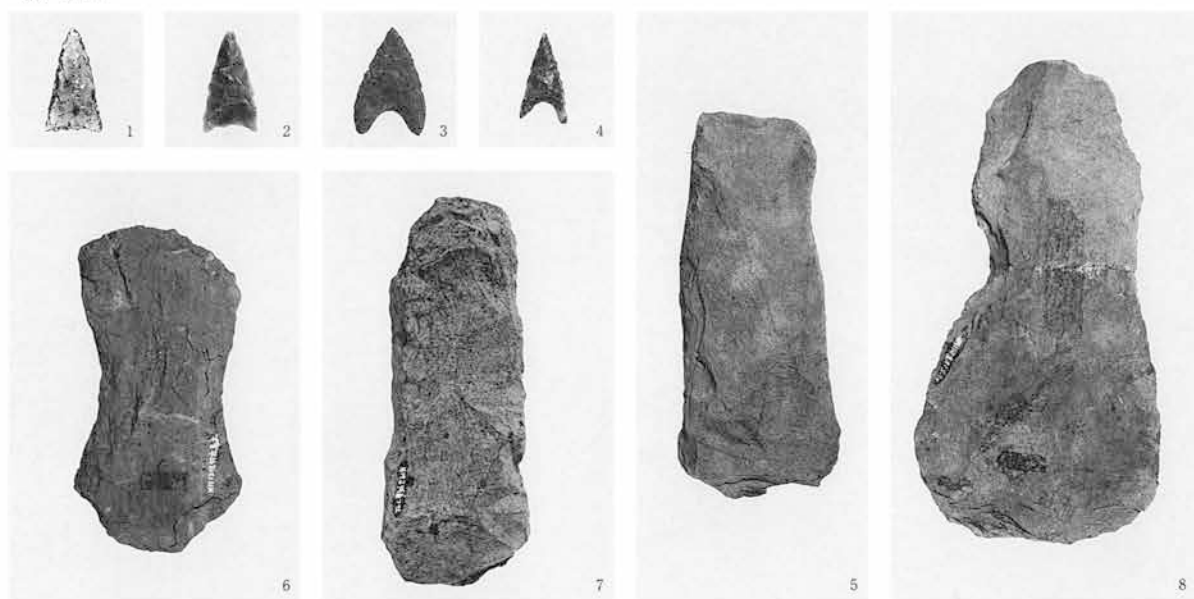
11.遺構外 (1) 縄文時代



(2) 弥生時代



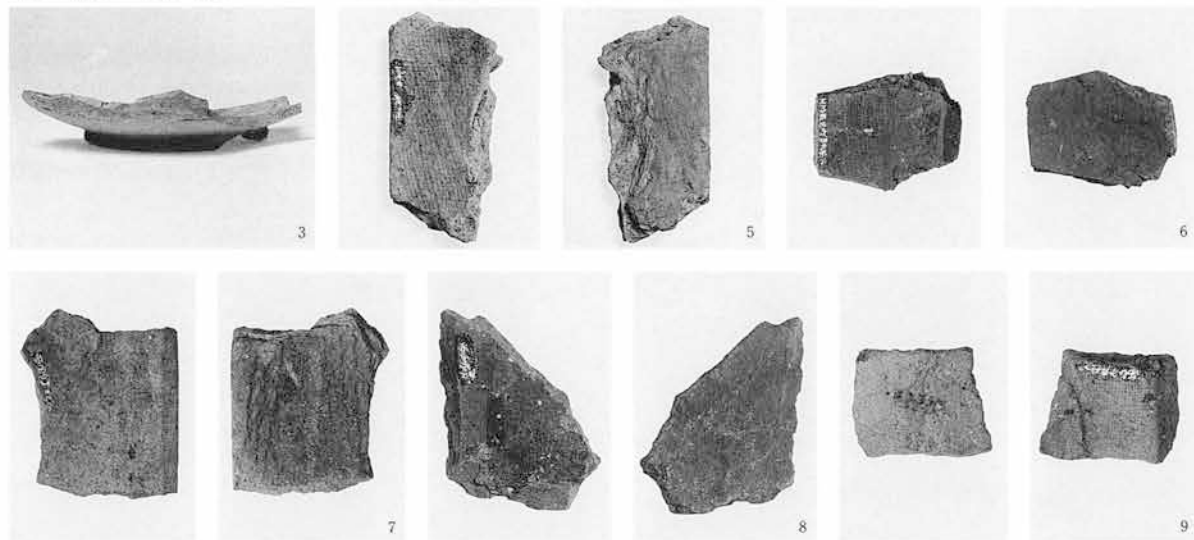
(3) 石器

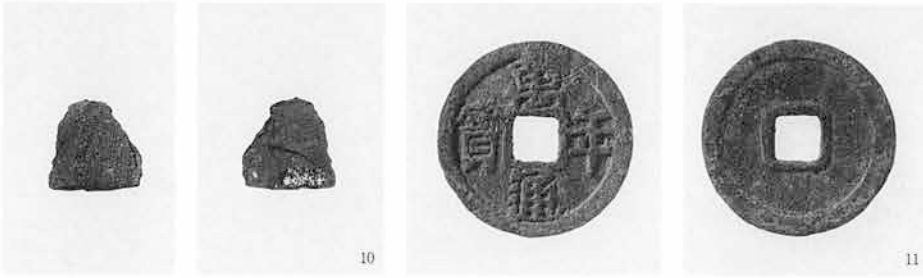


(4) 古墳時代

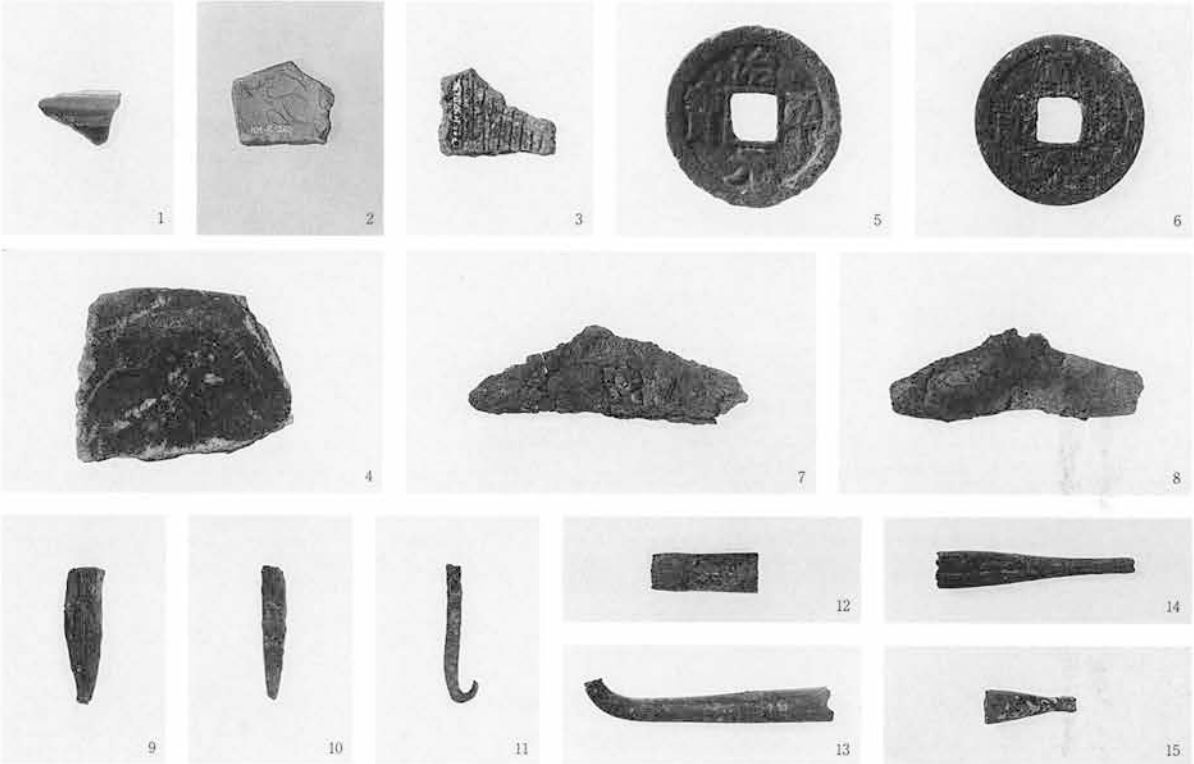


(5) 奈良・平安時代





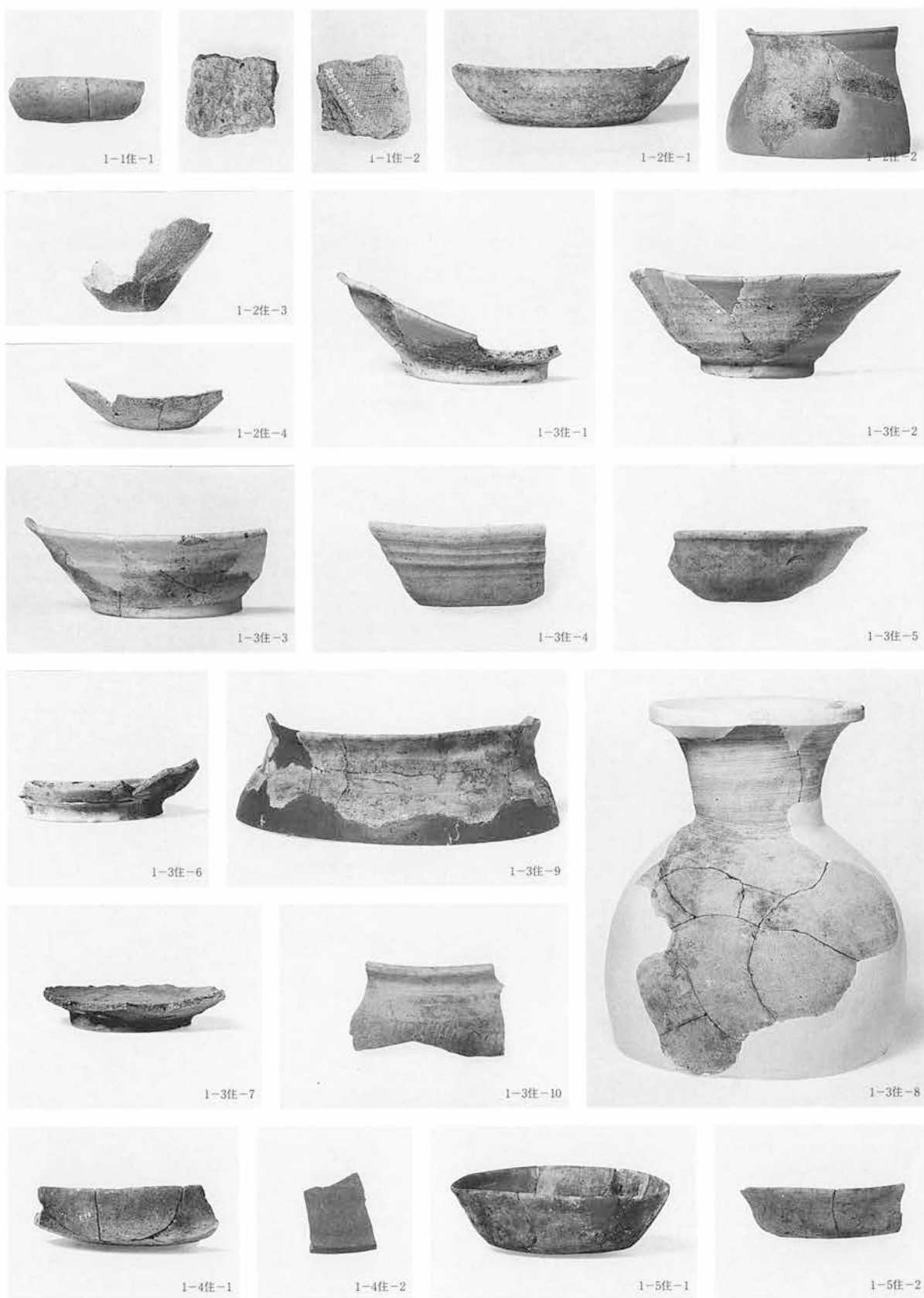
(3) 中世以降



PL 146

金古北十三町遺跡出土遺物

1. 竪穴住居跡





1-5住-3



1-5住-4



1-5住-5



1-5住-8



1-5住-6



1-5住-7



1-5住-9



1-5住-9



1-5住-10



1-6住-1



1-6住-4



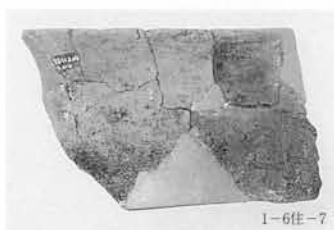
1-6住-5



1-6住-2



1-6住-3



1-6住-7



1-6住-6



1-6住-8



1-6住-9



1-6住-10



1-6住-11



1-6住-12



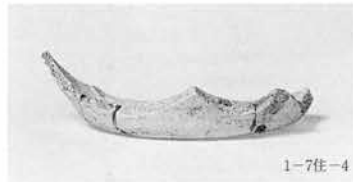
1-7住-1



1-7住-2



1-7住-3



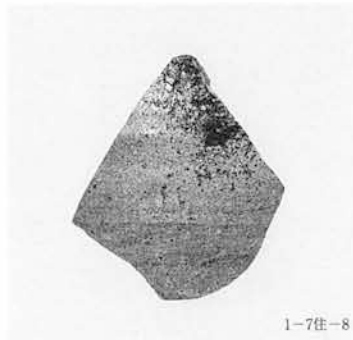
1-7住-4



1-7住-5



1-7住-6



1-7住-8



1-7住-7



1-7住-10



1-7住-12



1-7住-9



1-7住-11

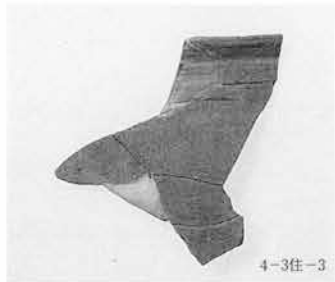
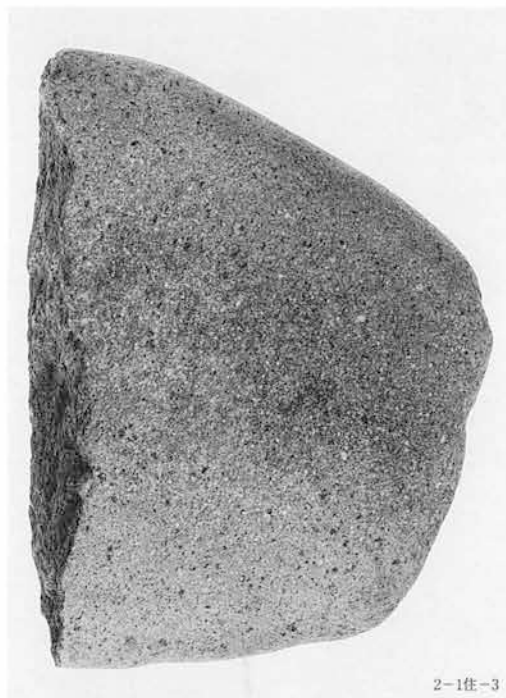


2-1住-1



2-1住-2







4-4住-6



4-4住-7



4-4住-8



4-4住-9



4-4住-10



4-4住-11



4-4住-12



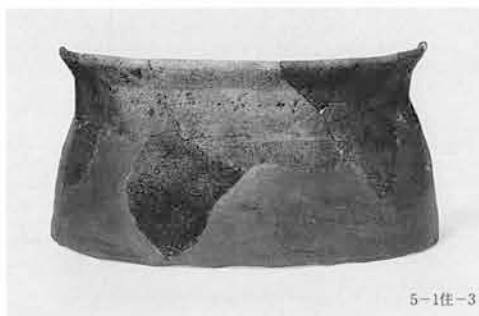
5-1住-2



5-1住-4



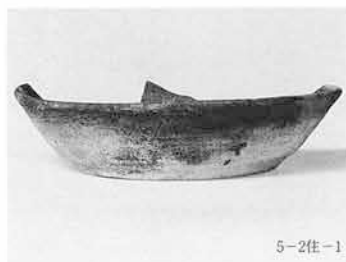
5-1住-1



5-1住-3



5-2住-3



5-2住-1



5-2住-2



5-2住-5



5-2住-7



5-2住-6

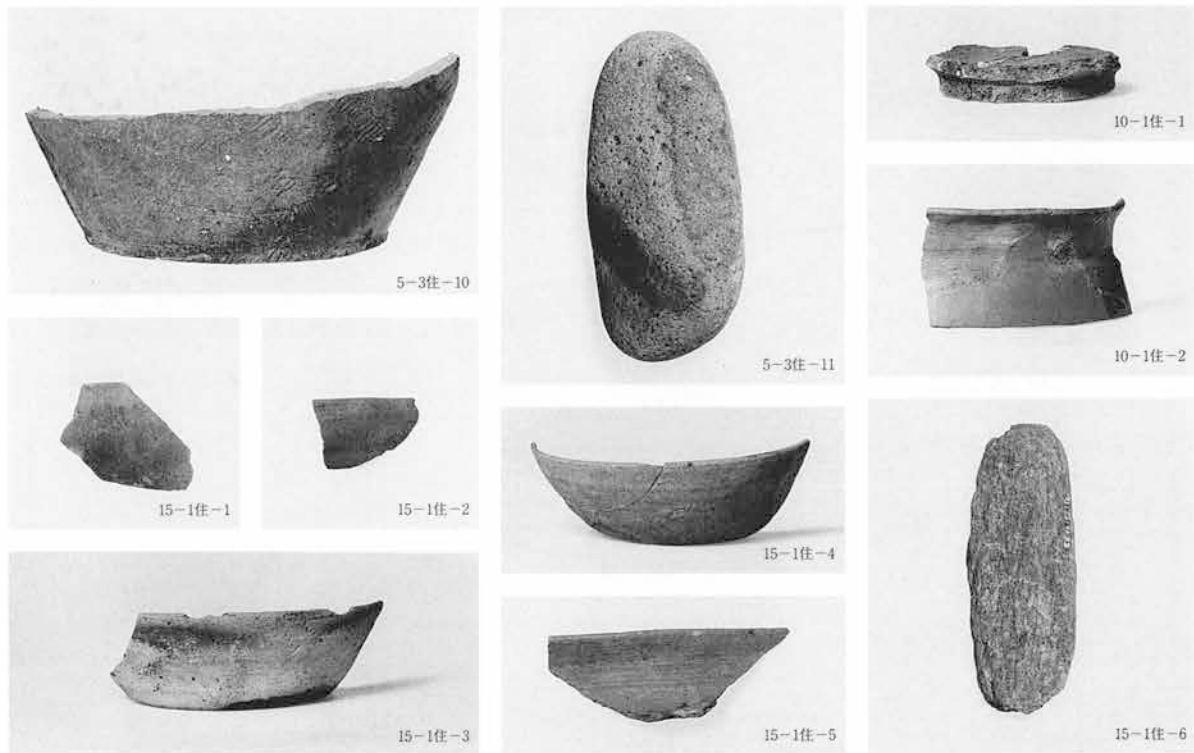


5-2住-8

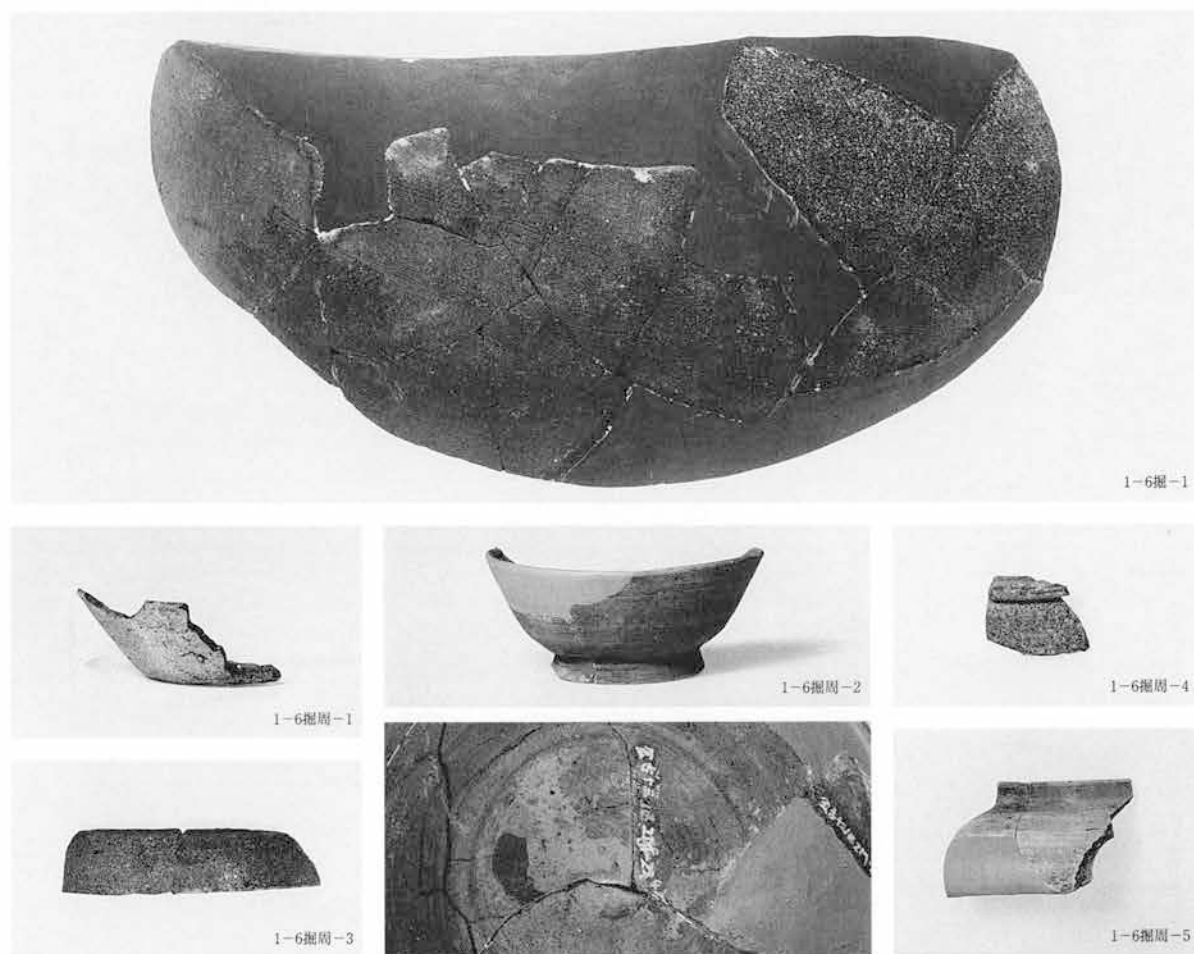


5-2住-4





2. 掘立柱建物跡・柱列





1-6掘周-6



15-1柱-1



14-1掘-1



2-1掘-1



1-114±-1



1-169±-1



3. 竖穴状遺構・土坑・土壙墓・粘土採掘坑群・被熱土坑



1-121±-1



1-133±-1



1-133±-2



3-2±-1



2-104±-1



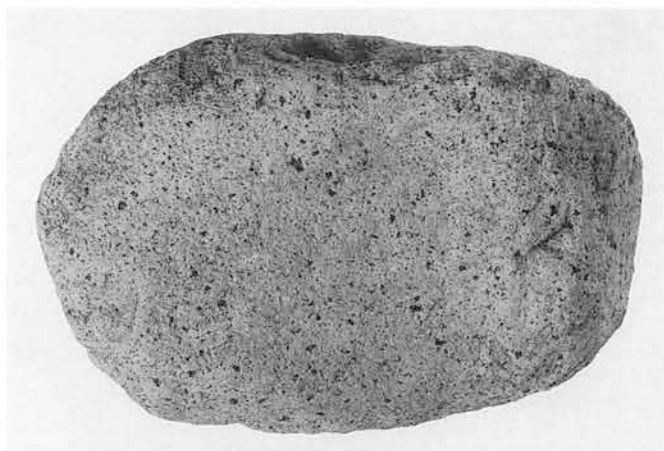
2-148±-1



4-79±-1



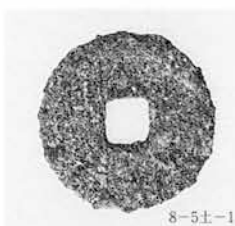
5-17±-1



5-28±-1



6-3±-1



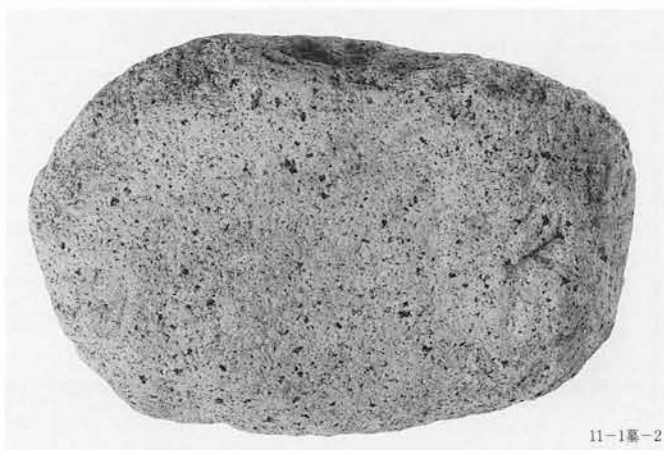
8-5±-1



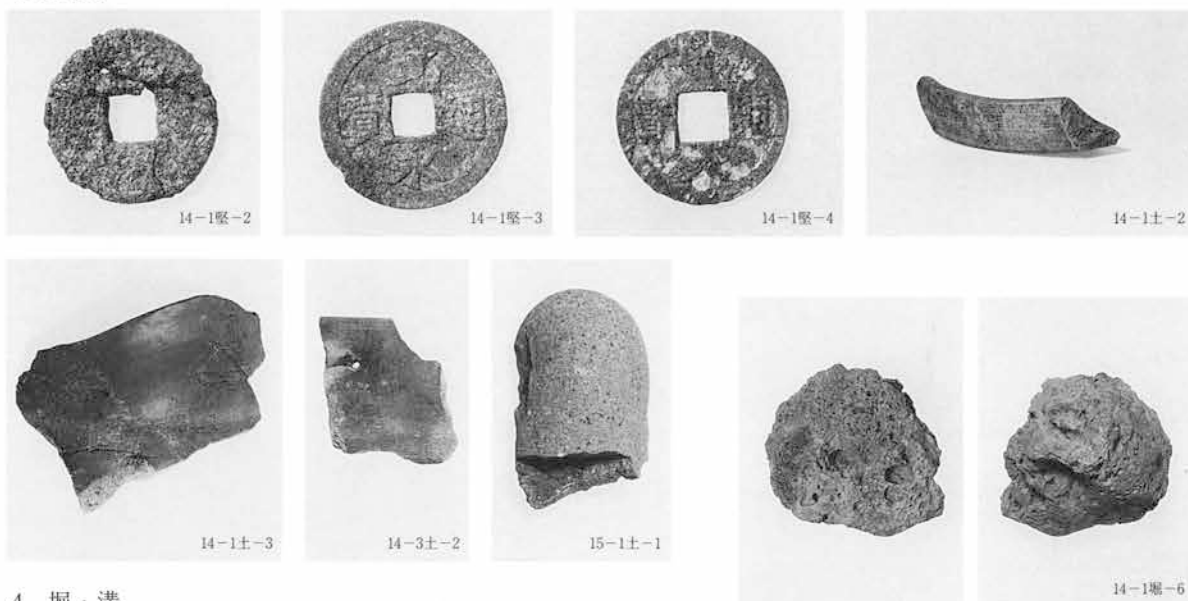
8-5±-3



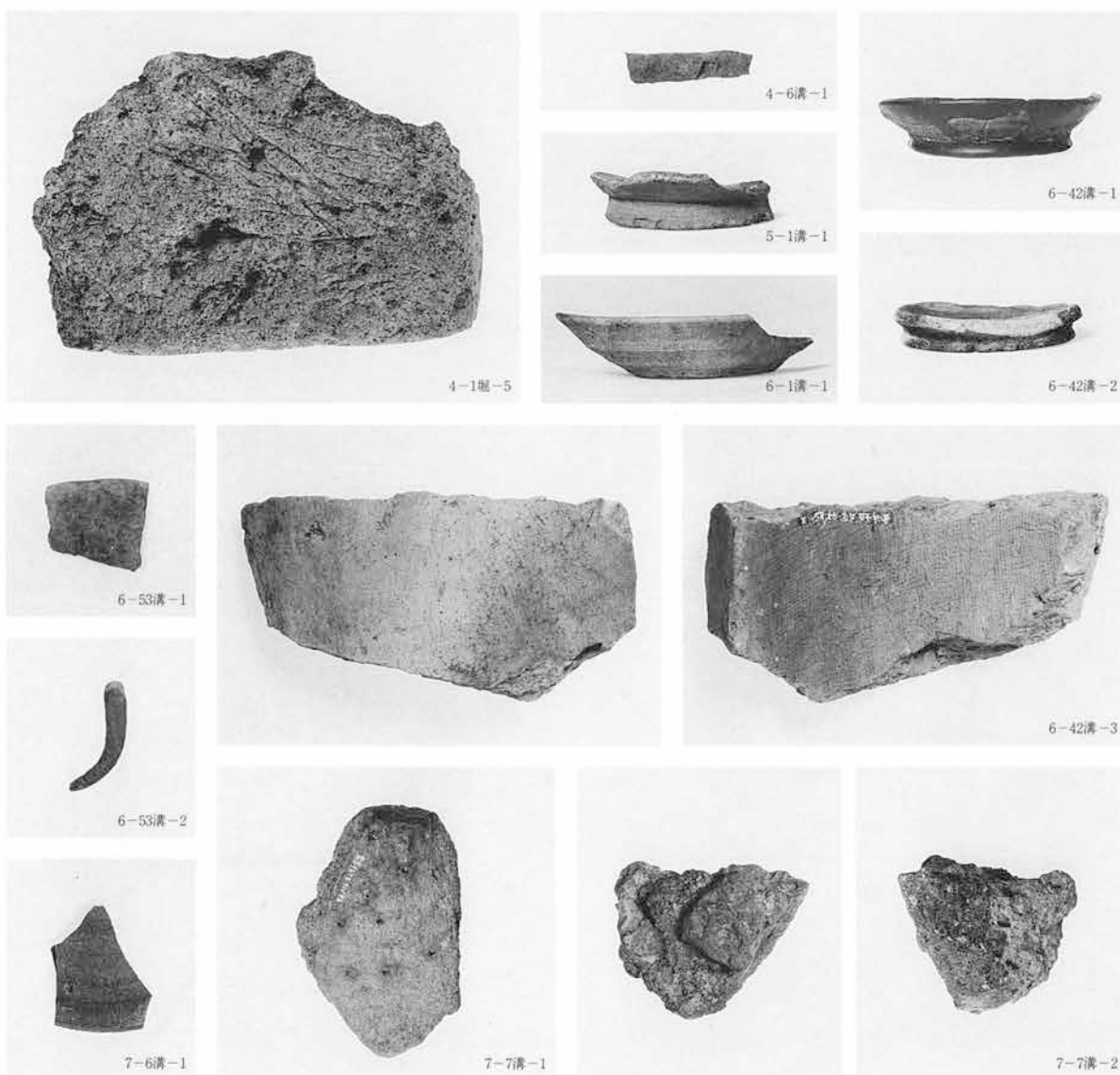
11-1墓-1



11-1墓-2

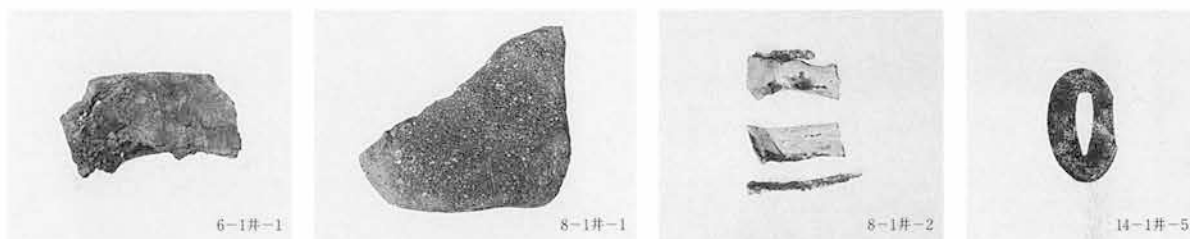


4. 堀・溝





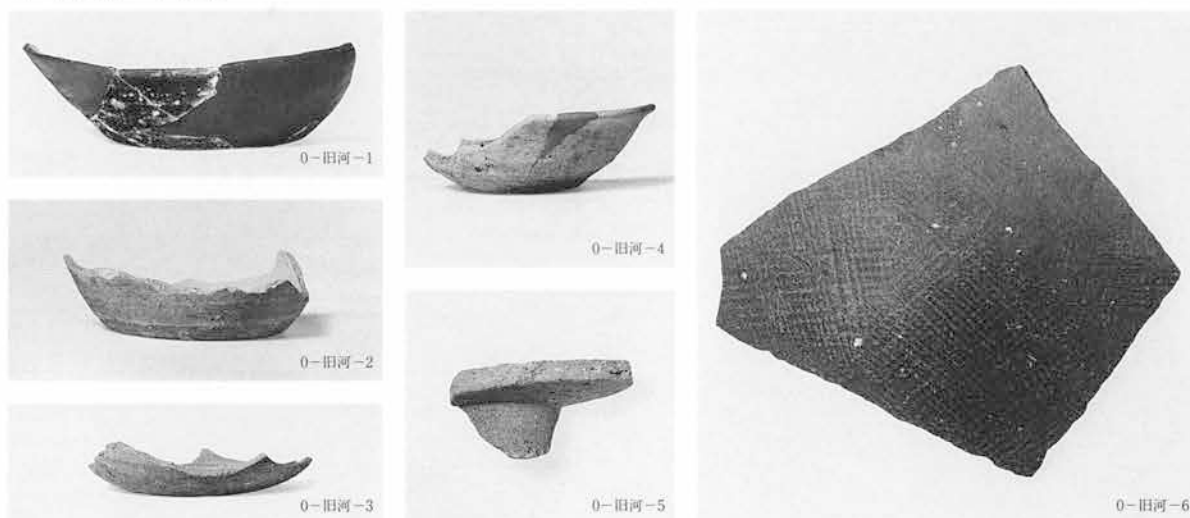
5. 井戸



7. 道路跡



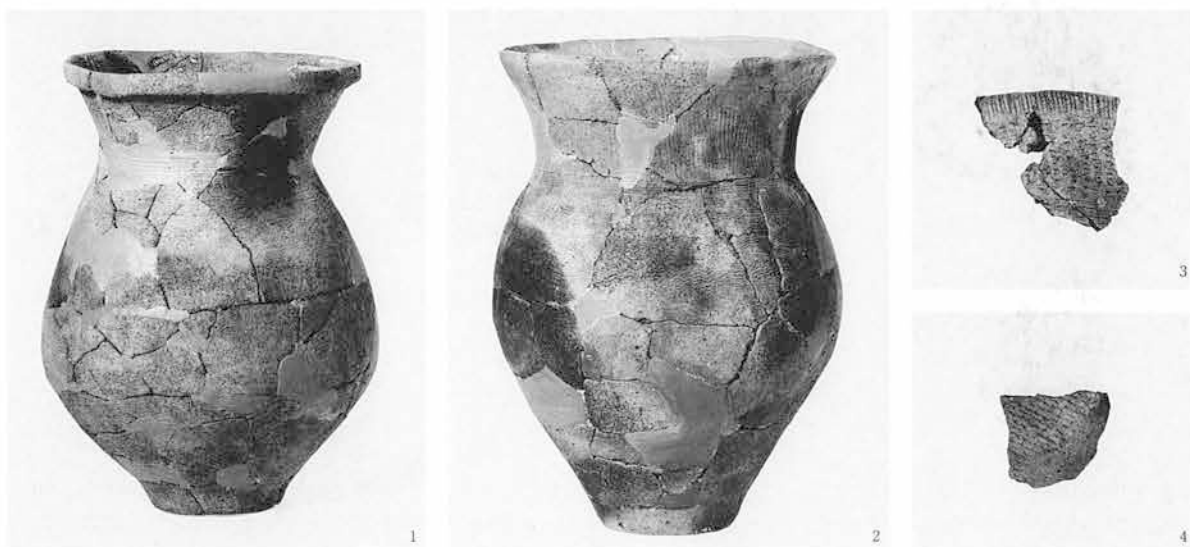
8. 河道跡・小谷地



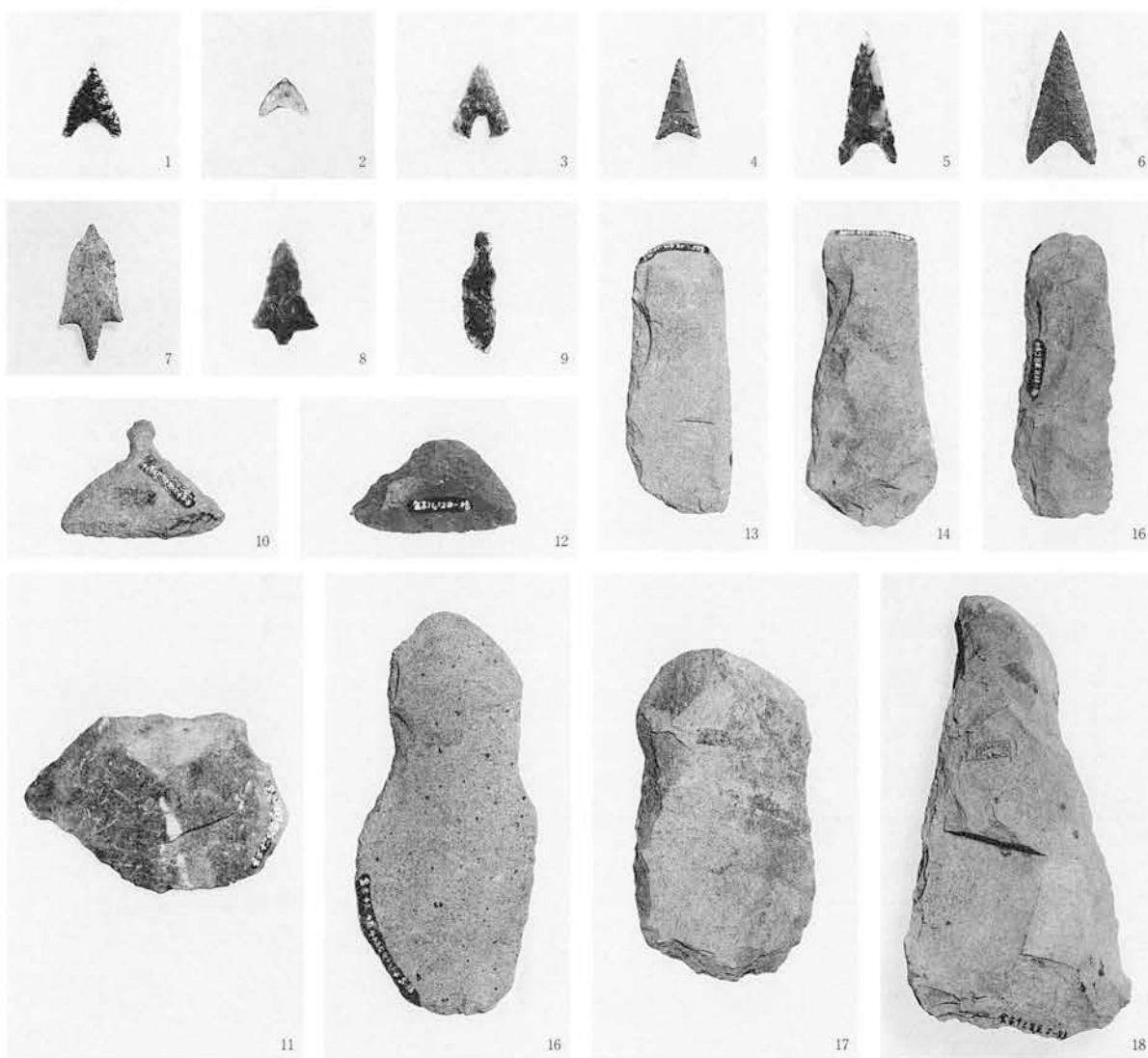
9. 遺構外出土遺物 (1) 縄文土器

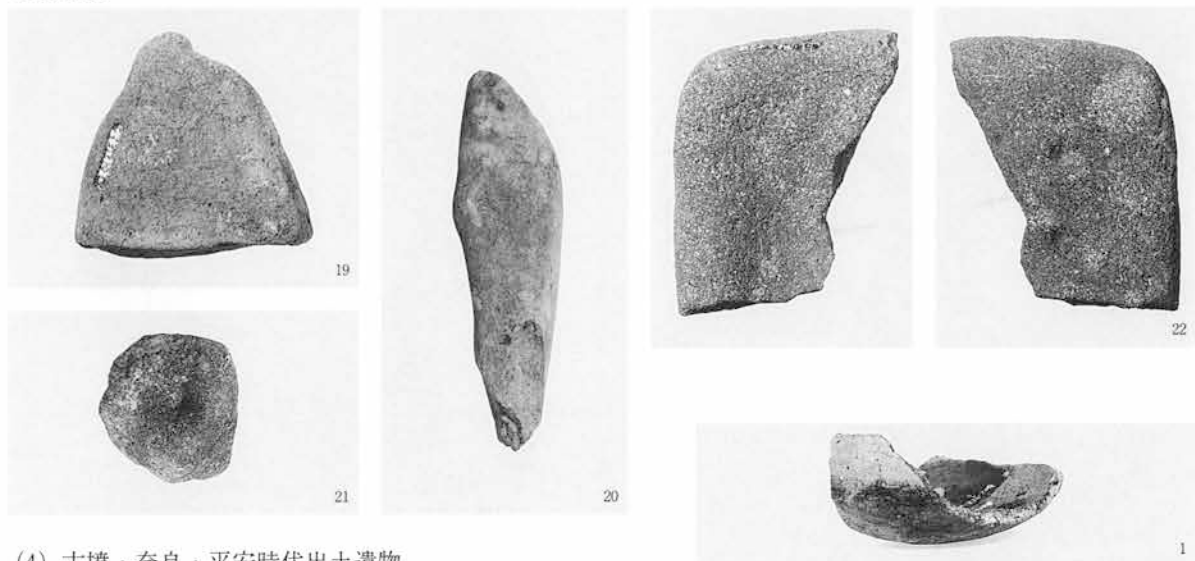


(2) 弥生土器

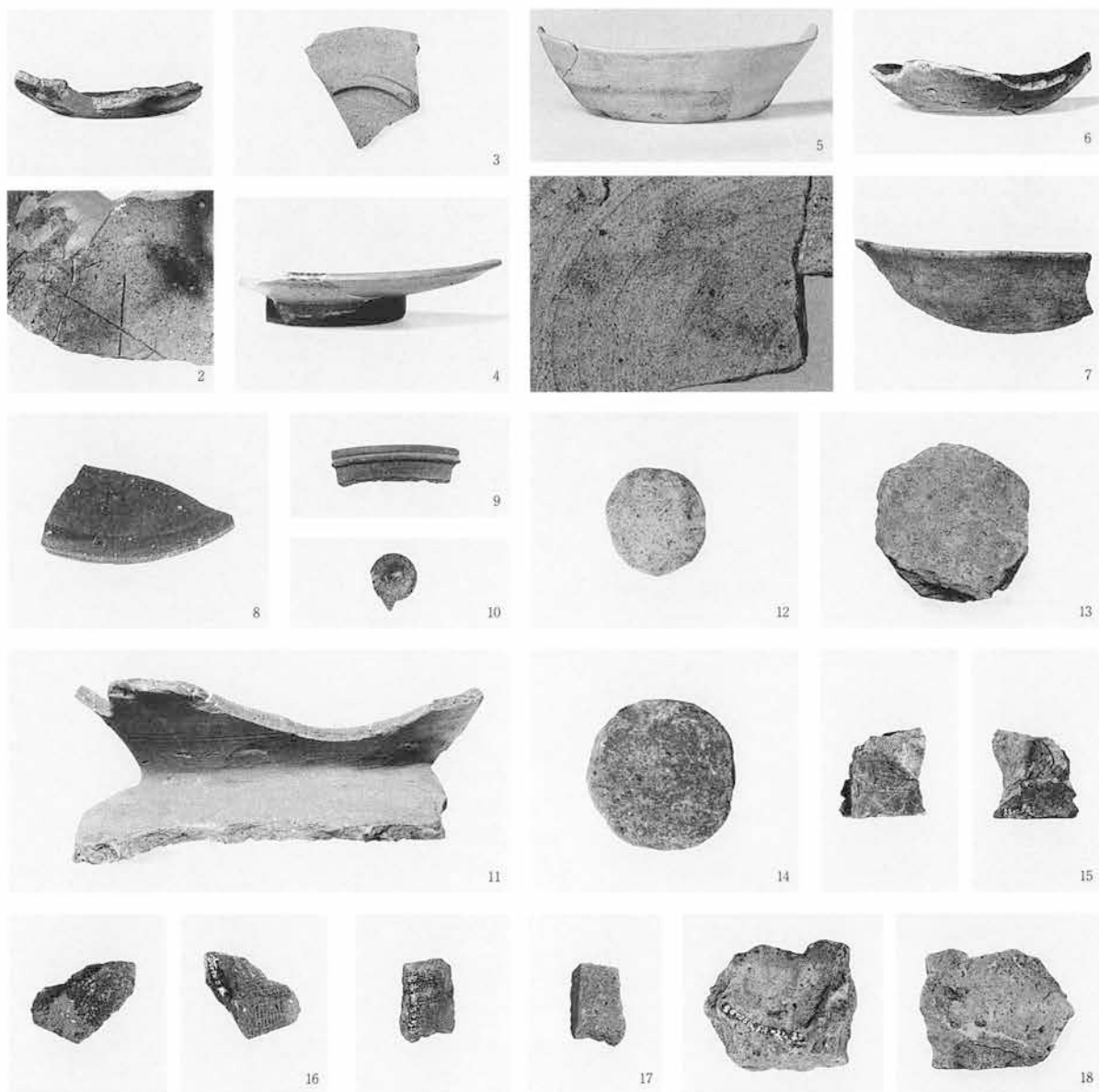


(3) 石器

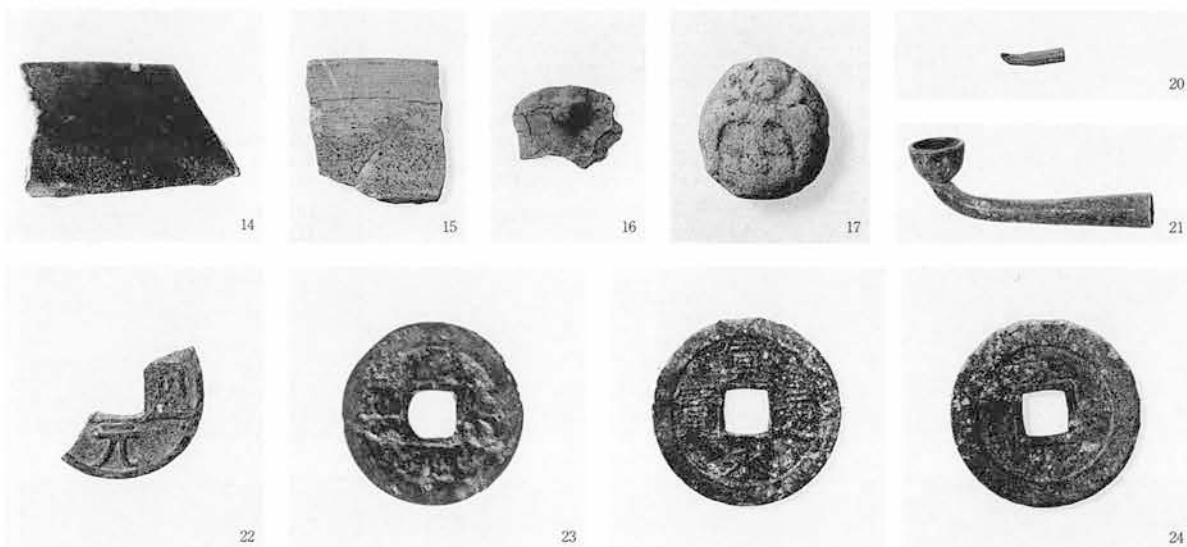




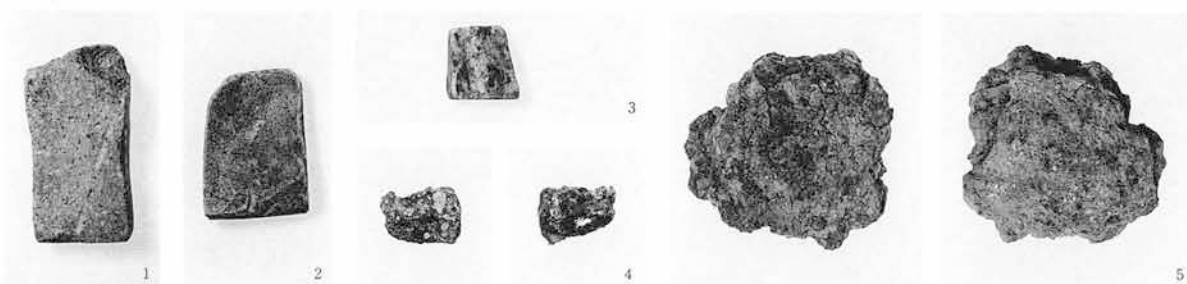
(4) 古墳・奈良・平安時代出土遺物



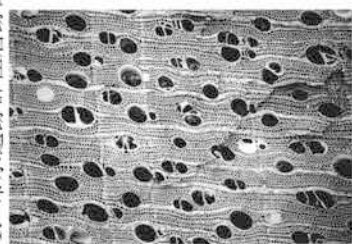
(5) 中世以降



(6) 時期不明



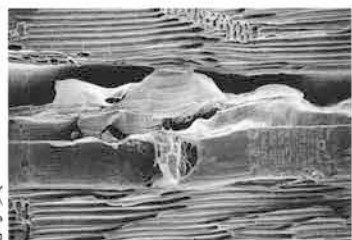
1. 冷水遺跡群住居跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



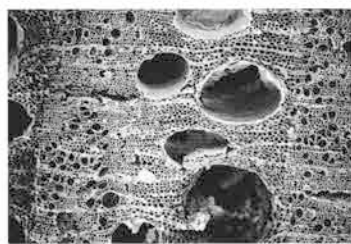
1a. カバノキ属 (横断面) 27住-1 bar: 1mm



1b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



1c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



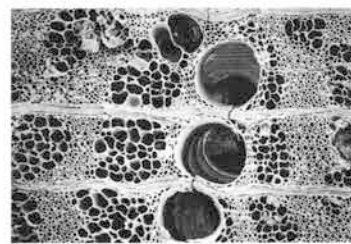
2a. クリ (横断面) 14住-15 bar: 1mm



2b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



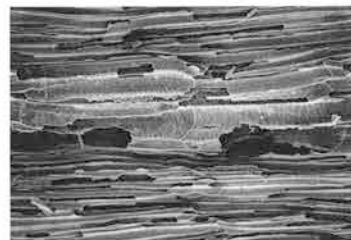
2c. 同 (放射断面) bar: 1mm



3a. ケヤキ (横断面) 14住-12 bar: 0.5mm



3b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



3c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

2. 冷水遺跡群住居跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



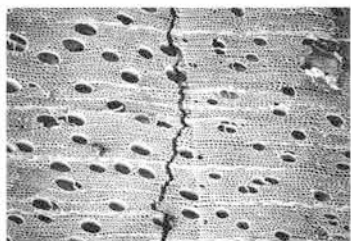
4a. コクサギ (横断面) 27住-27 bar: 0.5mm



4b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



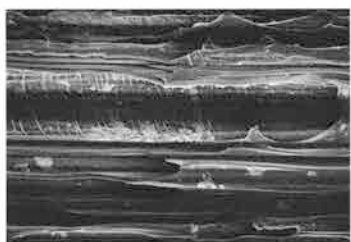
4c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



5a. カエデ属 (横断面) 27住-2 bar: 0.5mm



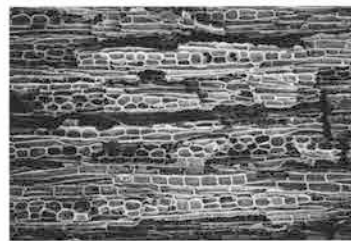
5b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



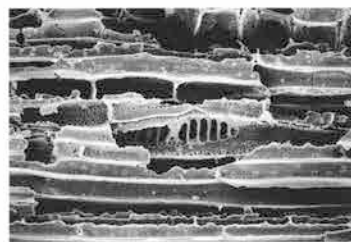
5c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



6a. フウブキ (横断面) 27住-11 bar: 0.1mm

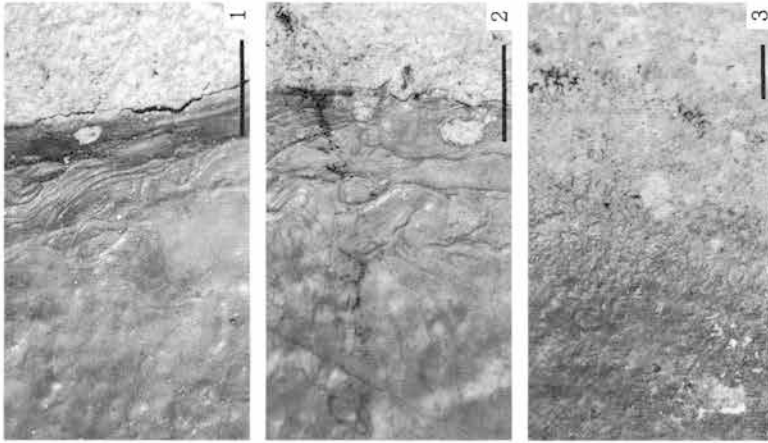
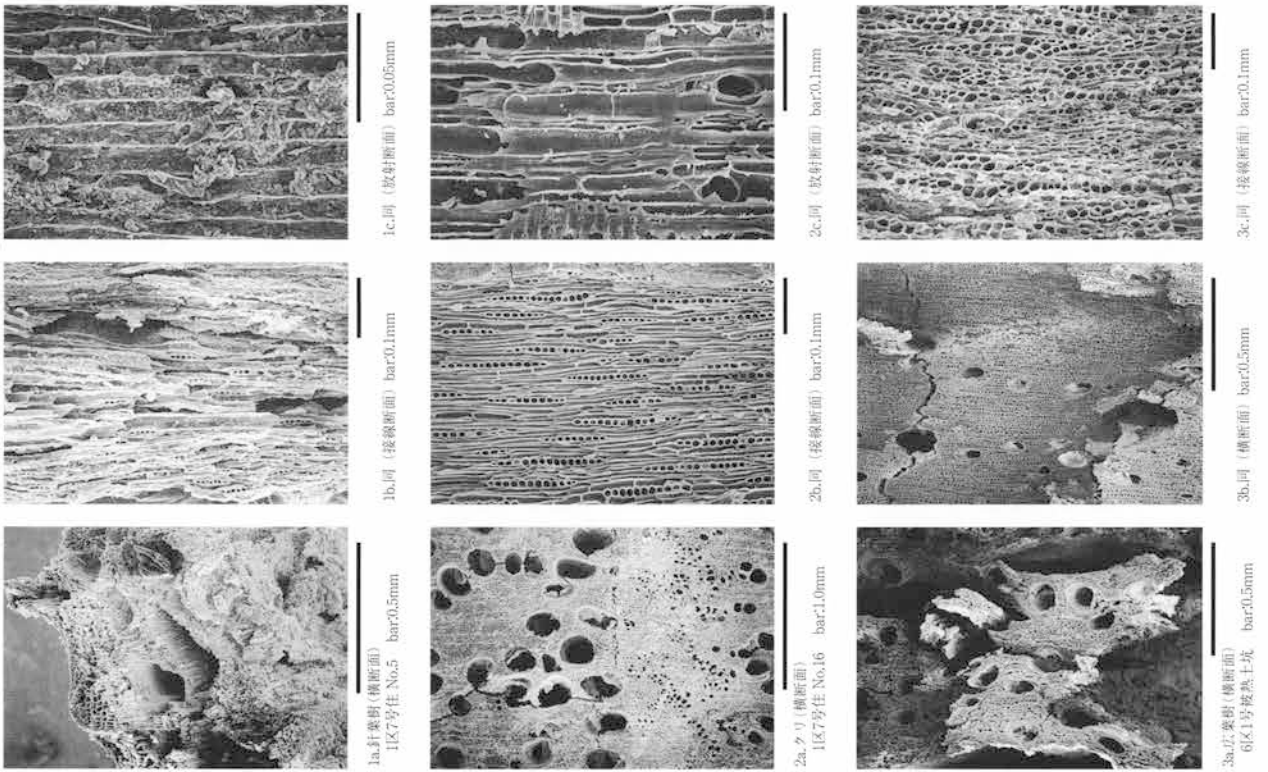


6b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



6c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

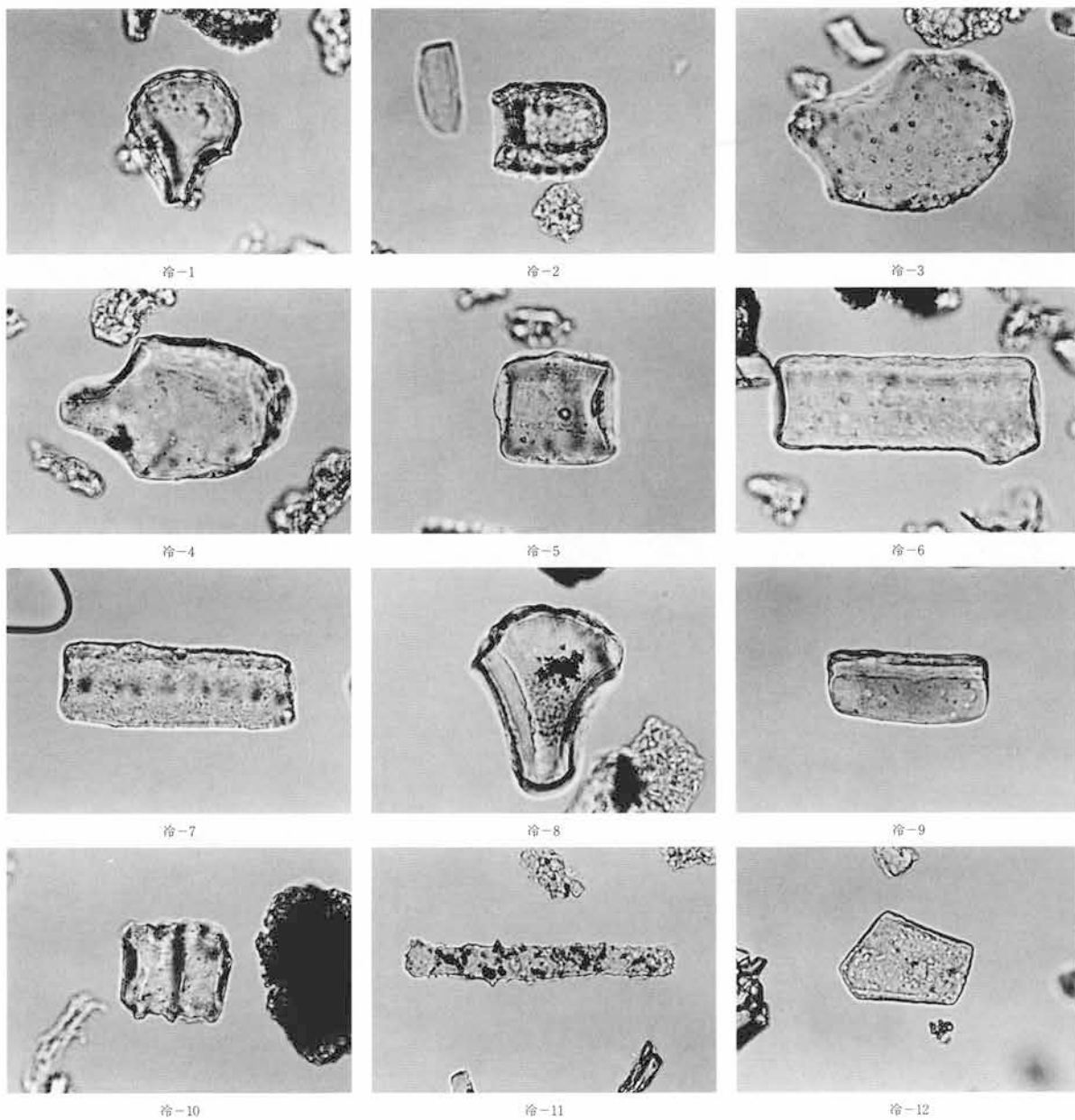
1. 金古北十三町遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



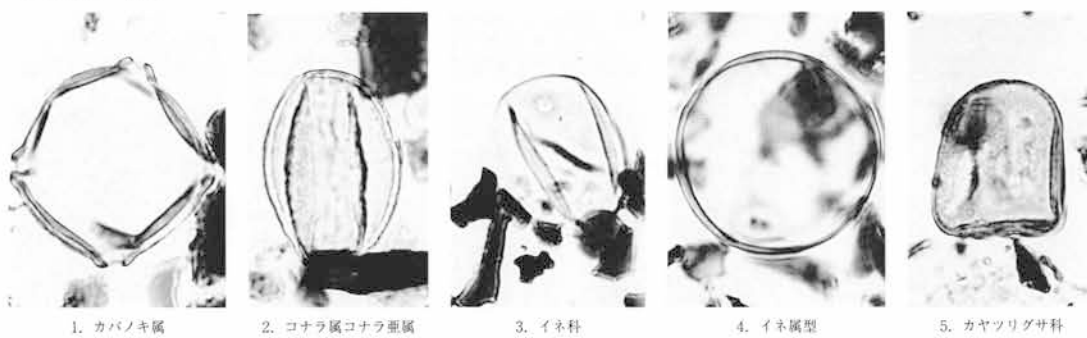
2. 須恵器底部灰色付着物の実体顕微鏡写真

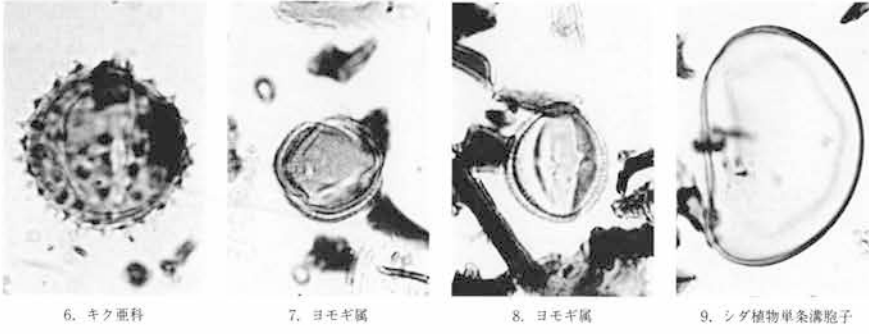
(1), 周辺部の概 (その1) スケール1mm (2), 周辺部の概 (その2) スケール2mm
 (3), 薄い付着部スケール1mm

1. 冷水村東遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）

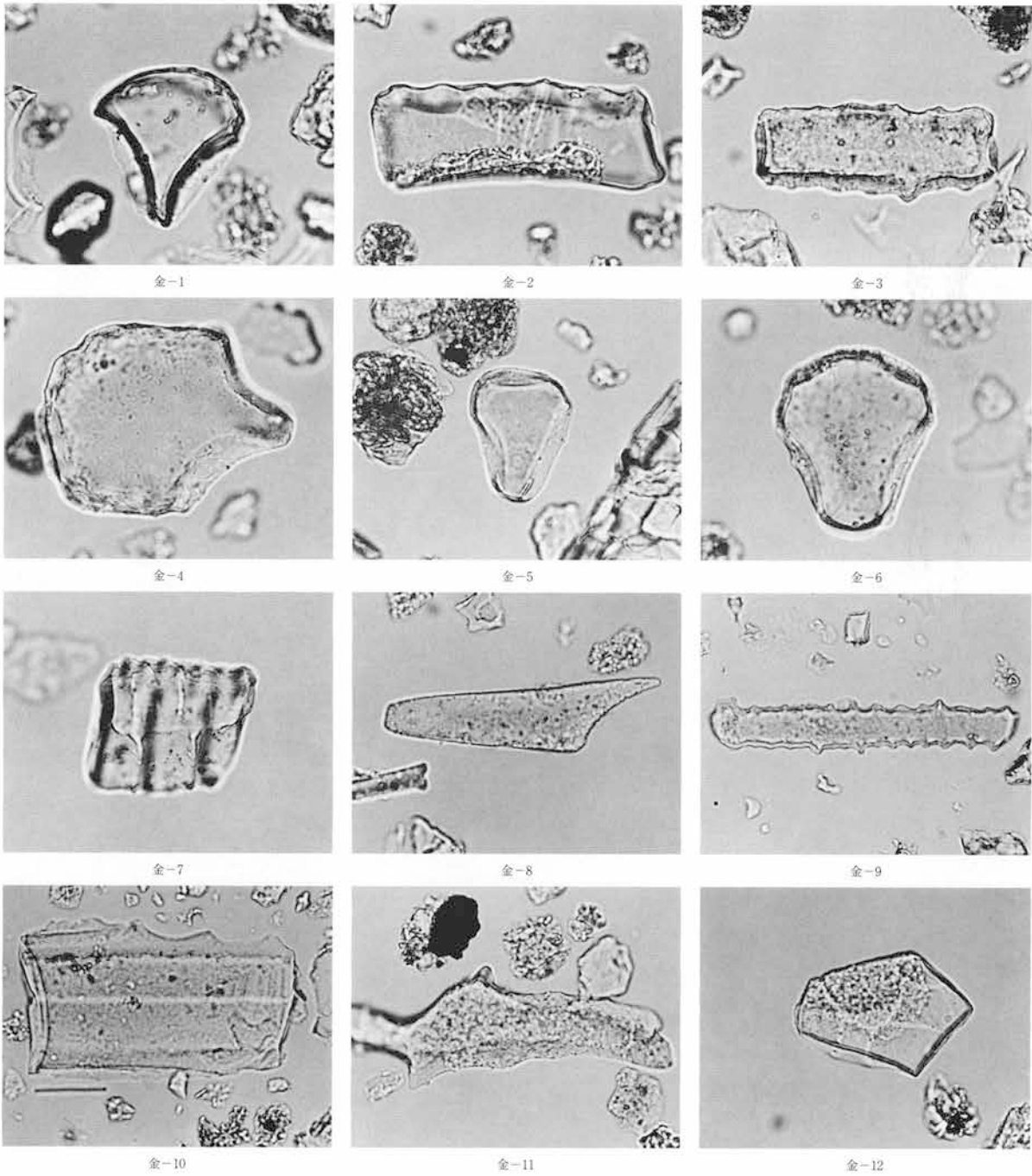


2. 花粉・胞子





3. 金古北十三町遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真 (倍率はすべて400倍)



群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第245集

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・高崎渋川線道路改築(改良)工事に伴う
金古北十三町遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成10年12月18日 印刷

平成10年12月25日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-0061 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377-0061 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局
